

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成8年度)

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だと言われています。この先人たちが遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。このため、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和と言うことも、今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターを創設以来、岩手県教育委員会文化課による発掘調査事業の調整と指導のもとに、道路建設などに関連して止むを得ず消滅していく遺跡についての発掘調査を実施し、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は県内7市8町3村にわたる33遺跡、118,979㎡の調査を実施しました。

調査しました遺跡の時代は、縄文時代を中心として、旧石器時代から近世まで、殆ど全ての時代にわたっております。今年度の調査で注目されたのは、山田町の房の沢IV遺跡から検出されました奈良時代の古墳群があります。ここからは北海道系や北関東系と思われる遺物も出土し、古墳に埋葬された人たちの出自やこの地域の産業なり交易などを解明する貴重な発見となりました。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度に調査された33遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝を申し上げます。

平成9年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

目 次

I. 建設省・農水省関係

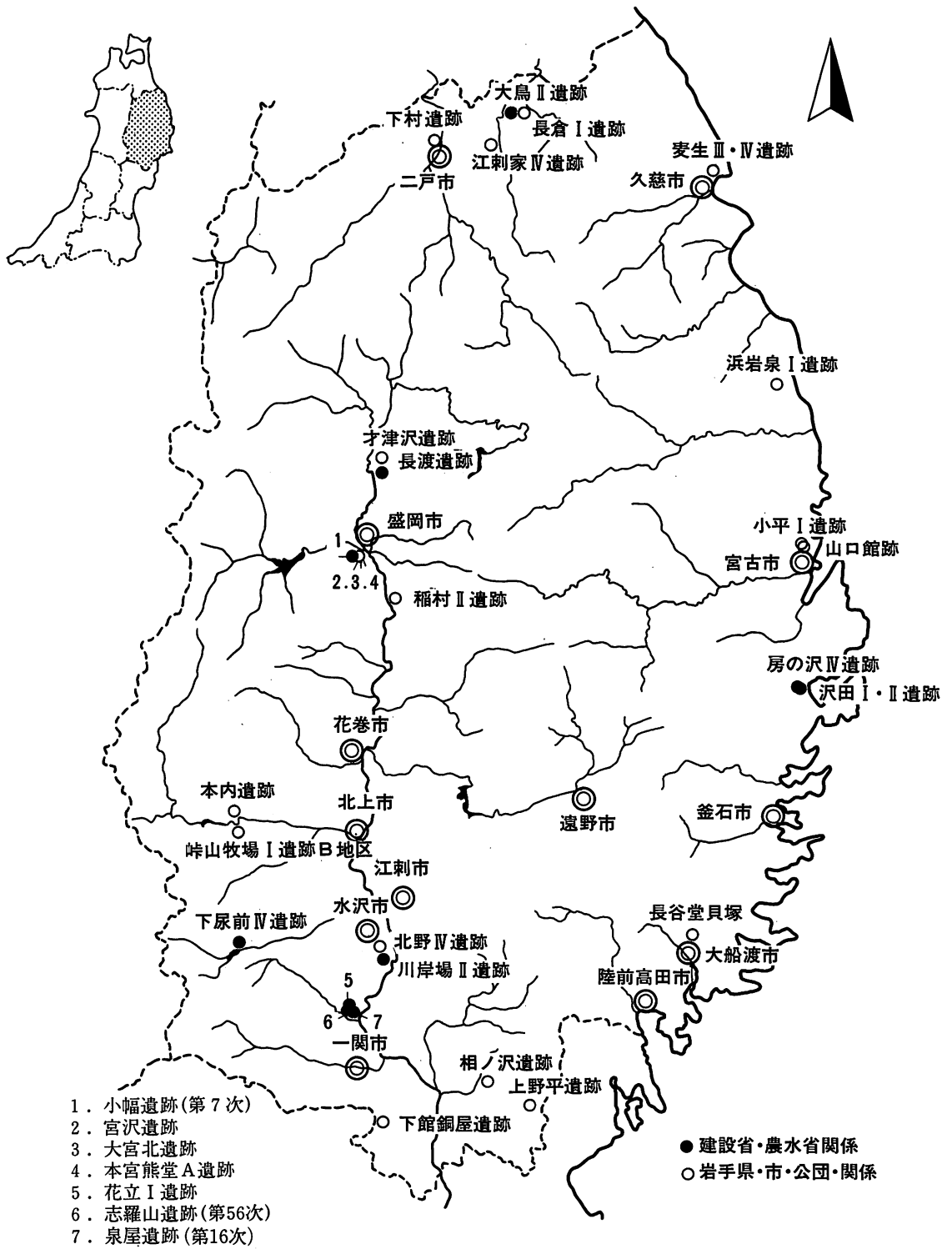
(1) 泉屋遺跡第16次調査(平泉町) ……………	3	(7) 沢田Ⅱ遺跡(山田町) ……………	37
(2) 川岸場Ⅱ遺跡(前沢町) ……………	9	(8) 房の沢Ⅳ遺跡(1)(山田町) ……………	43
(3) 花立Ⅰ遺跡(平泉町) ……………	15	(9) 房の沢Ⅳ遺跡(2)(山田町) ……………	49
(4) 長渡遺跡(玉山村) ……………	21	(10) 下尿前Ⅳ遺跡(胆沢町) ……………	55
(5) 小幅遺跡第7次調査(盛岡市) ……………	27	(11) 大鳥Ⅱ遺跡(軽米町) ……………	61
(6) 沢田Ⅰ遺跡(山田町) ……………	33		

II. 公団関係

(1) 峠山牧場Ⅰ遺跡B地区(湯田町) ……………	69	(3) 本宮熊堂A遺跡(盛岡市) ……………	79
(2) 宮沢遺跡(盛岡市) ……………	75	(4) 下村遺跡(二戸市) ……………	89

III. 岩手県・市関係

(1) 北野Ⅳ遺跡(水沢市) ……………	97	(11) 浜岩泉Ⅰ遺跡(田野畑村) ……………	153
(2) 長谷堂貝塚(大船渡市) ……………	103	(12) 江刺家Ⅳ遺跡(九戸村) ……………	159
(3) 稲村Ⅱ遺跡(紫波町) ……………	109	(13) 相ノ沢遺跡(藤沢町) ……………	165
(4) 志羅山遺跡第56次調査(平泉町) ……………	115	(14) 長倉Ⅰ遺跡(軽米町) ……………	171
(5) 下館銅屋遺跡(花泉町) ……………	125	(15) 才津沢遺跡(玉山村) ……………	177
(6) 上野平遺跡(藤沢町) ……………	131	(16) 大宮北遺跡(盛岡市) ……………	183
(7) 麦生Ⅲ遺跡(久慈市) ……………	137	(17) 宮沢遺跡(盛岡市) ……………	189
(8) 麦生Ⅸ遺跡(久慈市) ……………	141	(18) 本宮熊堂A遺跡(盛岡市) ……………	195
(9) 本内遺跡(北上市) ……………	145	(19) 山口館遺跡(宮古市) ……………	199
(10) 小平Ⅰ遺跡(宮古市) ……………	149		



平成8年度調査遺跡位置図

I. 建設省・農水省関係

(1) 泉屋遺跡第16次調査

所在地	平泉町平泉字泉屋27-8ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	一関遊水地太田川左岸築堤等
発掘調査期間	平成8年4月9日～9月30日
発掘対象面積	1,760㎡
発掘調査面積	1,760㎡
遺跡番号・略号	NE76-1079・IY96-16
調査担当者	羽柴直人・杉沢昭太郎・千葉和弘
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・水沢

1. 遺跡の立地

泉屋遺跡は平泉市街の南側に位置している。今回の調査区は北上川の支流太田川北岸のJR東北本線の東側に接する部分である。調査区は宅地、水田として使用されており、盛り土や削平により、原地形がかなり改変されていた。原地形は概ね太田川に向かってなだらかに傾斜して下がっている地形と考えられる。

2. 調査の概要

泉屋遺跡はこれまでも平泉町教育委員会と、埋蔵文化財センターによって緊急発掘調査がおこなわれており、今回の調査は第16次調査になる。一関遊水地太田川左岸築堤工事に係わる泉屋遺跡の調査としては6次目になる。今回の調査で検出された遺構、遺物は縄文時代、古代（9～10世紀）、12世紀、中世、近世のものがある。主体を占めるのは12世紀と近世の遺構、遺物である。検出された遺構は掘立柱建物65棟、柱穴状ピット 約1330個、井戸状遺構14基、溝21条、土坑63基、竪穴住居2棟である。

〈掘立柱建物〉

掘立柱建物は所属時期が不明のものもあり、時期別の棟数をここで示すことはできない。時期を推定できるものでは12世紀と近世に属する掘立柱建物がほとんどである。

12世紀の掘立柱建物で特筆されるのは調査区北端で検出された大型建物がある。調査区外に建物が延びるため全体のプランは明らかでないが、桁行の全長約20m、梁間の長さは検出された分で約8 m18cmを測る。推定であるが梁間の全長は11m52cmと考えられる。柱穴の掘方も径1 mほどと大きく、柱痕から推定できる柱材の径は30cmである。幾つかの柱穴の底面には柱の沈下を防ぐための板製の礎盤が置かれていた。そしていずれの柱穴からも柱の抜き取り痕が確認された。このような大型の建物は、これまで泉屋遺跡で検出されたものとは明らかに一線が画される。

また近世以降に属する掘立柱建物は、調査区の南側で集中して検出された。これらは多くが民家の母屋と考えられ、何度か建て替えが行なわれたものである。現在の推定では6回の母屋の建て替えが行なわれたと考えられる。柱穴と周辺から出土した遺物から、これらの建物で最も古いのは16世紀末、新しいのは18世紀後半頃と考えられる。つまり16世紀の末頃に屋敷を構え、その後18世紀後半まで掘立柱の母屋の建て替えを繰り返し、その後は礎石建の母屋になったと考えられる。礎石建物は検出できなかったが、それに付属する厩のくぼみが検出されている。礎石はその後の整地などで取り払われたのであろう。

〈井戸状遺構〉

井戸状遺構は12世紀に属する可能性が高いもの5基、近世以降（16C末も含んで）に属するものが9基検出された。16S E 8（近世以降）は石組が施されているが、他はいずれも素掘りの井戸である。深さは3 mから4 m程度のものが多い。12世紀の井戸からは陶磁器片、かわらけ、曲物、漆紙などが出土している。近世以降の井戸からは陶磁器片や桶、自然木などが出土している。16S E 3からは16世紀末の陶器と、漆器椀、木製の箱、杵が出土した。

〈土坑〉

12世紀に属する土坑の中に、埋土が有機質分が多く瓜類の種が混入するものがみられる。この埋め土の特徴は、柳之御所跡などで検出されているトイレの可能性が高いとされる土坑の埋め土に類似している。これらの中にはチュウ木と推定される木片が出土した土坑もある。この土坑の埋め土に人糞が含まれているか土壌の分析をおこない、土坑の性格を考えていきたいと思う。

近世以降に属する土坑には、桶が埋設されたものがあり、肥溜か便所と推定される。他の土坑は用途不明

なものが多い。

また、検出面と出土遺物から判断して、縄文時代に属すると思われる土坑が9基検出されている。

〈溝〉

ほとんどは12世紀、近世に属するものである。12世紀の溝で調査区を西から東に横断する16SD12、13の2本はまだ調査区外に続いており、今後の調査の結果でその性格を考えたい。16SD1は溝に礫を詰めた暗渠であるが、礫とともに挽臼と梵字が刻まれた板碑が入れられていた。

〈出土遺物〉

縄文時代の遺物は後期、晩期の土器、石器がある。土器は後期後半から晩期初頭のもものが中心である。特筆される遺物として、晩期初頭に属する人面の突起が付された注口土器がある。

古代に属する遺物は土師器、須恵器がある。概ね十和田 a 降下火山灰の降下の頃の時期のものであろう。

12世紀に属する遺物は国産陶器では常滑産、渥美産が多い。三筋壺、甕、壺、片口鉢の器種が出土している。他に須恵器系陶器と思われる破片が少量出土している。中国産磁器は白磁四耳壺又は水注、白磁碗、青磁碗、青白磁の合子が出土した。かわらけは手づくねかわらけとろくろかわらけが出土した。木製品では曲物、チュウ木、漆器皿、棒状製品が出土した。他には漆紙、壁土、種子が出土した。

中世に属する遺物は中国産磁器、国産陶器、漆器碗、板碑、中国銭がある。板碑は詳細な時期は不明であるが、「キリーク（阿弥陀如来）」の梵字が刻まれている。

近世に属する遺物は、磁器（碗、皿、瓶、火入れ、猪口）、陶器（碗、皿、鉢、搦鉢、土瓶）がある。磁器の産地は肥前とそれ以外の国内の産地、そして中国産がある。陶器は肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬、在地産の陶器がある。木製品は桶、柱材が、石製品は砥石、挽臼が出土している。金属製品は銭（寛永通寶）、かんざし、煙管が出土している。

他に時期を特定できない遺物に釘、鉄斧、硯、鋳型、鍛冶滓がある。

3 まとめ

今回の調査では縄文時代から近世にわたる遺構、遺物が充実した形で検出された。

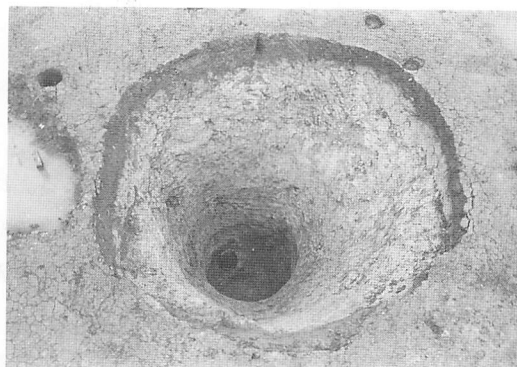
縄文時代と古代の遺構、遺物は藤原氏以前の平泉を考える上で重要な資料となりうるものである。

また今回の調査を含めて、これまで6次にわたる太田川河川改修工事にかかわる泉屋遺跡の発掘調査によって平泉南辺における12世紀の遺構分布がかなり明らかになったといえる。12世紀の奥州藤原氏の「都市平泉」の景観復元に大きく寄与できる成果である。

また近世の重複する掘立柱民家は、ほとんど明らかではない近世前半の住居の具体的な姿を考える上で良好な資料を提示することができた。



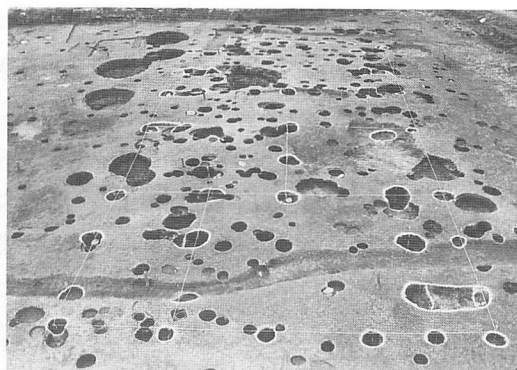
調査区全景



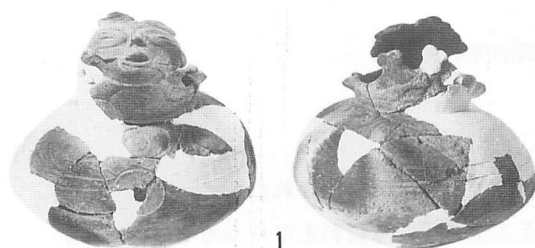
曲物の出土した井戸跡(12C)



大型掘立柱建物跡(12C)



掘立柱民家跡(17C 後半?)



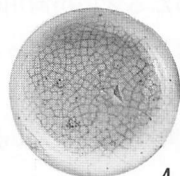
1



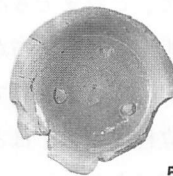
2



3



4



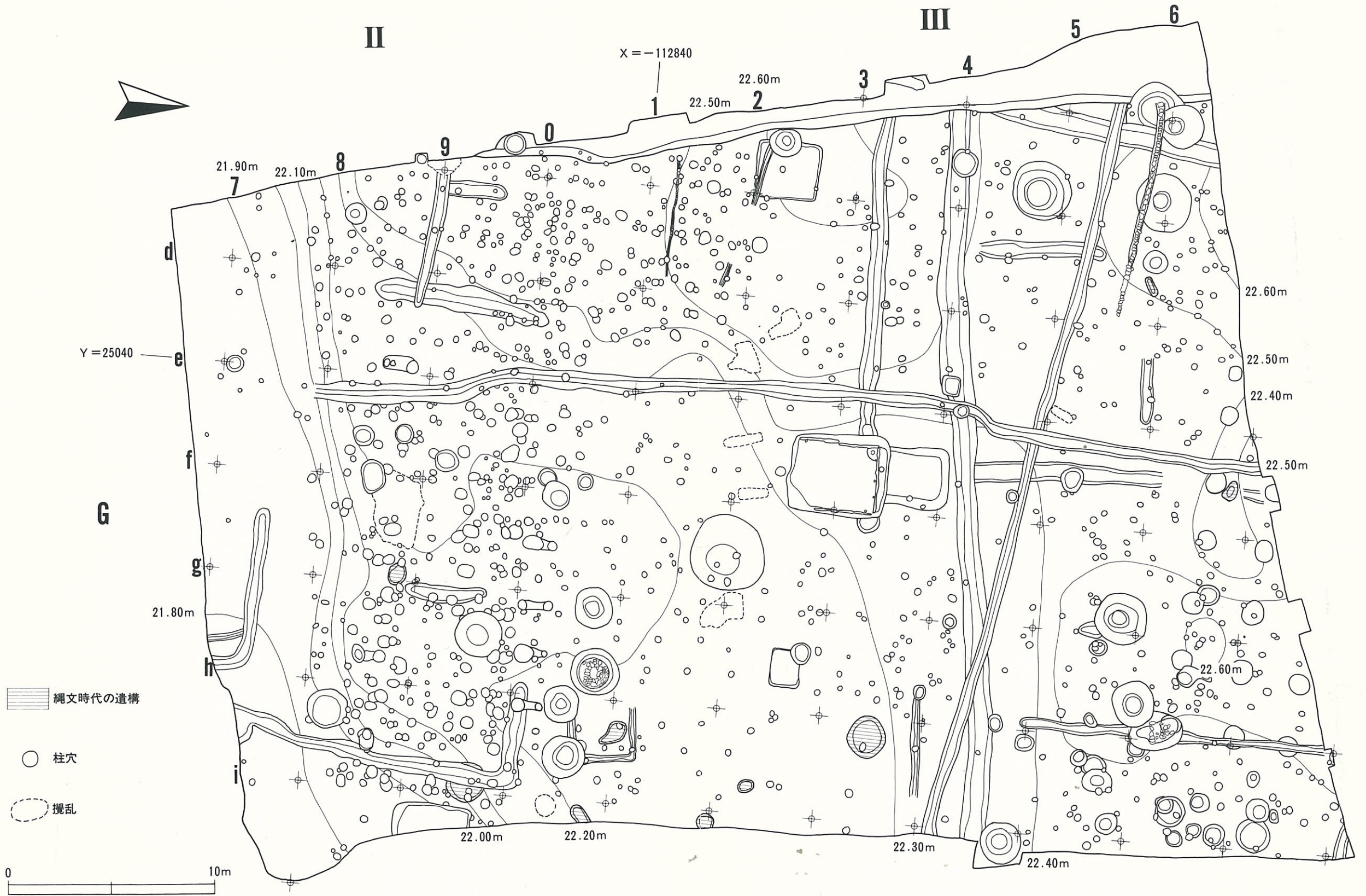
5



6

1. 人面付注口土器(縄文時代晩期)
2. 漆紙(12C)
3. 常滑産片口鉢(12C)
4. 美濃産陶器皿(16C末)
5. 唐津産陶器皿(16C末)
6. 板碑(中世?)

泉屋遺跡第16次調査検出遺構・出土遺物



泉屋遺跡第16次調査遺構配置図

(2) かわ ぎし ば 川 岸 場 II 遺 跡

所在地 胆沢郡前沢町白山字川岸場35-2 ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 北上川上流改修事業・白山築堤
発掘調査期間 平成8年7月11日～11月5日
調査対象面積 6,000㎡
発掘調査面積 4,000㎡
遺跡番号・略号 NE47-0190・KKⅡ-96
調査担当者 小山内透・山口俊規
協力機関 前沢町教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

川岸場Ⅱ遺跡は東日本旅客鉄道前沢駅の北東約4.5km、北上川右岸に位置し、北上川縦谷平野に立地する。遺跡の標高は30m前後、北上川との比高は約6mで、現況は宅地と畑地である。本遺跡南西には昭和32年に発掘調査の行われた川岸場Ⅰ遺跡が隣接している。

2. 調査の概要

本遺跡は古くから縄文（晩期）・弥生時代の良好な遺物包蔵地、近世から現代まで続く環濠屋敷（通称大室屋敷）、そして近世伊達藩のお蔵場跡として周知されているものである。

今回の調査区は、環濠屋敷とお蔵場の中央を南北に縦断する範囲であり、調査区南半には縄文・弥生時代の良好な遺物包蔵地も含まれている。今年度の調査で終了したのは近世の4,000㎡であるが、お蔵場と重複する縄文・弥生時代については遺物包蔵地の範囲と深さを確認したに止まり、未了となった2,000㎡は次年度以降の継続調査となった。今年度の調査で検出された遺構は主に近世以降のもので、建物跡13～15棟、敷石状遺構10カ所、柱穴約400基、竪穴状遺構2カ所、柱列5条、土坑類7基、堀3条、土塁2カ所、溝1条、清水池2カ所、玉石垣2カ所などである。

なお、元地主が立ち退き時に薬医門、屋敷内神社とその鳥居、樹齢100年以上の立ち木を重機で移転したため、環濠屋敷のうち約800㎡程が攪乱破壊されていた。

〈建物跡〉

建物跡は、掘立柱建物跡1～3棟・布掘り掘立柱建物跡2～3棟のほか、基礎地形^{じきょう}の痕跡が確認されたものとして布掘り礎石建物跡？3～4棟・石組基礎建物跡？3棟・土台建物跡？3棟などがある。掘立柱建物跡は調査区北部の環濠屋敷のほぼ中央と調査区中央部のお蔵場の南側で検出された。前者についてはその詳細は今後の検討が必要であるが、南北桁行12～15m、東西梁行8m前後の規模をもつ母屋跡で2期以上の立て替えが想定される。布掘り掘立柱建物跡は調査区中央部のお蔵場跡で検出され、いずれも東西桁・南北梁で布掘り内には柱間約1mの半間単位で柱穴が確認され、一部に土間状の貼土がなされている。梁行はすべて5m、桁行全長は調査区外にかかるため不明であるが、13～20mと推定される。お蔵場跡に位置する布掘り礎石建物跡と思われるものは幅約1m、深さ5～10cmの布掘り内に3～5cm大のグリ石をつめた地形痕跡が確認されたものである。環濠屋敷の北側で検出された石組基礎建物跡と思われるものは10～20cm大の河原石が1～4列の直線的な列石状として部分的に確認された、また土台建物跡と思われるものは幅30cm～1mで方形もしくは直線的に堅くしまった痕跡が確認されたものであるが、いずれもその全容は不明である。

〈敷石状遺構〉

敷石状遺構としたものはすべて環濠屋敷の北側で検出され、3～5cm大の河原石を用い単純に敷いたものと深さ10cm程の掘り込みに敷き詰めたものがある。前者は規模が大きいが、後者は1m程の範囲のものである。後者については礎石建物跡の基礎地形の可能性も考えられる。

〈柱穴状ピット〉

柱穴状ピットのほとんどは環濠屋敷の中央部で検出されたものであり、今後の検討が必要であるが、母屋および付属施設に伴うものと思われる。

〈竪穴状遺構〉

竪穴状遺構としたものは一辺約4mの略方形で10cm前後の浅い掘り込みのものである。壁際には20cm大の石が不定に並べられ、底面には小礫が敷き詰められていたものである。

〈柱列〉

柱材が遺存していたもので、先端部以外は加工されておらず、打ち込みの杭列の可能性が高い。

〈土坑類〉

お蔵場で20cm大の河原石が多量に詰められた円形の1基、環濠屋敷で全面に黄褐色粘土が貼られた鍵型の1基のほか、長方形の浅い土坑が5基検出されている。

〈堀跡・溝跡〉

堀跡は調査区北側の現況で確認された土塁を伴う2条、中央では1条が検出された。これらはすべて屋敷を囲む一連の遺構と考えられる。屋敷の高位部に位置する北及び南側の2条は開口部幅約3m、底部幅約30cm、深さ1～1.3mを測る薬研堀である。北側低位部に位置する1条は高位部の堀と連続するものの、北側に食い違い規模的に小ぶりとなって、屈曲した東側では幅は50cm前後、深さ20cm程の溝状となる。溝跡1条は北側低位部土塁の内側に沿い、幅約1.5m、深さ約30cmを測る。

〈土塁〉

土塁は調査区北側の堀2条に伴うものであり、高位部の堀に伴うものは基底部幅4～5m、高さ30cm～1mを測る。低位部の堀に伴うものは堀にそって屈曲し、基底部幅3m前後、高さ30～50cmを測る。

〈清水池〉

調査区北側低位部の屋敷内に1カ所と低位部堀の西端で検出された。いずれも湧き水で堀と溝によって屋敷外に流水させている。屋敷内の1カ所は方形の掘り込みで整備され、堀内のものは壁に石づみをしていた。

〈玉石垣〉

20cm大の河原石が用いられた石垣は、方形環濠の東辺の壁と屋敷内の高位部から低位部への法面で検出され、堀に伴うものは高さ約1m、長さ40m程であるが、屋敷内で検出されたものは移転時に崩落したものと思われ、一部が確認されたのみである。

〈遺物包含層〉

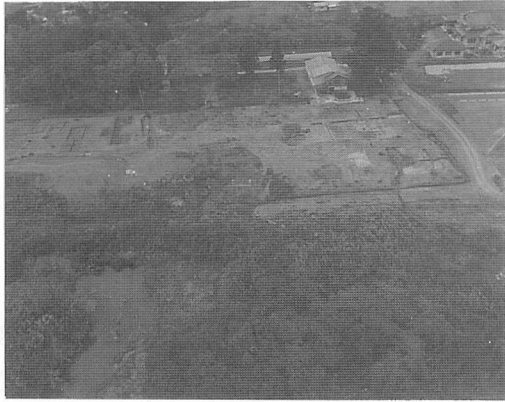
調査区南半約3,000㎡の縄文（晩期）～弥生時代の遺物が多量に含まれる範囲を確認したが、調査区南端は宅地跡として攪乱されており、800㎡程が消失していた。試掘の結果からは層厚20cm～1m以上、平均80cm程と推定される。

〈出土遺物〉

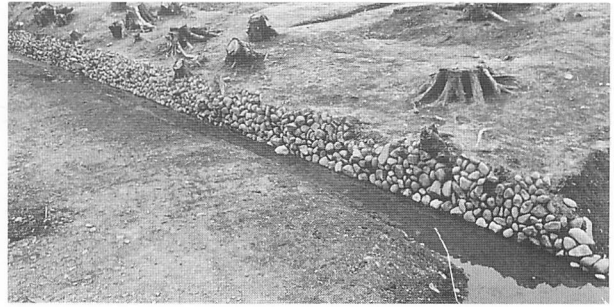
遺物は縄文（晩期中葉）～弥生時代初頭、古代、近世（17～19C）～現代のものが出土した。縄文・弥生時代では土器大コンテナ19箱、石器大コンテナ4箱、土・石製品（土偶・円盤状・動物・石棒・独鈷石・岩版・男根状・円盤状など）小コンテナ各1箱、陶磁器類（東北産陶器、肥前産染め付け・青磁・白磁など）大コンテナ4箱、金属製品（釘・古銭など）小コンテナ1箱、木製品（箸・板材・柱木など）中コンテナ2箱と摩滅した土師器と須恵器が中コンテナ1箱である。

3. まとめ

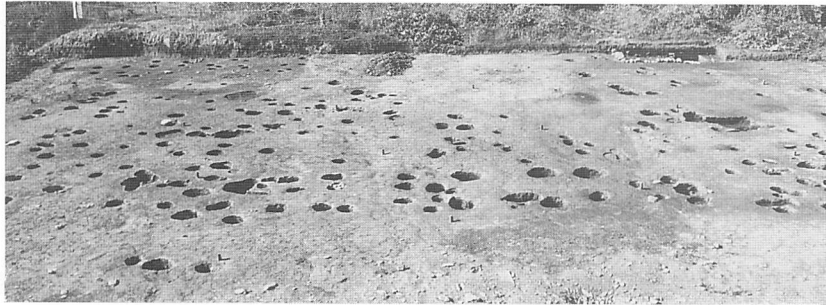
今年度は主として近世について調査を行ったものであり、近世伊達藩大肝入の屋敷構えとお蔵場の一端ではあるが、県内では調査例の少ない近世民家等の事例を得られたことが最大の成果である。また良好な縄文（晩期）～弥生時代の遺物包蔵地の存在は来年度以降の調査が期待される。



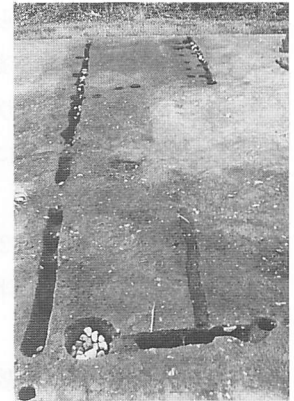
遺跡全景



石垣



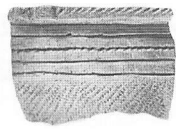
掘立柱建物跡(母屋)



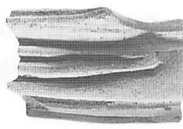
布掘り掘立柱建物跡



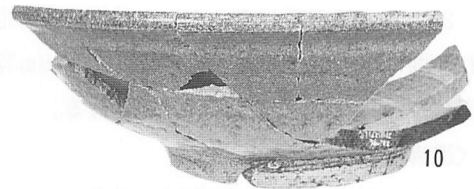
1



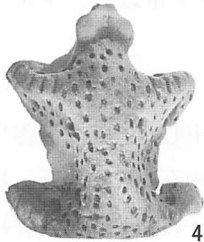
2



3



10



4



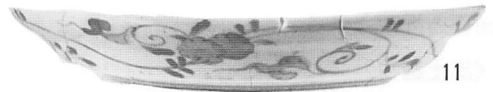
5



7



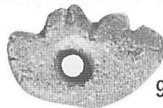
8



11



6



9



12

1 ~ 3 縄文・弥生土器

4 動物内蔵土器

5 ~ 7 石鏃

8 石錐

9 有孔石製品

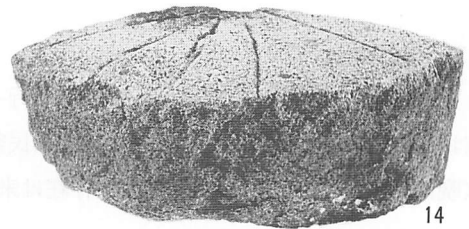
10 ~ 12 陶磁器

13 猪形土製品

14 石臼

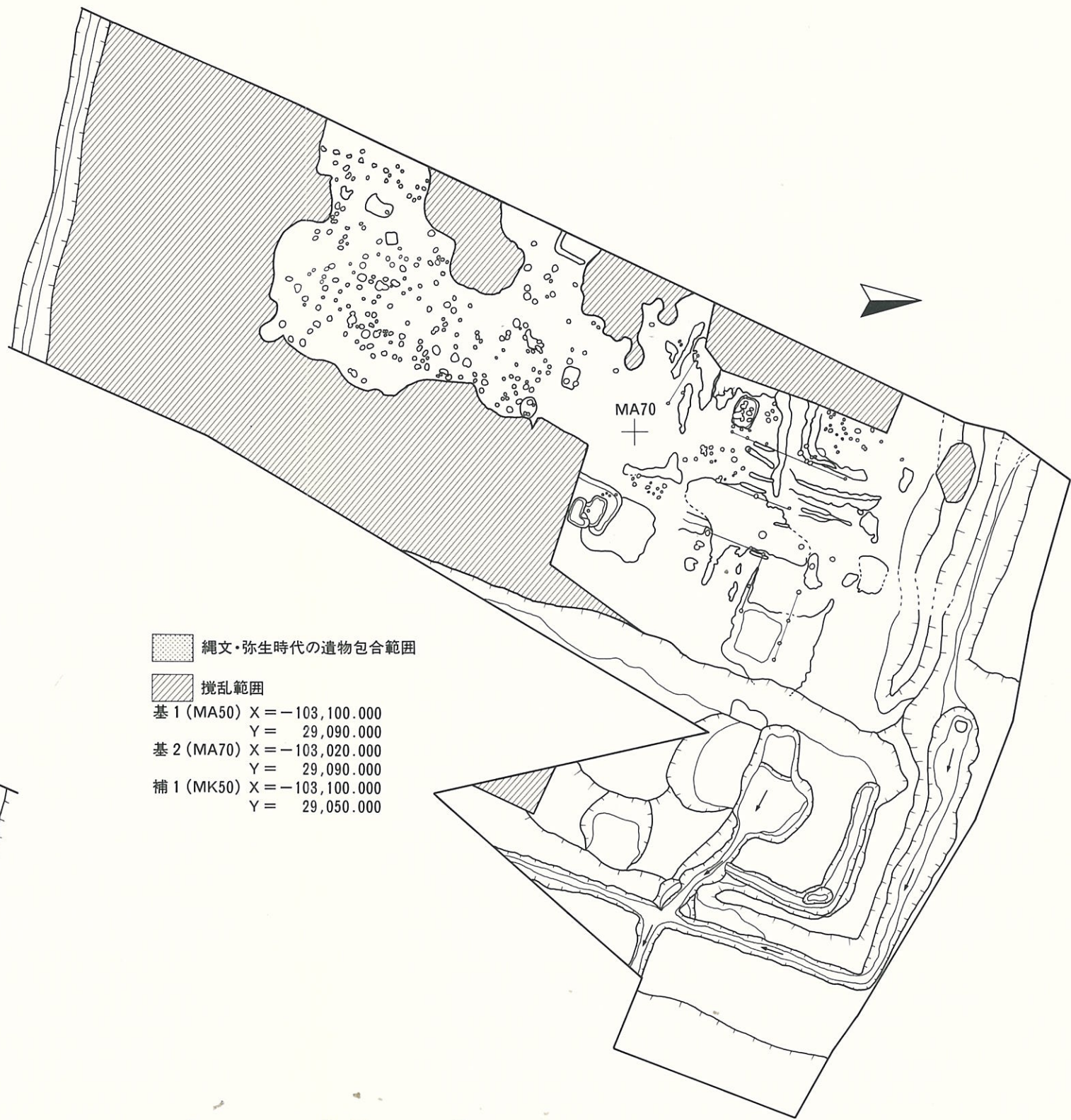
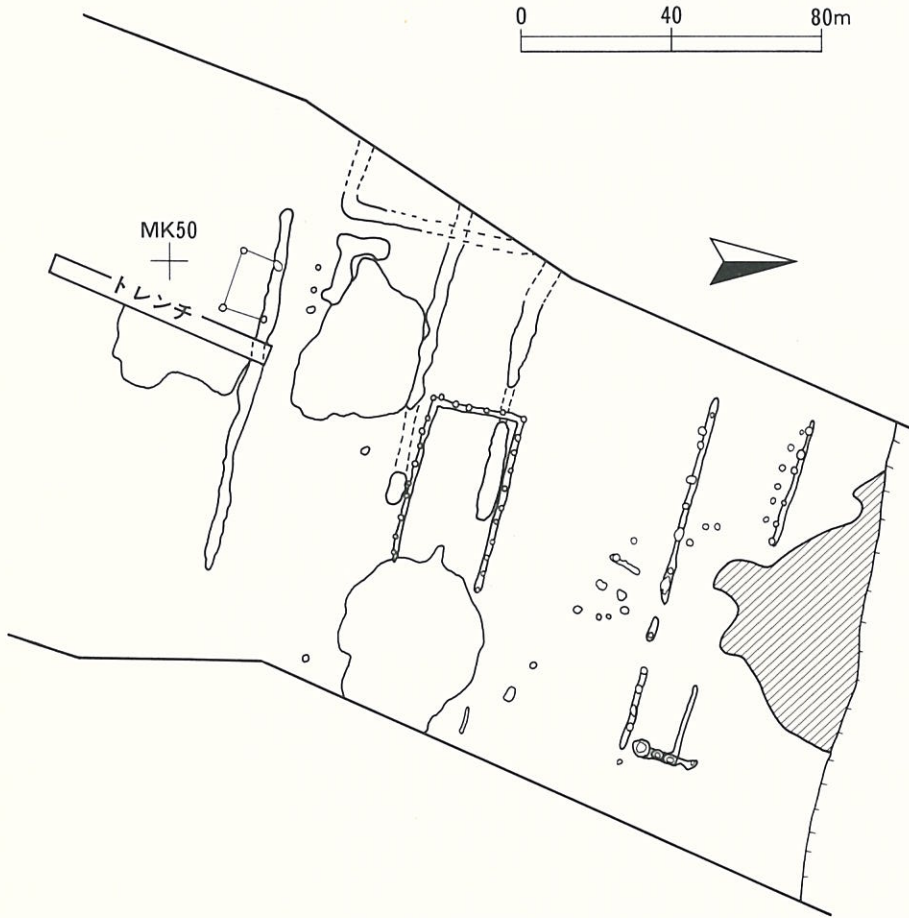
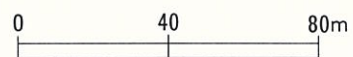
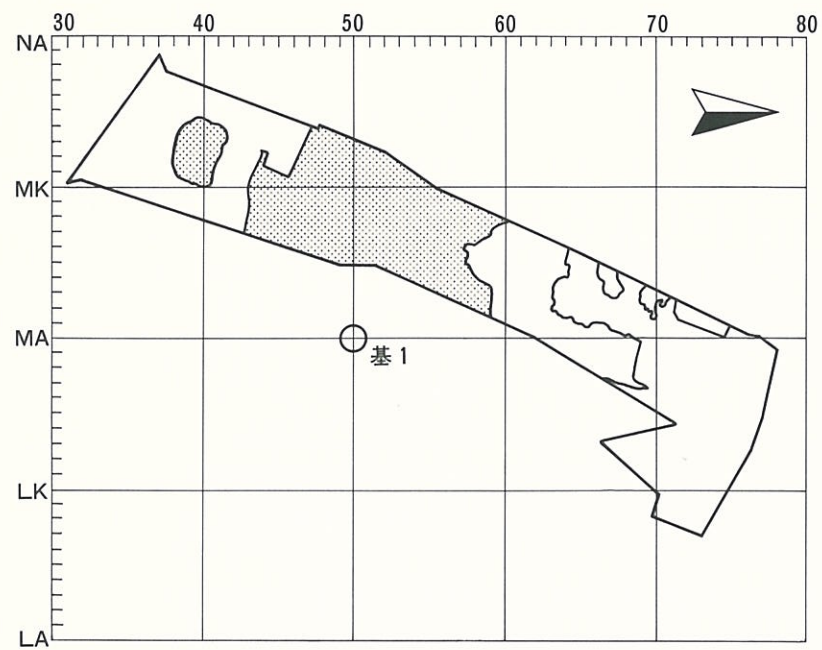


13



14

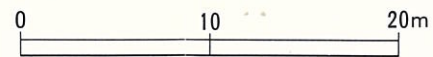
川岸場Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



縄文・弥生時代の遺物包含範囲

攪乱範囲

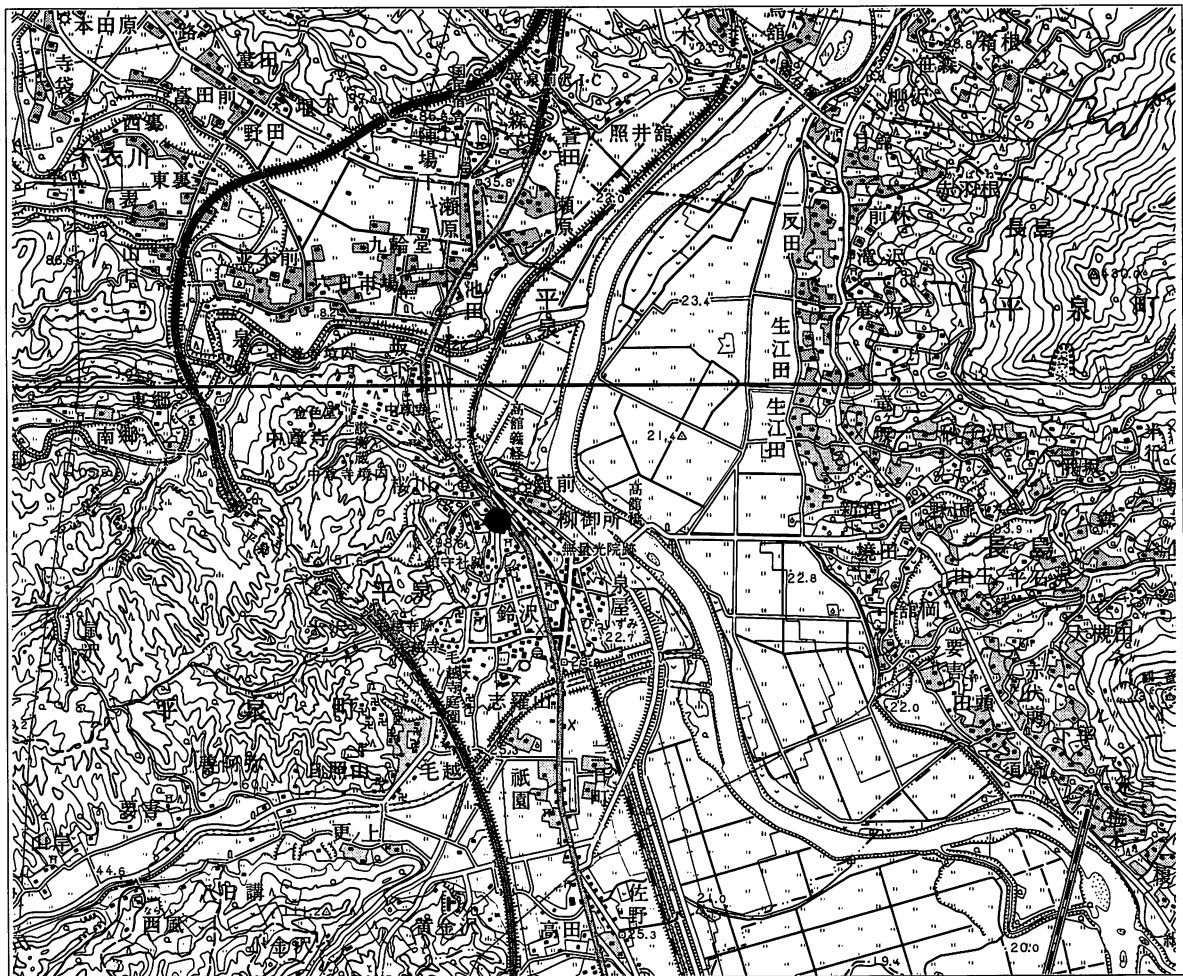
基 1 (MA50) X = -103,100.000
 Y = 29,090.000
 基 2 (MA70) X = -103,020.000
 Y = 29,090.000
 補 1 (MK50) X = -103,100.000
 Y = 29,050.000



川岸場Ⅱ遺跡遺構配置図

(3) 花立 I 遺跡

所在地 西磐井郡平泉町字花立28-1ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 国道4号交通安全対策
発掘調査期間 平成8年10月1日～10月29日
調査対象面積 330㎡
発掘調査面積 330㎡
遺跡番号・略号 NE76-0092・HD I-96
調査担当者 杉沢昭太郎・千葉和弘
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 水沢・一関

1. 遺跡の立地

花立Ⅰ遺跡は、平泉町のほぼ中央に位置しており、JR東北本線平泉駅から北西約900mのところにある。今年度の調査区は昨年度の調査区に隣接し、国道4号西側沿いの住宅跡と町道を挟んで2ヶ所に分かれている。南側調査区は国道の道路面より一段高く西側の金鷄山への傾斜地で西から東方向に下っていたものを削平・盛土して平場を造成し宅地として利用されていた。北側調査区は南西から北東側へと緩やかに傾斜していたようだが、削平・盛土によって平坦地化され北端の一部は湿地となっていた。

2. 調査の概要

南側調査区

〈溝跡〉

2条検出された。1号溝跡は調査区北東部を国道に沿って北西-南東方向に12m程行ったところで南西方向に向きを変えて2号溝跡と交差しながら7m行き調査区外へ延びている。幅70~50cm、深さ40cm前後を測る。2号溝跡は1号溝跡より新しく南北方向に5m行き南西方向に曲がり調査区外へ続いている。何れも手づくね・ロクロかわらけが出土しており12世紀後半の遺構と思われる。

〈柱穴群〉

調査区中央部を中心に21基検出されている。直径27cm~46cm、深さは30cm程のものから50cm前後のものまで見られる。宅地の基礎により失われたものも多数あると思われ建物跡にはならなかった。出土遺物はなく年代は不明である。

〈柱穴列〉

調査区の北端に位置し、直径が30~40cm前後の柱穴11基によって構成されている。南東-北西方向に直線的に4mほど行き北西側は調査区外に続いていると思われる。平成6年度の調査でも列の軸方向が異なっているものの類似する遺構(12世紀)が検出されている。このことから当遺構に関しても同時期の可能性が高いと思われる。

〈土坑〉

調査区北側、柱穴列に隣接して位置している。開口部径1m、底部径0.7m、深さ0.6mを測る。かわらけが埋土中位から下位にかけて出土しており12世紀の遺構と考えられる。

〈炭窯跡〉

調査区のほぼ中央部に位置している。窯の下半分のみが残存していた。南西-北東方向が長軸で5.3m、短軸2.9m、深さ70~30cmを測る。底面は平坦で硬く踏み締められており、壁は焼成により赤変し底面から外傾して立ち上がっている。炊き口は煉瓦と礫とで閉じられていた。埋土には焼土と炭片とが混在して見られた。煙道部にも煉瓦と礫とを使用しており近・現代の遺構と思われる。埋土からは煙管の吸口が1点出土している。

〈道路側溝遺構〉

調査区の南端の道路の側溝と思われる遺構である。南西-北東方向に8.2m程確認された。平泉町内では古くから存在していた道路と考えられており高館方向へ続いている。遺物は出土していない。

北側調査区

〈溝跡〉

4条検出された。何れも調査区の北側に位置し北西-南東方向に延びている。国道下へ続いているため詳細は不明だが、2号溝跡は平成6年度調査時に検出された溝跡に対応するものである。1号溝跡よりかわらけとともに漆器碗(皿?)が出土、他の2条からもかわらけ、常滑産陶器片が出土しており12世紀の遺構と思われる。

〈土坑〉

検出数は2基である。どちらも3号溝に切られている。両者は隣接して位置し規模も開口部径1m、底部径0.7m前後、深さ0.5m程と類似している。遺物は出土しておらず時期、性格については判然としない。

〈暗渠〉

2・3号溝跡より新しい。南西-北東方向に径10~30cmの河原石を敷き詰め直線的に5m程延び調査区外に達している。出土遺物はなく年代は不明である。

〈出土遺物〉

南北の両調査区で検出された計5条の溝跡を中心にコンテナで2.5箱ほど出土している。完形品は数点のみである手づくねが主体だが、ロクロかわらけも2割程度見られる。鉢形のものも1点ある。国産陶器はすべて北側調査区で出土したものである。2袋分で何れも小破片である。常滑産が大半を占める。他に漆碗(皿?)1点、瓦片1点、煙管1点、須恵器細片が少量出土している。

3. まとめ

今回の調査で検出された溝跡の中で南側調査区の2条に関しては互いの切り合い関係から新しい溝のほうでロクロかわらけの比率が高いという傾向がつかめそうである。今後の整理の段階でより明確にしていきたい。また、平成6年度調査で検出された柵列状ピットと同規模の柱穴列が南側調査区で検出された。この遺構がどのような性格のものか、他の遺構との関係も考慮して検討する必要がある。



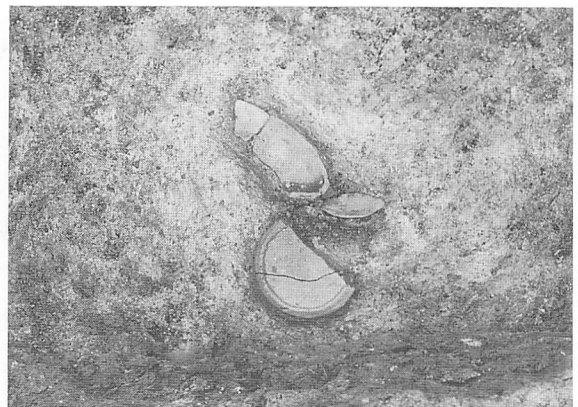
北側調査区



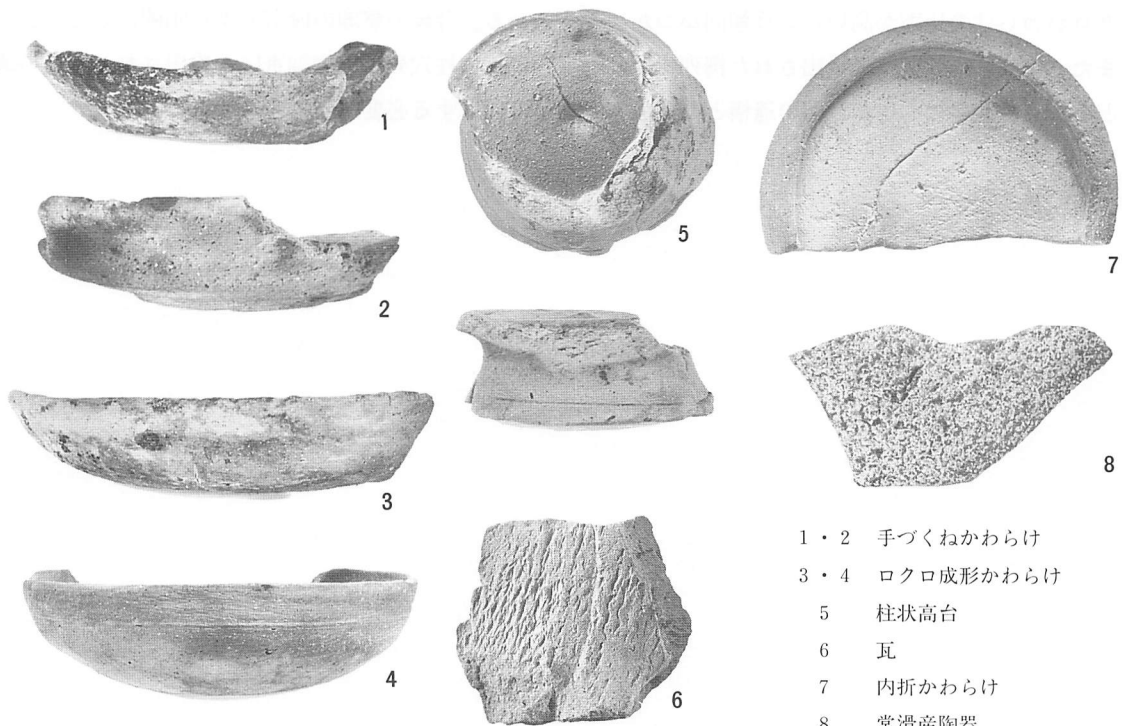
南側調査区



漆器出土状況

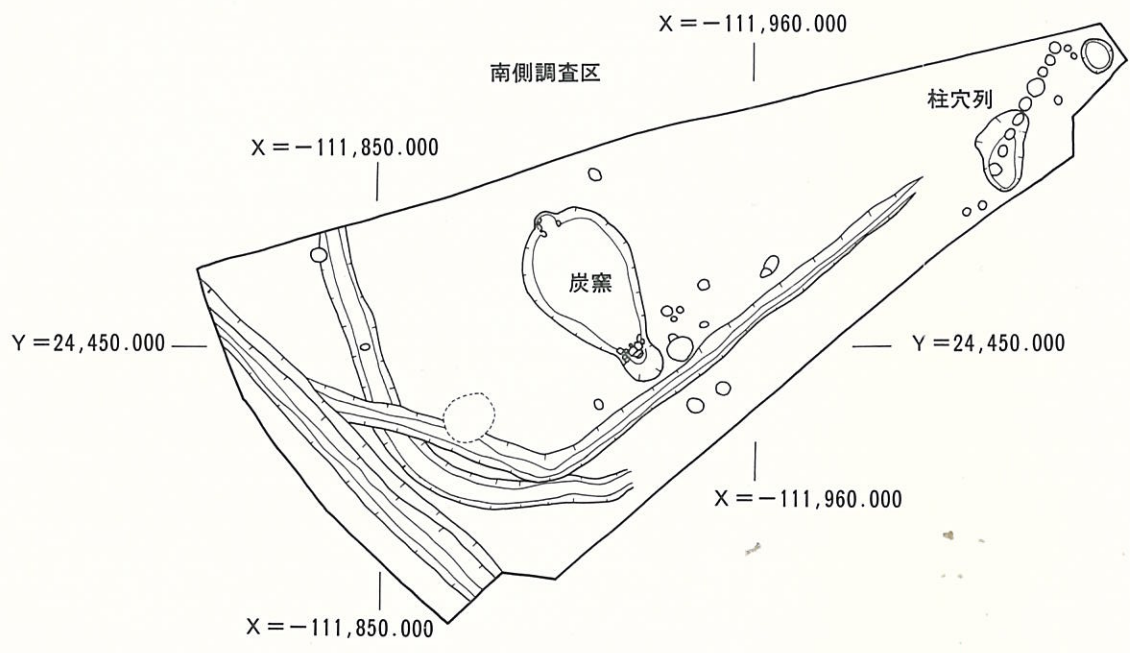
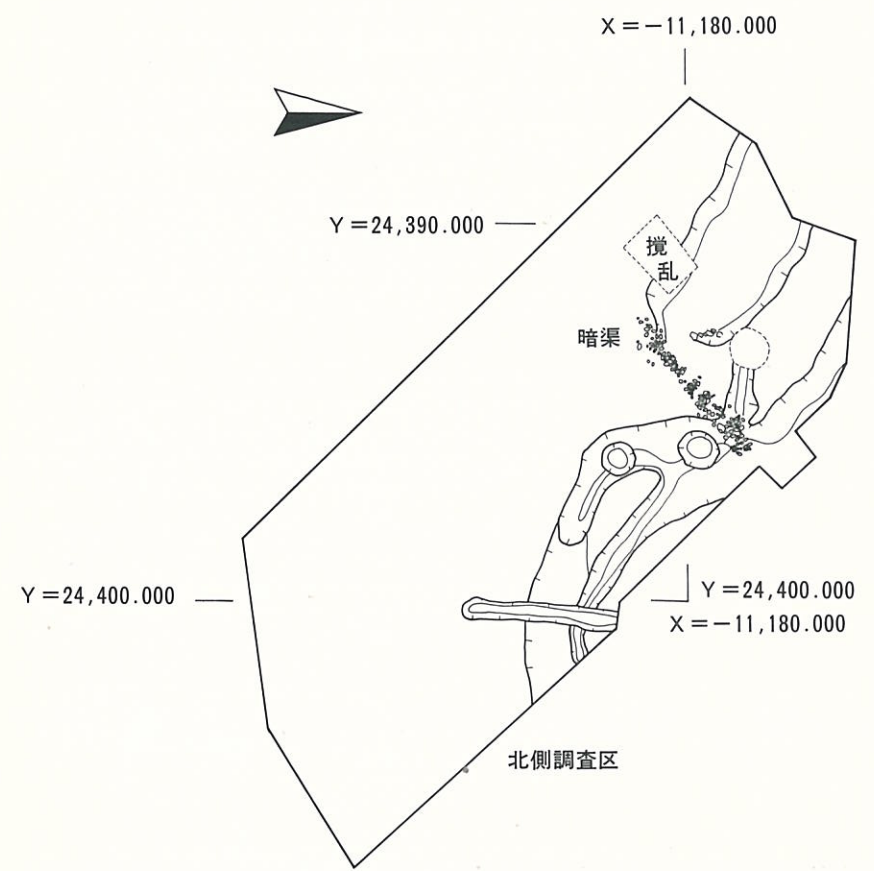
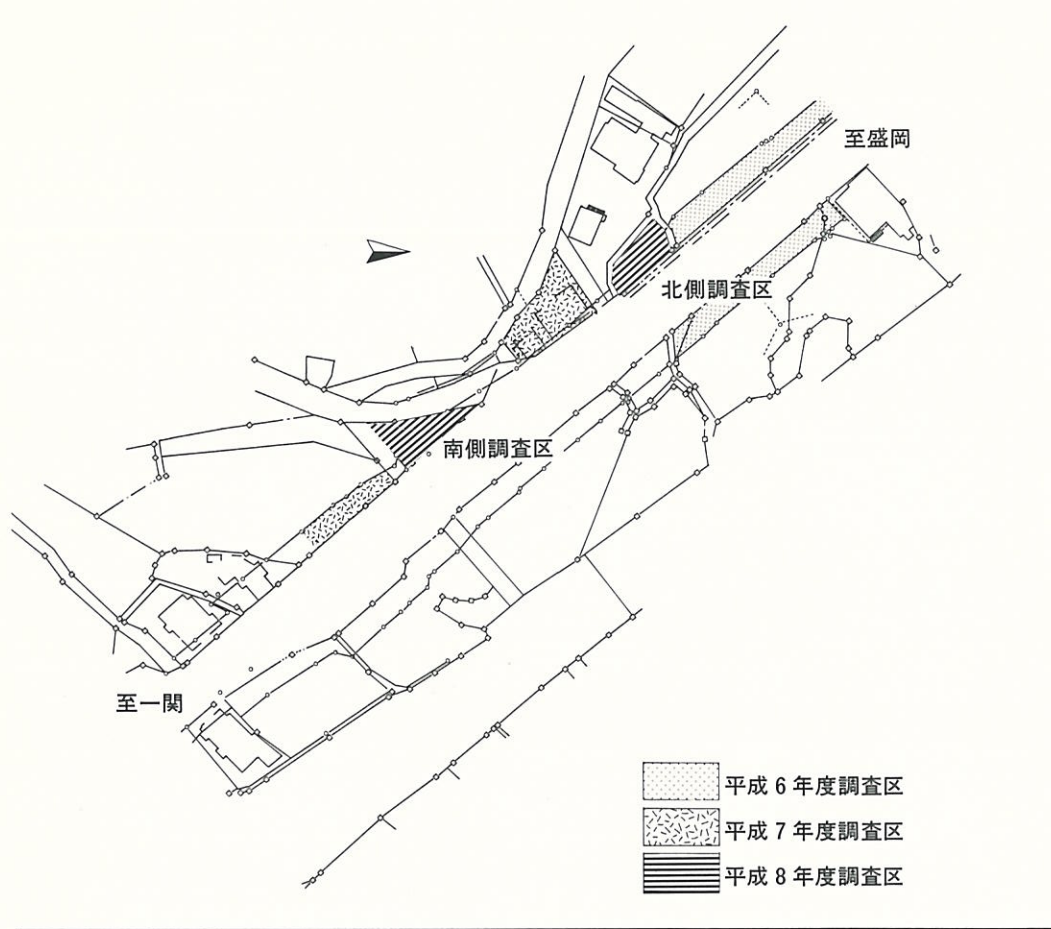


遺物出土状況

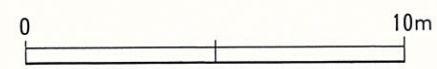


- 1・2 手づくねかわらけ
- 3・4 ロクロ成形かわらけ
- 5 柱状高台
- 6 瓦
- 7 内折かわらけ
- 8 常滑産陶器

花立 I 遺跡検出遺構・出土遺物



- 土坑
- 柱穴
- ≡ 溝跡



花立I遺跡遺構配置図

(4) ^{なが} ^{わたり} 長 渡 遺 跡

所在地 岩手郡玉山村渋民字長渡75-3
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 国道4号・渋民バイパス建設
発掘調査期間 平成8年8月1日～10月29日
発掘対象面積 4,200㎡
発掘調査面積 4,200㎡
遺跡番号・略号 KE67-2174・NW-96
調査担当者 晴山雅光・金子佐知子
協力機関 玉山村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・沼宮内

1. 遺跡の立地

長渡遺跡は、岩手郡玉山村渋民字長渡地内に所在し、東日本旅客鉄道東北本線渋民駅より北東に約1.8km 石川啄木記念館の南東 500mに位置する山間の緩斜面に造成された水田跡地にある。

調査区は、耕作用あぜ道及び用水路により東西に二分されており、東・西・南の三方を山の急斜面や沢と水路によって囲まれている。また現在の水田（昭和40年頃より後）造成時の切土・盛土によって、大きく原地形が改変され、原地形は概ね耕作用あぜ道に沿って緩やかに傾斜し、谷間に沢の流れる地形である。

2. 調査の概要

調査にあたり、現在も使われているあぜ道や用水路部分とその治水に伴う安全措置部分などは、遺構が検出された場合に広げるようにした。検出された遺構は、竪穴住居跡1棟・土坑18・焼土5・柱穴状ピット類18・旧水田跡である。また、造成時の攪乱・風倒木・最近の埋め戻し穴なども検出されている。

基本土層は、I a 黒褐色土（耕作土・現表土）、I b 褐色ブロック土（造成時盛土）、II a 黒褐色土（旧表土）、II b 黒褐・赤褐色混合土（旧水田層）、III a 黒褐色土、b 黄褐色土（十和田 a 火山灰層）、c 黒褐色土、IV 褐色土（パミス層）、V 暗褐色土（パミス包含層）、VI 黒色土（シルト）、VII 黒色土（湧水層）、VIII 褐色土（地山層）へと変化する。遺構の検出面はIV層の上で行った。遺物は主にII a 層、IV～V層から出土しており、II a 層からは、縄文土器の他、土師器や近現代の陶磁器片が出土し、IV～V層からは、縄文時代後期と考えられる時期の土器や石器などが出土した。

〈竪穴住居跡〉

調査区北西隅のIV層から検出された縄文時代後期の住居跡である。床面の北西側半分は、旧水田面の造成時に取水口として深く削平されており、また残っている南側部分の壁面も同じく旧水田面に削平されているため不完全な形で検出である。住居の中央と思われる位置には地床炉があり、その南側は固く締まった炭化物の混入する床面になっている。近くには径20～30cmの石が散在しているが、炉石であったか否かは、炉やその周辺に、石を使用した痕跡がないため不明である。平面は南北に長い楕円形を呈し、規模は長径5.6m×短径4.8m前後と推定される。柱穴も5基検出したが、削平されてしまった部分が大きく、どの様な配置・構成であったかは不明である。

〈土坑〉

縄文時代の土坑が16基・平安時代の土坑が2基検出された。そのほとんどが調査区の北西部と中央・南寄りの2か所に集中しており、その他には斜面に形成しているものが4基あった。土坑のほとんどが、IV層上面の検出であり、土坑の集中した2か所はIV層～V層が厚く堆積した遺物集中区でもある。

平面形は、楕円形、卵形、隅丸三角形、隅丸四角形、扇形、と多様で、重複しているものもある。規模は直径が最小40cm×40cm前後のものから最大210cm×125cmであり、深さは10cm前後から50cm前後の立上りが急な土坑まであり、その中でも深さ20cm前後の土坑が12基と一番多い。

土坑内からは、あまり遺物は出土してはいないが、ほぼ復元の可能な土器を伴って出土した土坑が1基ある。その土器は、縄文時代後期と考えられる高台付き浅鉢形土器で、内面には炭化物膜が付着しており、内外面には文様がなく、遺物の中で、他に類似したものは出土していない。また土坑の中には、遺構検出面で、焼土遺構が重複した状態で検出されたものが1基あり、埋土の中にも別の焼土ブロックを含んでいた。その他には、木の根により攪乱されているものや旧水田の造成時に遺構の上部が削りとられてしまっていて原形をとどめないもの、柱穴状ピットを伴う土坑や焼土遺構に隣接する土坑もあった。

〈柱穴状ピット〉

調査区北西の土坑の集中するIV層から、柱穴状ピットが4基、旧水田面中央（Ⅱb層）下のⅢ層から検出されたピット群が7基、またその他のIV層から検出されたピットが7基であった。調査区北西のピット群は土坑との重複関係から土坑よりも新しく、また埋土も比較的新しく締まりのないものであった。深さは15cm～30cmで立ち上がりは緩やかに傾斜している。配列は土坑を挟んで鍵形に並んでいる。旧水田面下のピット群は、径が15cmの円形ピットが3基、径が30cm～40cmの楕円形ピットが4基に分けられ、新旧のピットが混在している。深さは7cm～16cmと浅く、旧水田の開墾時に削られてしまったものと考えられる。その他のピット群には、規則的に配列されているようなものもあるが、同時期に形成されたものかは定かでない。

〈焼土遺構〉

縄文時代後期の焼土が1基、平安時代の焼土が4基検出された。縄文時代の焼土は、土坑や浅い窪みに隣接しており、形状は不整形で、厚さも一定ではない。平安時代の焼土は、前述した土坑上に形成した焼土が1基、それと時期を同じくする焼土が1基、旧水田面下のⅢ層から検出されたものが1基である。土坑上に形成した焼土は、土坑が埋まり浅い窪みになったところを、炉の代わりとして使ったと思われる。どの焼土も石や土器で区画した痕跡はなく、周囲に床面、柱穴など住居の痕跡が見られないので、屋外炉と思われる。

3. 出土遺物

遺物の9割前後が遺構外からの検出である。全体の出土量は大コンテナで1.5箱と少ないものの、広範囲にわたって複数の層位から出土した。遺物の種類も多く、各時代に関わる遺物が出土している。

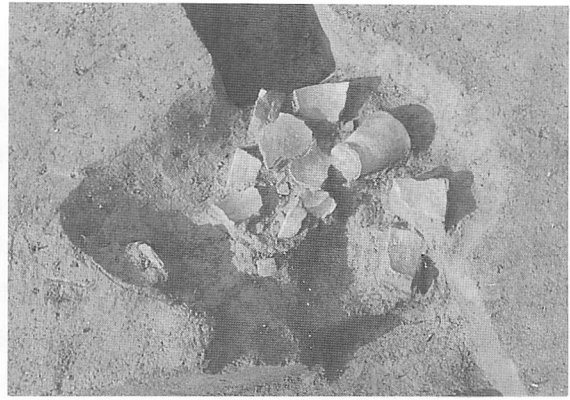
縄文時代後期と思われる土器片が全遺物の7割を占め、ミニチュア土器なども出土しているが、完形品は見られず、復元できる土器は少ない。その中で、灰黒色の表面に、赤色で彩りされた鉢形土器か壺形土器の口縁部や胴部と思われる土器片が7片出土している。表面に凹凸はなく、わずかにしか残っていないもののはっきりと黒色と赤色の顔料で文様を施しており、1片は入組文であることがわかる。その他に、石器（フレイク、スクレイパー、磨製石斧、敲磨器類）が出土しているが、石鏃や石匙などの、製品化されたものは出土していない。また、土師器が全遺物の1割強出土しており、皿か椀の高台部分や甕の口縁部など器種はまちまちである。近世では陶磁器片のほか、脇差や古銭（寛永通寶）などもわずかに出土している。

4. まとめ

長渡遺跡は、縄文時代後期から平安時代・近世、そして最近まで断続的に、人々が生活の跡を残した遺跡であった。旧地形から見て、遺跡の南から北に流れる山間の沢（低地）に沿って土器が多く出土しており、遺構から自然に落下して流れ込んだという可能性や、沢の水を生活用水として使用するため、付近一帯に水汲み・煮炊き用の土器が無造作に置かれ、そのまま残ったのではないかとも考えられる。また今回の調査では旧水田の開墾や耕作、現水田の大規模な造成など、度重なる土木事業により地層や地形がかなり改変されていることも明らかとなった。この事により、住居跡など生活の場として利用された遺構が、造成により消えてしまったものなのか、それとも本来、調査区域内にはなく、周辺に存在するものなのかという問題も依然として残る。特に土師器においては、出土した土器に伴う住居跡が検出されず、土師器の包含層が旧水田の造成により大きく削られてしまった可能性も有り、どこから来たものなのか原地形や土層も考慮に入れながら、これからの研究整理を進めたい。



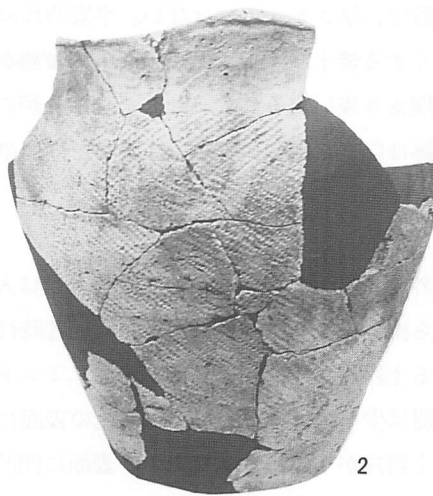
調査区遠景(北から)



遺物出土状況



1



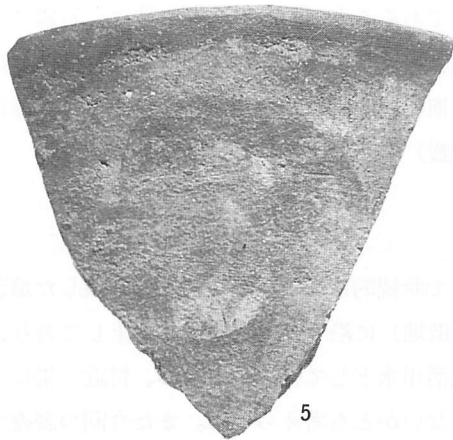
2



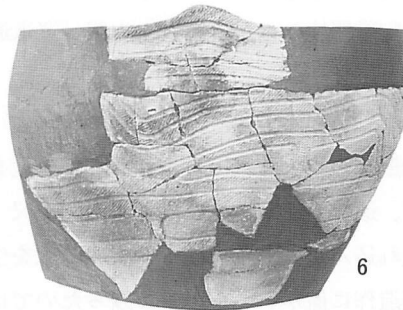
3



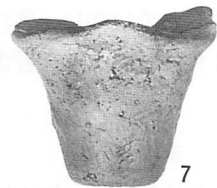
4



5



6



7



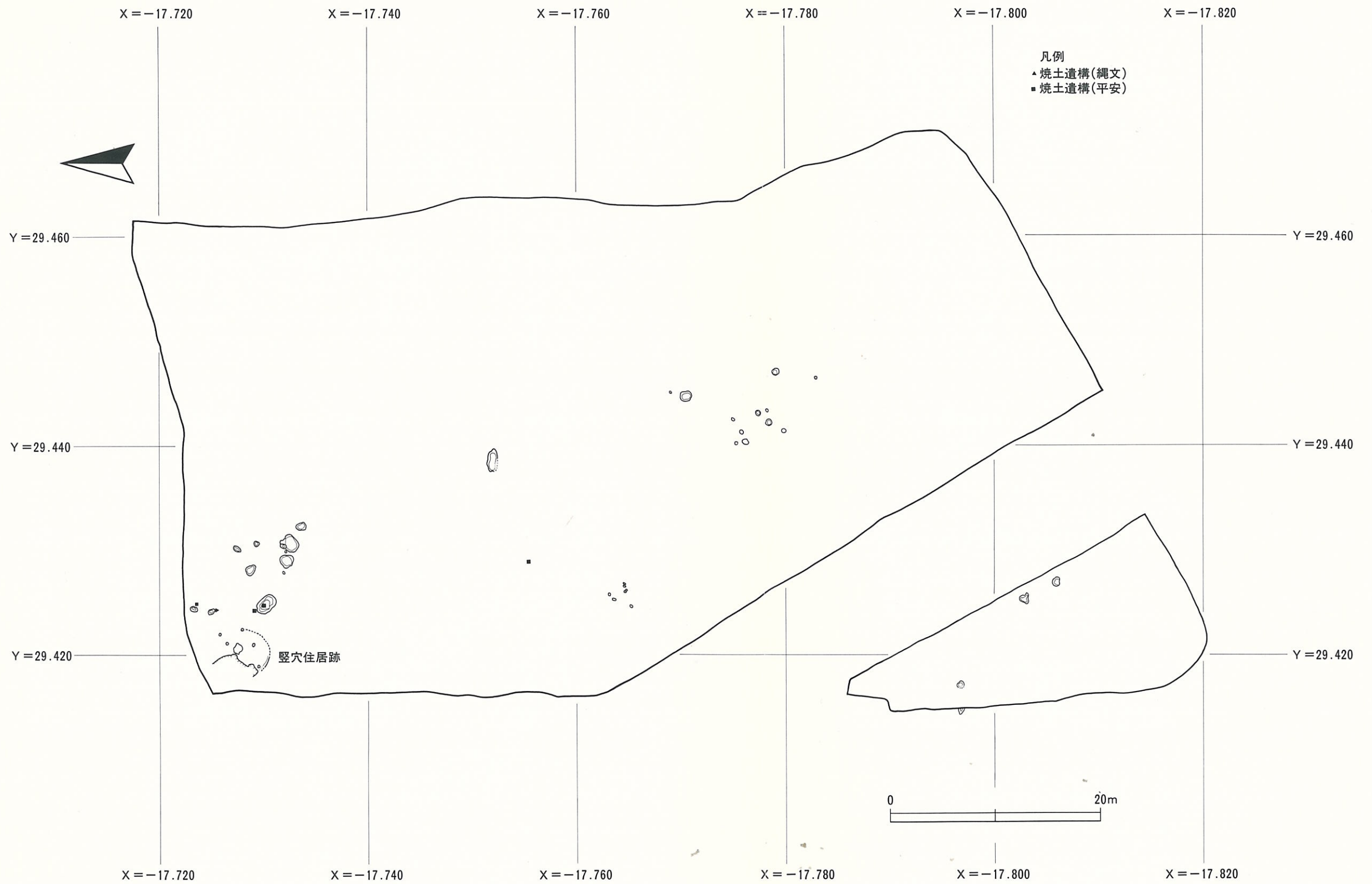
8



9

1. 縄文土器(台付浅鉢) 4. 磨製石斧 7. ミニチュア土器
 2. 縄文土器(壺) 5. 縄文土器(彩文) 8. 小刀
 3. 敲磨凹石 6. 縄文土器(深鉢) 9. 土師器(甕)

長渡遺跡検出遺構・出土遺物



長渡遺跡遺構配置図

(5) 小 幅 遺 跡 第 7 次 調 査

所在地 岩手県盛岡市本宮字小幅32ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 盛岡西バイパス建設
発掘調査期間 平成8年9月17日～10月28日
調査対象面積 2,300㎡
発掘調査面積 2,300㎡
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH07
調査担当者 菊地榮壽・高橋義介・酒井宗孝・金子昭彦
羽柴直人・高木 晃・村上 拓
協力機関 盛岡市教育委員会、地域振興整備公団



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

小幅遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高127m前後の河岸段丘縁辺部の微高地に立地している。現在の雫石川の氾濫源にあたり、旧河道の跡も残っている。調査区の現況は水田で、周辺地域も水田・畑地などの土地利用が多い。しかし、宅地や公共施設など盛岡市のニュータウンとして開発が進んでいる。

本遺跡の周辺には、西側約1kmの地点にある志波城跡をはじめ、本遺跡と時代的にも近いと考えられる林崎遺跡・本宮熊堂遺跡・矢盛遺跡などがある。

2. 調査の概要

本調査区は昨年度第5次調査区の東側にあたる。当初の調査面積は3,000㎡であったが盛岡市教育委員会の試掘調査で遺物・遺構が確認されない700㎡を対象外とし、調査面積は、2,300㎡である。検出した遺構は、溝跡6条、溝状遺構2条、道路状遺構1条、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡2棟、土坑12基、柱穴13基である。特に遺構・遺物は、B区に集中している。

〈溝跡〉

B区では東西に伸びる溝跡を1条検出している。掘立柱建物跡の柱穴と重複関係にあり、掘立柱建物跡より新しい。幅約0.7m、底部約0.5m、深さ約0.3m、長さ約40mの規模である。埋土中からは、土師器片、寛永通寶が出土している。寛永通寶が出土していることから、近世以降と考えられる。

C区では溝跡が西側で2条、東側で1条、計3条検出している。埋土から遺物を確認できず、時代は特定できない。

D区では北側と南側でそれぞれ1条、計2条検出している。北側の溝跡の規模は、長さ約10m、幅約1.6～1.8m、底部約0.4～0.6m、深さ約0.7～0.8mである。埋土中位から十和田a降下火山灰が検出されたことや土師器が出土していることから、この溝跡は平安時代前期のものと考えられる。南側の溝跡は南北と南東・北西の変形L字の形である。埋土から遺物を確認できず、時代は特定できない。

〈道路状遺構〉

D区北側の溝跡の南隣りで検出したもので、5次調査で検出された道路状遺構の延長部分である。道路状の幅は約3～3.4m、路面幅約1～1.8m、左右の側溝上端幅0.5～1.7m、底部幅0.2～1.5m、深さが約0.2mである。埋土からは十和田a降下火山灰や遺物は確認されていない。時代は特定できないが、北側の側溝が、十和田a降下火山灰を埋土にもつ北側の溝に切られていることから北側の溝より道路状遺構の方が古いと考えられる。

〈竪穴状遺構〉

調査区B区中央部で2基が重複関係にあり、西側の竪穴状遺構の方が新しいと思われる。平面形は西側が隅丸長方形であり、上端で約7m×6m、深さ0.4～0.8m、下端約6m×5mである。東側は平面形が楕円形であり、上端で約4×3m、深さ約0.4～1m、底部約1.2×0.9mである。

出土遺物は、19C初めの肥前陶磁器および大堀相馬産、瀬戸・美濃産、そして東北在地産と推定される陶磁器が出土し、特に東側の竪穴状遺構に多くみられる。

〈掘立柱建物跡〉

調査区B区竪穴状遺構の東側で2棟検出している。遺構の南側は調査区外となるため、全容は明らかではない。検出した部分では掘立柱建物跡1が、桁行5間、梁行2間(約10m×約4.6m)、間尺は約1.9～2.3mで

ある。柱穴からは、寛永通寶（古寛永）3点が出土していることから、掘立柱建物跡1は近世以降（1636年以降）のもものと推定される。根固め石を含む柱穴が2基見られる。

掘立柱建物跡2は掘立柱建物跡1の西側の柱穴と重複しており、掘立柱建物跡1より新しいと考えられる。桁行2間、梁行2間（約5.6m×約3.7～3.9m）、間尺は約1.6～2.0mである。柱穴3基では、根固め石が見られる。掘立柱建物跡1との柱穴の重複から近世以降のもものと推定される。

〈土 坑〉

12基検出したが、埋土から平安時代の土師器片を出土したもの1基で、他の11基からは出土遺物は確認されず、時代は特定できない。

〈柱 穴〉

13基検出したが、根固め石は見られず、また出土遺物は確認されないことから、時代は特定できない。

〈溝状遺構〉

A・B区でそれぞれ1条ずつ検出している。A区の溝状遺構は、かなり酸化鉄の集積が見られ、旧河道、あるいは後背湿地などにかかわる遺構と考えられる。時代は特定できない。

また、B区西端の溝状遺構については、用水路にかかわる遺構と考えられる。時代は特定できない。

〈出土遺物〉

縄文土器片、須恵器片、土師器片、土師質皿片、陶磁器片が出土している。土師器片については、平安時代中期～後期のもと思われる。近世陶磁器の出土量は中コンテナで1箱である。陶磁器の産地は肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬が多く産地不明の東北在地のものもある。古銭（寛永通寶11点）も出土している。

他に煙管、鋸齒縁状石器、石製品、土製品、堅果類が出土している。

3. まとめ

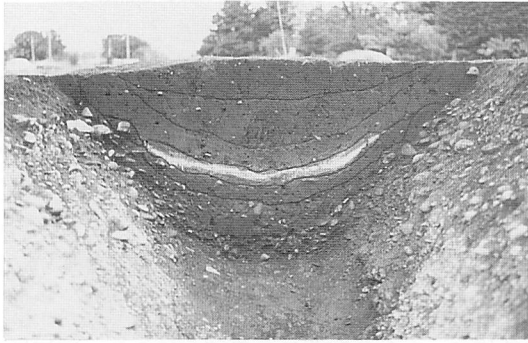
今回の調査で、小幅遺跡は平安時代と思われる溝跡、近世の掘立柱建物跡が確認できたことから大きく二時代において人々の生活が営まれていたと考えられる。周辺の調査区域との関連が幾分明らかになり、特に近世以降の本宮地区の集落の様相を知る手がかりを得ることができた。竪穴状遺構の性格、竪穴状遺構と掘立柱建物跡との関係、近世の本宮地区の景観、肥前陶磁器、瀬戸・美濃産、東北在地産の流通など今後の調査研究の対象を確認できたことは大きな成果である。



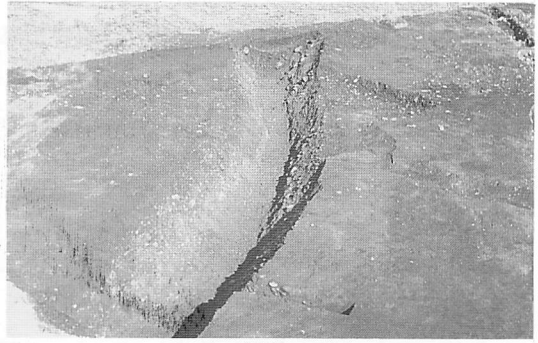
遺跡全景



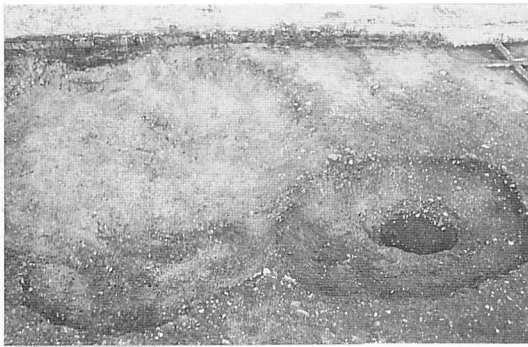
土師器出土状況



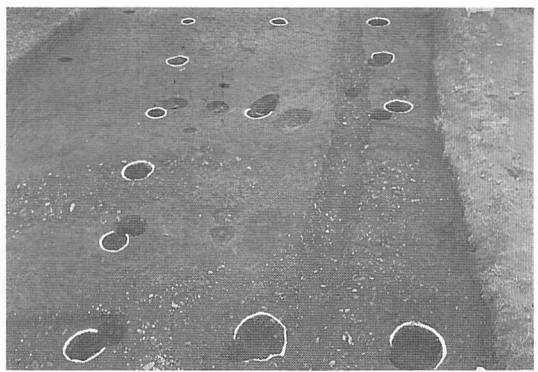
溝跡土層断面



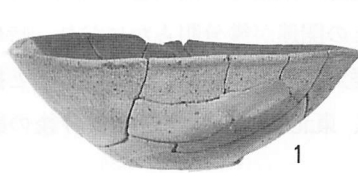
溝跡



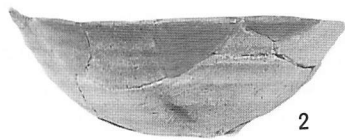
竪穴状遺構



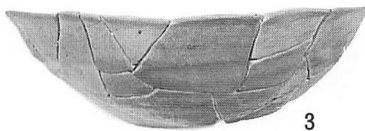
掘立柱建物跡



1



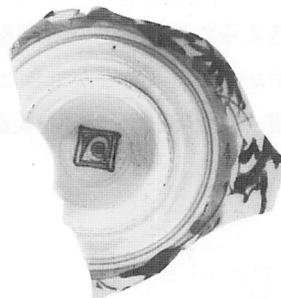
2



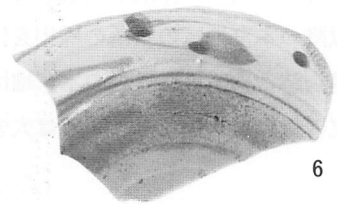
3



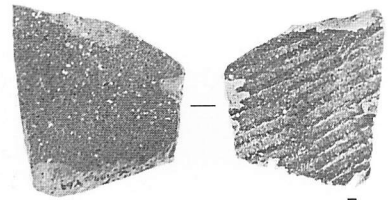
4



5



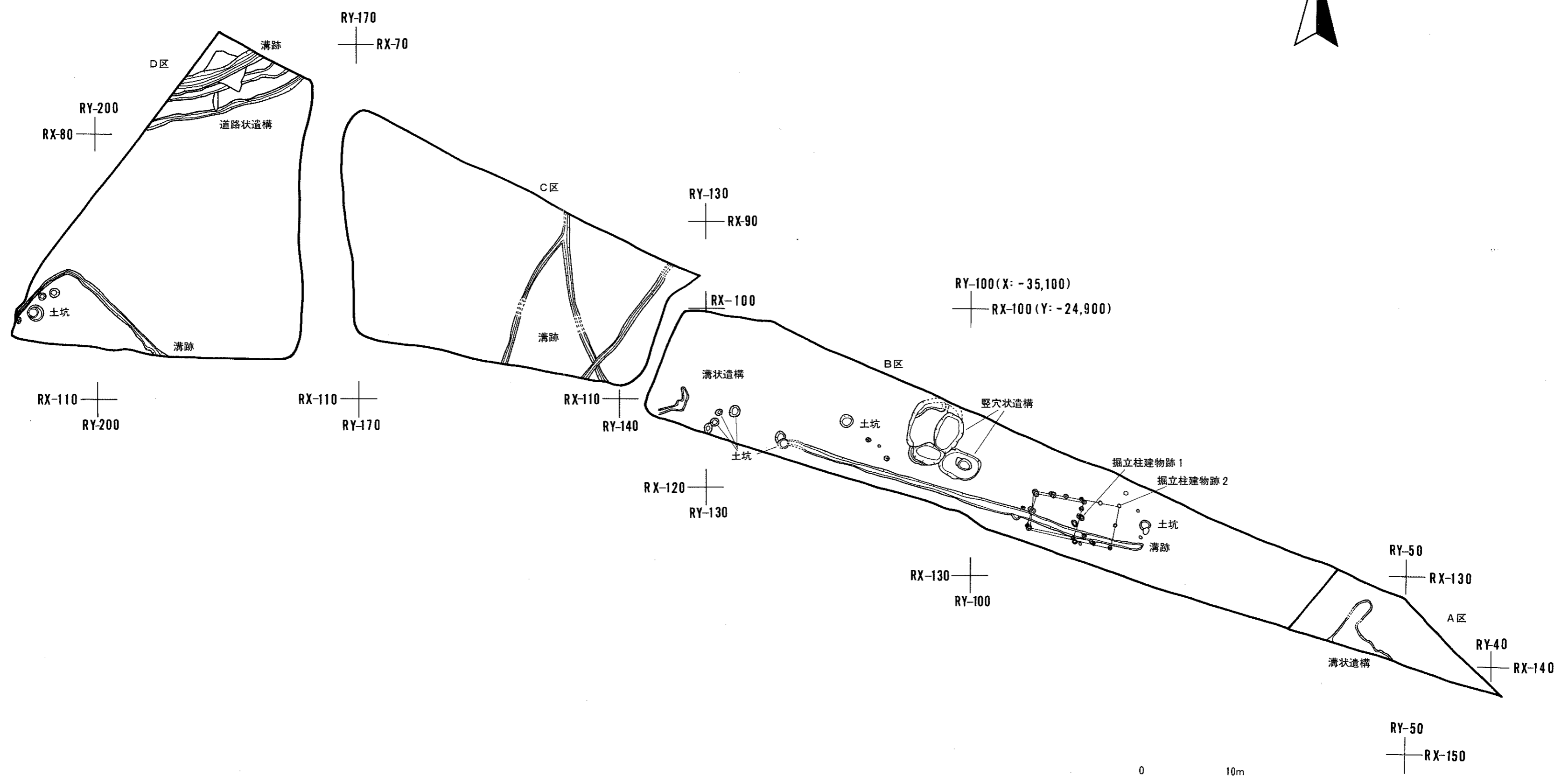
6



7

- 1 ~ 3 土師器坏
- 4 ~ 6 肥前磁器
- 7 須恵器甕

小幅遺跡第7次調査検出遺構・出土遺物



小幅遺跡第7次調査遺構配置図

(6) 沢 田 I 遺 跡

所在地	山田町山田14地割10ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
事業名	三陸縦貫自動車道（山田道路）建設
発掘調査期間	平成8年8月1日～平成8年8月30日
調査対象面積	980㎡
発掘調査面積	980㎡
遺跡番号・略号	L G 94-0032・S D I-96
調査担当者	佐々木清文・佐藤良和
協力機関	山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槓

1. 遺跡の立地

沢田Ⅰ遺跡は山田町山田14地割10ほかに所在し、JR山田線陸中山田駅の北方約2km付近に位置する。遺跡は山田北小学校北側100mの山際の緩斜面から沢沿いにかけて広がっている。遺跡の周辺は関口川に沿って形成された谷底平野に張り出す山麓の緩斜面や小規模な砂礫段丘が見られる。当遺跡の沢を挟んで東側には、縄文時代の集落・古代の製鉄・鍛冶遺構・中世城館遺構の検出された沢田Ⅱ遺跡がある。西側の山上には古墳群の検出された房の沢Ⅳ遺跡がある。

2. 調査の概要

沢田Ⅰ遺跡の調査は平成6年度に始まり、平成7年・8年と継続している。当初の調査対象面積は2,500㎡であったが、途中で房の沢Ⅳ遺跡の二次調査を行うことになり、工事用道路に係る980㎡の調査となった。

今年度の調査で検出された遺構は、縄文時代住居跡9棟・奈良時代住居跡2棟・平安時代住居跡1棟・土坑9基・焼土遺構9基・陥し穴1基である。縄文時代の住居跡には昨年から継続する大型住居跡も含まれ、それは長さ20mになり、沿岸部ではもとより県内でも有数の大きさになった。

〈縄文時代住居跡〉

縄文時代の住居跡は、傾斜地に立地していることと攪乱を多く受けていることで、大型住居を除き、西側の壁と床の一部だけが残るものが多い。

前期初頭の住居跡は直径6mほどの円形のものであるが、西側の壁と床しか残存しない。床面は貼り床で、壁は湾曲して立ち上がる。柱穴・炉跡は明瞭ではない。遺物は尖底土器や繊維の混じる土器片・石匙等の剥片石器が出土している。

前期前葉の住居跡は、大型住居と小型の隅丸方形状である。大型住居は6・7回の建て替えの痕跡がある。小型住居は長さ2mほどで、柱穴や炉は見られない。前期前葉の土器片と石鏃などの剥片石器が得られている。

中期中葉の住居跡は、初年度に調査された住居跡の床付近や大型住居付近から検出された。円形を基調とし、中央付近に石囲炉や地床炉を持つ。小型の住居が多いせいか、柱穴は明瞭でないものが多い。中期中葉と後葉のものがあり、遺物は土器片や剥片石器が得られている。

〈奈良時代住居跡〉

奈良時代の住居跡は方形だったようで、北側壁中央付近にかまどが作られている。縄文時代の大型住居の上位から検出された住居からは、線刻のある坏が重なって出土している。

〈平安時代住居跡〉

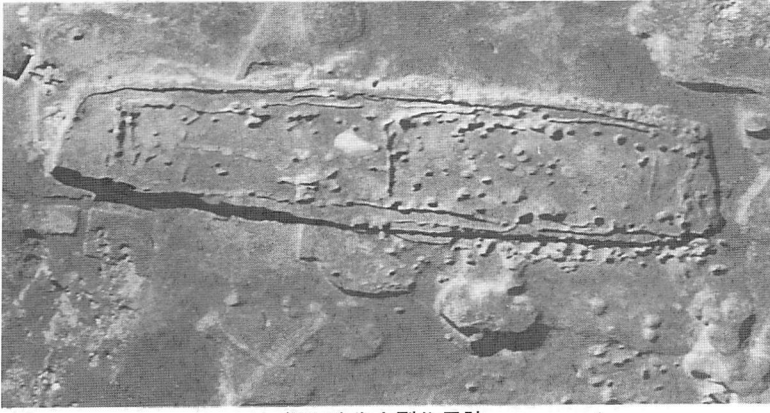
平安時代の住居跡は、後世の土取り穴で攪乱を受け、西側壁と床面の一部のみが残る。ロクロ使用の土師器片が出土している。

〈その他〉

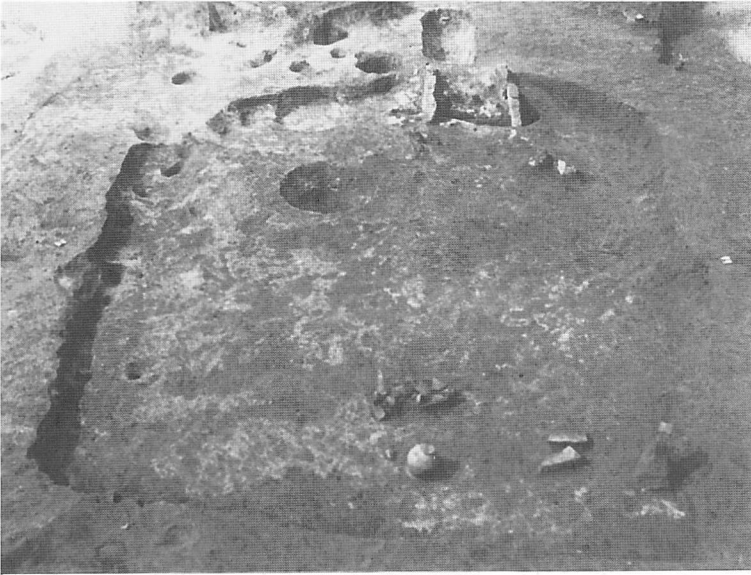
土坑や焼土遺構・陥し穴は縄文時代の検出面で検出され、周囲や埋土からは縄文土器片や石器が得られている。遺構外からは縄文土器や土師器片以外に、鉄滓やフイゴの羽口片も出土している。

3. まとめ

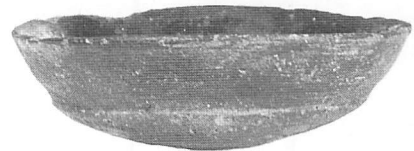
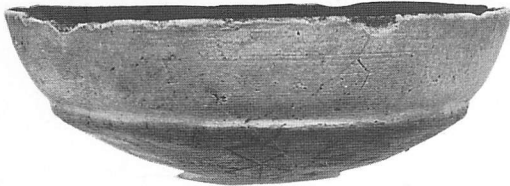
昨年に継続する今年度の調査では、長さ20mの大型住居の全貌を明らかにしたほか、奈良時代や平安時代の住居跡を検出し、縄文時代前期から平安時代まで継続する集落であることが明確になった。それと同時に、隣接する房の沢Ⅳ遺跡の古墳群や沢田Ⅱ遺跡との関連も深くなってきた。



縄文時代大型住居跡

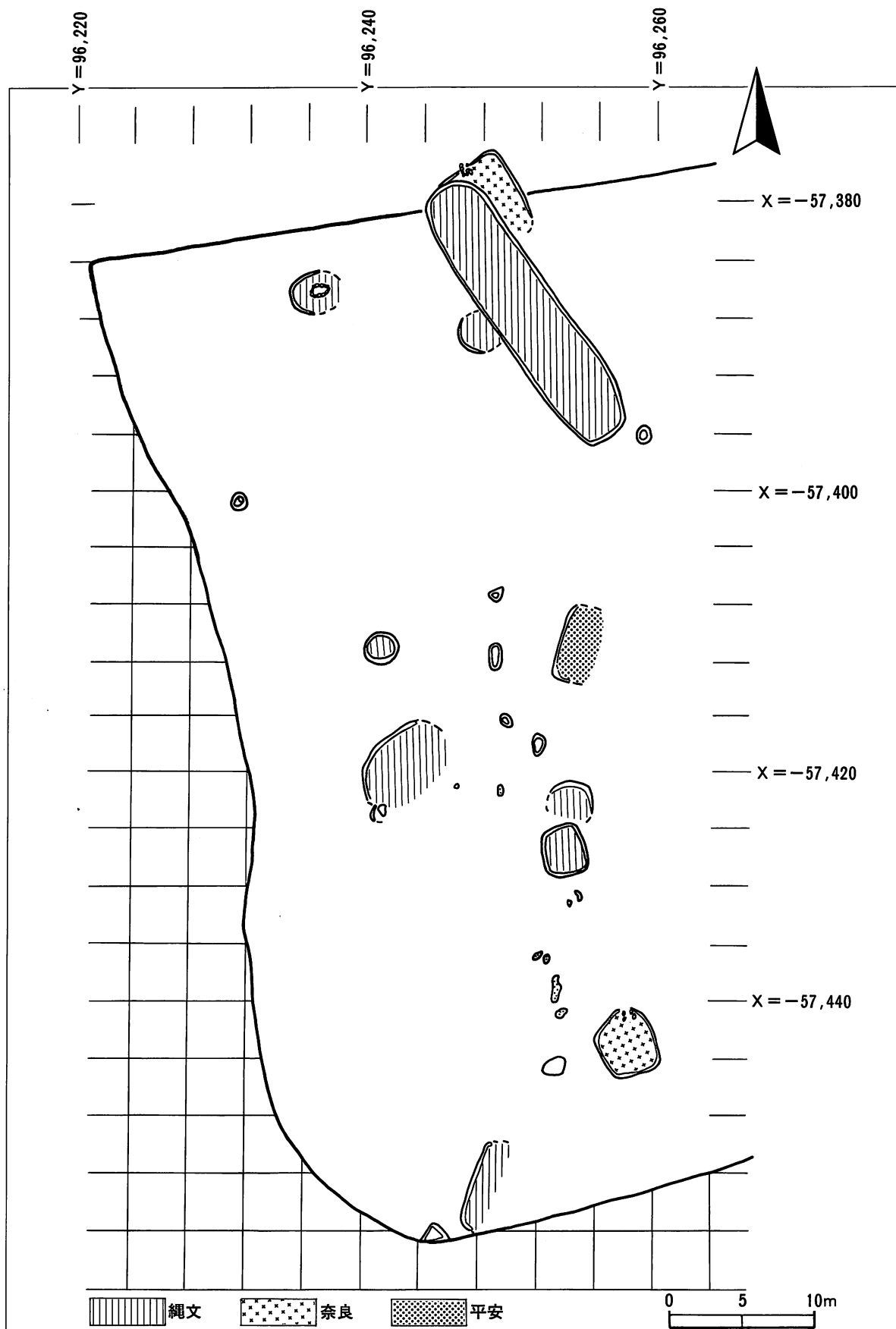


奈良時代住居跡



線刻のある土師器

沢田 I 遺跡検出遺構・出土遺物



沢田 I 遺跡遺構配置図

(7) 沢田Ⅱ遺跡

所在地 下閉伊郡山田町山田3地割55-1ほか
 委託者 建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
 事業名 三陸縦貫自動車道(山田道路)建設
 発掘調査期間 平成8年4月11日～7月31日
 調査対象面積 4,000㎡
 発掘調査面積 4,000㎡
 遺跡番号・略号 LG94-0044・SDⅡ-96
 調査担当者 佐々木清文・佐藤 良和
 協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槓

1. 遺跡の立地

沢田Ⅱ遺跡はJR山田線陸中山田駅の北方約2km付近に位置し、山田北小学校の北東に広がっている。関口川の下流域にあり、その支流の沢田の沢と間木洞川の間細長く延びる丘陵上から東側の斜面にかけて立地している。この丘陵の南側にも小さな丘陵が続き、八幡館遺跡となっている。

この丘陵は120m×400mほどで広がる館跡で、南東側には二段の腰郭が作られ、北側の丘陵基部は二重に切って落とされている。南側を除く周囲は急傾斜になっており、両側の沢が天然の堀の役割を果たしている。標高は丘陵上が33m東側の畑が12mと比高差が約20mある。

郭上の平場や腰郭の跡は戦後まで畑地として利用され、その後杉が植林され現在に至っている。また郭の南端は江戸時代後期から墓地として利用されていた。

2. 調査の概要

調査は中世城館跡である沢田館の全容を把握するために雑木除去をし、空中写真撮影・地形測量を行ったのち、路線部分の発掘調査を行った。路線部分の調査面積は4,000㎡で、主郭上の一部と南西側の腰郭とそれから連続する西側の斜面を調査した。その結果、中世城館造成に先立つ遺構として、奈良時代・縄文時代の遺構も検出され、複合遺跡であることが確認された。

(1) 縄文時代

腰郭や斜面から竪穴住居跡10棟と土坑7基が検出された。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、斜面に作られていたことや古代や中世の造成工事で切られ、一部が破損したり、または部分的にしか残存しない。一段目の腰郭の下の斜面から二段目の腰郭の下の斜面に立地し、館全体の中では南東向きの斜面となっているが、傾斜は決して緩くない。形状は円形ないしは楕円形を基調とするものと長方形を基調とするものがある。前者は石囲炉や土器埋設炉・複式炉を伴い、壁際に周溝が巡るものもある。直径が5～6mのものと4m以下のものがあり、大きな住居跡には柱穴が明瞭に残る。後者は地床炉を持ち、壁際に柱穴状土坑を伴うものと炉や柱穴が見られないものがある。

伴出遺物は、多い住居跡と少ない住居跡があるが、埋設土器や出土破片から縄文時代中期後葉から末葉と思われる。縄文土器の他に石鏃・石匙・磨製石斧などの石器と小型土器に納められたアスファルトの塊がある。また、住居の廃棄後に貝殻や動物遺骸の捨て場として利用された遺構もある。

〈土坑〉

土坑は開口部が円形で内部が広がる袋状のものと筒状のものがあるようである。斜面のためか底部付近しか残らないものや、地滑りで、開口部がずれたものもある。

(2) 奈良時代

竪穴住居跡7棟と製鉄炉1基・鍛冶炉6基・土坑3基・排滓場・貝層が検出された。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は二段目の郭上に検出された。斜面の下方側は館の造成工事等で切られて残存しないが、重複もあり、壁やかまどの一部しか残存しないものもある。小型の住居跡が多いようで、柱穴はほとんど確認されていない。西側壁にかまどの残る住居跡には、煙道が約2mと長いものもある。出土遺物はロクロ未使用の坏や甕の土師器と鉄鏃や錫杖の頭部状の鉄製品・砥石などが出土している。

製鉄炉と鍛冶炉は三段目の郭の縁から下の斜面にかけて検出されている。調査地の北側から製鉄炉・鍛冶

炉が6基重複し、南側から1基の鍛冶炉が検出され、その下方の斜面は排滓場となっている。

〈製鉄炉〉

製鉄炉は鍛冶炉の下位から検出された。黒色土の斜面を地山風化花崗岩層まで掘り込んで、径3mほどの半円状の平坦な作業場を作り出し、斜面下位側に径60cmほどの炉底が築かれている。炉底の部分しか残存しないが、周囲は5～10cmほどの範囲で還元色を呈している。作業面からはフィゴの羽口や送風装置は検出されていない。炉の下方の斜面からは流出滓が検出されている。

〈鍛冶炉〉

鍛冶炉は径50cmほどの浅い焼土の窪みと鉄床石が隣接するものと、径80cmほどの粘土で囲われた炉がある。双方ともフィゴの羽口片が多く散乱し、木炭を噛んだ椀形の鍛冶滓が多く出土するが、後者は椀形滓の大きさが直径20cm以上のものもあり、大型である。また前者は鉄床石の周辺に鍛造剥片が多く見られる。大型の炉は精練鍛冶を行った大鍛冶炉の可能性がある。

北側の鍛冶炉は、ほぼ同じ場所に何度か繰り返して作られており、その上に貝殻廃棄層が見られ、貝類の他に動物遺骸や鹿角製品が出土している。鉄片・鉄塊系遺物・ロクロ未使用の土師器片がわずかに出土しているが、製作途中の鉄製品は出土していない。ロクロ未使用の遺物を伴うことからこれらの工房の時期は奈良時代以前と思われる。

〈貝層〉

貝層は鍛冶炉の上や排滓場の近くに形成され、アワビやイガイ・クボガイなどの岩礁生のものやホッキ・アサリ・サビシラトリガイ等の砂泥生のものがあるが、中にはシライトマキバイのようにやや深海に生息し網漁を想定させるものもある。

土坑は住居跡の近くや内部から検出されたもので、筒状である。埋土は縄文土坑に較べ黒色土が多く、締まりは疎で、鉄滓を含むものもある。

(3) 中世以降

中世と思われる遺構は郭・腰郭の他に溝跡がある。三段目の郭上に調査地の中央付近から始まり等高線に並行するように南に回って二本掘られている。縄文時代の住居跡を切っている。

調査地南西の八幡館への連絡部分は、当初空堀が予測されたが、その部分から古代の鍛冶炉や貝層が検出されたため、その部分には空堀や土橋は最初からなかったことが明らかになった。

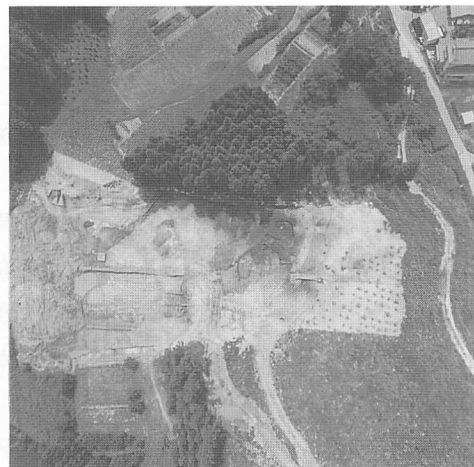
このほか近現代と見られる土坑群が、三段目の郭上から八幡館にかけてと一番下の斜面から検出されている。いずれも浅い表土又は耕作土から風化花崗岩層まで掘り込んで作られている。三段目の郭上のものは直径80cmほどのものが多く、深さ15～20cmほどである。重複もある。出土遺物はほとんどないが、一部から一銭銅貨が出土しており、その時代以降の可能性もある。また下の斜面から検出されたものは尿尿を保存していた肥桶の跡のようである。

3. まとめ

今回の調査で沢田Ⅱ遺跡は、中世城館だけでなく縄文時代・奈良時代の複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代の集落は東向きの斜面に検出されているが、南側の斜面にも広がっていたものと思われる。奈良時代の集落は、製鉄や鍛冶を行う集団の工房と住居跡からなり、東向きの斜面を利用して営まれているようである。発掘調査地の南側にも住居跡の存在が想定される。中世の館跡は両側の沢を天然の堀として利用し、平場が数段形成されている。南東に隣接する八幡館とも接続するようである。



遺跡遠景



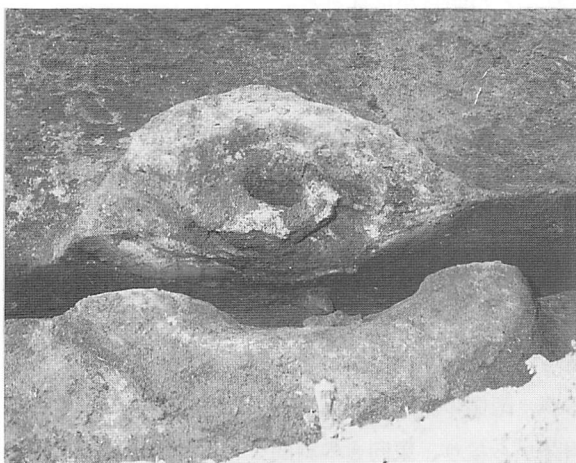
調査範囲と検出遺構



検出遺構



縄文時代住居

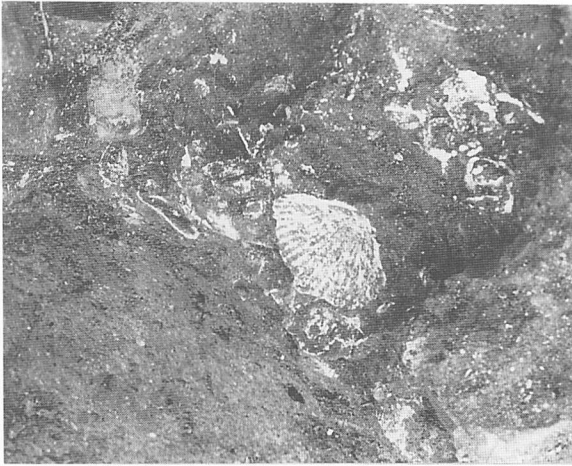


大鍛冶炉



製鉄炉

沢田Ⅱ遺跡検出遺構他



貝層出土状況



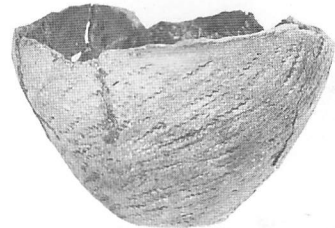
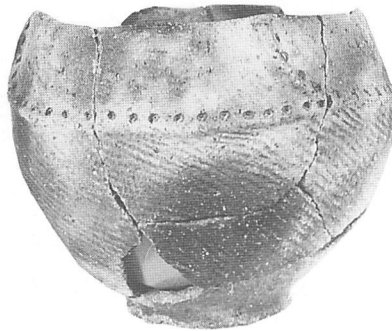
鉄製品出土状況



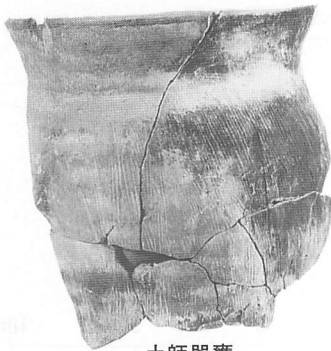
縄文土器



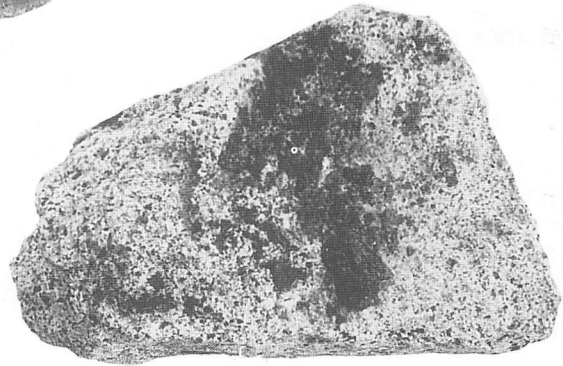
ミニチュア土器



アスファルト入浅鉢

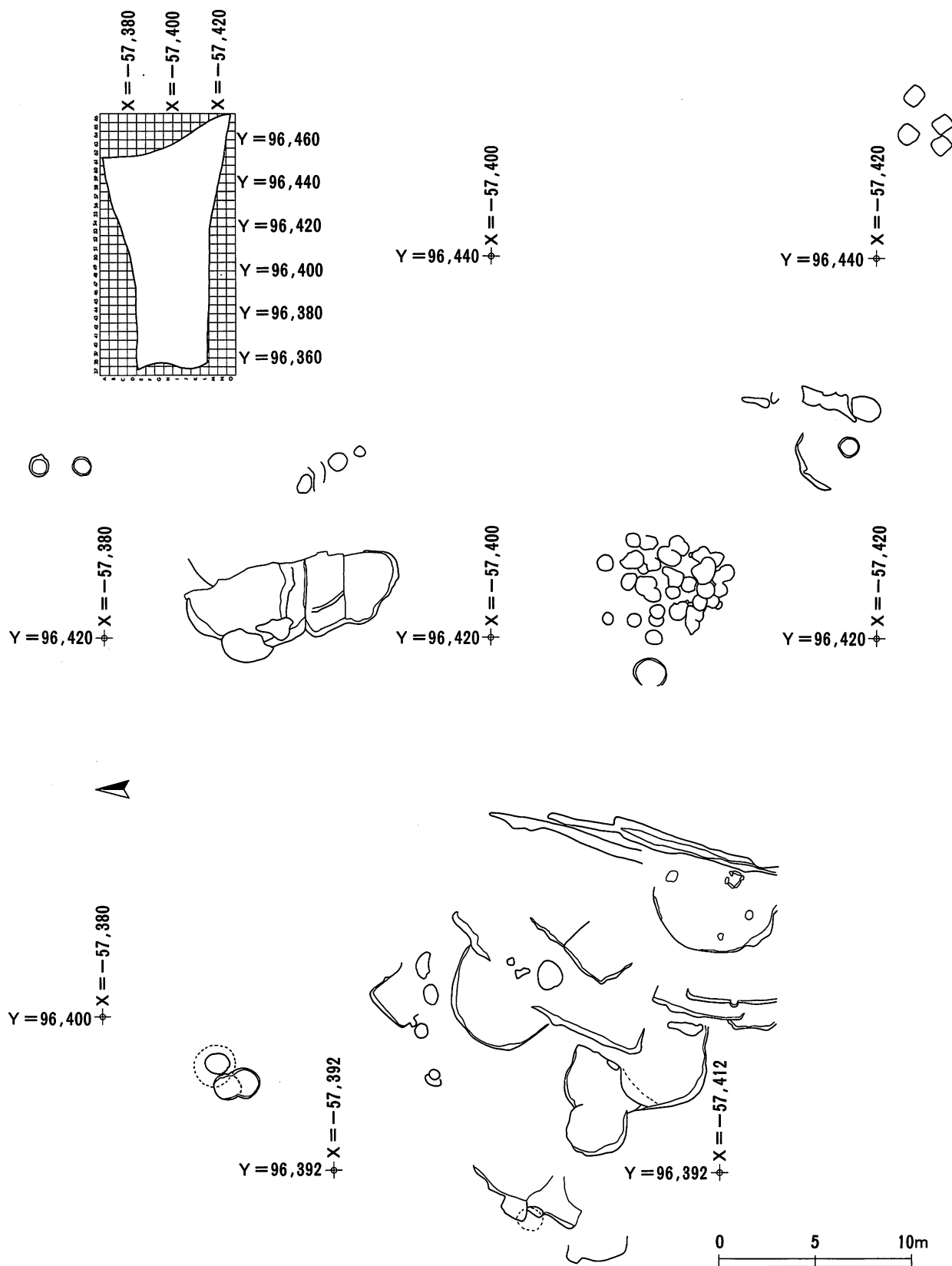


土師器甕



鉄床石

沢田Ⅱ遺跡出土遺物



沢田Ⅱ遺跡遺構配置図

ぼう さわ
(8) 房の沢IV遺跡(1)

所在地 下閉伊郡山田町山田14ほか
委託者 建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
事業名 三陸縦貫自動車道(山田道路)建設
発掘調査期間 平成8年4月13日～6月14日
調査対象面積 3,600㎡
発掘調査面積 3,600㎡
遺跡番号・略号 LG94-0050・BSIV-96(1)
調査担当者 大道篤史・川向聖子
協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槌

1. 遺跡の位置と立地

房の沢Ⅳ遺跡(1)はJR山田線山田駅の北方約2km付近、山田北小学校の北西に位置し、山田湾に注ぐ関川流域の小さな沢によって形成された扇状地状の南向きの緩斜面に立地している。

遺跡後背には大畑山地を中心とする小起伏山地が展開し、砂礫段丘と扇状地が交互に入り組んだような地形の様相を呈している。遺跡の東側の丘陵部の尾根には房の沢Ⅳ遺跡(2)が存在し、尾根を一つはさんだ東側に沢田Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。なお遺跡の大半はもともと深い沢であったようであるが、戦後盛り土を行って整地し、現状は牧草地となっていた。

2. 調査の概要

房の沢地区の調査は当初、本遺跡の範囲であったが、調査後半に蕨手刀が出土し、東側丘陵部に遺跡の存在が予想されたため、協議を交わした後、房の沢Ⅳ遺跡(2)の調査が行われている。

今回検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝状遺構7条、焼土遺構7基、柱穴状の小穴91基である。遺構は東側丘陵部側に集中し、中央部の沢の存在した区域からは検出されていない。西側から1棟掘立柱建物跡と思われる遺構が検出されている。

〈掘立柱建物跡〉

山際南東部斜面沿いから1棟(1号掘立柱建物跡)、中央部西側のⅣd層において1棟(2号掘立柱建物跡)確認されている。2棟とも全体の規模を把握することはできなかった。1号掘立柱建物跡は2号土坑を囲むように柱が並ぶが詳細については明らかでない。周囲に廃棄されたと思われる焼土が検出され、建物跡に関わるものと推測される。

〈土坑〉

4基検出されており、地山面での検出が2基、Ⅳa層での検出が2基である。2号土坑は壁・床面とも黄褐色粘土で貼り固めており、埋土にも黄褐色土のブロックが入り込む。周囲には柱穴状ピットが集中し、2号土坑に伴う建物施設であったと考えられる。周辺には投げ捨てられたと思われる焼土が3箇所から検出されているが、土坑の性格については不明である。

〈溝跡〉

Ⅲ層面で3条、Ⅳ層面で4条それぞれ検出されており、5号溝跡がやや直角に近い形流れを変えている。他は南北に直線的にのびている。埋土の共通点として砂質土が中位に混入し、底部は細く入り込んだような状況となっている。鉄滓も多く含まれるが、これらの溝は雨水の流水路である可能性が高い。また山際南東側より半円状に巡る溝が1条検出されている。斜面下半部は削平されており、全容を明らかにできなかったが、切り合い関係から周囲の掘立柱建物跡よりも古い遺構であることは明らかである。

〈出土遺物〉

鉄滓が大半を占め、コンテナ15箱程度出土している。その他の遺物として鉄製品が多く、蕨手刀・刀子・釘などが出土している。土器は少なく小コンテナで2箱程度の出土である。時期は奈良時代後半と思われる須恵器と土師器が少量、縄文時代後期・弥生時代後期の土器が数点出土している。また近世の陶磁器片が少量出土している。石器として縄文時代の石鏃が8点ほど出土している。須恵器以外は沢を挟んだ調査区北側及び東側から出土している。また同じ層から各時代の遺物が出土していることから、斜面上部からの流れ込みの可能性が高いと考えられる。鉄滓の出土範囲も調査区北東部に限られ、斜面上部ほど大きい塊でより多く出土することから調査区外斜面上部に製鉄関連遺構の存在する可能性がある。須恵器は表土から1.7mほ

ど掘り下げたIV d層から出土している。

・蕨手刀について

蕨手刀は全国で250振り余り確認されているが、そのうち90振りほどが岩手県内からの出土である。本遺跡からは完形品1振りを含めた計3振りが出土している。しかしその9割方は古墳からの出土であり、古墳以外からは少数となっている。

(出土地点) 東斜面へり際から完形品を含めた3振りと刀身部1点が出土している。完形品の1振りは山際部分から、その他は3mほど下方から出土している。

(出土層位) IV層上面の黒色土中より出土している。この面は鉄滓が多く出土している面でもある。北側の斜面上部から特に多く鉄滓が出土している。

(出土状況) 蕨手刀を埋め込んだと思われる掘り込み跡や周囲に溝をまわしたと考えられるようなプランは認められなかった。古墳出土の例にある鞘及び足金具の痕跡は見られるが、周囲に古墳の存在は認められなかった。1振りが垂直に立った状態で出土している他は、横たわった状態で出土している。東側丘陵部から流れ込んだ可能性が強いと考えられる。

(形態)

No.1 蕨手刀(完形品) 全長48cmで短寸気味であり、刃長は36cmを測る。平造りであり、若干反り気味となっている。柄長は7cmで刀身に対し、柄反りが見られ、柄の絞りも強い。刀身の幅は元幅5.5cm、先幅3.5cmと幅広でしっかりとした作りである。

No.2 蕨手刀(刀身部欠損) 柄長は8.5cmであり、No.1蕨手刀よりも長めの柄を持っている。柄尻部もより丸みを帯びる。刀身の幅は元幅5.5cmを測る。

No.3 蕨手刀(刀身部欠損) 柄長は7cm、刀身の幅は元幅5.5cmであり、No.1蕨手刀と同じ特徴を有する。その他の鉄製品としては刀子・鋸頭・槍鉋・鉄玉・釘などが出土している。

3. まとめ

今回の調査によって、周辺に製鉄遺構及び古墳の存在したことが推測され、房の沢IV遺跡(2)の調査が行われた。その後の調査では東側尾根部より多くの古墳が見つかり、副葬品も多数出土している。

上記のことから、蕨手刀は8世紀前～中葉に製作され、しかも房の沢・沢田一帯を支配下に持つ豪族を中心とした製刀集団の存在が推測される。「蝦夷」の権力者の象徴といわれている蕨手刀の工房の存在は8世紀前半の大和朝廷の蝦夷征討の進展を伺い知ることが出来るだけでなく、蝦夷の文化圏についても貴重な資料を提供することになると思われる。



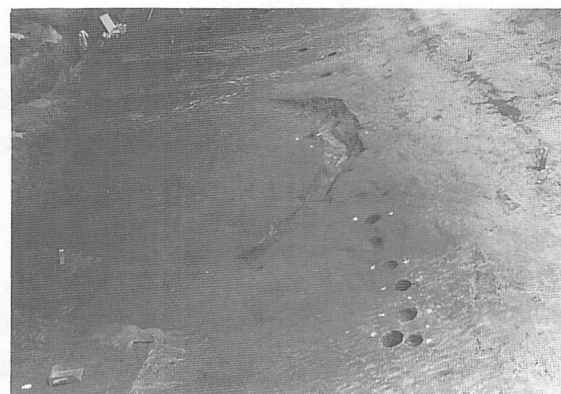
空撮写真(手前中央が調査区)



蕨手刀出土状況



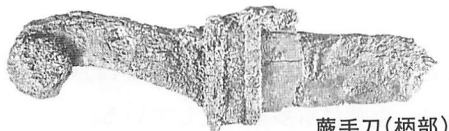
掘立柱建物跡



周溝状遺構と柱穴列



蕨手刀(完型)



蕨手刀(柄部)



蕨手刀(刀身部)



蕨手刀(柄部)



刀子



鉄鎌



須恵器



鉄鎌



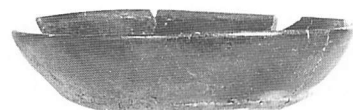
釘



釘

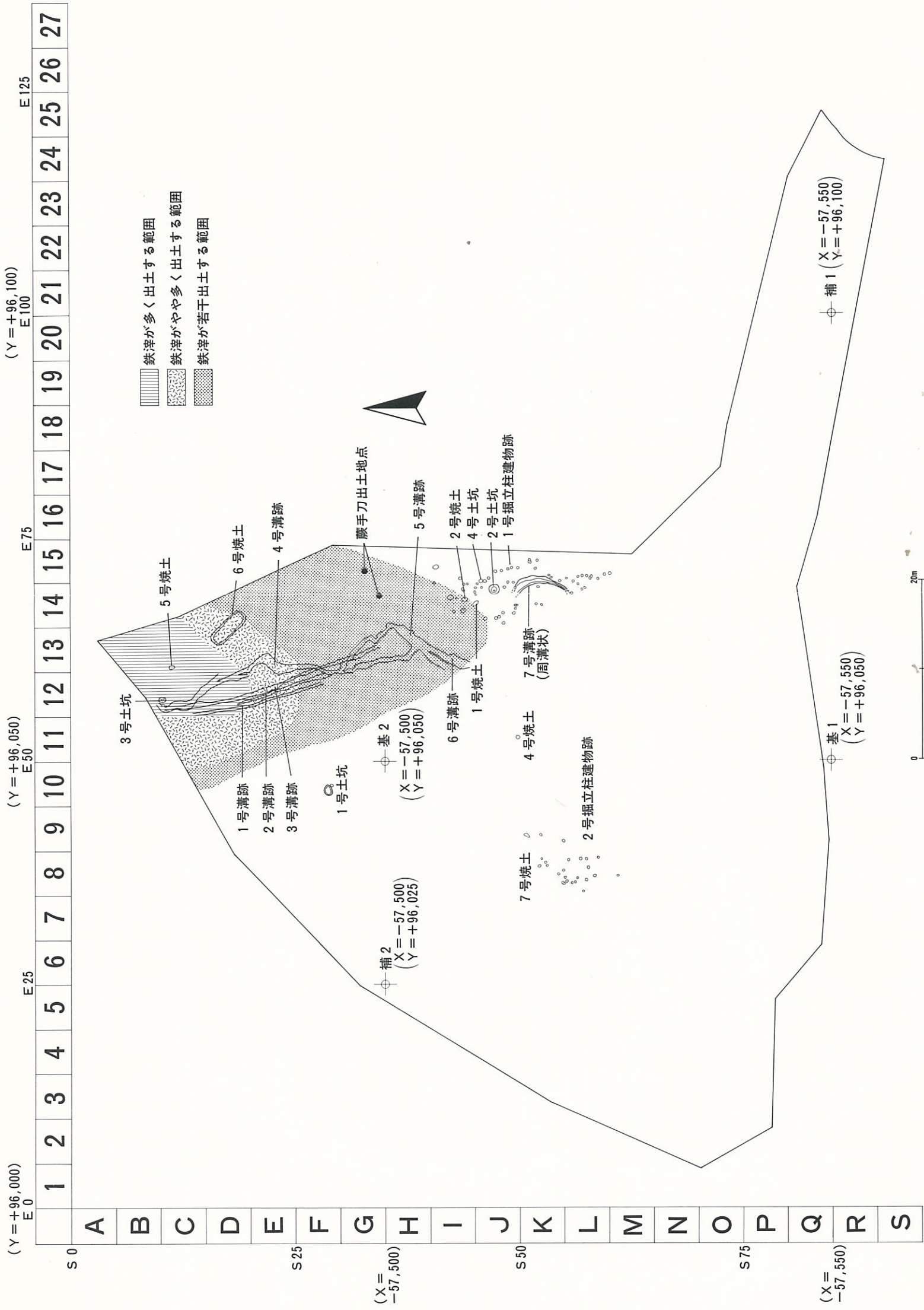


鉄玉



土師器

房の沢Ⅳ 遺跡(1)検出遺構・出土遺物



房の沢Ⅳ遺跡(1)遺構配置図

ぼう さわ
(9) 房の沢Ⅳ遺跡(2)

所在地	山田町山田14地割103-1
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
事業名	三陸縦貫自動車道(山田道路)建設
発掘調査期間	平成8年9月2日~平成8年11月7日
調査対象面積	2,400㎡
発掘調査面積	1,900㎡
遺跡番号・略号	L G 94-0050・B S IV-96(2)
調査担当者	佐々木清文・佐藤良和
協力機関	山田町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 大槓

1. 遺跡の立地

房の沢Ⅳ遺跡(2)は山田町山田14地割103-1に所在し、JR山田線陸中山田駅の北方約2km付近に位置する。遺跡は山田北小学校北西側に連なる低位丘陵の南向きの尾根の頂部から南側の斜面を主とし、西側の沢跡にかけて広がっている。一次調査は沢跡の谷底部分の発掘を行い、二次調査は尾根上を中心に行った。

遺構は尾根の頂部から尾根づたいに南側の山腹にかけて広がる。標高は35m~57mで、山田湾や十二神山・霞露ヶ嶽・鯨山を眺望できる絶景の地である。尾根の南東は小学校用地の整備に伴いV字状に切られ、階段状に整備され、U字溝が埋設されているが、本来はもう少し緩やかな沢地形だったようである。遺跡東側には、縄文時代から古代の集落である沢田Ⅰ遺跡が、さらに東側には古代の製鉄炉や鍛冶工場の検出された沢田Ⅱ遺跡がある。西側から南側にかけての低位丘陵には縄文時代から古代の集落や製鉄遺跡が点在している。

2. 調査の概要

尾根の頂部や傾斜の緩い部分では墳丘と周塹の痕跡が地表から観察されたが、他の部分では表土を剥いでから遺構の存在が確認された。墳丘を持ち、周塹を伴うものを古墳とすると、今年度の調査地内で検出された古墳は25基あり、調査期間内で調査したのは20基である。古墳の他には、石槨2基と竪穴状遺構1基・土壇墓1基・土坑1基・木炭窯2基を検出し、調査した。

〈古墳〉

西寄りの傾斜の緩い斜面から検出された1基の古墳は、径約8mの周塹が一周して巡り、高さ80cmほどの墳丘が築かれている。この古墳は地表からも墳丘の高まりが認識された。周塹はV字状に掘られている。墳丘の中央付近に長さ3m・幅1.1m・深さ70cmほどの主体部が掘り込まれ、底面の端には仕切溝が設けられている。人骨や木棺の痕跡は確認できなかったが、副葬品として直刀と鉄鏃・内黒の土師器坏が主体部から、須恵器壺と須恵器坏が周塹から、また須恵器の大甕の波片が主体部から周塹にかけて広い範囲から出土している。直刀は柄が東側を向いている。須恵器の壺は底部が穿孔されており、古墳祭祀が行われたようである。

東寄りの尾根付近から検出された古墳は径8mほどのものと径6m以下のものがあるが、傾斜がきついため周塹は下方まで巡らない。主体部は長軸2.5mほどで短軸は0.8m前後と1.1m前後のものがある。底面の端に仕切り溝が作られているものと作られていないものがある。主体部の方向は東西方向が主であるが、等高線に並行して築かれたようである。主体部が二段になり、追葬されたと見られる遺構もあるほか、古墳同士の重複も見られる。

ほとんどの主体部には刀剣類と鉄鏃や内黒土師器の坏が埋葬され、中には錫釧や鉄釧の伴うものもある。周塹からは須恵器の壺や土師器の高坏・壺・馬具の出土した遺構もある。また調査地の最上位の古墳からは、鏝付きの甑と頸部に刻目の施された甕や黒曜石の破片が同じ周塹から検出されている。主体部から出土した刀剣類の柄は東側に向いている。

調査地南西側の古墳は、西寄りの緩傾斜地の古墳を除き、周塹の直径が4m未満と小さいものが多い。主体部も長軸2m・短軸0.8mと小さく、古墳の重複も認められる。主体部から刀剣類や土師器坏・壺と共に切子玉1点が得られている。刀剣類の柄は東側を向いている。また、周塹の埋土から鋤き先・鎌・斧・刀子という農工具も出土している。

〈石槨〉

石槨は南東寄りに2基検出されたが、いずれも古墳の周塹の上に厚板状の花崗岩礫を並べて作られている。下位の古墳の周塹埋土の上に形成された黒色土の上を整地してから作られている。また、周塹を作った形跡

はない。2基とも下方の礫は崩落しているが、内側の幅約60cmに作られ、軸方向は1基は東西、もう1基は南北方向である。両者とも内部に大刀一振りが埋納されていた。遺体が同時に埋葬されたかどうかは不明である。

〈土壙墓〉

土壙墓は調査地南西に近い古墳の周湮から検出された。東西方向に長い長方形の土坑で、内部に刀剣と刀子・鉄釧が副葬されていた。刀剣の柄は東側を向いている。古墳よりは新しいが、ほぼ同じ時期と思われる。

〈竪穴状遺構〉

調査地中央付近の古墳と古墳の間に検出された。周湮との重複関係はないが検出層位はほぼ同じである。2.5m×1.5mほどの不整長方形で、南側は斜面で欠落している。底面は平坦だが、柱穴や周湮はない。埋土からロクロ非使用の土師器の破片が出土している。

〈土坑〉

調査地の北側の斜面で検出された。西側は林道作業道で切られている。長径1mほどの楕円形である。古墳群と同じ層位で検出されたが、関連は不明である。埋土からロクロ未使用の土師器の破片が検出されている。

〈木炭窯〉

2基とも古墳の上位に作られている。1基は長軸3m・短軸1mほどの草鞋形を呈する浅い土坑状で、もう1基は林道作業道で壊されているが、同様な土坑状だったようである。伴出遺物はないが、古墳造営の時代からそれほど離れた時期ではないようである。

〈遺物〉

刀剣類・土器類ともに遺構に伴うものがほとんどである。古墳の主体部に伴うものは完形品が多いが、金属製品はかなり腐食が進んでいる。

鉄製品の種類は刀剣類20点・鉄鏃50点・馬具51点・農工具15点・その他17点である。このなかで馬具・鉄鏃は破損が著しく、複数個体に分かれたものが多い。馬具は銜具と馬銜が出土している。馬銜は腐食が進み、もとの形状に復元することは困難である。錫製品は釧であり、かなり腐食崩壊している。

土器類はロクロ非使用の土師器と須恵器である。土師器は内黒処理された坏や球胴形の甕・長頸壺・高坏・甑・赤色顔料塗彩の破片などがある。坏の中には内側に段が明瞭に残り7世紀後半の様相を留めるものもある。須恵器は壺・長頸壺・坏・大甕がある。また遺構に伴わないものには少数であるが縄文中期の土器片と弥生時代後期の土器片が混入している。

石製品は古墳に伴うものは切子玉1点である。製品ではないが黒曜石の破片4点と軽石や火山礫が古墳周湮から出土している。その他に縄文時代と見られる石鏃1点・磨製石斧2点・磨石2点がある。

3. まとめ

今回の発掘で調査された古墳は20基であるが、尾根上や南側の斜面などにも存在することが確実で、また南東側の斜面整備部分にも存在したと思われる古墳を含めると50基を越す数の古墳群が存在していると考えられる。土壙墓や石槨の存在は、古墳に後続する埋葬形態があったことを示唆しているようである。

副葬品に刀剣類が多いことと隣接遺跡に製鉄・鍛冶関連の遺跡や集落が検出されていることは、鉄を作り加工した集団がいて、それに関連する古墳群であると思われる。

古墳の造営された時期については、出土遺物相互の関連と重複関係を今後十分に検討しなければならないが、7世紀後半から8世紀代の間継続したと考えられる。



遺跡遠景(北から)



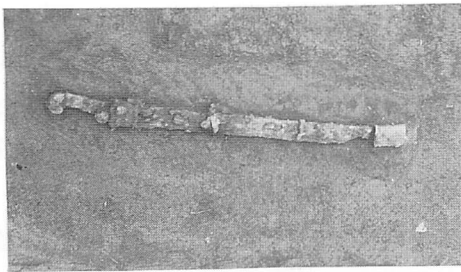
古墳群検出状況(東から)



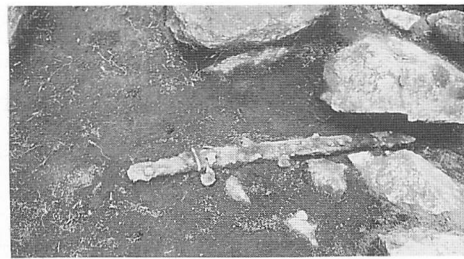
墳丘と遺物出土状況



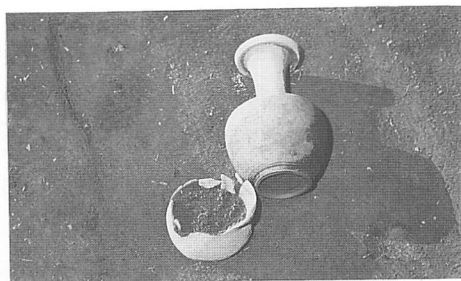
主体部と遺物出土状況



蕨手刀出土状況

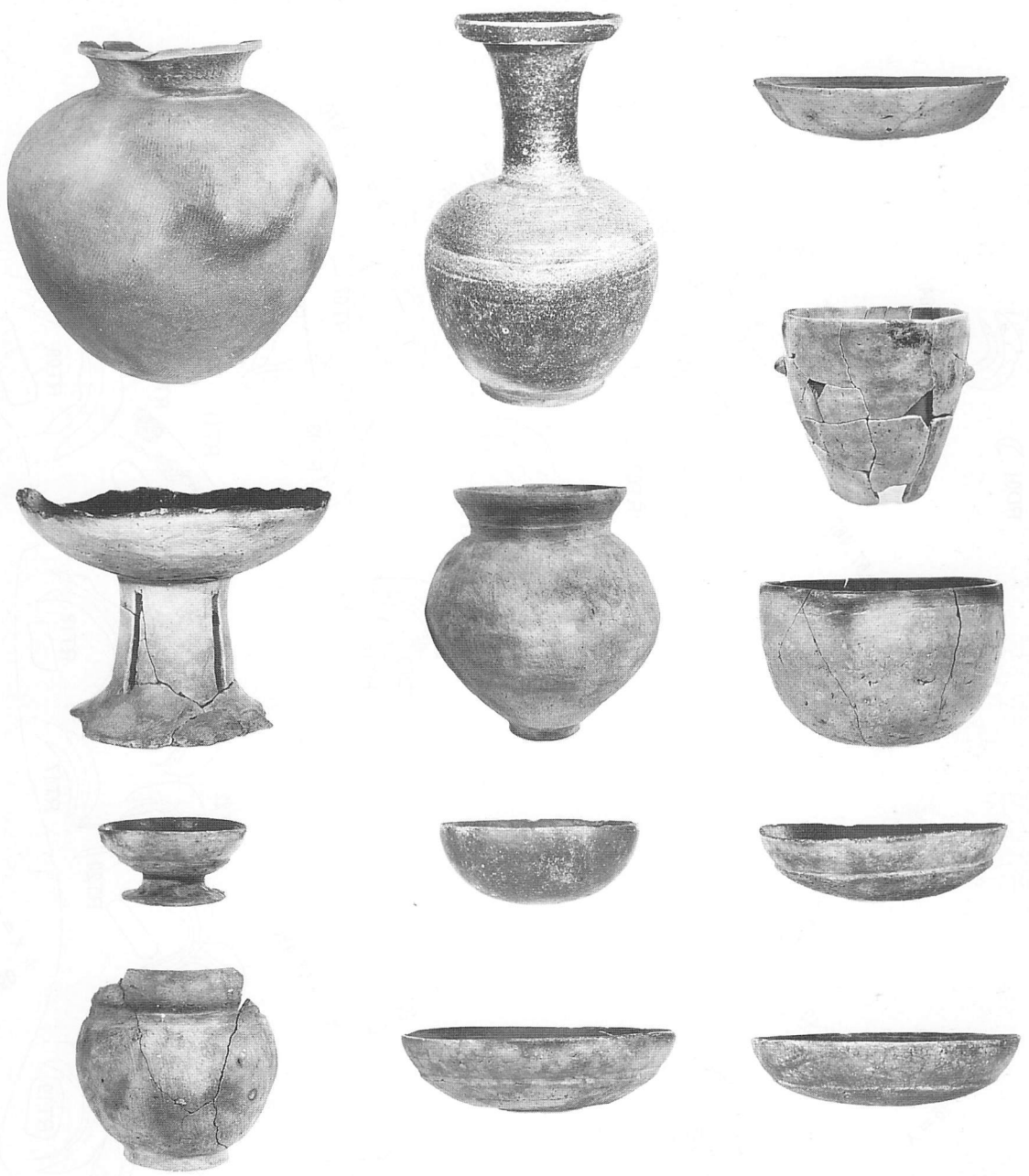


直刀出土状況



長頭壺出土状況

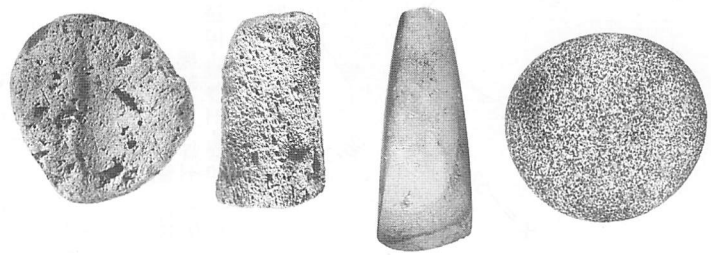
房の沢Ⅳ遺跡(2)の遺構・遺物出土状況



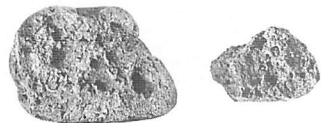
切子玉



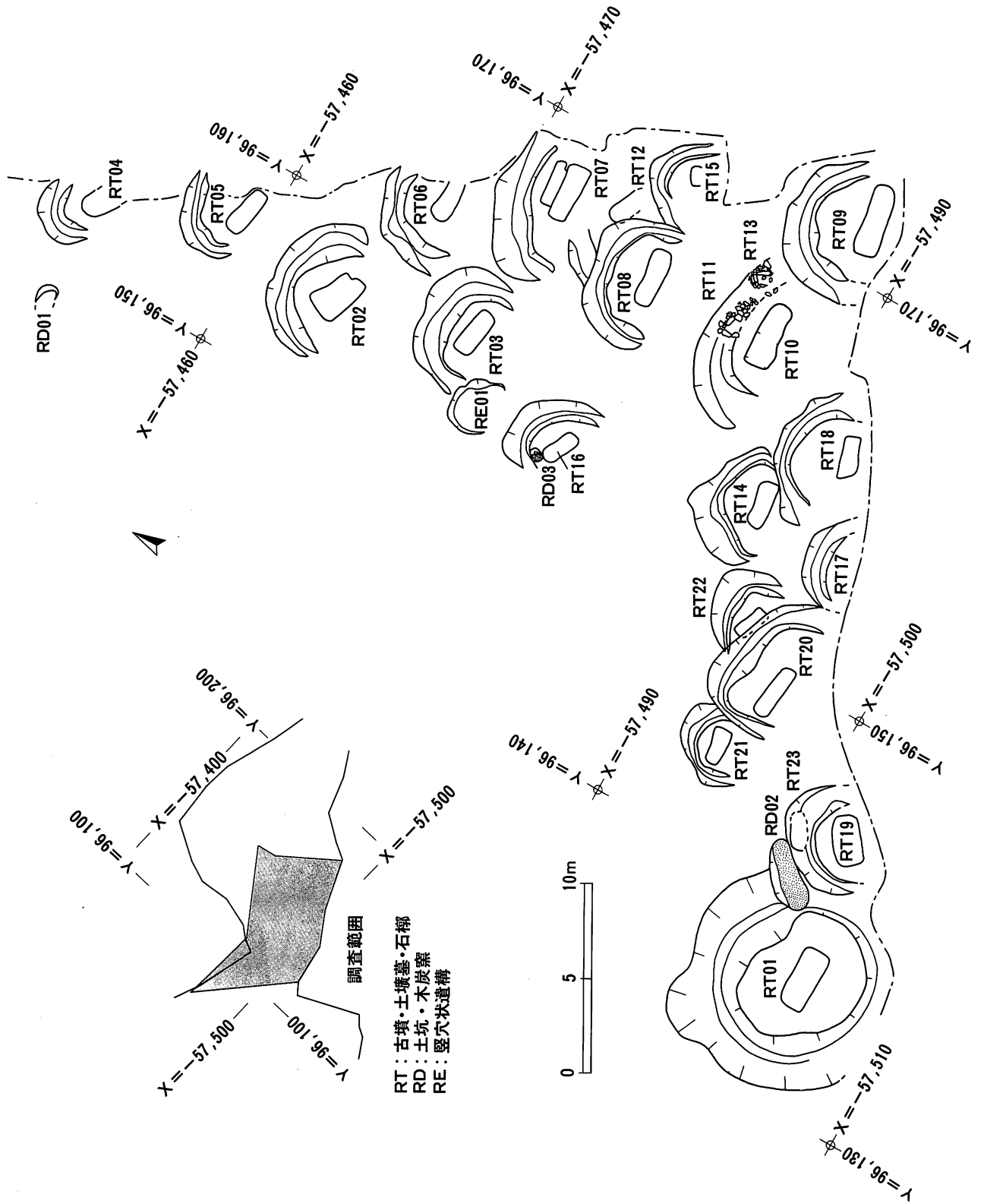
黒曜石片



軽石製品



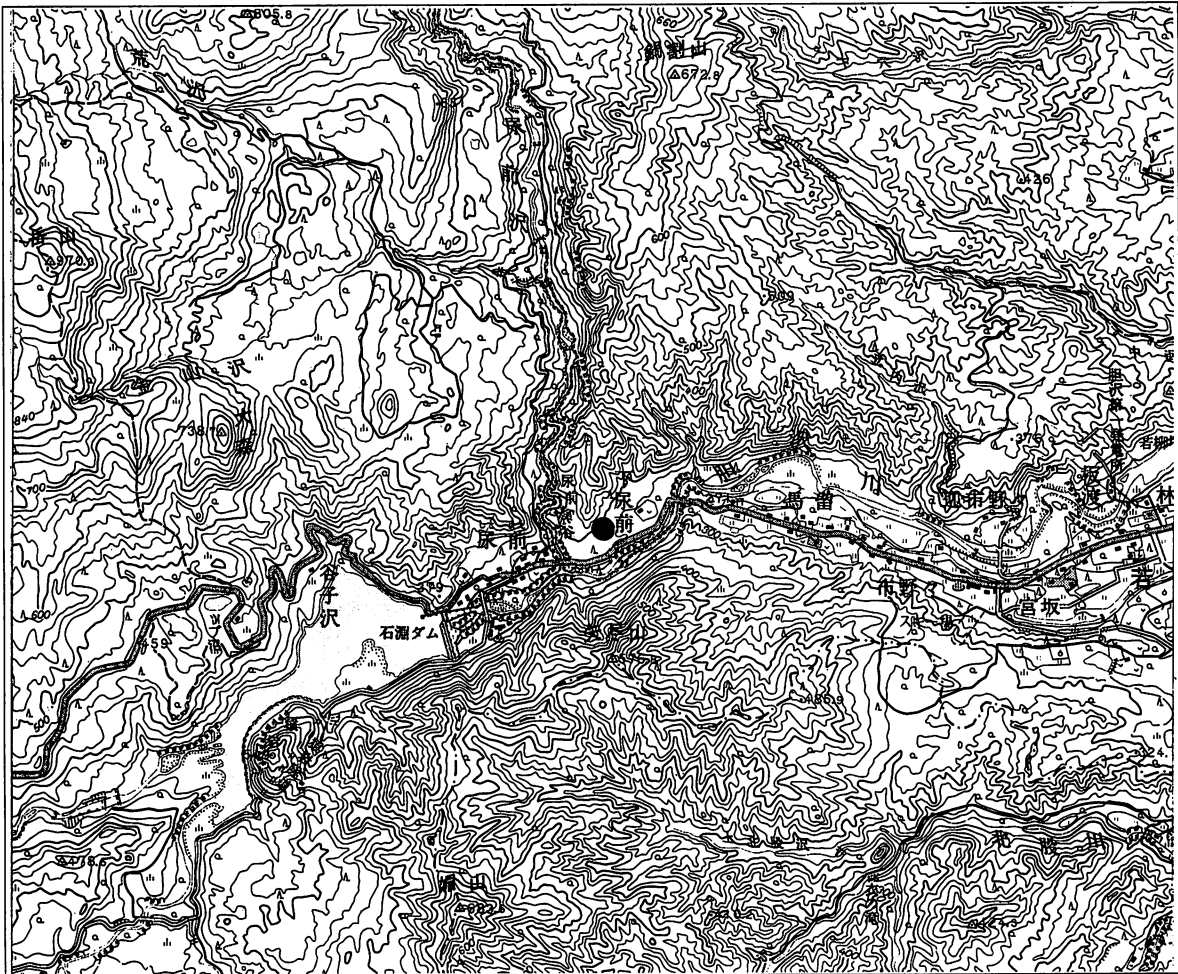
房の沢Ⅳ遺跡(2)出土遺物



房の沢Ⅳ遺跡(2)遺構配置図

(10) ^{しも}下 ^{しと}尿 ^{まえ}前 IV 遺跡

所在地	胆沢郡胆沢町若柳字下尿前4-1ほか
委託者	建設省東北地方建設局胆沢ダム工事事務所
事業名	胆沢ダム建設
発掘調査期間	平成8年8月1日～10月29日
調査対象面積	8,000㎡
発掘調査面積	8,000㎡
遺跡番号・略号	NE21-2312・SSIV-96
調査担当者	中村直美・山下浩幸
協力機関	胆沢町教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 焼石岳

1. 遺跡の立地

下尿前IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅より西に約20km、石淵ダムの北東約1.5kmに位置し、南流する尿前溪谷と、東流する胆沢川が合流する地点に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は292～294m、胆沢川との標高差は約60mで、現況は原野である。本遺跡の北東約300mには下尿前II遺跡がある。

2. 調査の概要

平成5年度からの継続調査で、今年度は馬留工事用道路に沿う8,000㎡が対象となった。検出された遺構は炭窯跡1基、焼土遺構27基、土坑15基、集石遺構2基である。このうち出土遺物等から時代・時期を特定あるいは推定できた遺構は、弥生時代後期の土坑2基、焼土遺構1基、現代の炭窯跡1基で、その他の遺構は時期不明である。

また遺跡全体には風倒木痕が数多く認められ、中から遺物が出土するものもあることから、検出した以上にプランの確認のできなかった土坑等が存在していた可能性がある。

〈土坑〉

調査区全域で15基が検出された。平面形はほとんどが円形で、わずかに楕円形のものも含まれる。規模は径0.6～0.9mのものが多く、最小のもので0.34×0.47m・深さ0.17m、最大のもので3.04×3.4m・深さ0.36mを測る。断面形は袋状・皿型・フラスコ状を呈している。遺物はほとんど共伴しないが、埋土中から弥生時代後期の土器片を出土するものがある。

〈焼土遺構〉

調査区全域にわたって検出された。表土除去後の黒褐色土面から6基、それより下層の黒褐色土面から21基が確認されている。27基のうち、現地性のもは8基である。焼土の形状や規模は様々で、最小のもので6×10cm・層厚2cm、最大のもので58×316cm・層厚12cmを測る。これらの焼土は検出された層位によって二種類に分類される。一つは表土除去後の黒褐色土面で検出されるもので、灰白色の灰が厚く堆積する。周辺に柱穴などは伴わず、遺物も伴わない。もう一つはそれより下層にあたる黒褐色土面で検出されるもので、赤褐色の焼土主体で構成される。この焼土からも遺物はほとんど出土していないが、弥生時代後期の土器片を伴うものが1基ある。まわりから明確な柱穴等は検出されていないが、周辺に固くしめる面を持つものが確認されていることから住居跡の炉となる可能性もある。

〈集石遺構〉

調査区の南側と北側から2基が検出された。1基は中央部南側に位置する。20～35cmの円礫が馬蹄状に配列し、その内側を10～17cmの円礫が不規則に巡っている。長軸方向はほぼ南北にあり、長軸方向の長さ約1.24m、短軸方向は約1.2mを測る。この集石の下部には径1.2m・深さ0.23mの皿型状を呈するほぼ円形の土坑が伴っている。土坑内から遺物は出土していない。もう1基は北側に位置する。14～32cmの円礫を楕円形に配している。主軸方向はほぼ南北にあり、長軸方向の長さ約1.34m、短軸方向の長さ約0.94mを測る。この集石の下部に土坑等の施設は伴っておらず、遺物の出土もない。

〈炭窯跡〉

調査区北東隅で雑物撤去後の地形の窪みから検出された。窯体は製炭室と前庭部で構成される。規模は製炭室で2.8×3.7m・深さ1.32m、前庭部で3.3×3.6m・深さ1.02mである。窯の構造は石窯で、壁面は16～25cmの礫を積み上げてつくられている。周辺から上屋施設を支えたと思われるような柱穴等は確認されていない。床面には11～35cmの扁平な巨礫が部分的に敷かれている。製炭室と前庭部の境には、礫を積み上げた焚

口が構築されている。製炭室西側の床には26～35cmの円礫が数個半円状に配されており、その上位の壁面が熱を受けて強く赤変していることから、煙出しであった可能性が考えられる。また、前庭部南側の床から鋸・鏝・鉄板が出土している。

〈出土遺物〉

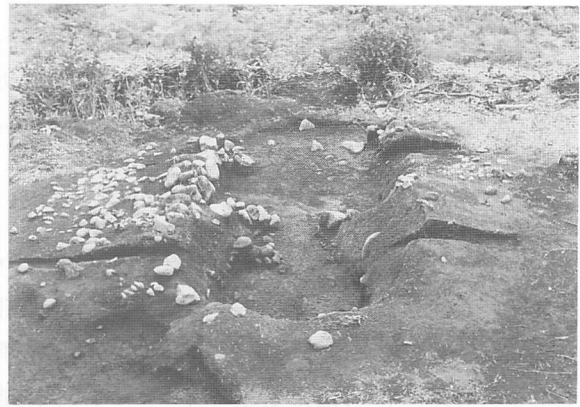
小コンテナ8箱分の遺物が出土した。内訳は土器・石器・鉄製品等であるが、大半は縄文時代早期から弥生時代後期にかけての土器である。割合としては弥生時代後期のものが一番多く、縄文時代早期・前期のものがこれに次いでいる。石器は、縄文時代草創期の有舌尖頭器と、これと同一層位から出土した剥片1点をはじめ、磨製石斧・石匙、弥生時代のアメリカ式石鏃など数点が出土した。このほかに近世の磁器片1点が見つかっている。

4. まとめ

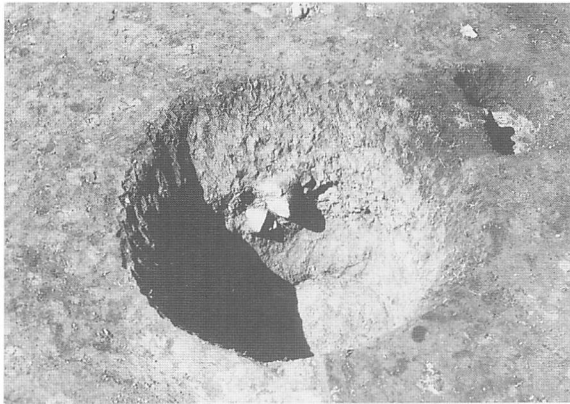
今回の調査で確認した遺構・遺物はともに少ないものであったが、縄文時代草創期から弥生時代後期、また近世から現代にかけて、この土地を利用していた当時の人々の生活の痕跡を認めることができた。集落を構成し得るほどの長期間には渡らなかつたかもしれないが、このことは少なくとも10000年以上も前から、この地における人間の活動が断続的に行われていたことを示唆するものと考えられる。また、弥生時代後期の遺物が多く出土したことや、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土したことで、該期の好資料も追加することができた。



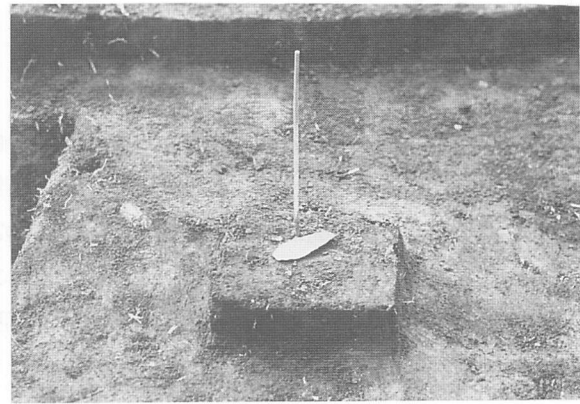
調査区全景



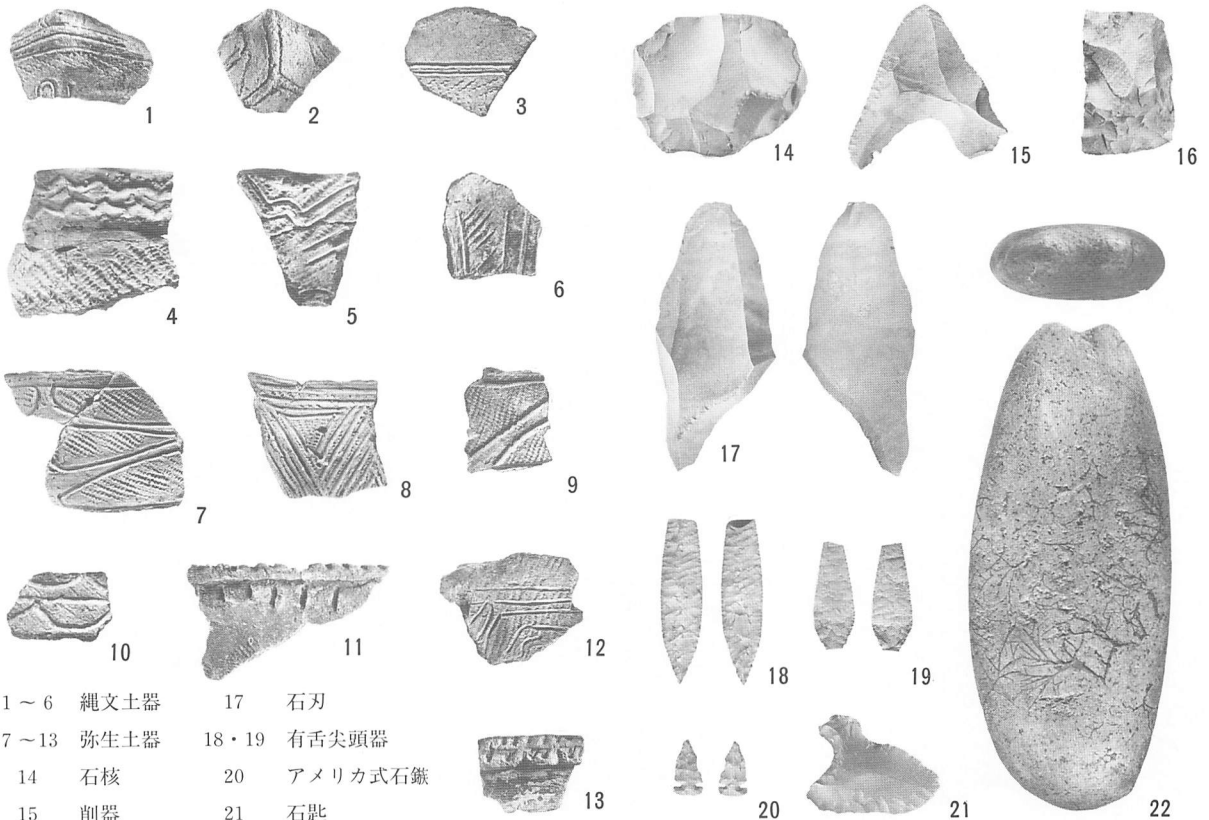
炭窯跡



土坑



有舌尖頭器出土状況

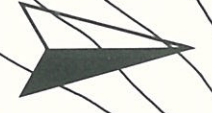


- | | |
|-------------|-------------|
| 1 ~ 6 縄文土器 | 17 石刃 |
| 7 ~ 13 弥生土器 | 18・19 有舌尖頭器 |
| 14 石核 | 20 アメリカ式石鏃 |
| 15 削器 | 21 石匙 |
| 16 石筥 | 22 磨製石斧 |

下尿前IV遺跡検出遺構・出土遺物

Y=7.38

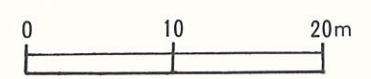
X=-97.95



土坑

烧土遺構

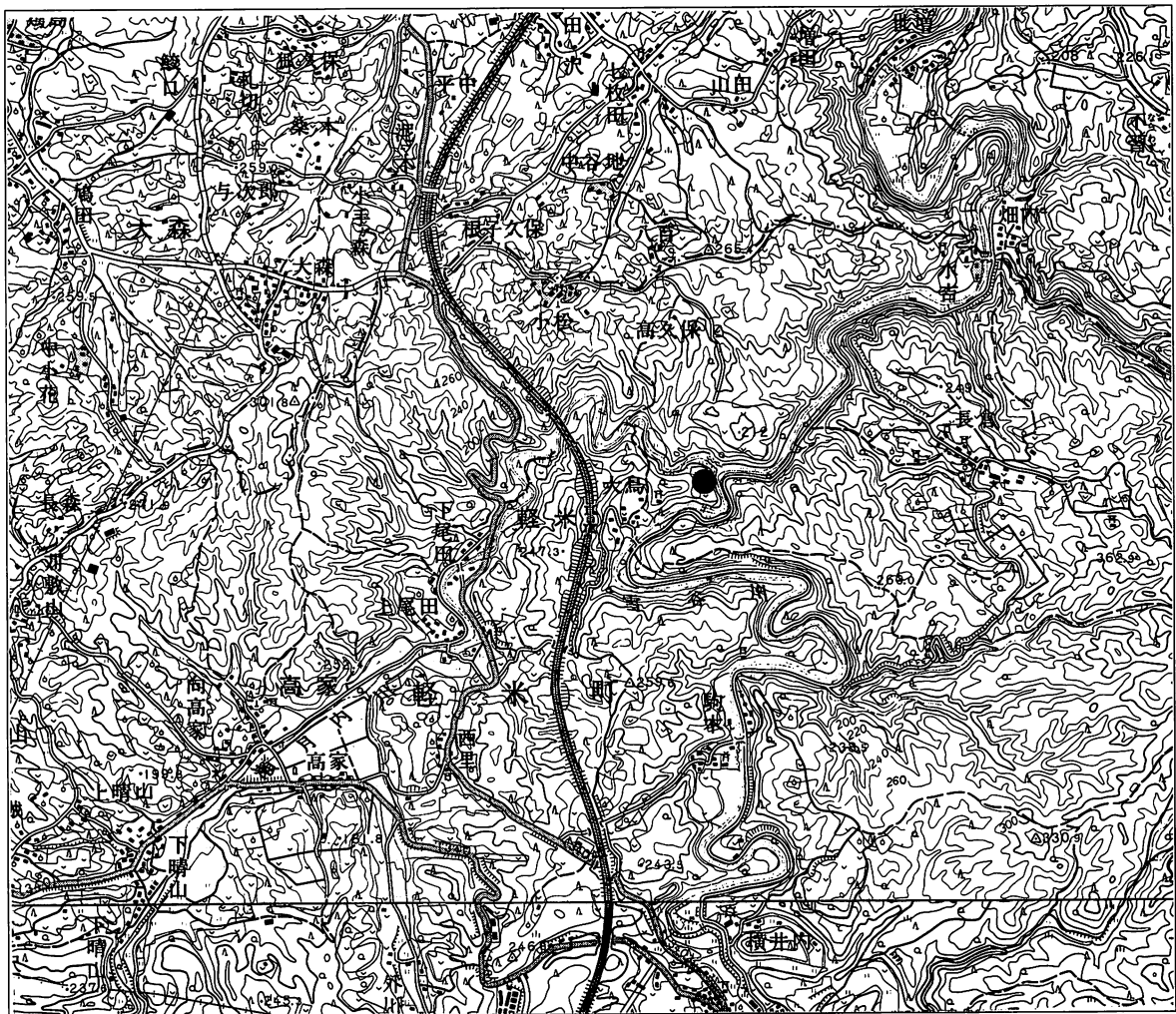
集石遺構



下尿前IV遺跡遺構配置図

おお とり
(11) 大鳥 II 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字軽米第17地割字大鳥180ほか
委託者 農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所・岩手県
事業名 世増ダム建設
発掘調査期間 平成8年6月17日～11月8日
調査対象面積 10,750㎡
発掘調査面積 10,750㎡
遺跡番号・略号 TF63-1194・OTII-96
調査担当者 木戸口俊子・柴田慈幸
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 三戸・一戸

1. 遺跡の立地

大鳥Ⅱ遺跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジの北東約4kmに位置しており、雪谷川と瀬月内川との合流地点の西岸を中心に南北に細長い遺跡である。丘陵斜面部に立地し、標高110mよりも低い部分が調査範囲である。遺跡の現況は山林・原野であるが、以前は一部畑地として利用されていた。

2. 調査の概要

調査区は南北に長いため、大きく北側調査区・中央調査区・南側調査区と3ヶ所に分けて調査に入った。縄文時代の遺構の分布は、北側調査区と中央調査区の比較的緩斜面の部分に集中している。遺物の出土状況も遺構の検出数に比例している。緩斜面でありながら、縄文時代の遺構も検出せず、出土遺物も大変少なかったところでは、溝状遺構と井戸が検出されている。南側調査区では、旧耕作土を取り除くと増水のために堆積した砂や自然礫にあたり遺構は検出されなかった。

検出された遺構は、竪穴状遺構が5棟、土坑が49基、焼土2基、溝状遺構2条、井戸が1基である。

〈竪穴状遺構〉

北側調査区で2棟、中央調査区で3棟検出している。平面形は楕円形の1棟を除き、他は円形を呈しており壁はほぼ垂直に立ち上がる。最大のもは中央調査区北側の直径約3.80mで深さは40cm～60cmの遺構だが遺物はない。その他の竪穴状遺構の遺物出土状況は、埋土上位～中位からの出土で全て数個体の土器片である。焼土、炉、柱穴状ピット等は検出されなかった。いずれも時期は検出状況から十和田b降下火山灰の降下前の遺構と見られ、周囲から縄文後期～縄文晩期の土器が出土しているため土器と同様の時期と考えられる。

〈土坑〉

北側調査区で11基、中央調査区で37基検出している。中央調査区に多く検出されているわけだが、中でも竪穴状遺構の検出された北側に集中している。いずれも平面形はほぼ円形を呈しており、直径50cm～1mほどの大きさである。断面形はピーカー型及びすり鉢型とがある。中にフラスコ型らしきものが1基あるが、これは北側調査区の竪穴状遺構と重複している土坑で土坑の方が新しいと思われる。ほとんどの土坑の埋土状況は、竪穴状遺構と同様で十和田b降下火山灰をより多く含む黒色土が上位に堆積している。中にはほとんど含まない黒褐色土～黒色土が埋土となっているものもあり、それらについては多少時代が新しくなると思われる。ただし、出土遺物等からの裏づけはない。遺物の出土した土坑もあるが、複数の土器片が埋土上位～中位に含まれているため、ほとんど流れ込みと見て良いであろう。時期については竪穴状遺構と同様に縄文後期～晩期と考えられる。

〈焼土〉

中央調査区より2基検出している。1基は土坑内より検出された。現地性と見るには難しい。

〈溝状遺構〉

中央調査区の中央部及び南側からそれぞれ1条ずつ検出された。1条は以前に耕作田へ続く道として利用されていたところである。この遺構は斜面上部では水脈跡の様相を見せているが、途中から底部が平らでほぼ同じ幅(約30cm)で約10mほど続く溝状になっており、浅くなるとともに傾斜中腹ほどでなくなる。埋土上位に十和田a降下火山灰と思われる火山灰の堆積がみられた。もう1条は遺構中央にコ状に礫が並び、そこより約50cm程の幅で深さ約1m30cm程度で傾斜に従って調査区外である崖まで続いていた。井戸状遺構と同時期と思われる。

〈井戸〉

斜面中腹から始まり、平面では逆位のヘラ状の形を呈しており、柄にあたる部分に礫が両壁に積まれていた。礫は幅1 m～2 mほどで溝状に20 m近くにわたって続いていた。当初は溝として調査を進めていたが、遺構中央部において四方を礫で囲まれた1辺1 m強の方形に近い井戸が検出された。この井戸を使用するために利用されたと思われる階段状の遺構も合わせて検出されている。この遺構の最深は5 mで最大幅10 m、長さは30 mに及んだ。遺物は出ておらず、時期は不明である。

〈南側調査区の石積部〉

以前にこの調査区を畑として利用していた人の「畑として利用する以前からある程度の高さの石積みがあった」という話から、遺構の可能性を考えながら調査を開始した。しかし、耕作のために何回かに分かれて石が積み上げられていったことは事実だが遺物等は全く出土せず、石の積み上げにも特別意図的な様子はなく遺構とは言えないようである。

〈出土遺物〉

今回の調査での遺物はコンテナで土器が3.5箱、石器が88点出土している。土器は縄文時代の早期～弥生時代のものが出土しているが、中心は後期～晩期の土器片である。石器は石鏃が16点、石匙が1点、石錘が15点、石斧が3点、磨石が20点、石刀が2点等である。遺構に伴う土器は殆どなく、口縁～底部まで接合できる土器はない。

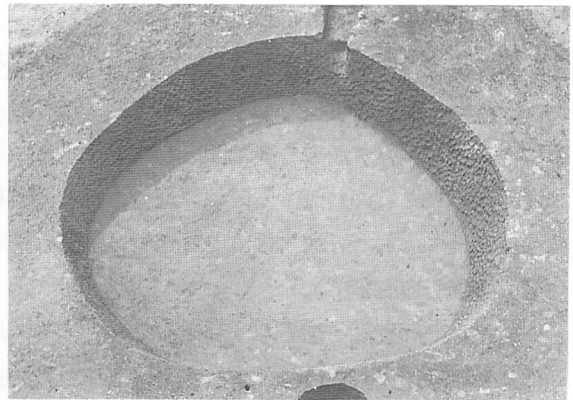
3. まとめ

今回の調査では竪穴住居跡は見つからなかったが、縄文時代後期～晩期の人々の生活の営みを感じられる土坑等が検出され、近辺に集落跡があることを裏づけた形となった。また、土器は後期～晩期のみならず、縄文時代早期、前期、中期、弥生時代の各時期のものも出土しており、大鳥の地では長い間人々が生活していたと思われる。

井戸については、川がすぐ近くにあるにもかかわらず大規模な土木工事によって造られており、単に飲料のためとは考えられない。コ状に礫が並べられていた溝状遺構とともに別の目的のために造られ利用されていたと思われるが、不明の点も多く今後の検討課題である。



遺跡全景



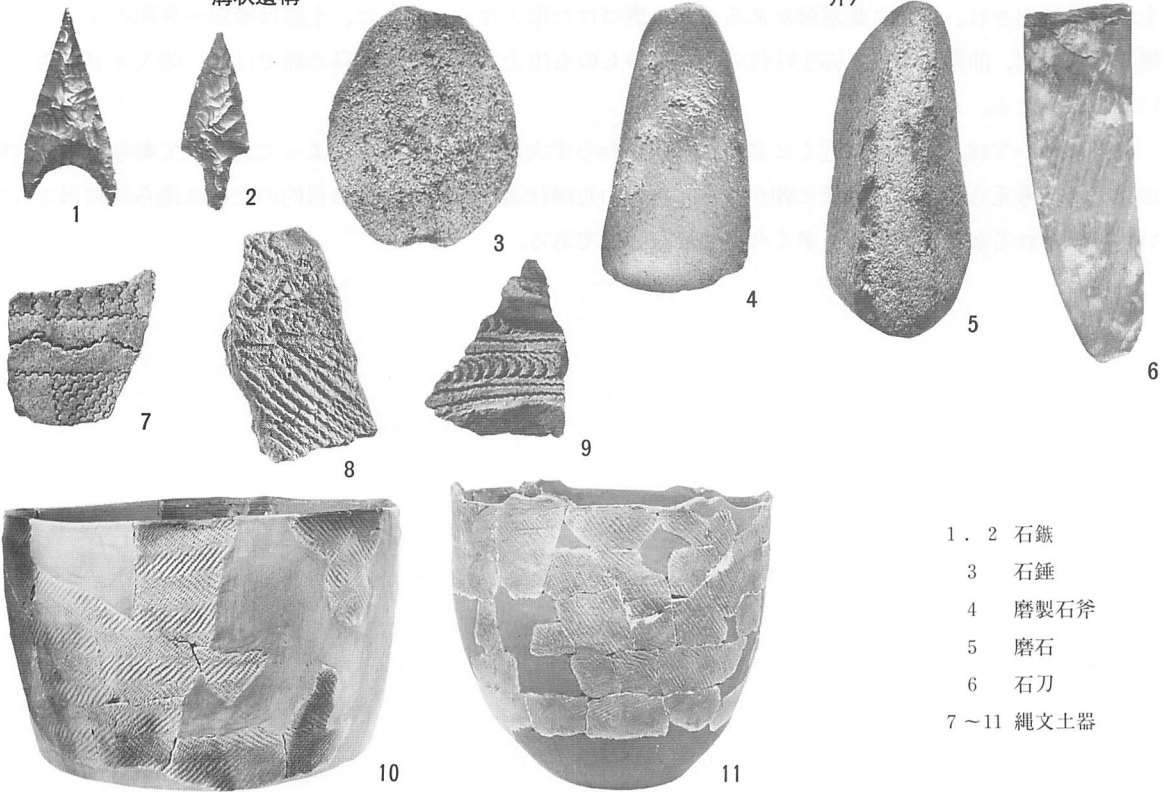
豎穴状遺構



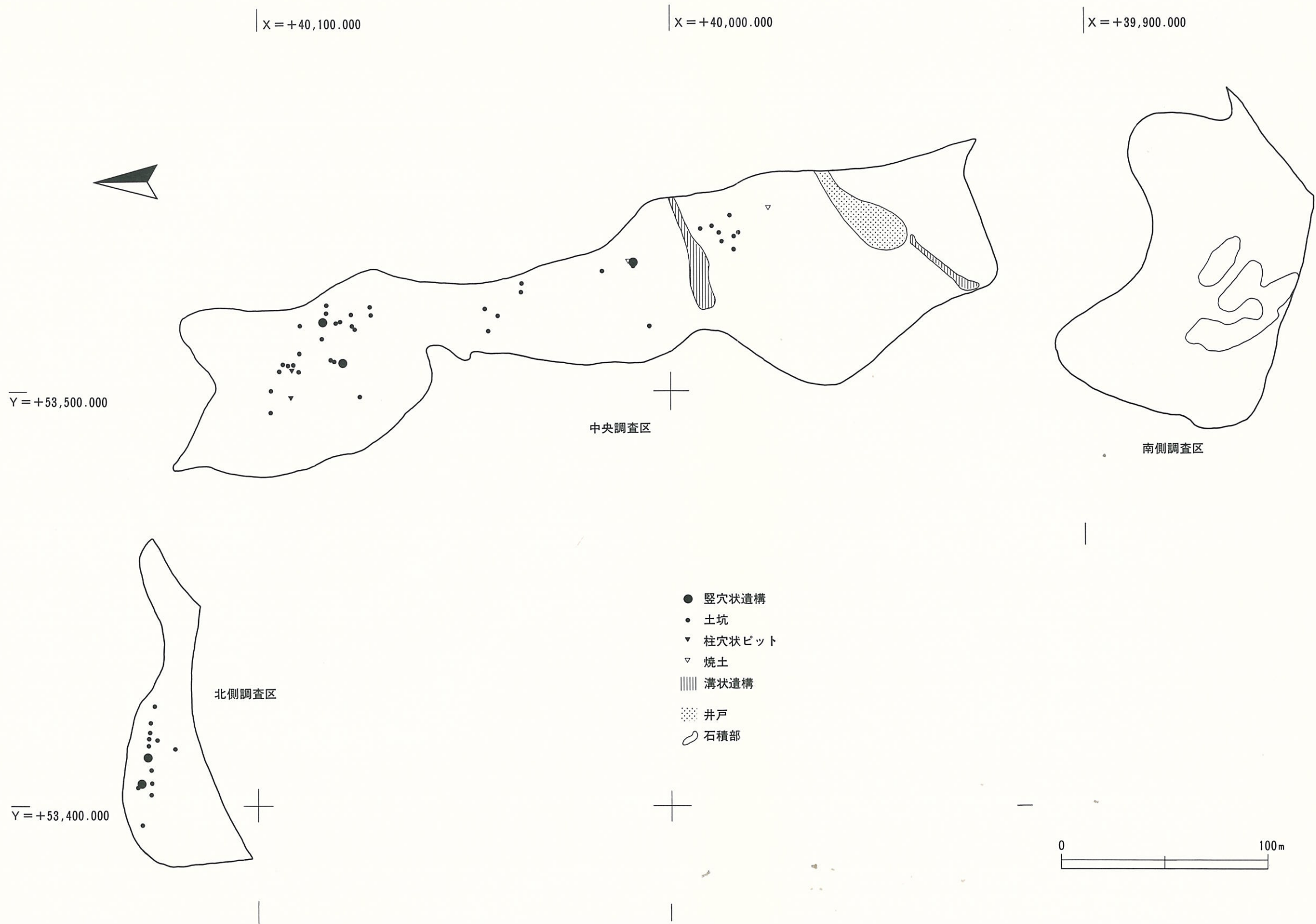
溝状遺構



井戸



大鳥Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物

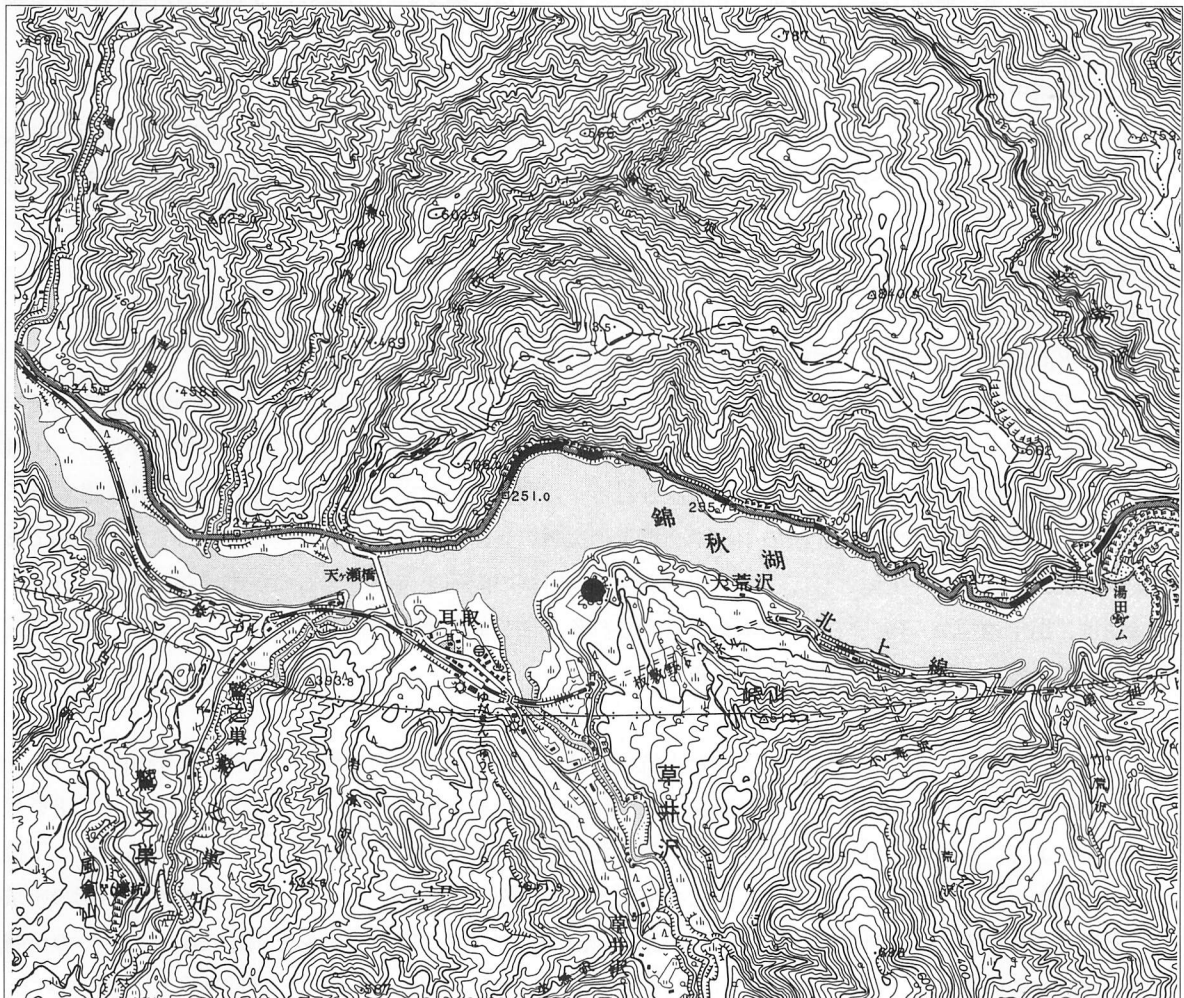


大鳥Ⅱ遺跡遺構配置図

II. 公団関係

とうげやま ぼくじょう
(1) 峠山牧場 I 遺跡 B 地区

所在地	和賀郡湯田町第46地割125-25ほか
委託者	日本道路公団東北支社
事業名	東北横断自動車道秋田線建設
発掘調査期間	平成8年6月3日～10月22日
調査対象面積	6,120㎡
発掘調査面積	6,120㎡
遺跡番号・略号	ME60-0160・TYIB-96
調査担当者	阿部勝則・鈴木聡・川向聖子
協力機関	湯田町教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 川尻

1. 遺跡の立地

峠山牧場 I 遺跡 B 地区は、和賀郡湯田町第46地割125-25ほかに所在し、東日本旅客鉄道北上線ゆだ錦秋湖駅の北東約1 kmに位置する。遺跡は和賀川右岸の標高285 m～293 mを示す大荒沢段丘上に立地している。遺跡の現況は山林で約800本の栗の木が数 m 間隔で規則的に植えられているが、遺跡の北西側（錦秋湖寄りの北側半分）は幅約50 mにわたり最大1 mの深さで土取りされ、褐色土上に松が生育している。本遺跡の南側には隣接して峠山牧場 I 遺跡 A 地区、さらに南西側には本内 II 遺跡、耳取 I 遺跡などがある。

2. 調査の概要

調査区は西側（A区：3360㎡）と東側（B区：2760㎡）の2箇所に分かれている。A区の北側は土取りされ、Ⅲ層～Ⅳ層まで削られているが、北端で土坑がまとまって検出され、北西端では竪穴住居跡も1棟検出されている。A区の南側では遺構・遺物は検出されなかった。B区の北側は縄文時代の遺構・遺物の集中区で、竪穴住居跡をはじめ多くの遺構・遺物が検出された。B区の南側には遺物包含層は形成されていないが、竪穴住居跡1棟、土坑1基、焼土遺構などが検出されている。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡31棟、土坑50基、墓墳1基、陥し穴状遺構2基、焼土遺構4基、集石遺構1基、土器埋設遺構16基などで、ほかに縄文時代の遺物包含層、旧石器時代の遺物集中区を検出している。

〈旧石器集中区〉

B区の北側で検出された。平成6年度に確認された旧石器集中区より約150 m北側に位置する。旧石器は、層位的にはⅡ層（漸移層）～Ⅲ層（ローム）の間で出土しており、集中区の範囲は径4 m～8 m程の広がりをもつものと推定される。多数の剥片類とともにナイフ形石器・彫器・搔器などが出土している。

〈竪穴住居跡〉

いずれも部分的な調査で不明な部分が多いが、規模・形状から大きく2種類（A・B）に分類できる。

A類：平面形は円形基調で、規模は径4 m～5 m程の住居跡である。炉は地床炉である。

B類：平面形は方形基調で、規模は短軸4 m～6 m、長軸8 m以上の住居跡である。平面形は長方形を呈するものと推定され、長軸方向を南北にもつ住居跡と東西にもつ住居跡がある。壁際には周溝が巡り、中軸線を中心に対になるように壁際に支柱穴が配置される。柱間は3.5 mである。数回の建て替えが確認できるものもある。炉は地床炉で、住居跡の中軸中心線上に複数の炉跡が並ぶ。これらの住居跡はB区の北側でまとまって検出されたが、全体として、弧を描くように放射状の配列を確認できるのが本遺跡の特徴である。

時期は、出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。部分的な調査のため断言はできないが、B類の住居跡はいわゆる「大型住居跡」の可能性はある。

〈土 坑〉

ここではA区北端でまとまって検出された土坑について述べる。規模・形状から2種類に分類できる。一つは、平面形が円形で、規模は開口部径150 cm、底部径170 cm、深さ120 cm前後で、断面形がフラスコ状を呈する土坑である。いずれも底面の中央に副穴、そして四方に広がる溝状の施設をともなっている。埋土下位から炭化したドングリがまとまって出土したフラスコ状土坑が1基ある。もう一つは平面形が楕円形の土坑で、規模は大型の例で開口部径200 cm×150 cm、深さ60 cm前後である。底面の中央と両端に副穴をもつのが特徴で、柱痕跡を確認できた副穴もある。いずれの形態も時期は出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。

〈墓 墳〉

A区の北端で1基検出された。規模・形状は、開口部径230cm×160cm、深さ60cmで、長軸方向を東西にもつ隅丸長方形である。埋土は黄褐色土主体の人為堆積で、掘り上げた土をそのまま埋め戻したものと判断された。底面に2個体分の土器片が敷かれたように置かれ、炭化物や赤色顔料も検出された。人骨は検出されなかったが、墓塚と考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

溝状を呈するタイプで、竪穴住居跡と重複するかたちで2基検出された。本来の規模などは不明である。

〈焼土遺構〉

B区の北東側で、規模12m×4m以上の大型の焼土遺構が検出された。検出面はIc層面で、焼土の厚さは10cm前後である。周囲より縄文土器片・石器類が出土している。時期は縄文時代前期と思われる。

〈集石遺構〉

B区の北側で検出された。径1mの範囲に十数個の大小の円礫・亜円礫で構成される集石である。礫の下位に土坑などは確認できなかった。周囲から縄文土器片が出土しており、集石を構成する礫のなかに石錘・断面三角形の擦石などが含まれる。時期は、縄文時代前期と思われる。

〈土器埋設遺構〉

遺物包含層中で検出された。土器より少し大きめの穴を掘り、土器を正位あるいは斜位で埋設している。埋設されていた土器の多くは深鉢形土器の体部下半だが、完形の土器を埋設していたものが1基ある。

〈遺物包含層〉

B区の北側で広範囲に確認された。色調は黒褐色を呈し、焼土粒・炭化物が多く混入する。層厚は30cm～40cmで、縄文時代前期末葉を主体とする土器と石器を多量に包含する。削平されて既に失われていたところもあるが、包含層の範囲はB区北側の遺構群が分布する範囲とほぼ一致する。

〈出土遺物〉

縄文時代の土器・土製品・石器・石製品が出土している。土器の出土量はコンテナ（大）で約100箱である。時期は縄文時代の前期末葉を主体とする。石器類も多く、器種には石鏃・石槍・石錐・石匙・石篋・削器・搔器などの剥片石器、磨製石斧、擦石・敲石・凹石などの礫石器がある。本遺跡の場合、石鏃・石匙・石錘・断面三角形の擦石が特に多いのが特徴である。剥片や石核も多い。石製品も多く、特に玦状耳飾が多く出土しており、他に男根状石製品・燕尾形石製品なども出土している。また琥珀やドングリ・クルミなどの堅果類も出土している。旧石器は、ナイフ形石器・彫器・搔器などが出土している。

3. まとめ

本調査に先だって平成6年度に範囲確認調査が行われており、その結果、遺跡の南西側で旧石器時代の遺物集中区5箇所、北東側で縄文時代前期の遺構・遺物の集中区が確認されている（岩埋文233集）。

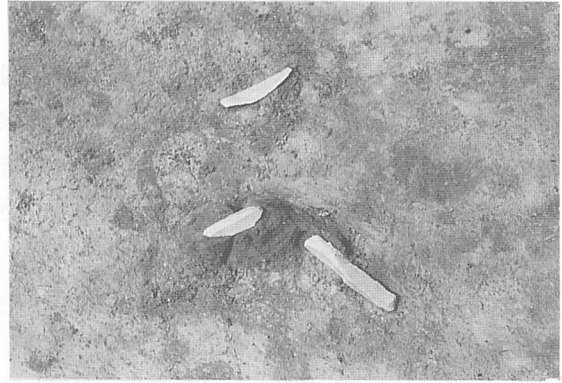
今回の調査で、峠山牧場I遺跡B地区は旧石器時代・縄文時代前期の集落跡の複合遺跡であることが明らかになった。範囲確認調査の成果と併せると以下のことが指摘できる。

A区北端で土坑群が検出されたことから範囲確認調査では不明確であった縄文時代前期の集落の範囲の西側部分が明らかになった。また多数の住居跡の存在や多量の遺物、とくに放射状に配列される大型住居跡群の存在は、和賀川流域における該期の拠点的な集落跡であったことを示すものと考えられる。

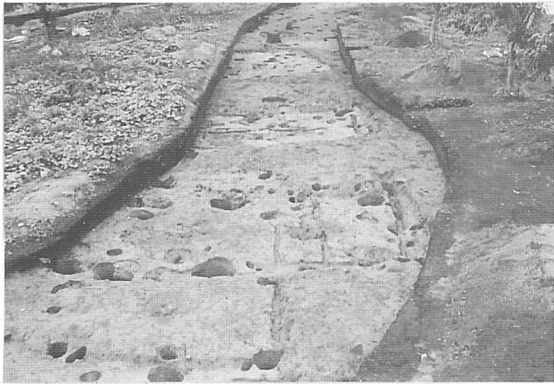
旧石器集中区が遺跡の北東側の地点から検出された意義も大きい。範囲確認調査で遺跡の南西側で検出されている旧石器集中区5箇所と性格が異なるものか否かの比較検討も今後の課題である。



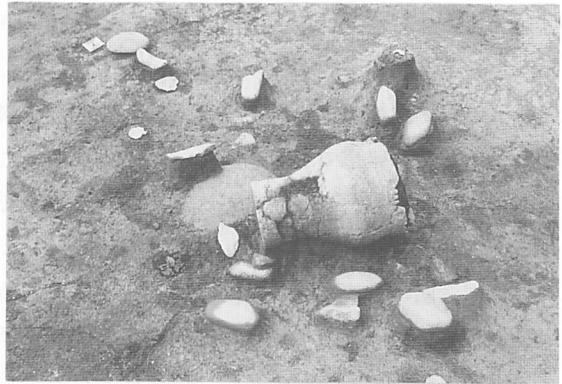
遺跡全景



旧石器出土状況



竖穴住居跡群



遺物出土状況



1



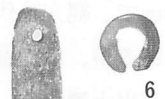
2



3



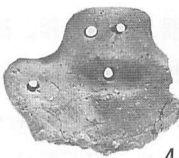
4



5



6



7



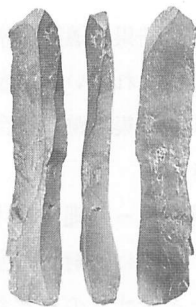
8



9



10



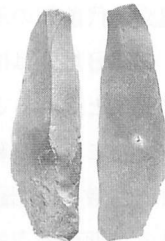
11



13



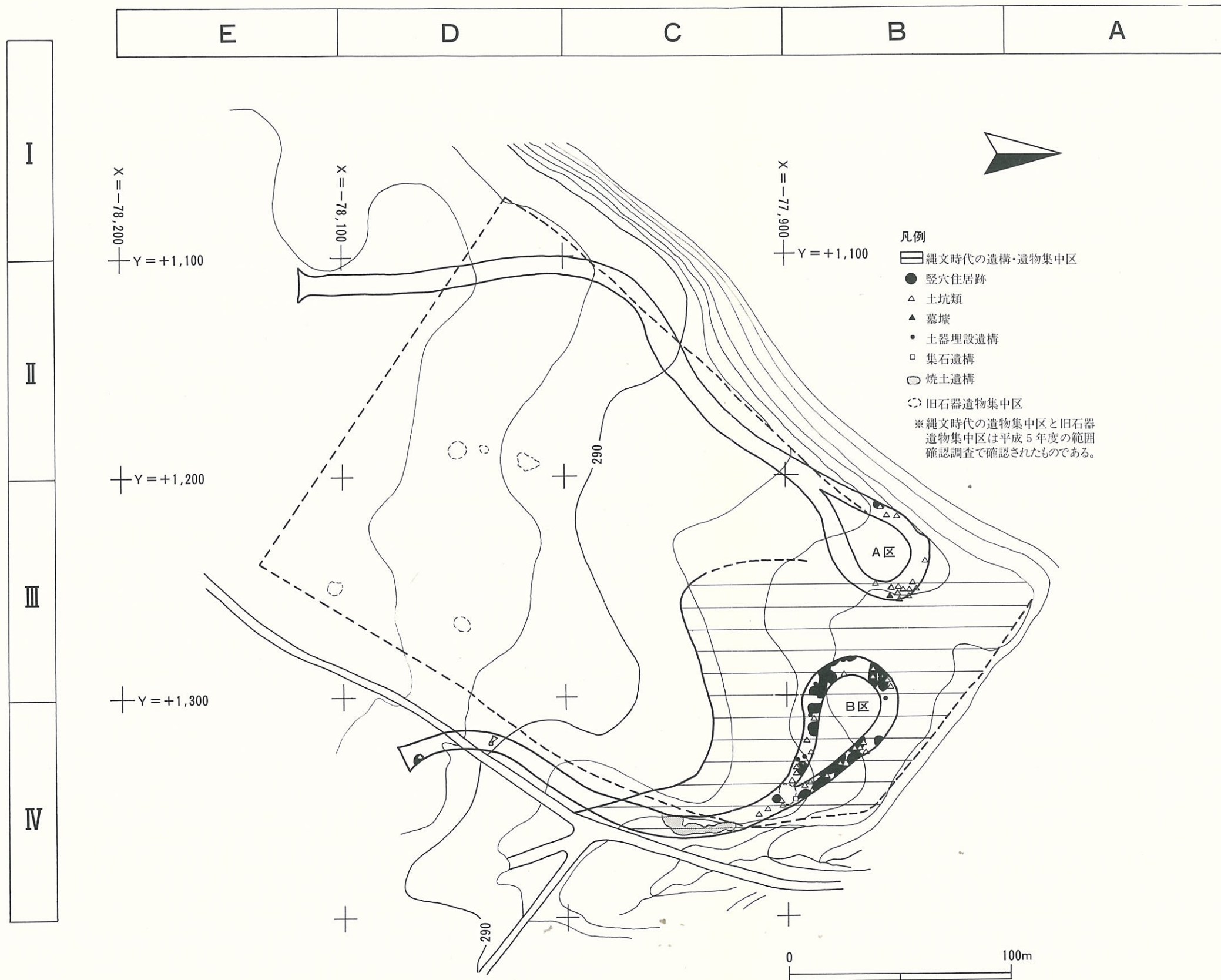
14



15

- 1・2 縄文土器(前期)
- 3・4 土偶
- 5 垂飾
- 6～8 扶状耳飾
- 9・10 石鏃
- 11 石錐
- 12 石匙
- 13・14 彫器
- 15 搔器

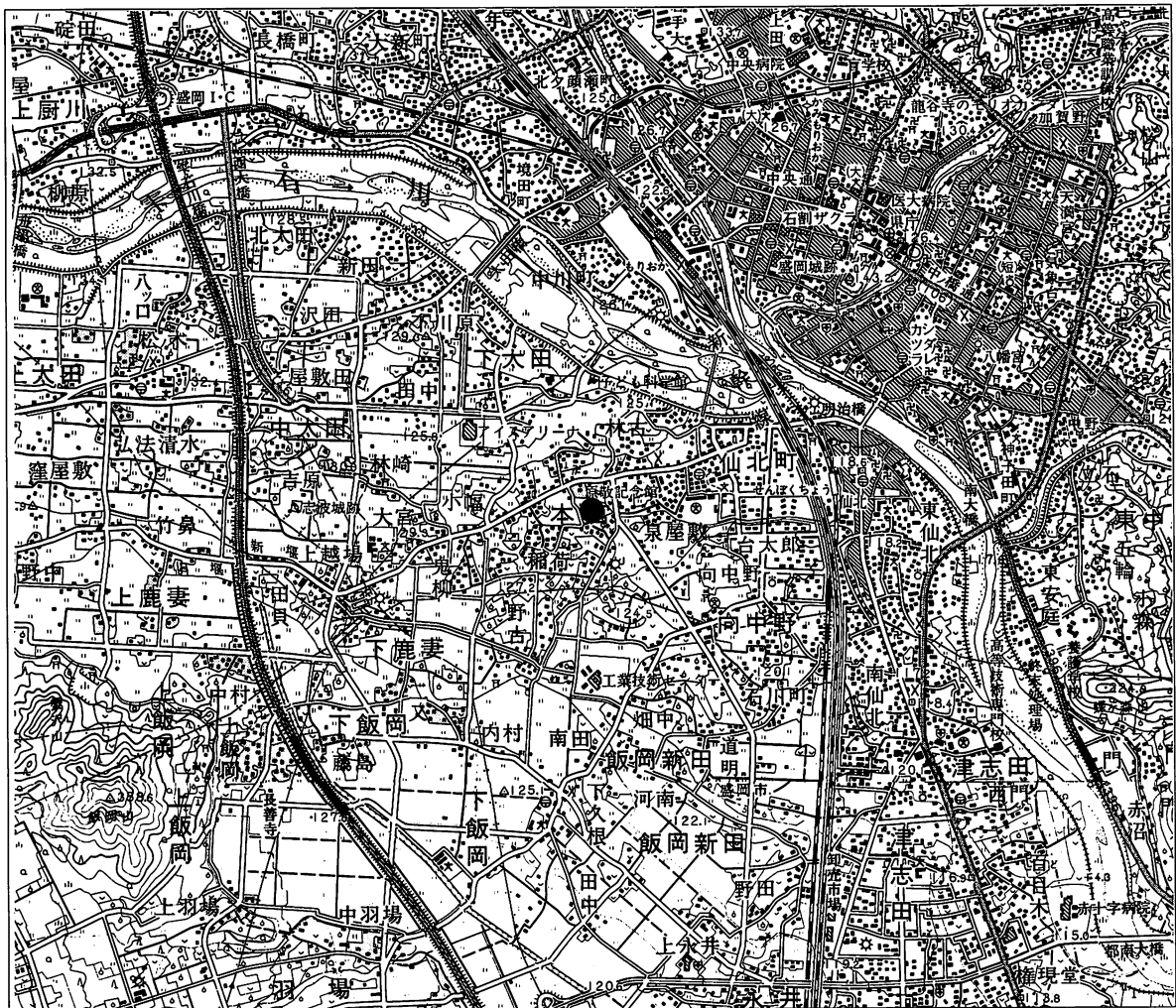
峠山牧場 I 遺跡 B 地区検出遺構・出土遺物



峠山牧場 I 遺跡 B 地区遺構配置図

(2) 宮 沢 遺 跡

所在地 盛岡市本宮字宮沢10-2、11-1 ほか
委託者 地域振興整備公団盛岡事務所
事業名 盛岡市南新都市土地区画整理
発掘調査期間 平成8年6月3日～6月28日
調査対象面積 700㎡
発掘調査面積 700㎡
遺跡番号・略号 LE16-2101・OMZ-96
調査担当者 溜 浩二郎・高橋実央
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・日誌

I. 調査に至る経過

本遺跡は盛岡南新都市土地区画整理事業施行区域内に位置しており、地区内に計画している都市計画道路築造工事を施行する上で、発掘調査の実施が必要となった。平成7年9月、岩手県教育委員会に対して埋蔵文化財調査の実施依頼分と併せての調査実施が岩手県教育委員会「教文第1069号」(平成8年3月6日)によって通知された。

ここに、地域振興整備公団分700㎡の調査が(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって平成8年6月3日～6月28日まで行われるに至った。

II. 遺跡の立地

宮沢遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から西に約2.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘に立地し、現在の雫石川との高低差は約8mある。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約1kmに志波城跡、西約300mに大宮北遺跡、西に隣接して小幅遺跡がある。

III. 調査の概要

(1) 検出された遺構

検出された遺構は、溝状遺構1条である。出土遺物はない。

〈溝状遺構〉

調査区北側で1条検出された。調査区を東西に横切り全長は約90mである。出土遺物はなく時期は明確ではないが切り合いから平安時代以降と考えられる。

IV. まとめ

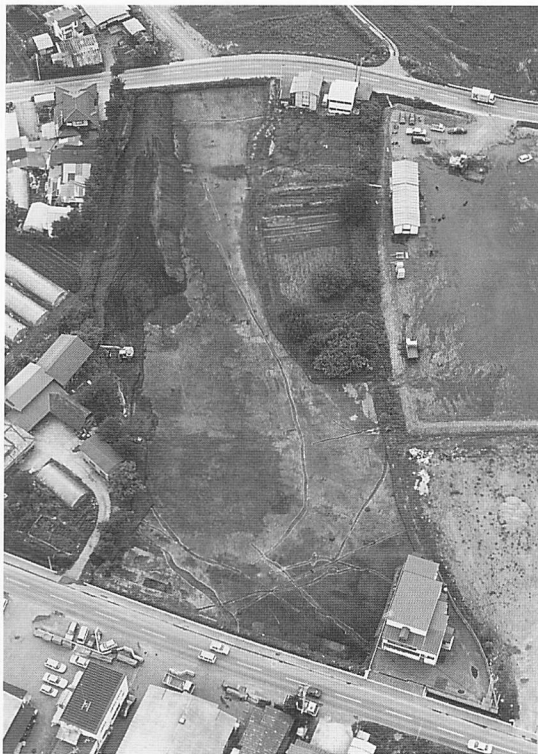
今回の調査で本遺跡が遺物散布地であることが確認された。出土遺物の量や生活に直接関わったと考えられる遺構がないことから、生活の場としての利用はなかったと思われる。

報告書抄録

ふりがな	みやざわいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	宮沢遺跡発掘調査報告書							
副書名	盛岡市南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第266集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)-638-9001							
発行年月日	西暦 年 月 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積	調査原因
みやざわいせき 宮沢遺跡	いわてけんもりおかし もとみやあざみやざわ 岩手県盛岡市 本宮字宮沢10- 2、11-1ほか	03201	LE16-2101	39度 41分 03秒	141度 07分 00秒	1996. 6.3~6.28	700㎡	「盛岡市南新都市計画土地区画整理事業」事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮沢遺跡	遺物散布地	平安時代	溝状遺構1条	なし				



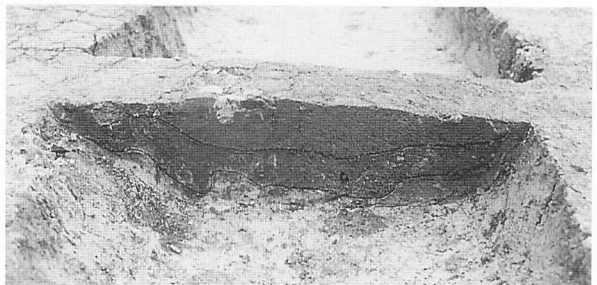
遺跡遠景



調査区全景

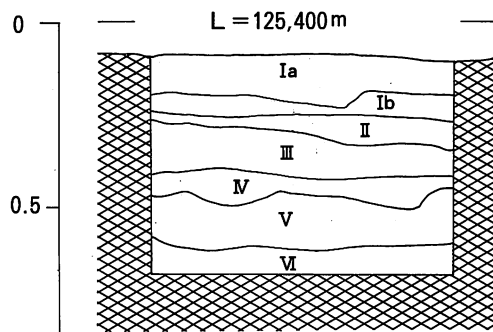
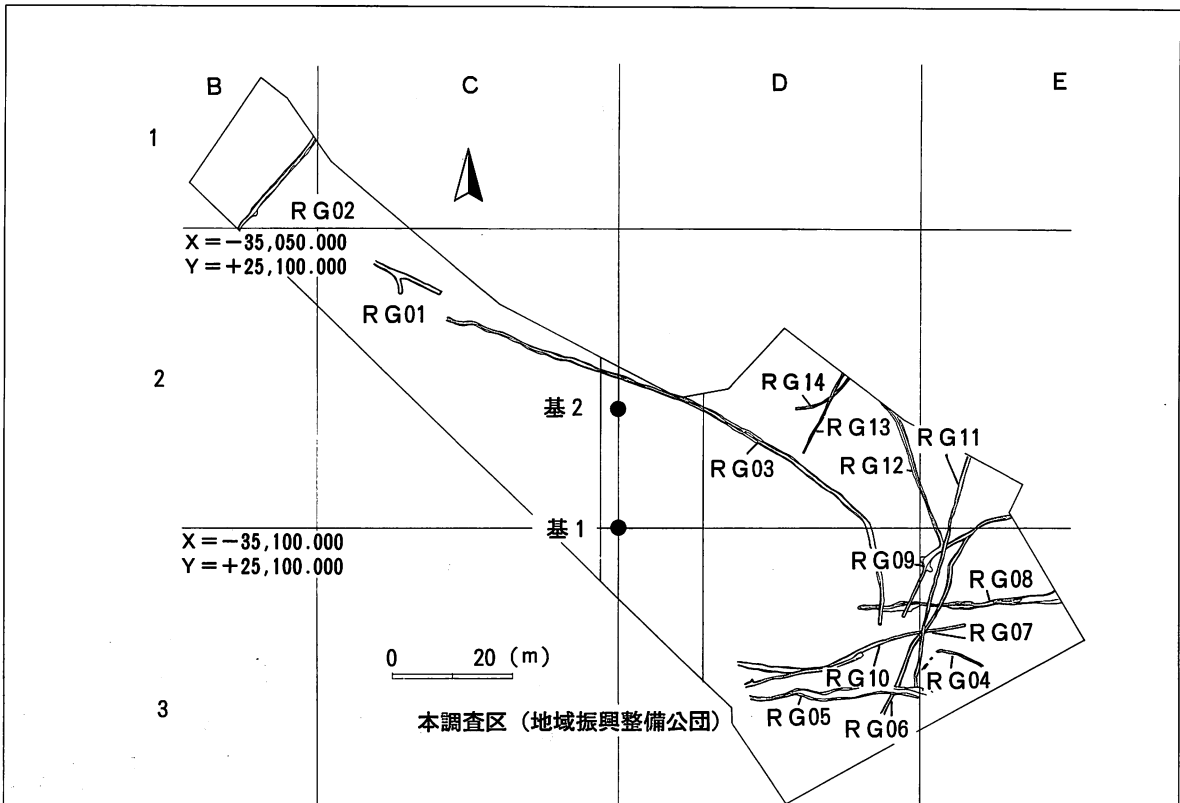


溝状遺構 (平面)



溝状遺構 (断面)

宮沢遺跡検出遺構



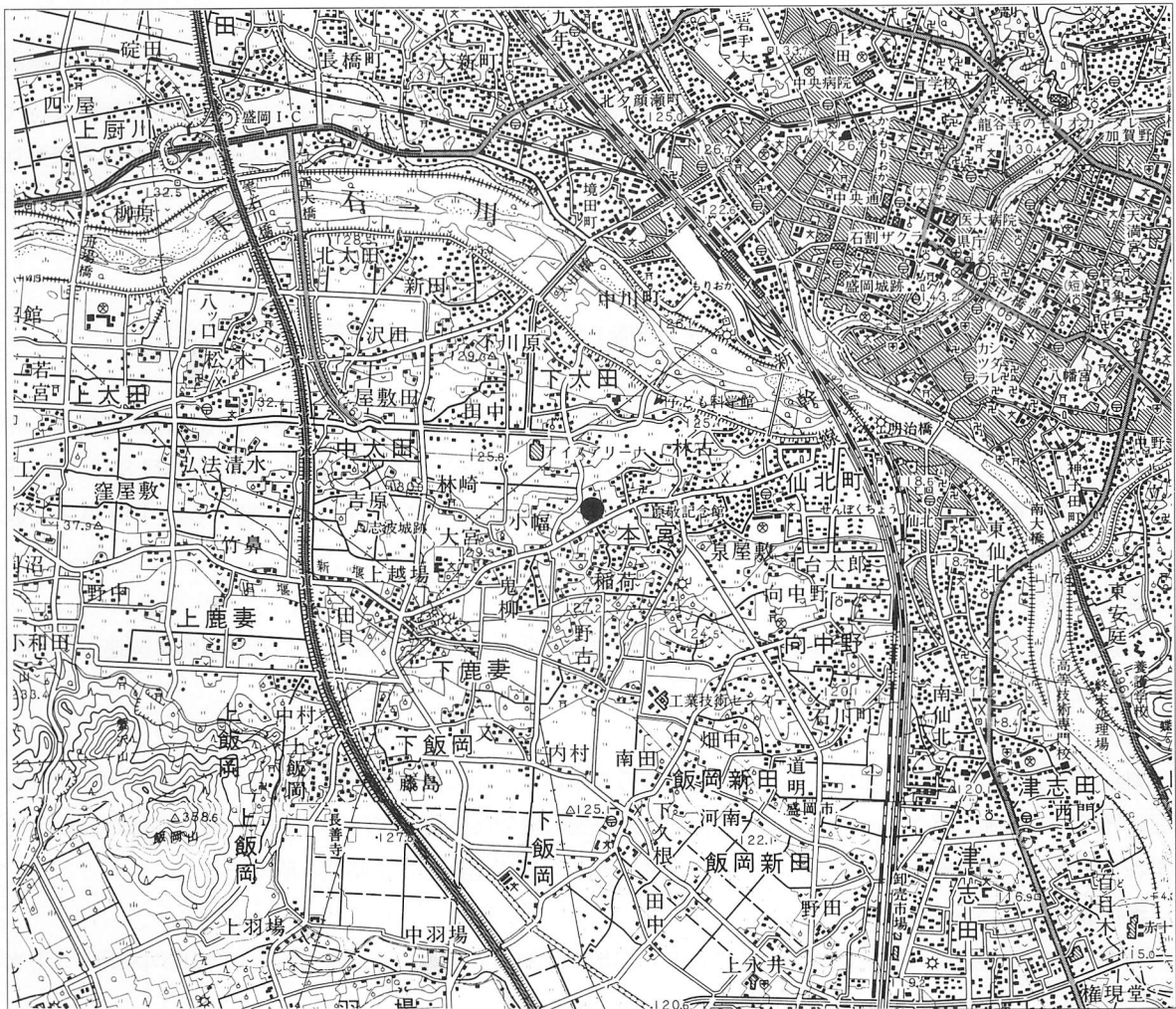
基本層序

- 第I a層：10YR 3/1 黒褐色土 粘性なし しまりあり
旧水田跡。層厚約10-15cm。
- 第I b層：10YR 2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり
旧水田跡で水酸化鉄粒多く含む。
- 第II層：10YR 2/1 黒色土 粘性あり しまりあり
- 第III層：10YR 1.7/1 黒色土 粘性あり しまりややあり
平安時代の遺物を包含する。
- 第IV層：10YR 4/4 褐色土 粘性なし しまりなし 砂
を多く含む。
- 第V層：10YR 3/3 暗褐色土 粘性あり しまりややあり
- 第VI層：10YR 5/6 黄褐色土 粘性あり しまりあり

宮沢遺跡遺構配置図

もとみやくまどう
(3) 本宮熊堂 A 遺跡

所在地	盛岡市本宮字熊堂65-3、73-1ほか
委託者	地域振興整備公団盛岡事務所
事業名	盛岡市南新都市土地区画整理
発掘調査期間	平成8年9月2日～10月23日
調査対象面積	3,800㎡
発掘調査面積	3,800㎡
遺跡番号・略号	LE16-2107・OKD-96
調査担当者	溜 浩二郎・高橋実央
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・日誌

I. 調査に至る経過

本宮熊堂A遺跡は盛岡南新都市土地区画整理事業施行区域内に位置しており、地域内に計画している都市計画道路築造工事を施行する上で、発掘調査の実施が必要となった。平成7年9月、岩手県教育委員会に対して埋蔵文化財調査の実施依頼をした結果、同遺跡における盛岡市調査依頼分と併せての調査実施が岩手県教育委員会「教文第1069号」(平成8年3月6日)によって通知された。

ここに、地域公団調査分1,200㎡の調査が(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって平成8年9月2日に開始され、さらに調査面積の拡大により同年10月23日まで3,800㎡の現地調査が実施されるに至った。

II. 遺跡の立地

本宮熊堂A遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から西に約1.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘に立地している。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約2.0kmに志波城跡、北西約700mに大宮北遺跡、北北西約200mに小幅遺跡がある。

III. 遺跡の基本層序

本遺跡は度重なる雫石川の氾濫によって周辺から供給した砂礫やシルト質土で被覆された沖積面の砂礫段丘上に立地する。立地する地形を反映して表土下の地層は異なっており一様ではないが基本的には縄文時代晩期の土器が出土する第Ⅲ層～第Ⅳ層まで全体的にはほぼ一致している。以下、4N区南西部における深掘りの土層断面を遺跡の基本土層とした。(図は88頁)

IV. 調査の概要

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構1カ所、土坑2基、溝状遺構10数条である。

〈掘立柱建物跡〉

調査区の南側から10基の柱穴が検出された。平面形は長方形で1間×3間の直屋である。南西部には1間×1間の付属施設がある。柱間の寸法は桁行は6尺4寸(約208cm)でほぼ等間隔、梁行は16尺8寸(約508cm)である。桁行の軸方向はN-21°-Wである。柱穴の掘り方はいずれも円形を基調とし、半数から柱痕が認められた。出土遺物はなく時期は不明である。

〈焼土遺構〉

調査区中央部東側から1カ所検出された。現地性で84×62cmの範囲に広がっている。周囲に関連の施設がなく、出土遺物もないことから時期は不明である。

〈土坑〉

調査区の中央部で2基検出された。形状はどちらも楕円形を呈し、規模は大きい方が開口部径368×316cm、底部径187×158cm、深さ73cmで、もう一方が開口部径236×152cm、底部径206×150cm、深さ44cmである。いずれも表土下、第Ⅲ層を検出面としている。遺構内からの出土遺物はなく時期不明である。

〈溝状遺構〉

調査区内で約10数条の溝状遺構が検出された。旧地形と照らし合わせるとほとんどが水田の区画跡(水路)であることが判った。

〈出土遺物〉

遺構外からの出土が大半で、土器類は調査区中央部から縄文時代晩期の土器が大コンテナで1.5箱、石器は遺構外を中心に小コンテナで1箱出土した。主なものに有茎の石鏃（18・19）、石匙（20～23）がある。また他には中央部に穿孔を有する円盤状土製品が1点（17）出土している。

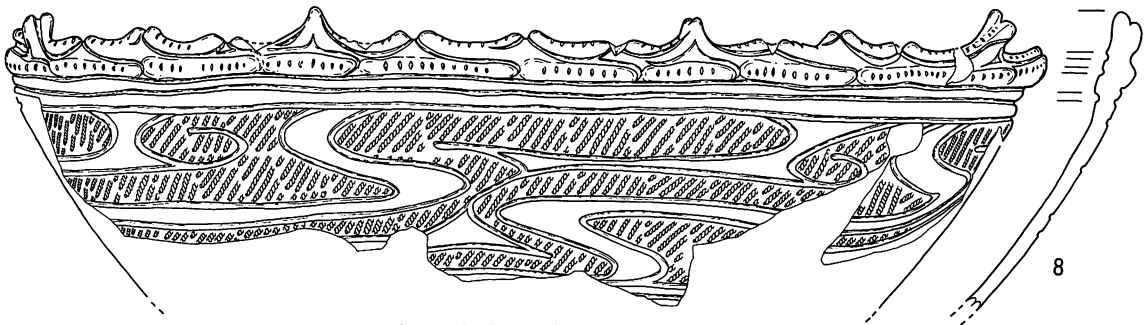
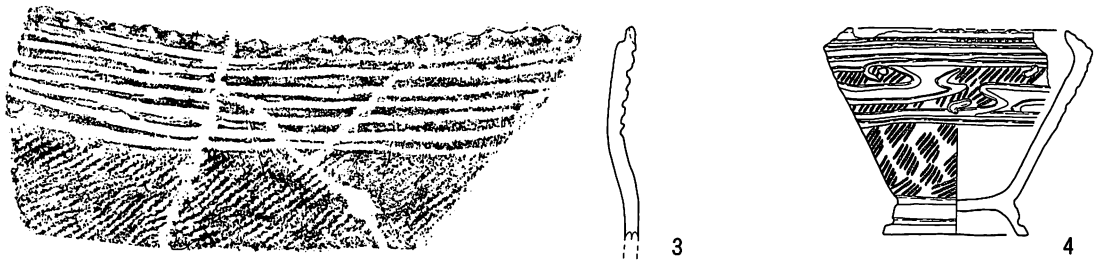
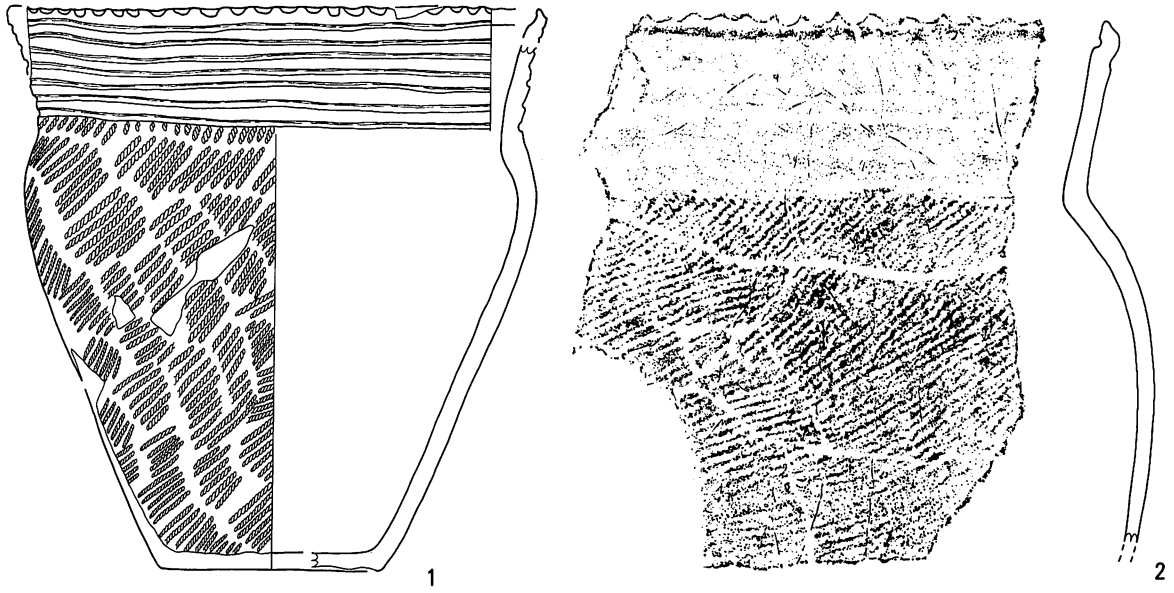
V. まとめ

今回の調査で本調査区が主に縄文時代晩期の土器散布地であることが確認された。中央部やや南で検出された掘立柱建物跡などから、人間が生活していた様子が窺えるが開田時の削平によって遺構の大半が消失していることから詳細は定かではない。また、本宮熊堂A遺跡全体としては縄文時代晩期の住居跡も検出されており、縄文時代に生活の場として利用されていたことが確認されている。

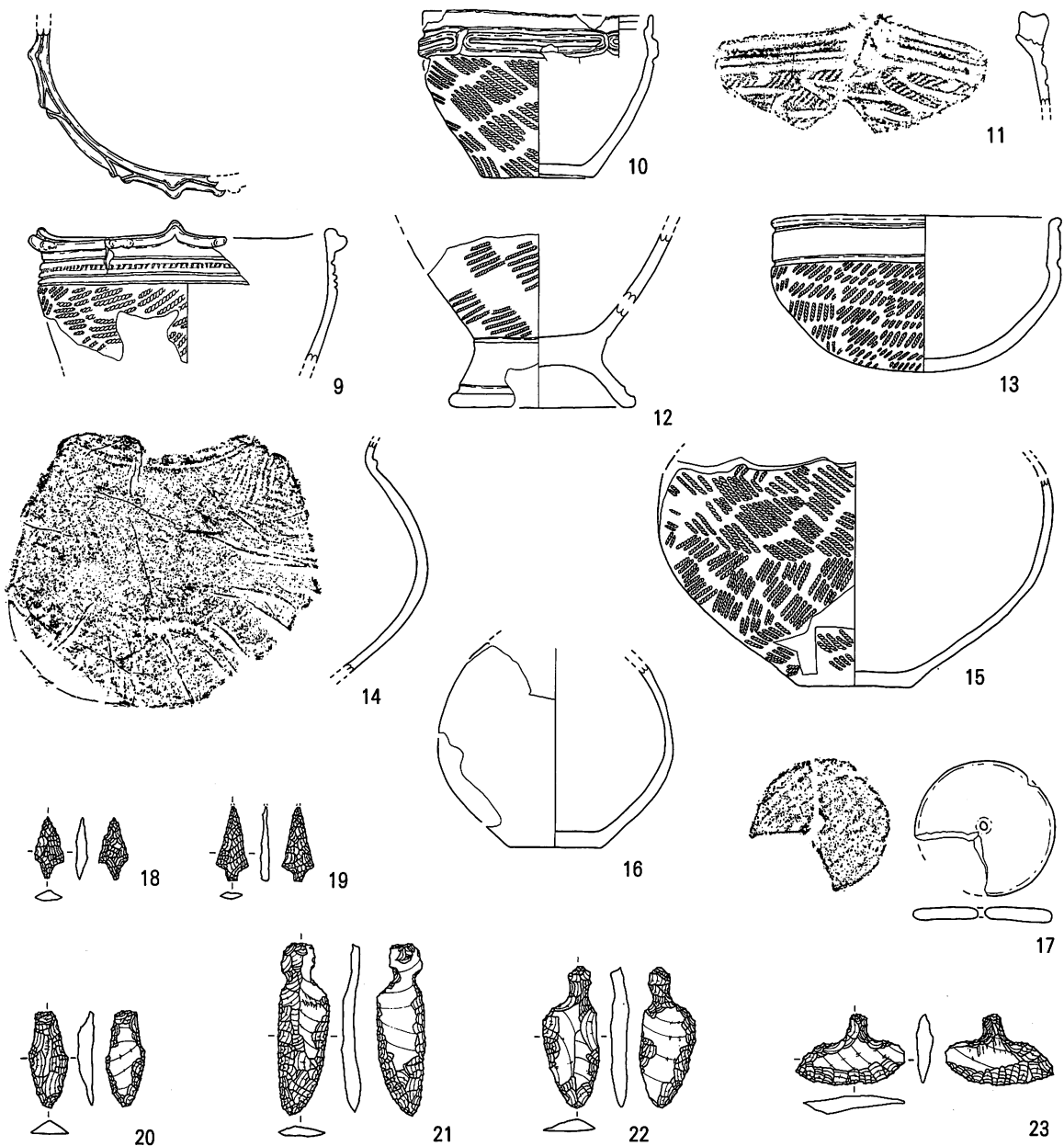
なお、本宮熊堂A遺跡（地域振興整備公団分）に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうえーいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書							
副書名	盛岡市南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第266集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)-638-9001							
発行年月日	西暦 年 月 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとみやくまどう 本宮熊堂A遺跡	いわてけんもりおかし もとみやあざくまどう 岩手県盛岡市 本宮字熊堂65- 3、73-1 ほか	03201	LE16-2107	39度 41分 19秒	141度 08分 08秒	1996. 9.2~10.23	3,800㎡	「盛岡市南新都市計画土地区画整理事業」事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本宮熊堂A遺跡	土器散布地	縄文晩期	掘立柱建物跡（時期不明）1棟 溝状遺構（近・現代）10数条 土坑（時期不明）2基		縄文時代晩期の土器、石器			



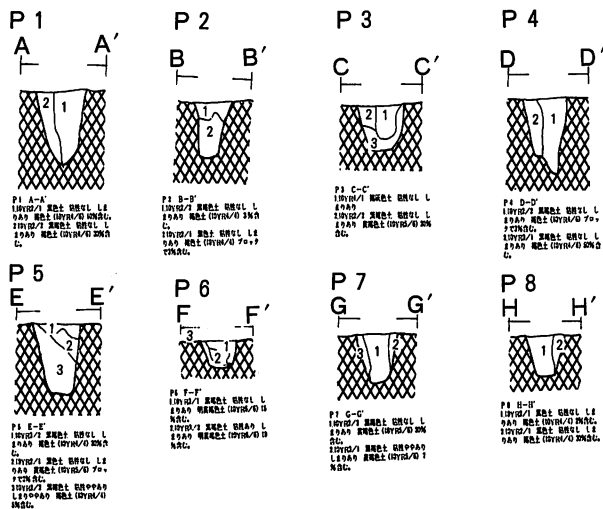
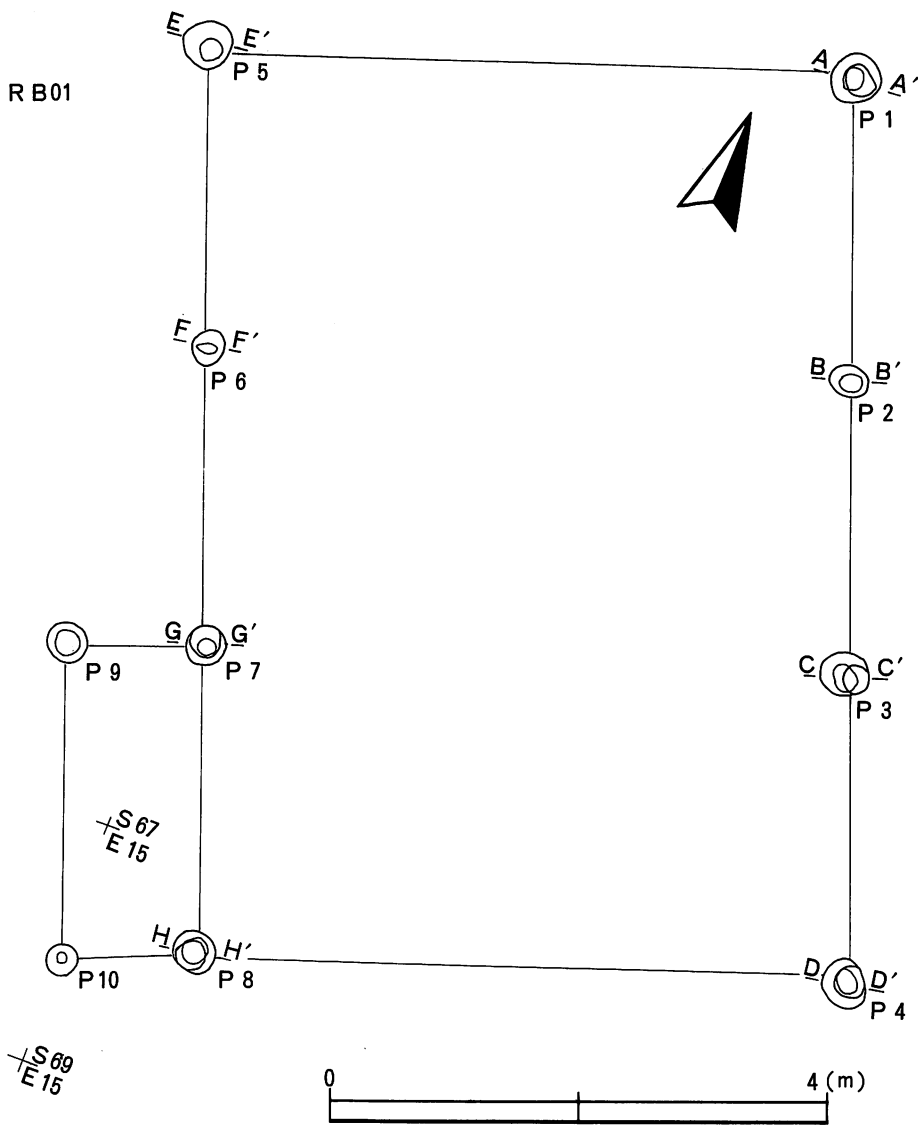
本宮熊堂 A 遺跡出土遺物 (1)



土器観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位 外面(文様・装飾・地文など)	内面(調整など)
1	3 P区 III層	深鉢 □唇部両面押圧 □縁部に沈線7本 地文LR	ナデ
2	3 P区 III層	深鉢 □縁~体部 □唇部押圧+裏面沈線1本 体部地文LR	ナデ
3	3 P区 III層	深鉢 □縁部 沈線7本 □唇部両面押圧+裏面沈線1本	ナデ
4	3 P区 III層	台付深鉢 □唇部内傾 地文LR	ナデ
5	3 P区 III層	鉢 □唇部内傾 地文LR	ナデ
6	3 P区 III層	深鉢 □縁内傾 地文RL	ナデ
7	3 P区 III層	鉢 □唇部刻目+頂部沈線1本 □縁部5本沈線間3本目に刻目文 体部羽状縄文	一部ミガキ
8	3 P区 III層	深鉢 □縁部 突起あり □唇裏面に沈線3本	ナデ
9	3 P区 III層	深鉢 □縁部 突起あり □縁部4本沈線間2本目に刻目文 地文LR	ナデ
10	3 P区 III層	鉢 □唇部裏面沈線1本	ナデ
11	3 P区 III層	鉢 □縁部破片 □唇部に突起あり	ナデ
12	3 P区 III層	台付鉢 体部~底部 地文LR	ナデ
13	3 P区 III層	浅鉢 丸底 □縁部に沈線文2本 □縁部は無文、体部はLR	ナデ
14	3 P区 III層	壺 □縁部~体部 羽状縄文	ナデ
15	3 P区 III層	壺 体部~底部 羽状縄文	ナデ
16	3 P区 III層	壺 体部 無文	ナデ

本宮熊堂A遺跡出土遺物 (2)

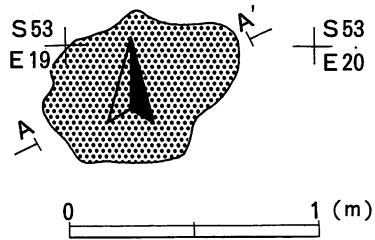


柱穴観察表

P No	径 (cm)	深さ	備考
1	40×40	60	柱痕あり
2	31×27	46	
3	39×34	37	柱痕あり
4	40×36	62	柱痕あり
5	39×37	58	
6	29×27	22	
7	32×32	41	柱痕あり
8	34×34	44	柱痕あり
9	32×32		
10	25×24		

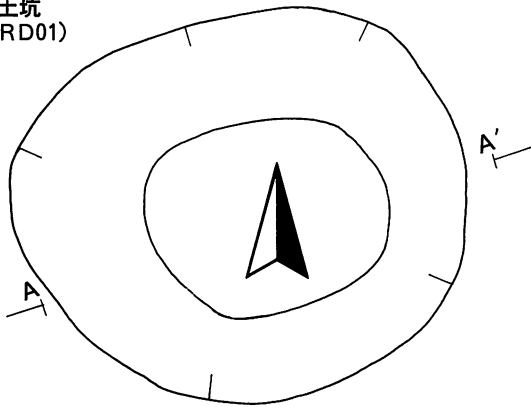
本宮熊堂A遺跡検出遺構 (1)

焼土遺構 (RF01)



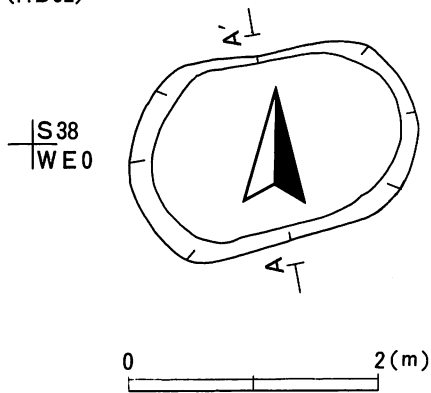
S18
E15

土坑 (RD01)

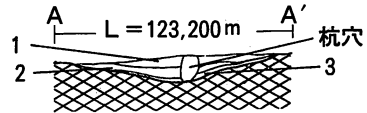


S23
E14

土坑 (RD02)

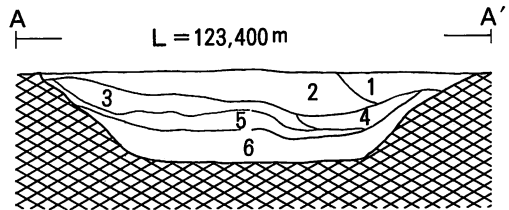


S38
E4



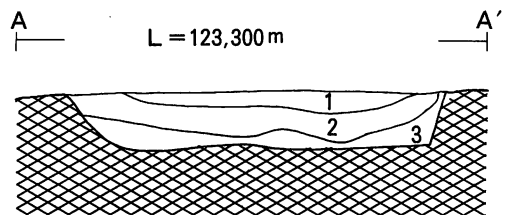
RF-01

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 橙色焼土 (5YR6/8)20%含む。
2. 2.5YR3/4 暗赤褐色焼土 粘性なし しまりあり
3. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり



RD-01

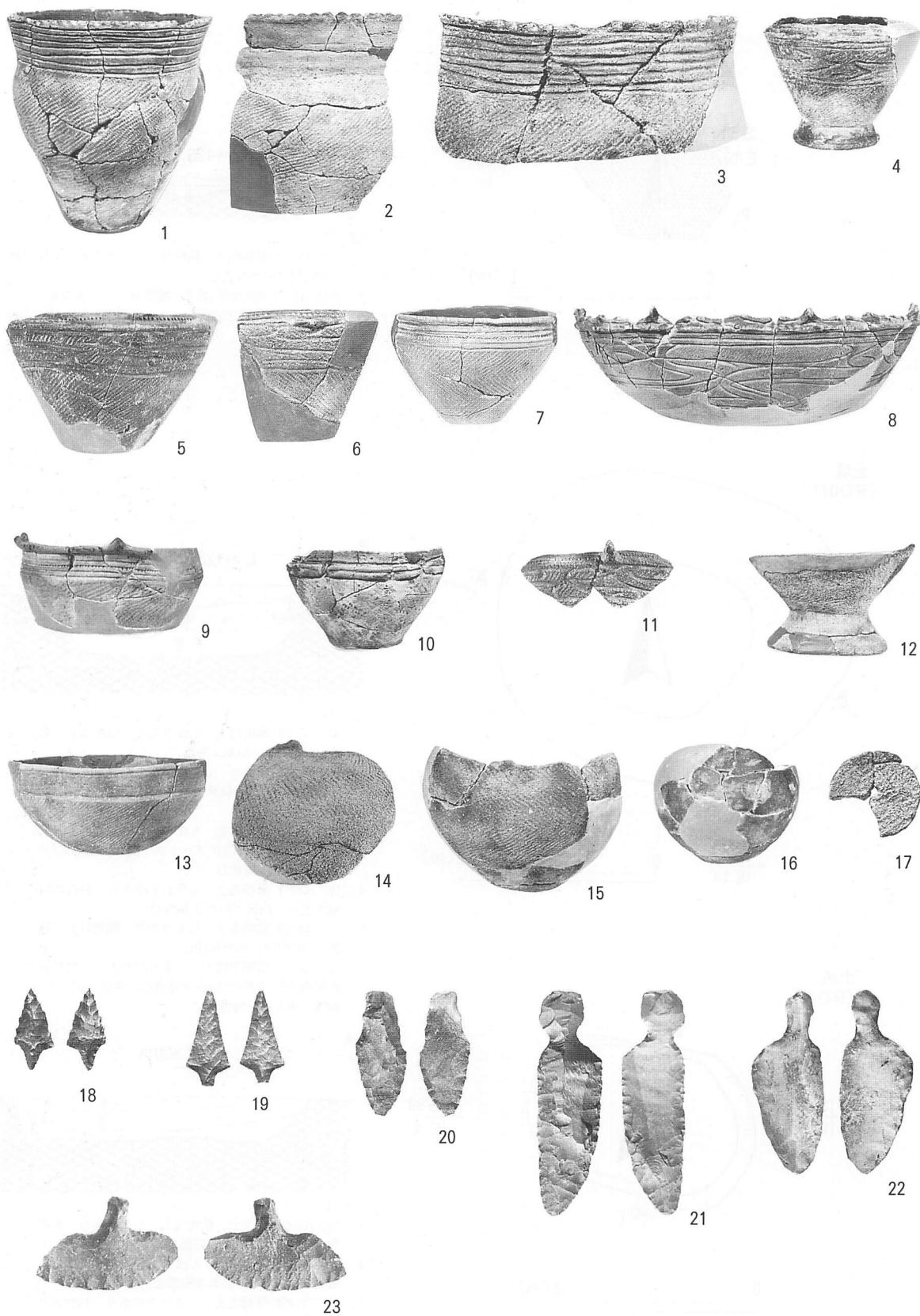
1. 10YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 褐色土(10YR4/6)を2%含む。
2. 10YR2/1 黒色土 しまりあり 粘性なし 褐色土(7.5YR4/6)を粒状で3%、褐色土(10YR4/6)を1%含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 黄褐色土(10YR5/6)がブロックで混入。褐色土(10YR4/6)を1%含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 褐色土(7.5YR4/6)を3%含む。
5. 10YR2/2 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 褐色土(10YR4/6)25%含む。
6. 10YR2/3 黒褐色粘土 しまりややあり 粘性あり 赤褐色土(5YR4/8)を5%含む。褐色(10YR4/6)の砂質シルトを2%含む。



RD-02

1. 10YR4/6 褐色土 粘性なし しまりあり 黒褐色土(10YR2/2)を30%含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 褐色土(10YR4/6)を2%含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 褐色土(10YR4/6)を10%含む。

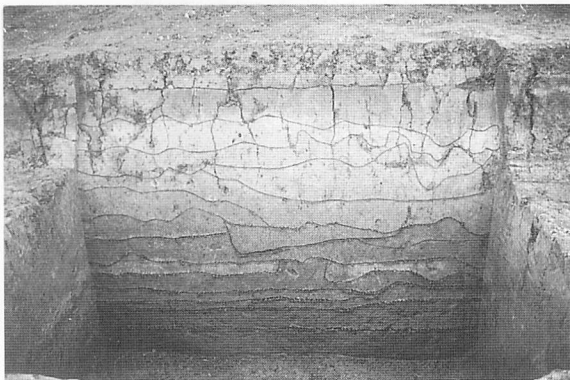
本宮熊堂 A 遺跡検出遺構 (2)



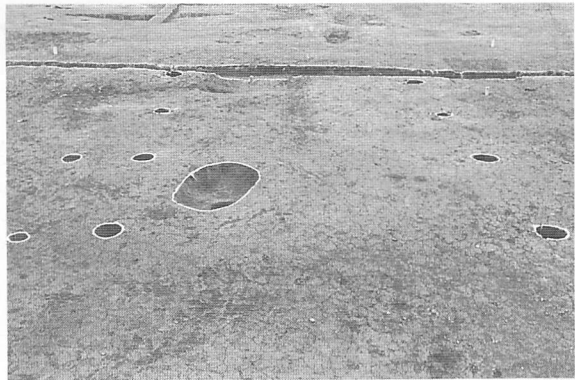
本宮熊堂 A 遺跡出土遺物



調査区全景



基本層序



掘立柱建物跡

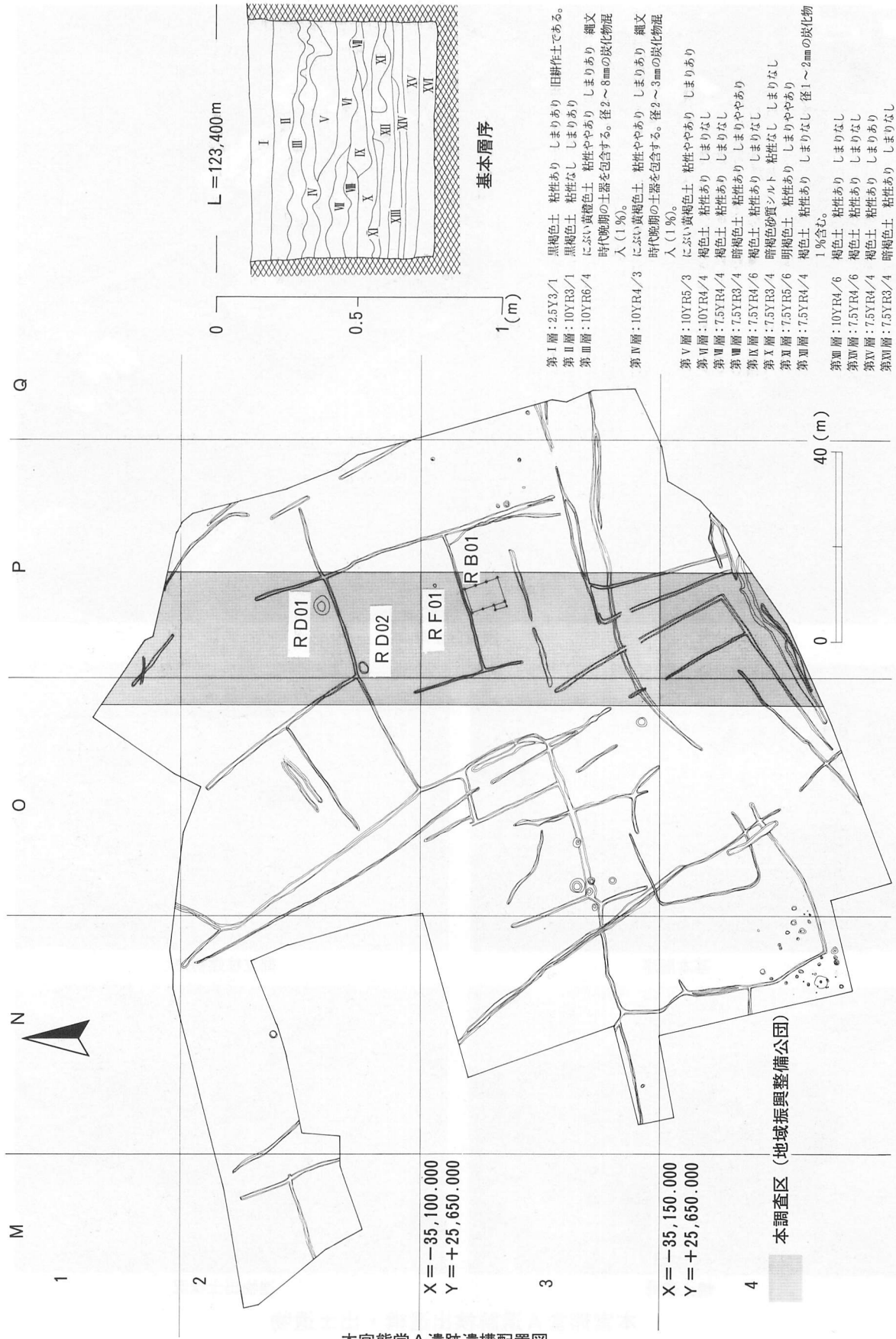


焼土遺構



遺物出土状況

本宮熊堂 A 遺跡検出遺構・出土遺物



本宮熊堂A遺跡遺構配置図

M

1

N



O

P

Q

2

RD01

RD02

RF01

RB01

3

X = -35,100.000
Y = +25,650.000

X = -35,150.000
Y = +25,650.000

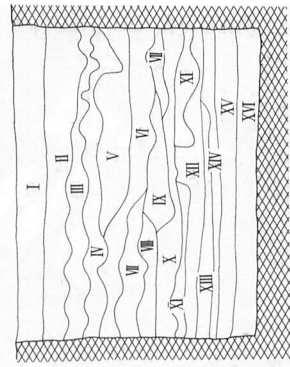
4

本調査区 (地域振興整備公団)

0 40 (m)

0 0.5 1 (m)

L = 123,400 m

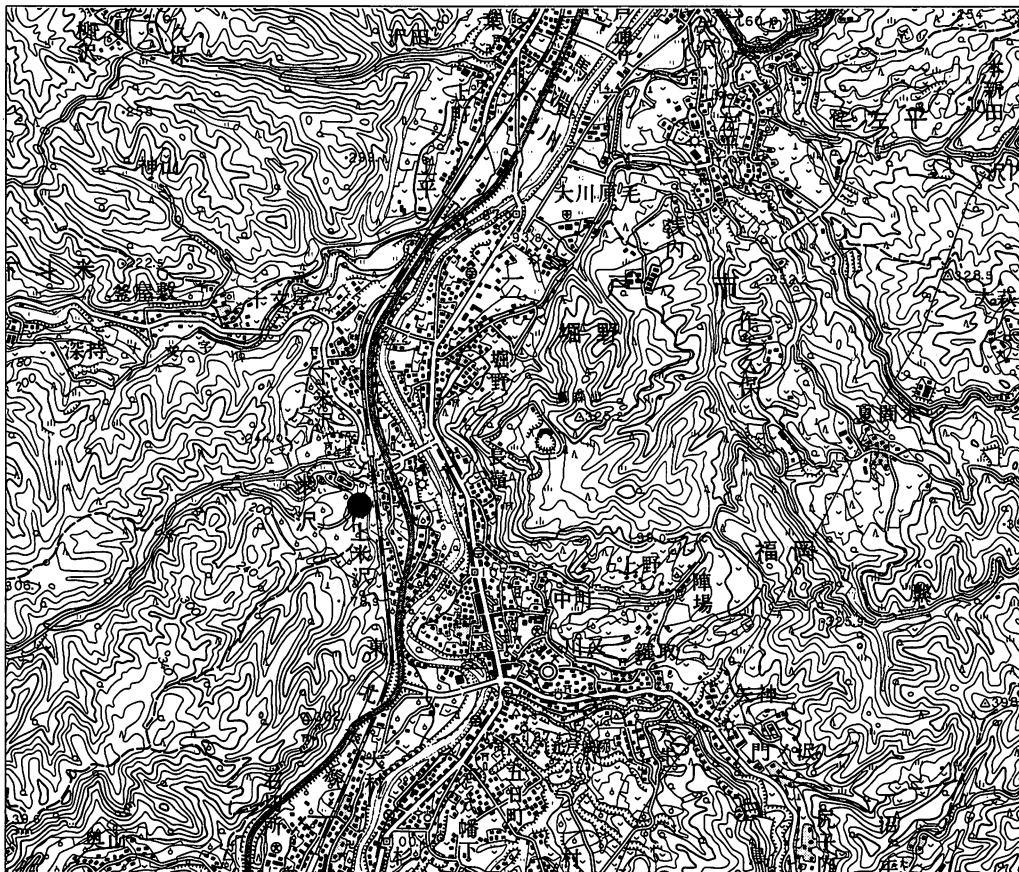


基本層序

- 第I層: 2.5Y3/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり 旧耕作土である。
- 第II層: 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし しまりあり にぶい黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 縄文時代晩期の土器を包含する。径2~8mmの炭化物混入(1%)。
- 第III層: 10YR6/4 にぶい黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 縄文時代晩期の土器を包含する。径2~3mmの炭化物混入(1%)。
- 第IV層: 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 第V層: 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性ややあり しまりあり
- 第VI層: 10YR4/4 褐色土 粘性あり しまりなし
- 第VII層: 7.5YR4/4 褐色土 粘性あり しまりなし
- 第VIII層: 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりややあり
- 第IX層: 7.5YR4/6 褐色土 粘性あり しまりなし
- 第X層: 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性なし しまりなし
- 第XI層: 7.5YR5/6 明褐色土 粘性あり しまりややあり
- 第XII層: 7.5YR4/4 褐色土 粘性あり しまりなし 径1~2mmの炭化物1%含む。
- 第XIII層: 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまりなし
- 第XIV層: 7.5YR4/6 褐色土 粘性あり しまりなし
- 第XV層: 7.5YR4/4 褐色土 粘性あり しまりあり
- 第XVI層: 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりなし

(4) 下 村 遺 跡

所 在 地 二戸市米沢字上村20-1ほか
委 託 者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事 業 名 東北新幹線（盛岡－八戸間）
発掘調査期間 平成8年6月17日～11月8日
調査対象面積 8,430㎡
発掘調査面積 6,500㎡
遺跡番号・略号 JG93-2147・SM-96
調査担当者 大道篤史・下田隆衛・川向聖子
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡配置図

1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

下村遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の南約500mに位置している。調査区は南北の長さが約500m、幅が25mの細長い形状をしており、主に線路西側の山の麓に立地している。遺跡の標高は105m～110m前後で、現況はほぼ畑地、果樹園、道路、草地である。

2. 調査の概要

本遺跡は、便宜上A区～E区の5つに分けている。その内、北側の沢地であるE区は、調査により、終了とした。また、それに続くD区については調査を次年度以降へ繰り越すこととした。従って、本年度はA区～C区が主な調査対象区である。

今年度検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構1基、焼土遺構5基、溝9条、掘立柱建物跡16棟、礎石建物跡1棟、柱穴状ピット1441基、土坑56基、墓坑18基、配石・集石遺構4基などである。また、出土遺物は縄文時代の土器・石器類、近世の陶磁器、古銭、木製品、鉄製品である。なお、掘立柱建物の柱穴からは、幾つかの柱根も出土している。

〈竪穴住居跡・竪穴状遺構〉

竪穴住居跡は、C区北側で3棟検出された。ほぼ方形のプランで規模は、3.5m×3m程である。床中央に炭が見られたものが1棟あったが焼土も炉も見られない。3棟とも住居の四隅に主柱穴と見られる小ピットがあり、同様のピットが住居の内と外を巡っている。その内2棟は、壁際に巡る溝中に小ピットが多数存在し、出入り口と思われる張り出し部分がある。遺構の時期は、検出された層位や形式から中世と考えられる。更に北側にもこれらの遺構と類似した柱穴状ピット群が検出されているが、大部分は調査区外に伸びており、全容は不明である。竪穴状遺構は、A区南側で1棟検出された。方形のプランで規模は、4m×3m程である。柱穴配置は明確でなく、炉等の施設も見られない。

〈掘立柱建物跡・礎石建物跡〉

建物跡は、A区南側で礎石建物1棟・掘立柱建物1棟、北側で掘立柱建物（以下棟数のみ記述）1棟、B区南側で3棟、北側で5棟検出されている。A区南側の掘立柱建物は、4時期にわたる建て替えがあり、間取りは桁行7間だが梁行は、遺構が調査区外に張り出しているため不明である。礎石建物1棟は、これを母屋とする小屋と思われる。いずれも18世紀代～19世紀後半までの遺物が出土しており、明治の鉄道建設に伴い移転したことから、18世紀前半～19世紀後半までの建物跡であると推測される。A区北側の建物跡周辺には、大溝が方形に巡っている。やはり4時期にわたり建て替えられており、いずれも直ぐ家の造りである。間取りは6.5～5間×4間程で、厩は伴っていない。出土遺物は、17世紀初頭～19世紀後半までのもので、この建物は、17世紀初頭～18世紀後半までの期間に建て替えられていると推測される。B区南側の3棟は、間取りが6～4間×4間程で、柱穴の集中区に電柱が立っている1棟では全容が明かではない。出土遺物がほとんど無く時期決定は難しいが、B区北側の建物跡よりも検出面が下位であることから、より古い年代と推定できる。B区北側には、曲がり家と「布掘」をもつ建物の跡がある。前者は、8間×5間の間取りで他の建物跡より柱穴の規模が大きい。建物北東部に存在する墓坑との切り合い関係から、墓坑より古い年代と考えられる。鉄道建設で移転したらしく、19世紀前半代のもものと推定される。また、2間×2間の小屋と思われる建物跡が2棟東側に検出されている。後者は、間取りが7間×4間で、柱穴の中に根固めとして礫が組み込まれている場合が多い。この建物は、鉄道建設に伴い移築され、調査区のすぐ西側に現在も残されている。更に北側に1棟検出されているが、一部が調査区外に張り出しており全容は不明である。

〈焼土遺構・溝・配石・集石遺構〉

焼土遺構は、A区北側で2基、B区北側で3基検出された。A区北側の1基は、焼土を中心として周囲に正方形のプランを持つ灰が検出されているため、建物に伴う囲炉裏の跡とも考えられる。また、A区とB区のものも、それぞれの建物の施設に伴うものと思われる。溝は、A区南側2条・北側1条、B区北側3条、C区南側1条・北側2条が検出された。A区南西部の溝は、埋土が砂質土で雨水の侵食によってできたものと推定される。埋土中には、時期の異なる土器が多数含まれていた。これらは、隣接する山側から流れ込んだものと考えられる。C区の溝で最も規模の大きいものは幅約2.5m、確認延長約45mである。埋土は、黒褐色シルトで上層部に十和田a降下火山灰が堆積しており、土師器が1点出土している。その他の溝は、建物に関わるもので、排水路などに利用されていたと考えられる。B区北側の溝の埋土からは、多くの陶磁器片が出土しており、いずれも18世紀後半代の遺物と推測される。配石・集石遺構は、A区で1基、B区で1基、C区で2基検出されている。A区のもの最も大きいのが、同区の建物跡に伴うと思われる遺構の上位から検出されたため、それよりも新しい年代が与えられる。また、埋土にガラス片などが含まれており、畑を作る場合の石捨て場の可能性が高い。B区のは、布掘建物跡西側の溝に伴うものと考えられる。陶磁器などが多数出土しており、布掘建物跡とほぼ同時期に存在したと推定される。C区のは、礫が雑然と集積しており、1基は特に円礫が多い。他方の上部からは、縄文中期相当の土器が出土しており、下部に人為的な掘り込みが見られることから、同時期の墓坑である可能性があるものの詳細は不明である。

〈土坑類・墓坑〉

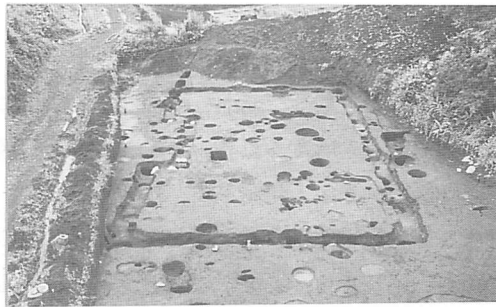
土坑類は、A区で15基、B区で21基、C区で20基検出されている。このうち、遺物等から時代の特定ができたものは、A区とB区にある墓坑とみられる18基と井戸状遺構の2基である。A区の墓坑からは、人間の歯、寛永通寶、棺桶の板材と思われる木片、釘などが出土している。また、B区では人骨と共に陶磁器、煙管、寛永通寶などの古銭が出土している。井戸状遺構は、A区の建物跡に付随したものと考えられることから、これらの遺構は18世紀前半～19世紀後半にかけてのものであると推定される。ほとんどの遺構は、遺物が検出されないため年代の確定は難しい。また、用途についても不明のものが多く。

〈出土遺物〉

出土遺物は、土器・大コンテナ約6.5箱、石器・小コンテナ約1箱、陶磁器類・中コンテナ約2箱、古銭75点などである。土器は、縄文前期の占める割合が高く、縄文前期（円筒上層c式ころ）はA区南端の斜面とB区北側～C区南側で出土している。また、中期（大木8b式ころ）と晩期（大洞C2・A'期）は主にC区南側から出土し、後期中葉～後葉のものはB区北側～C区南側で出土している。陶磁器類は、建物跡付近や墓坑内から出土しており、A区に多くみられる。17世紀初頭～19世紀の瀬戸産・肥前産・美濃産が多い。その他に古銭が多数出土しているが、ほとんどは寛永通寶である。また、墓坑からは、人骨や歯と共に煙管や茶碗などの副葬品などが出土している。

3. まとめ

今年度の調査では、近世の建物跡が数多く検出され、数回にわたる建て替えがあったことが確かめられた。これらの事例は、岩手の古民家の歴史の変遷を検証していくうえでの貴重な資料となるであろう。また、近世以前の遺物については、ほとんどが遺跡西側の山頂付近から流れ込んだものと考えられることから、近くに縄文の遺跡の存在が窺われる。従って、今後、未調査区や近隣の遺跡の検証いかんによっては、更なる成果を収めることができるとと思われる。



布掘をもつ建物跡



竪穴住居跡



柱穴状ピットと柱根



井戸状遺構



1



8



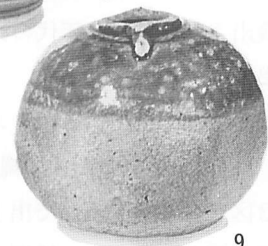
5



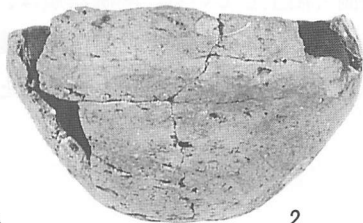
6



7



9



2



11



12



3



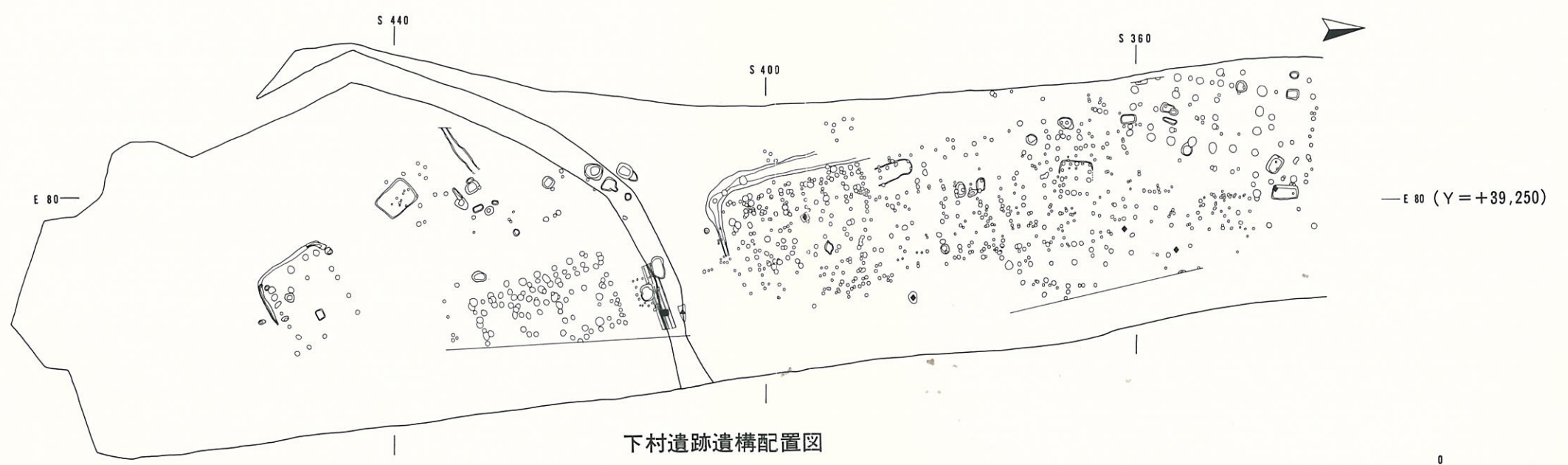
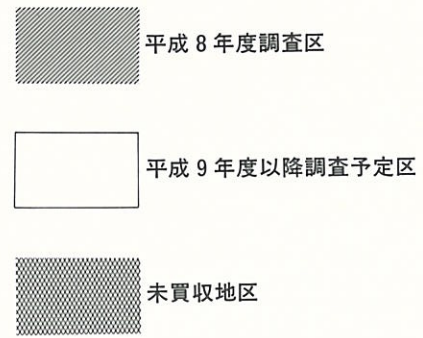
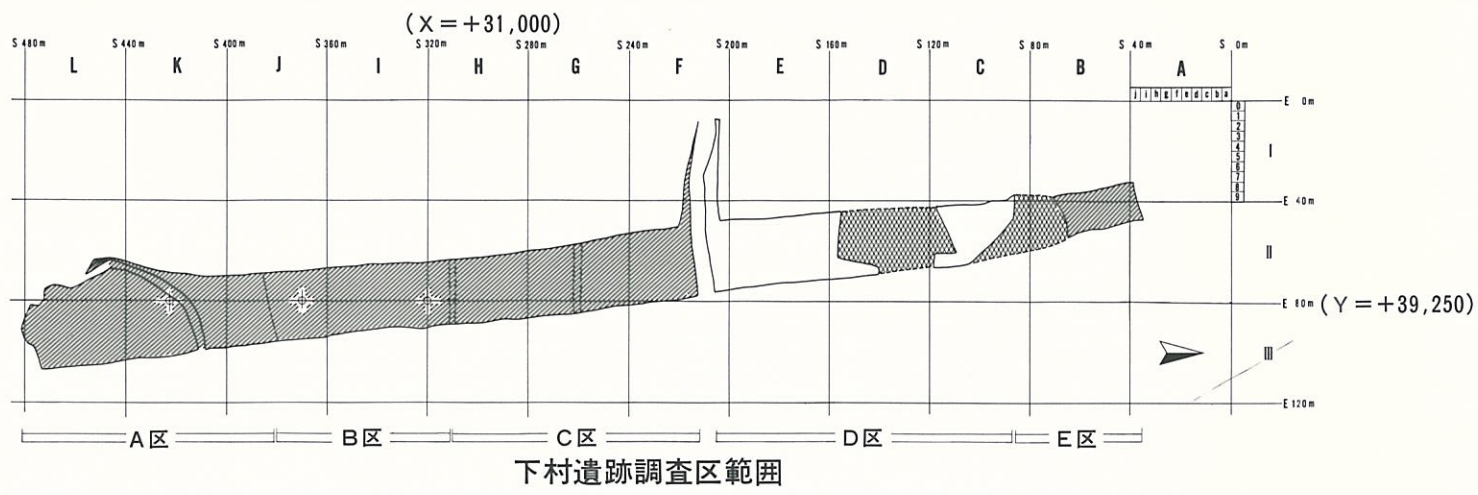
4

- 1~2 縄文式土器
- 3 石 匙
- 4 土 製 品
- 5~7 石 鏃
- 8 陶磁器 (茶碗)
- 9~10 陶磁器 (水差し)
- 11~12 寛永通宝 (表・裏)

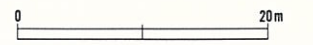


10

下村遺跡検出遺構・出土遺物



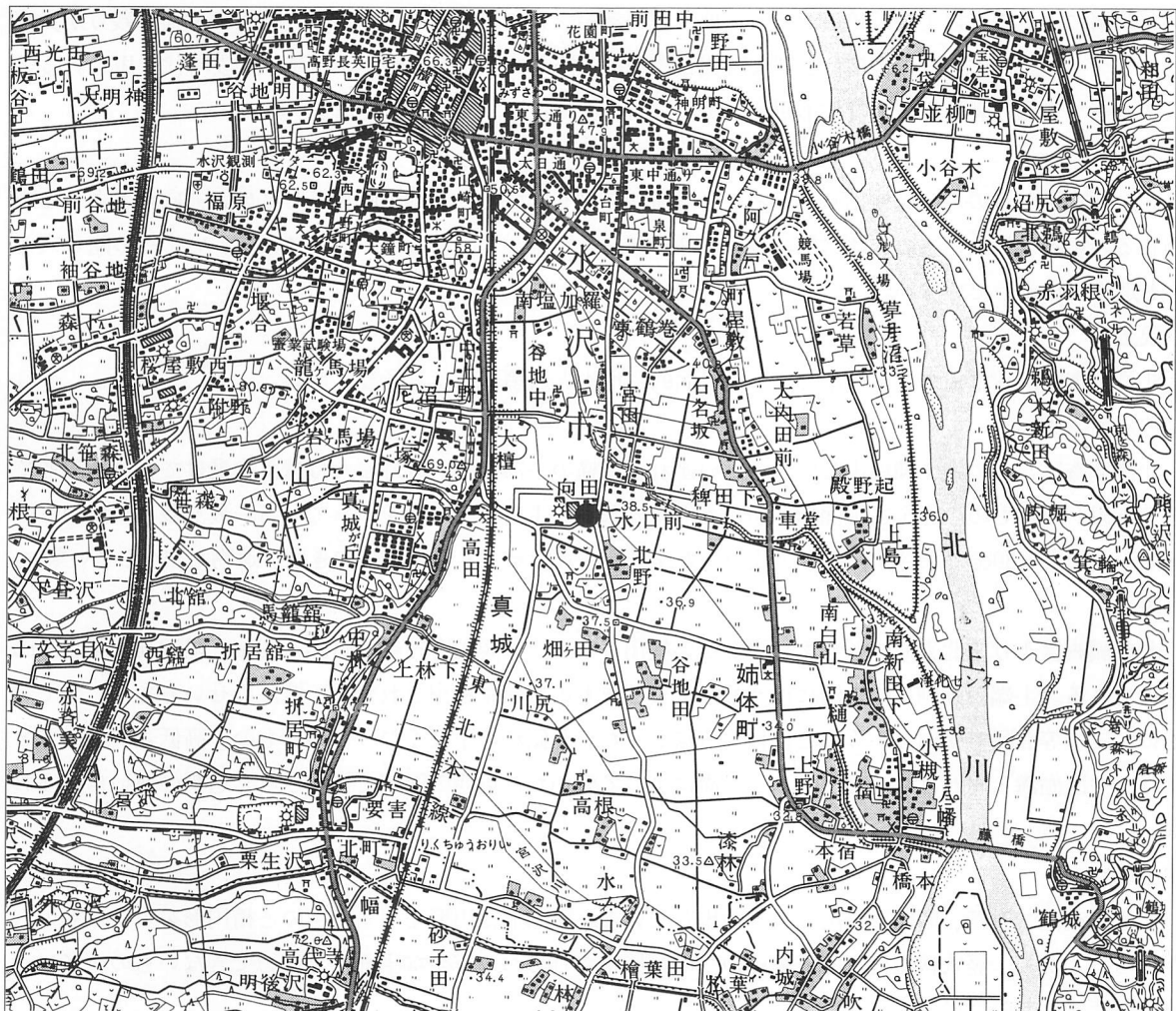
下村遺跡遺構配置図



Ⅲ. 岩手県・市関係

(1) 北野 IV 遺跡

所在地	水沢市真城字北野18-3、21-1
委託者	岩手県土木部水沢土木事務所
事業名	県営北野アパート建設
発掘調査期間	平成8年4月12日～6月14日
調査対象面積	2,500㎡
発掘調査面積	2,500㎡
遺跡番号・略号	NE26-2359・KNIV-96
調査担当者	木戸口俊子・柴田慈幸
協力機関	水沢市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 水沢

1. 遺跡の立地

北野IV遺跡は、水沢駅より南東約3km、北上川より西約2.5kmに位置し、県営北野団地内にある。

遺跡は、北上川より西に形成された水沢段丘にのっており、標高40m前後の微高地上に立地している。すぐ北側には寿安下堰が流れている。旧県営アパートが建てられる前は、りんご畑や水田として利用されていたようである。遺跡の周辺には林前遺跡、真城カ丘団地遺跡など平安期の遺跡がある。

2. 調査の概要

調査区は、公園と団地に挟まれ北側と南側に分かれている。調査対象面積の80%を占める南側調査区では南北を大きく分ける溝が走っており、昭和40年代中頃まで利用された水路である。この水路を境にして当時は北側では畑地、南側では水田だった。水田として利用された南側ではほとんど遺物も出土せず、また旧県営アパート建設時の整地層の下にある旧耕作土層を剥いても粘土層ばかりであった。

旧水路の北側については、耕作土層の下に若干遺物を含む層が見られたが、住居跡のような遺構は検出されなかった。時代不明の土坑3基と柱穴状ピット2基のみである。

北側調査区では旧県営アパートの基礎のため半分以上が壊されているのに加え、それ以前にも試験的なりんご栽培による1m以上の栽培痕、それに伴う肥料溜痕、ゴミ捨て場等に利用されたため遺構の残りが大変良くなかった。検出された遺構は、縄文時代と思われる陥し穴が8基、焼土が1基、平安時代と思われる竪穴状遺構が4棟、溝が1条、時代不明の土坑が21基、柱穴状ピットが34基である。

〈陥し穴〉

北側調査区からのみ8基検出している。全て溝状の陥し穴であり、軸の向きとしては3方向ほどあると思われる。規模は最大のもので開口部の長軸が2m85cm、短軸が75cm、深さが77cmである。いずれの陥し穴からも遺物は出土していない。

〈焼土〉

北側調査区から単独で1基検出している。面的に地山との境界ははっきりしない。

〈竪穴状遺構〉

北側調査区からのみ4棟検出している。いずれも遺構の一部が調査区外または攪乱を受けており、方形であると思われるものの完全に平面形がわかるものはない。1棟は陥し穴を切っている。最も残りが良いものは1辺が約1m30cmで深さ10cm程度と浅い。カマド、柱穴状ピット等は確認できず、遺物も出土していない。

〈溝〉

北側調査区より南北方向に軸をもつ溝が1条検出された。確認できた長さは14m60cm、幅50cm、深さ50cm前後である。上端の両側にこの溝に伴うピットらしきものが数基検出されたが、攪乱のせいもあり、全てが対になって等間隔で検出ということにはならなかった。北側が若干低くなっているものの高低差が最大で8cmほどで区画溝と思われる。ただし、この溝によって分かれた東西の区域で検出された遺構の違いは見られない。

〈土坑〉

北側調査区で21基、南側調査区で3基検出している。平面形は円形を呈するものと楕円形を呈するものがある。しかし、竪穴状遺構と同様遺構の一部が攪乱されており完全な平面形は確認できないものが多い。遺物が伴ったものはない。

〈柱穴状ピット〉

北側調査区で34基、南側調査区で2基検出している。規模は様々で掘立柱建物跡にはならなかった。

〈遺物〉

出土した遺物は遺構外からの出土がほとんどで、土器が小コンテナで2箱、石器が10点である。土器は土師器が7割を占め、須恵器も3割弱出土している。破片が多いが判別できる器種としては坏、甕、須恵器では坏、甕、長頸瓶がある。時期としては土器の特徴から9世紀中頃以降（～9世紀後半）と考えられる。遺物の多くは南側の調査区からの出土で遺構に伴ったものではなく、遺構の検出された北側からはごく少量の出土しかない。縄文土器も出土したが小破片のものである。

石器は石鏃が1点、石べらが3点、磨石が1点などである。

3. まとめ

今回の調査では、南側からは明確に判断できる遺構が検出されなかった。しかし、遺物の出土状況により周辺に平安時代及び縄文時代の遺構があったと思われる。

北側の調査区では竪穴住居跡が検出されなかったが、竪穴状遺構は住居跡の付属施設である可能性も含まれており、平安時代の集落の一部と見てよいだろう。また縄文時代の陥し穴が検出されたことにより、その当時には狩猟の場であったことを示している。

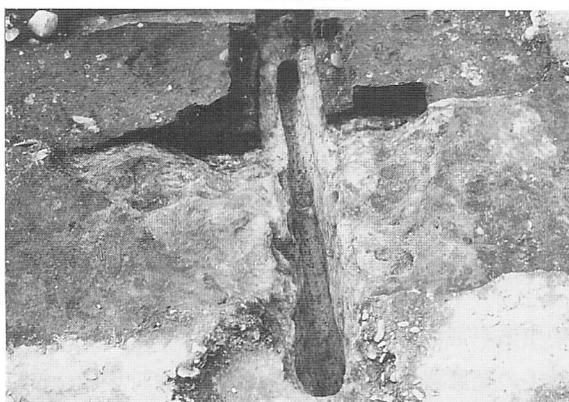
以上のように北野IV遺跡は大きく二時代において人々の生活が営まれていたと考えられるわけだが、溝や土坑については不明の点も多く、周辺で行われている市教委の発掘調査の結果も含めて今後検討していきたい。



遺跡全景



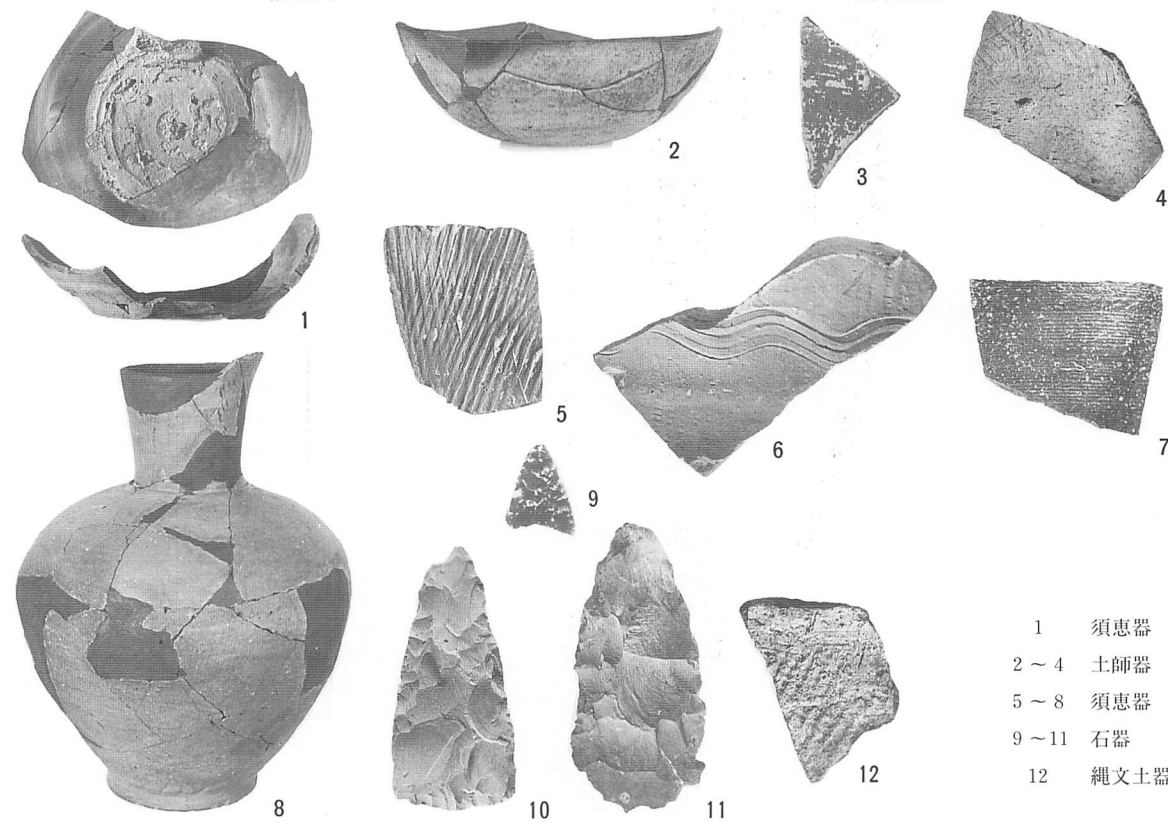
土坑



陷し穴

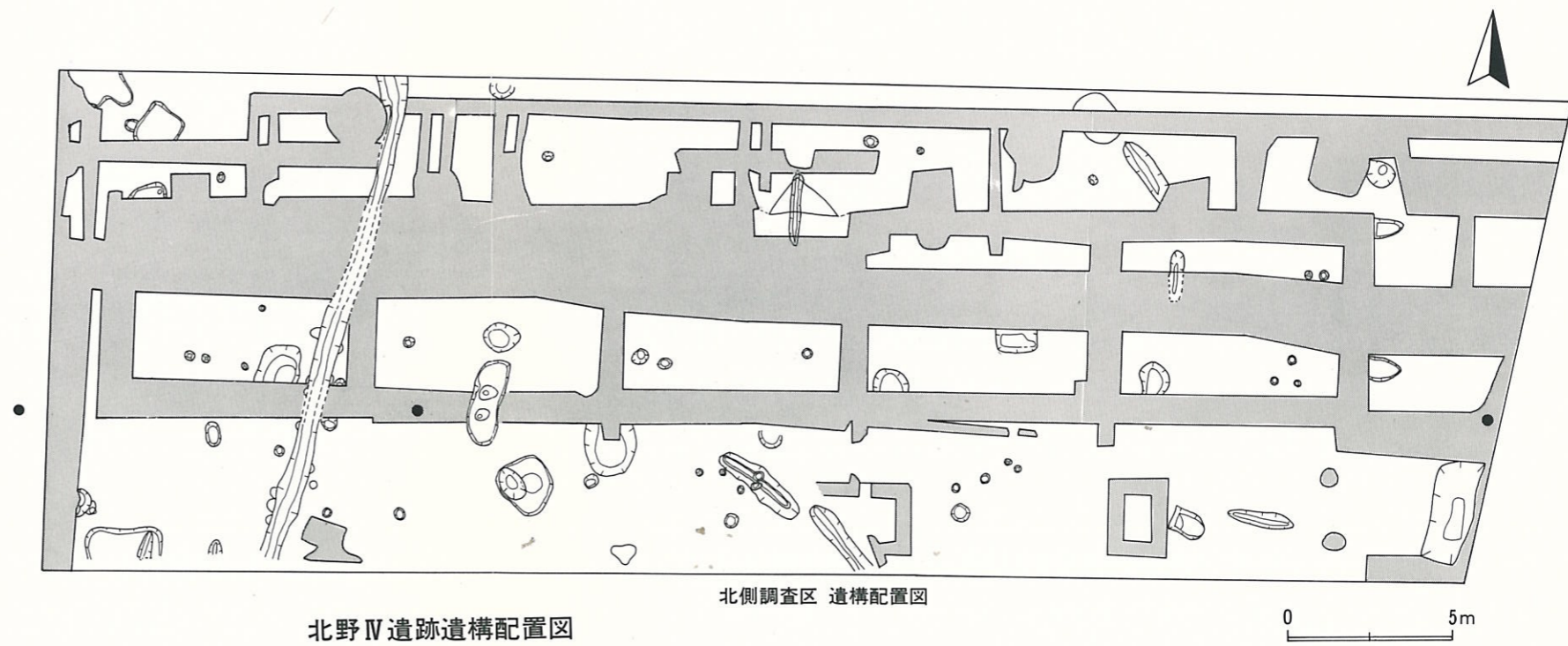
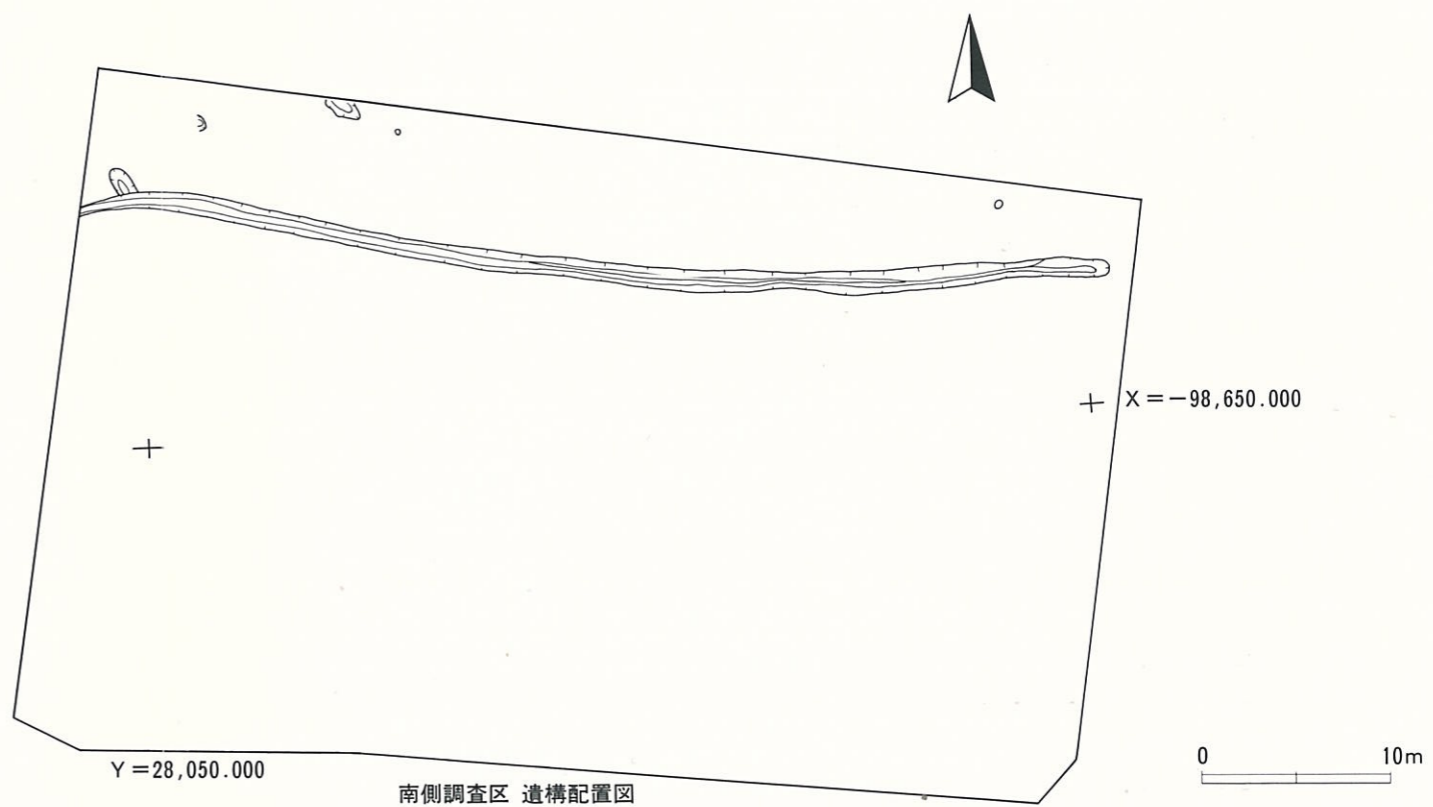


溝状遺構



- 1 須恵器
- 2～4 土師器
- 5～8 須恵器
- 9～11 石器
- 12 縄文土器

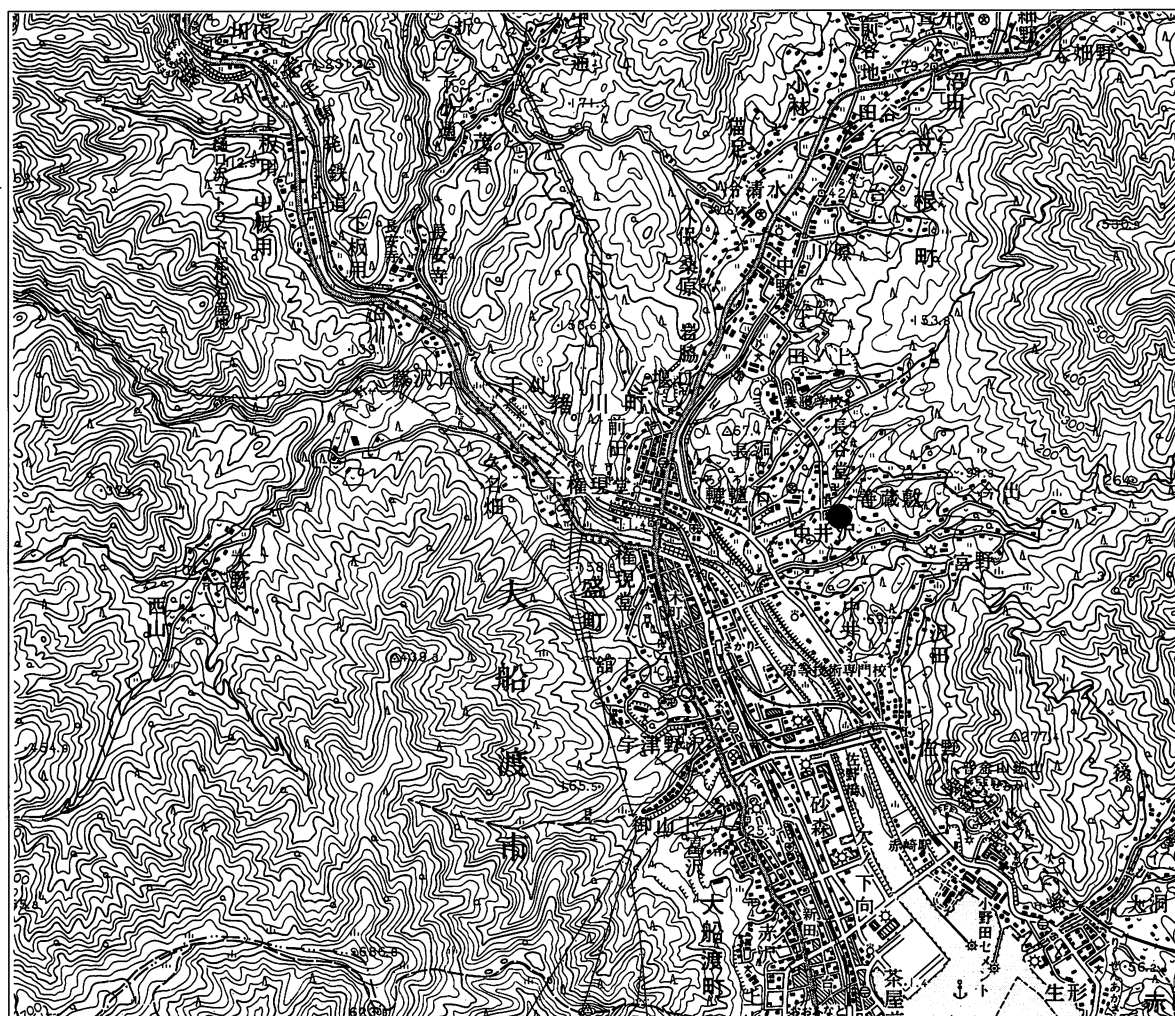
北野Ⅳ遺跡検出遺構・出土遺物



北野Ⅳ遺跡遺構配置図

(2) 長谷堂貝塚

所在地	大船渡市猪川町字中井沢地内
委託者	岩手県土木部大船渡土木事務所
事業名	県営長谷堂アパート建設
発掘調査期間	平成8年10月1日～11月20日
調査対象面積	3,000㎡
発掘調査面積	550㎡
遺跡番号・略号	NF39-1151・HSD-96
調査担当者	阿部勝則・濱田宏・川向聖子・鈴木聡
協力機関	大船渡市教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 盛

1. 遺跡の立地

長谷堂貝塚は、大船渡市猪川町字中井沢地内に所在し、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北東約1.2km付近、岩手県立大船渡高等学校の東南東約600m付近に位置する。また現地地形で海岸から約3kmほど北側に位置している。

遺跡は、西側を南流する立根川と南側を西流する中井川とに挟まれた盛川左岸の河岸段丘上に立地し、遺跡周辺は今出山（標高756m）のある北西側から南東側にむかって緩く傾斜している。調査区の標高は26m前後で、現況は宅地跡である。

大船渡湾周辺には大洞貝塚（県指定史跡）、蛸の浦貝塚・下船渡貝塚（国指定史跡）など著名な貝塚が多く存在するが、長谷堂貝塚は大船渡湾周辺に立地する貝塚でもっとも北側に位置する貝塚である。

2. 調査の概要

長谷堂貝塚は、長谷堂貝塚A地点・長谷堂貝塚B地点・長谷堂中貝塚A地点・長谷堂中貝塚B地点・長谷堂南貝塚・長谷堂東貝塚A地点・長谷堂東貝塚B地点の7地点で構成されている。今回、調査した地点は長谷堂中貝塚B地点に近接する。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構1棟、土坑類31基、墓壇1基、焼土遺構3基、土器埋設遺構3基、集石遺構3基などである。今回の調査で貝層は検出されなかった。

〈竪穴住居跡〉

全部で6棟検出された。調査区の北側に4棟、南側に2棟がそれぞれ重複している。いずれも炉跡と柱穴だけの検出であり、壁は確認できず、周溝は検出されなかった。炉跡は、方形基調の石囲炉と思われるが周囲をきっちりと囲んでいるものは1基だけである。石囲内部の焼土の広がりも不整形で、厚さも薄い。柱穴は石囲炉周辺に4本あるいは6本の配置が確認された。規模は径4m～5m前後と推定されるが、形状を含めて詳細は不明である。

時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉から弥生時代前期と考えられる。

〈土坑〉

検出された土坑は2種類に分類できる。ひとつは大型の定形的な土坑である。規模・形状は開口部径90cm～180cm、底部径130cm～200cm、深さ60cm～110cmで、平面形は円形を基調とし、断面形はフラスコ状を呈する。底部は平坦で副穴や溝などの施設は伴わない。7基検出された。分布の密度はそれほど高くないが、斜面に対して同一レベル付近に並ぶように分布しているようである。埋土中から大型の深鉢形土器がまともって出土している。時期は、出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。

もうひとつは規模・形状ともまとまりのない一群で、配置にとくにまとまりはなく、調査区に散在する。時期は、出土遺物から縄文時代晩期末葉から弥生時代前期と推定されるが、性格などは不明である。

〈墓壇〉

単独で1基検出された。北東側でフラスコ状土坑と重複し、フラスコ状土坑より新しい。墓壇の規模・形状は径150cm×130cm、深さ30cmで不整な隅丸方形を呈する。扁平な亜円礫・垂角礫で構成される石組みを上部に伴う墓壇である。石組みの除去後に墓壇の底部から極少量の赤色顔料が検出された。人骨・副葬品は検出されなかったが墓壇と判断される。時期は、縄文時代晩期末葉以降と考えられる。

〈焼土遺構〉

3基検出された。いずれも不整形な焼土の広がり、焼土の厚さも薄い。周囲に住居跡の床面となる痕跡

や柱穴は確認されなかった。時期は、縄文時代晩期末葉以降と推定される。

〈土器埋設遺構〉

3基検出された。いずれも土器より少し大きいだけの穴を掘り込んで土器を埋設している。1基は壺形土器を正位に、もうひとつは深鉢形土器を横位に埋設している。後者は住居跡内に位置するが相伴関係は不明である。時期は、縄文時代晩期末葉から弥生時代前期と考えられる。

〈集石遺構〉

3基検出された。1基は長径250cm、短径80cmの溝状を呈する範囲に亜円礫が数十個まとまって検出された。北側でフラスコ状土坑と重複し、フラスコ状土坑より新しい。集石の除去後に不整な落ち込みが検出された。埋土中から縄文土器片が出土している。

もう1基は直径300cmほどの範囲で弧状に数十個の亜円礫・亜角礫がまとまって検出された。とくに石を選別した様子は窺われず、石の大きさにもばらつきがある。集石の除去後に下位から土坑類などは検出されなかった。集石の下位および周辺から縄文土器片・陶磁器片などが出土している。

時期は、出土遺物から近世以降の可能性が高い。

〈出土遺物〉

縄文時代・弥生時代の土器・土製品・石器・石製品が出土している。土器の出土量はコンテナ（大）で約15箱である。時期は縄文時代の中期前葉に属するものと、晩期～弥生時代前期に属するものとの2時期を主体とする。個々の遺構の時期の詳細は今後の整理を待たねばならないが、中期前葉に属する遺物はフラスコ状土坑から出土したものに限られることから、遺物が出土していない遺構も含めて、他の遺構は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期に属する可能性が高い。

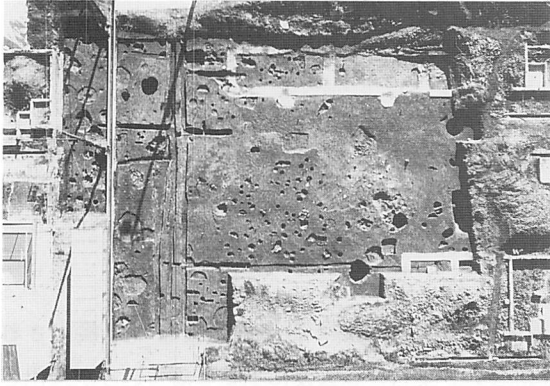
石器類はコンテナ（中）で3箱出土しており、器種は石鏃・石錐・石匙・削搔器、磨製石斧・打製石斧・環状石斧・擦石・凹石などである。その他の遺物として、獣骨片、堅果類、赤色顔料、陶磁器片などが出土している。

3.まとめ

長谷堂貝塚は過去に2度調査が行なわれている。昭和30年（1955）の早稲田大学による調査（西村正衛ほか）では、長谷堂中貝塚A地点でアサリ主体の貝層（大木9式）と遺物包含層、長谷堂貝塚A地点で縄文時代晩期（大洞A式）の仰臥屈葬の人骨、アサリ主体の貝層が発見されている。昭和46年（1971）の調査（草間俊一ほか）では、長谷堂中貝塚B地点が調査され、縄文時代中期末葉（大木10式）のアサリ主体の貝層、縄文時代後期（堀之内Ⅱ式）の敷石住居跡1棟、弥生時代中期（枅形囲式）の住居跡1棟、縄文時代晩期（大洞A・A'式）の墓壇5基などが検出されている。

今回の調査では、縄文時代中期前葉のフラスコ状土坑と晩期末葉～弥生時代前期の竪穴住居跡が確認された。このことは広範囲に広がる貝塚のなかで時期により場の使い分けがあったものと理解される。過去の調査成果と併せて考えると、縄文時代中期～晩期・弥生時代までの長期間に渡って営まれた集落跡であることがわかる。

今後の課題として、今年度の調査で検出された中期前葉のフラスコ状土坑（貯蔵穴）の広がりや該期の竪穴住居跡（居住域）の存在の確認、晩期末葉～弥生時代前期の遺構・遺物の範囲の確認が挙げられる。また過去の調査成果から該期以外の遺構・遺物の存在も当然予想されるところであり、貝層の検出と併せて今後の調査の深まりに期待したい。



遺跡全景



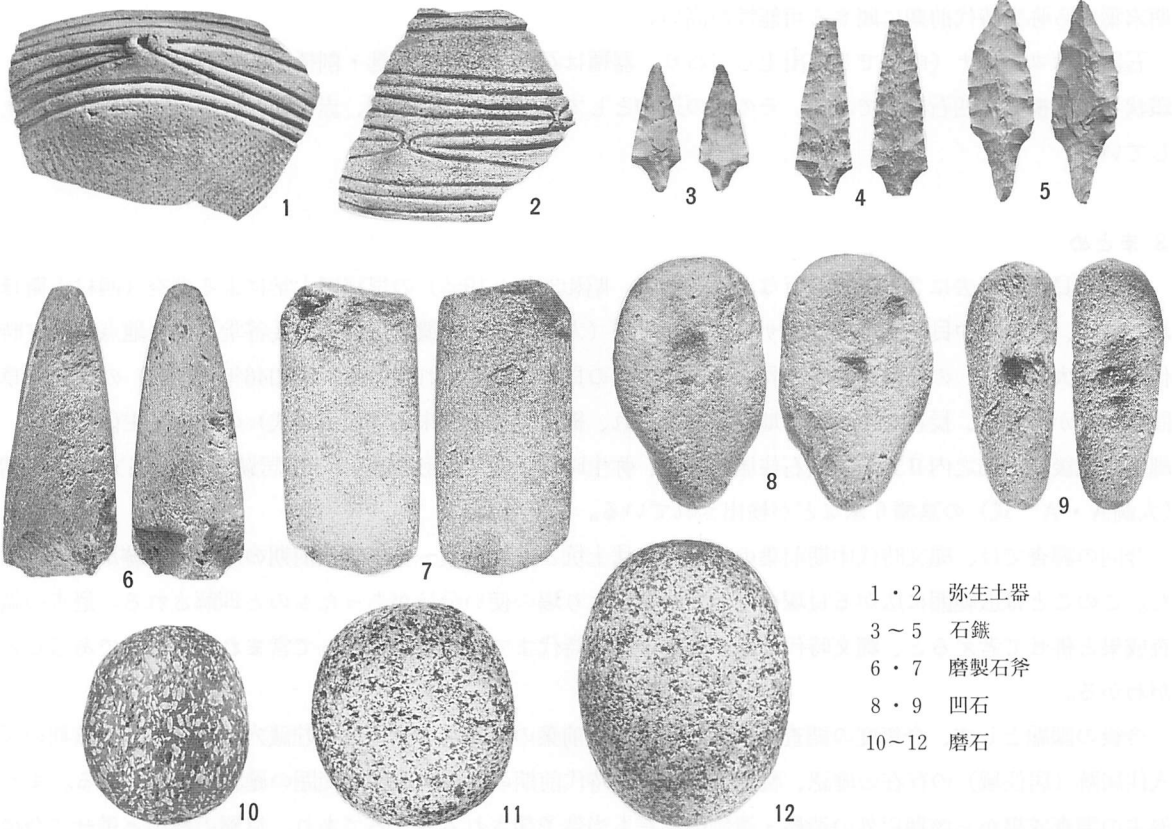
竪穴住居跡



フラスコ状土坑

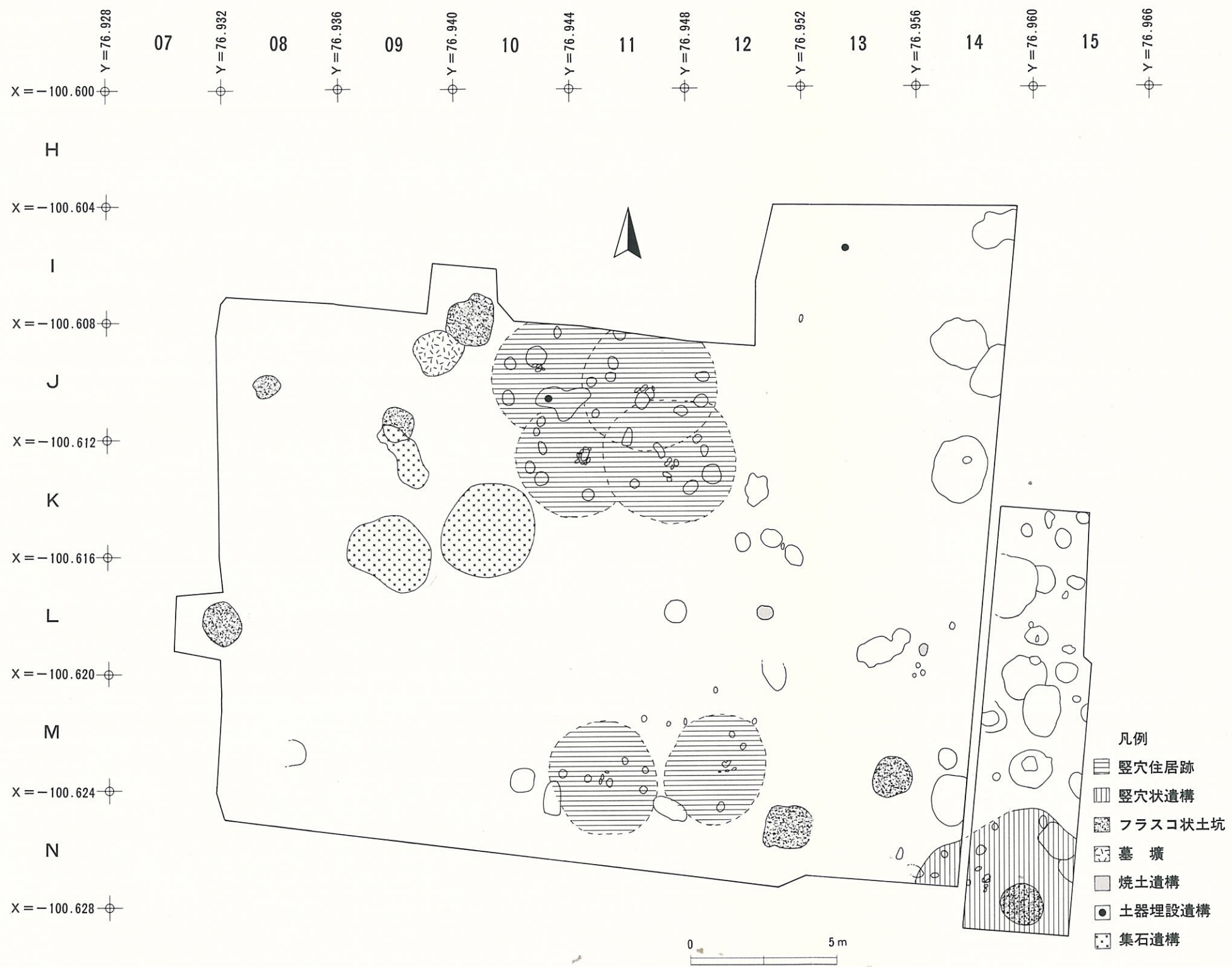


遺物出土状況



- 1・2 弥生土器
- 3～5 石鏃
- 6・7 磨製石斧
- 8・9 凹石
- 10～12 磨石

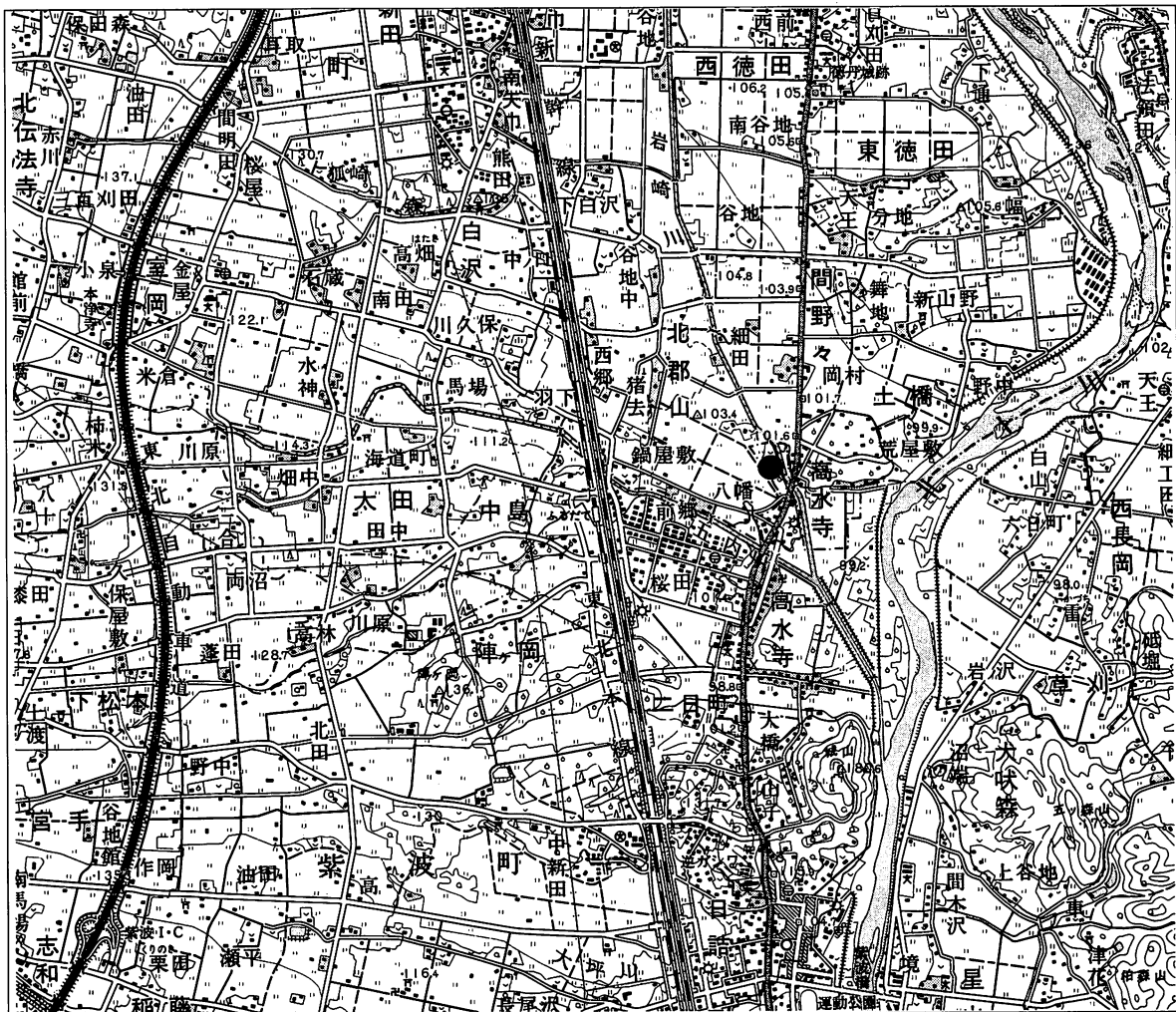
長谷堂貝塚検出遺構・出土遺物



長谷堂貝塚遺構配置図

(3) 稲村Ⅱ遺跡

所在地 紫波郡紫波町高水寺字稲村31-1ほか
 委託者 岩手県土木部盛岡土木事務所
 事業名 中小河川改修
 発掘調査期間 平成8年6月18日～10月31日
 調査対象面積 7,060㎡
 発掘調査面積 5,950㎡
 遺跡番号・略号 LE-57-1039・IMⅡ-96
 調査担当者 浜田 宏・篠根敬志・村上 拓
 協力機関 紫波町教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 日誌

1. 遺跡の立地

稲村Ⅱ遺跡は、JR東北本線古館駅の東北東約1.5km付近の国道4号線にかかる三枚橋の西側に位置している。

遺跡は、岩崎川と五内川に挟まれた場所であって、岩崎川沿いの自然堤防上に立地している。調査区内の標高は100.0～100.6mと、ほぼ平坦な地形である。調査前の状況は、畑地（りんご）および宅地で、一部は住宅移転後の荒地であった。

2. 調査の概要

今年度の調査対象面積7,060㎡のうち、現在居住している住宅の周辺等を除く5,950㎡の調査が終了した。残り1,110㎡については、次年度以降に繰り越すことになっている。

今回の調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構49基、奈良時代かそれ以前の竪穴住居跡14棟、住居状遺構4棟のほか、土坑6基、溝跡6条、焼土遺構3カ所、沢跡（旧河道）1カ所が確認された。

なお、調査区のすぐ西側では、宅地開発に伴う同じ稲村Ⅱ遺跡の発掘調査が、昨年度から紫波町教育委員会によって行われている。今年度分を含め、昨年来の紫波町教育委員会の調査でも同様の遺構が確認されており、遺跡の規模は大きく西側へと広がっているものと考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

検出された49基は、すべて溝状を呈する。規模は、長さが2.0m前後の小型のものから、3.5～4.0mの大型のものまで様々である。幅は0.6～0.7m前後が平均的で、中には1.0mを越えるものがわずかにみられる。深さは0.8～1.0mのものが多い。これらの中で、複数の陥し穴が明瞭に配列されているような状況は認められない。また、それぞれについては、形状や規模などからいくつかのグループに分類できるものと思われる。

〈竪穴住居跡〉

14棟すべてが奈良時代（8世紀代）かそれ以前の住居跡である。平面形は、方形を呈するものが10棟、長方形のものが2棟である。残りの2棟は、削平を受けているものと全体を調査できないもので不明である。この中で最大規模のものは、7.2×7.5mで壁の高さは50cmを測る。この他に、一辺が7mを越える住居跡が2棟検出されている。これらの大型住居は、4個か6個の柱穴のほか、カマド脇やコーナーに貯蔵穴を有している。ついで一辺が4～5mの住居跡は3棟、3m台のものは6棟である。3m台の小型の住居跡では、柱穴がみられないものが多い。

カマドは、13棟の住居跡で確認された。いずれも残存状況は良好である。袖部は、地山を掘り残してシルト質土を貼り付けて構築しているものがほとんどである。また、さらに土師器の甕を両袖に埋め込んでいるものが3棟にみられる。カマドが設置される方向は、北向きと北西向きの2方向であるが、それが時期差を示すものかどうかは今後検討していきたい。

また、特徴のある住居跡として、床面の中央部に掘りごたつ状の掘り込みを有するものが2棟検出されている。埋土の状況からは、建て替え拡張・縮小および他の遺構との重複の痕跡は認められなかった。

〈住居状遺構〉

小型の竪穴住居ほどの規模で、カマドではなく炉をもつものを住居状遺構とした。4棟検出されたが、うち3棟の平面形は隅丸長方形である。残りの1棟は、削平により不明である。いずれも床面に1ないし2カ所の地床炉様の焼土が形成されている。火の使用を伴う何らかの作業場であった可能性がある。時期は、住居跡との重複関係から住居跡より新しいが、出土遺物から住居跡とほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

〈土坑〉

検出された6基のうち、古代に属するものは3基で、それ以外は時期不明の土坑1基、井戸状土坑1基、直径2.8mの円形の大型土坑1基である。古代の土坑のうち、1基は平面形が長方形で、人為的に埋め戻された形跡があることから、墓墳の可能性はある。

〈溝跡〉

6条検出されているが、確実に古代に属するものは1条のみである。幅20～30cm、深さ10cmで、調査区北部を斜めに横断するかたちで検出された。この他に、円形周溝か方形周溝になるものと思われる溝跡が見つかるが、今年度は全体のおよそ4分の1程度しか調査できなかった。断面形はV字状を呈し、上幅は70～90cm、下幅は20cm前後で、深さは65～75cmである。時期は不明であるが、前述の溝跡と重複関係にあって、それよりは新しい遺構であることが確認された。

〈焼土遺構〉

3基検出されているうち、現地性のもは1基である。これは、直径約30cm程度で厚さは5cm、焼けのしっかりとした焼土である。他の2基は、ともに時期不明である。

〈沢跡（旧河道）〉

調査区の中央部北側に、南流する岩崎川に向かって流れていたと思われる沢跡が確認された。幅は10～15mで、深さは西側の浅い部分で1.0～1.2m、東側の最深部で2.8mである。上位から中位にかけては、土師器の坏・甕の破片や土製紡錘車などが出土した。それより下位は泥炭層となっており、東に向かうほど層が厚くなっていた。ここからは、流木や腐りきらない木の葉、トチ・クリなどの堅果類などとともに、縄文時代晩期の土器片がわずかながら出土した。また、直径70cm、長さ4mの広葉樹と思われる木もこの層から出土した。この木の根元からは、縄文時代晩期中葉の鉢形土器も見つかっており、木自体も縄文時代のものであることが明らかとなった。なお、木製品や骨角器などは出土していない。

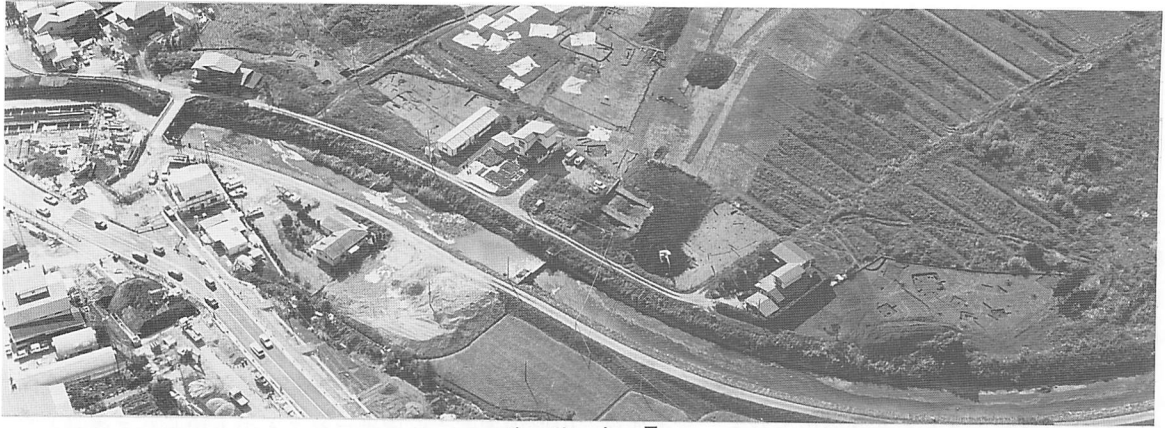
〈出土遺物〉

土器は、ロクロを使用していない土師器の坏・甕・壺が大コンテナ12箱分出土している。ロクロ使用の土師器および須恵器の破片は、ともに数点しかみられない。そのほとんどは、住居跡や住居状遺構、沢跡から出土した。石器は、住居跡から出土した砥石がわずかにみられる程度である。その他には、釘・刀子・鎌などの鉄製品や土製紡錘車、土製の勾玉・土玉などの土製品が出土している。また、土器や土製品づくりの材料と思われる粘土塊が4棟の住居跡から見つかっている。

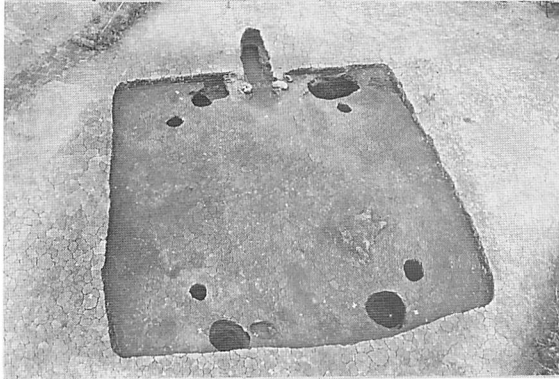
3.まとめ

今回の発掘調査によって、本遺跡は縄文時代には動物の狩り場として、奈良時代ごろには集落として、人々の生活の場となっていたことが明らかとなった。紫波町内の遺跡には、縄文時代の狩り場跡と古代の集落跡という複合遺跡（例えば下川原Ⅱ遺跡や西田東遺跡など）が多く存在するが、この稲村Ⅱ遺跡も同様の傾向を示している。特に、該期の集落としては、かなりの規模であったことが紫波町教育委員会の調査成果からも窺える。すべての住居跡が同時に存在したかなど、考察すべき点も多い。

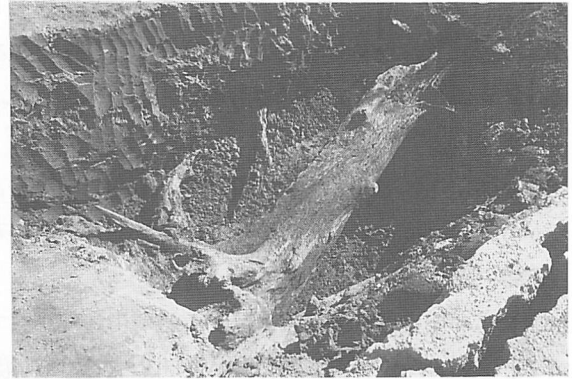
本遺跡の調査は、来年度以降も継続される予定であり、また紫波町教育委員会分の調査も継続されることから、さらに遺跡の全容が明らかになっていくものと考えられる。



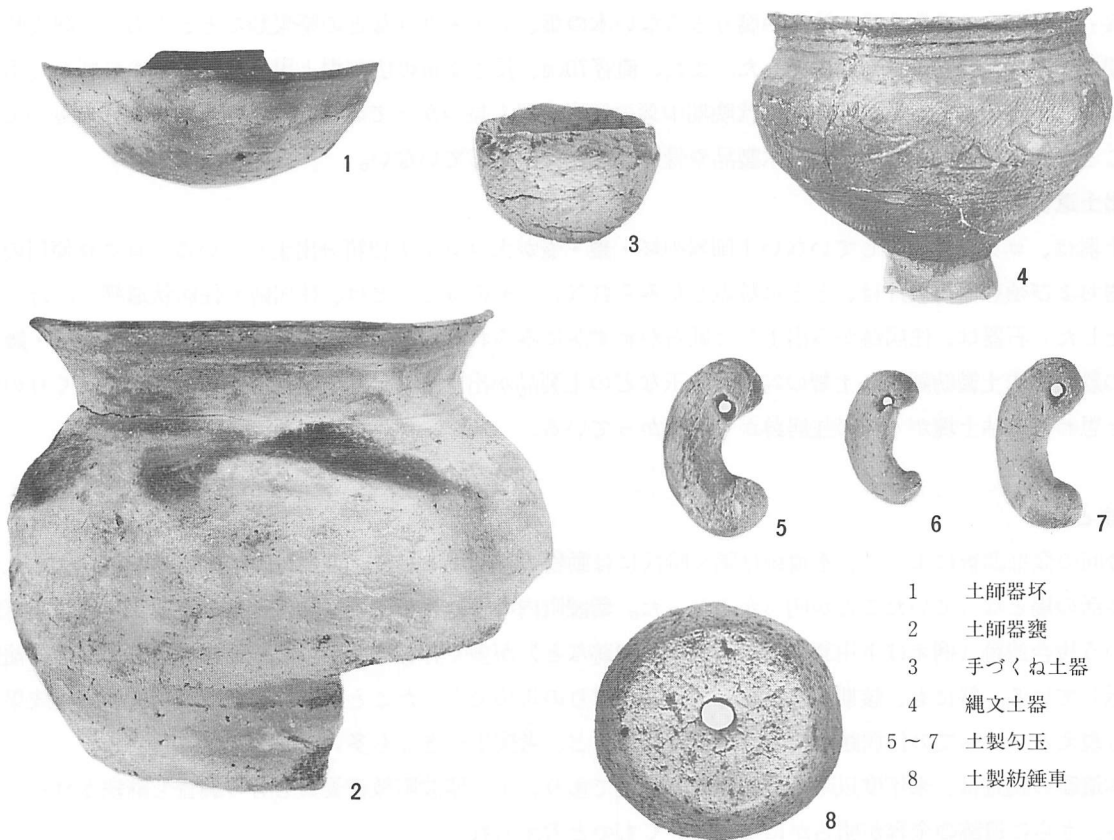
遺跡全景



奈良時代の住居跡

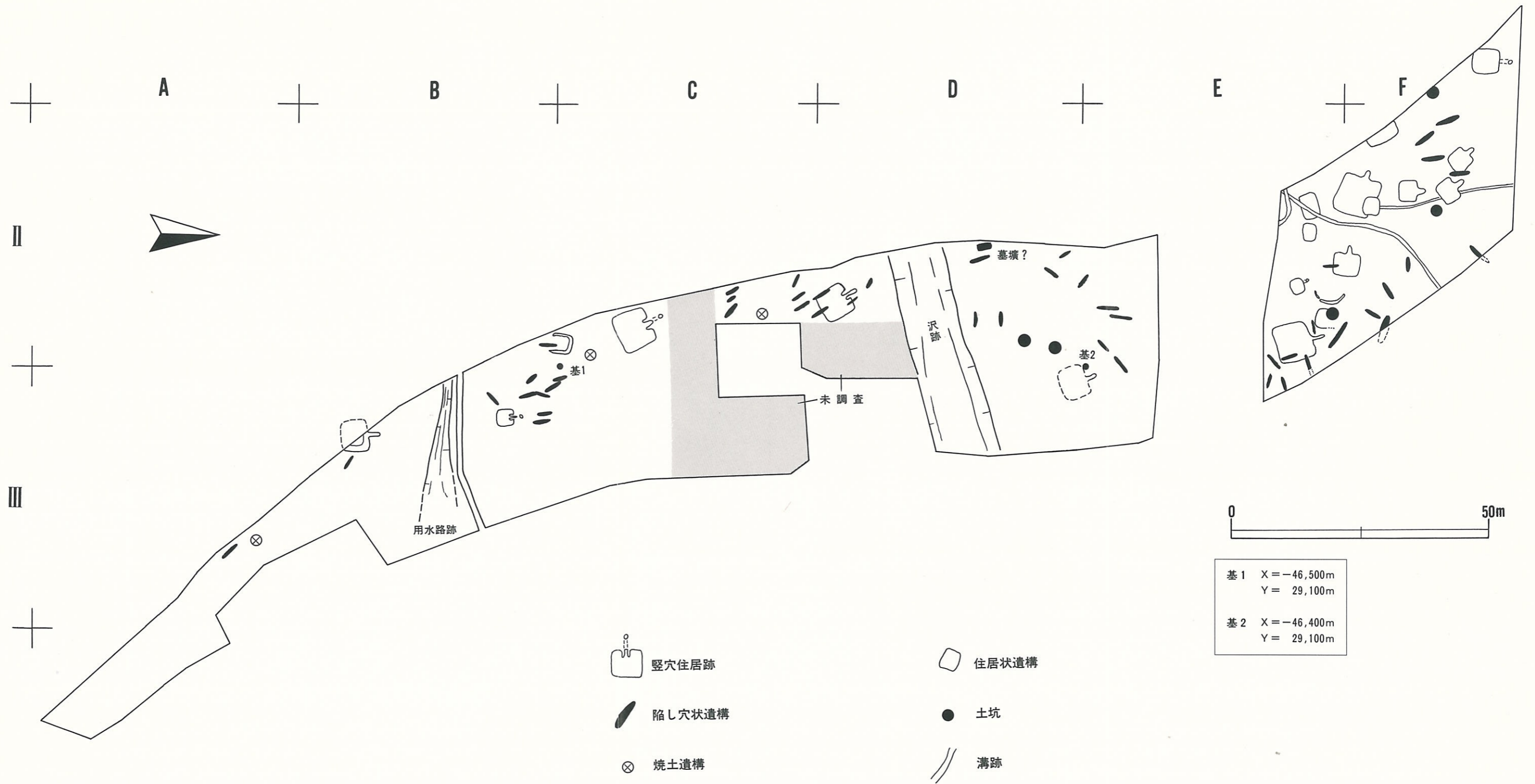


沢跡出土の雑木



- 1 土師器坏
- 2 土師器甕
- 3 手づくね土器
- 4 縄文土器
- 5~7 土製勾玉
- 8 土製紡錘車

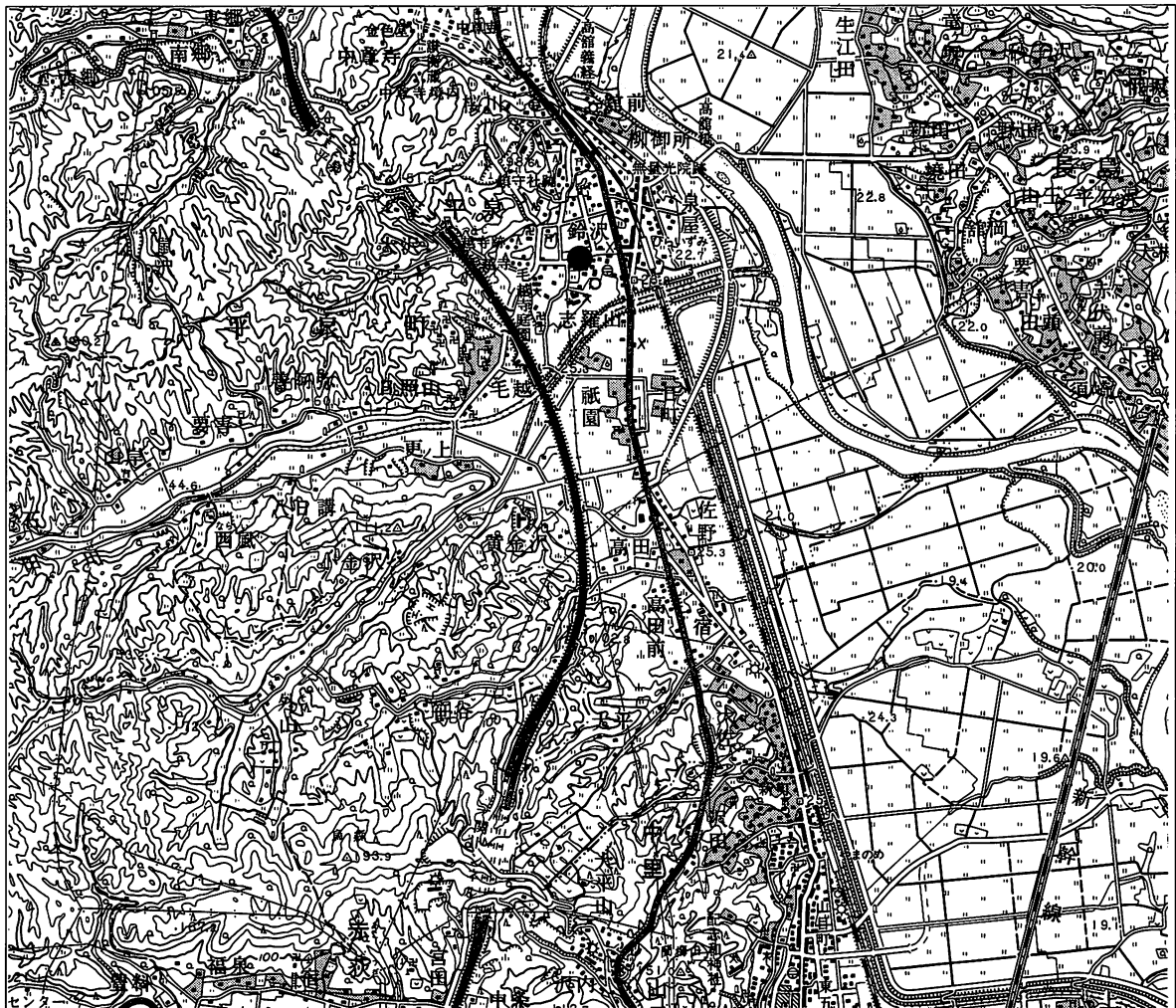
稲村II遺跡検出遺構・出土遺物



稲村II遺跡遺構配置図

(4) 志羅山遺跡第56次調査

所在地	西磐井郡平泉町字志羅山115-15ほか
委託者	岩手県土木部一関土木事務所
事業名	都市計画街路
発掘調査期間	平成8年4月8日～9月17日
調査対象面積	2,000㎡
発掘調査面積	2,000㎡
遺跡番号・略号	NE76-1088・SY-96-56
調査担当者	星 雅之・菊地榮壽・山下浩幸
協力機関	平泉町教育委員会・平泉町文化財センター



遺跡位置図

1 : 50,000 一関

1. 遺跡の立地

志羅山遺跡は、JR東日本鉄道東北本線平泉駅の西側に位置し、平泉町の市街地内に広範囲に広がる。近隣の遺跡には、西側に特別史跡毛越寺跡・観自在王院跡、北側に花立遺跡と日吉・白山社と呼ばれる特別史跡・毛越寺跡の飛び地指定地がある。

今回の調査は、主要地方道平泉・巖美溪線沿いを中心に国道4号沿いの一部分を、総全長約500m、幅3～4mで行った。標高は25～32m程で、西から東に緩く傾斜する。周辺には町役場や郵便局、銀行、農協等の行政・金融の公共的施設や各種商店が集中し、また近年は住宅が増加している。

2. 遺跡の概要

志羅山遺跡は、平泉町文化財センターと当埋蔵文化財センターによって60次を越える緊急発掘調査が行われており、今回の調査は昨年度実施した第47次の継続調査である。

検出された遺構は、掘立柱建物跡8棟、溝跡60条、塀跡3条、柱穴列2条、土坑47基、柱穴状小穴620基、井戸跡9基、カマド状遺構3基、木樋1基である。また残存状況は良好ではないが、国道4号との合流点付近からは12世紀～中世と思われる自然堆積層（遺物包含層）も確認された。

〈掘立柱建物跡〉

柱穴は620基検出されたが、調査区の幅が狭いことから建物の復元されたものは8棟のみである。12世紀に属すると思われる掘立柱建物跡は、28区で2棟検出されている。南北2間のものと、西側に庇がつく掘立柱建物跡の一部を検出している。庇の柱穴間隔は南北方向で約2.3mと等間隔である。母屋の部分は東側調査区外に伸びていると考えられる。

〈井戸跡〉

12世紀に属するものは、51区でトイレ状土坑と重複関係で検出された井戸跡で、上幅約3.1m、底部約0.6m、深さは現地表面から約5mで、断面形はロート状を呈する。埋土上部からかわらけ片が多数出土し、下部から木製品（ひしゃくの未製品）が出土している。

28区井戸跡2号は、井戸跡3号と重複関係で検出している。上幅約1.8m、中幅約1.1m、底部約0.8mで断面形はロート状を呈し、深さは約2.4mである。底部面で井戸枠が四方にあることを確認している。

〈土坑〉

土坑は47基検出している。特にかかわらけが多量に出土した土坑を28区調査南側から2基検出している。何れも南北方向に長軸を持つ。28区土坑1号は、平面形は隅丸長方形で、規模は長軸方向で約3.8m、短軸方向で約1.5m、深さ20～25cmである。検出面付近から多量のかかわらけ片を確認し、埋土上部、中位でかわらけの完形品が出土している。28区土坑2号は、土坑1号の東側に位置し、平面形は楕円形で、規模は長軸方向で約2.1m、短軸方向で1.6m、深さ約25～30cmである。1号同様埋土中からはかわらけが出土している。出土しているかわらけは、ほとんどがてづくねであることから12世紀の遺構と考えられる。

なお分析の結果を待たなければ断定はできないが、トイレと思われる土坑が4基検出されている。何れも有機質に富む埋土で、食物の種と思われるものが含まれる。

〈溝跡〉

溝跡は12世紀～近現代のものまで合わせて58条検出している。その中で特出されるのが、9区と43区にまたがって検出された溝跡で、町割的な性格の溝と思われる。9区溝跡1号は、上幅約2.8～3.1m、底部約0.5～0.8m、深さ約1.7m、断面形は逆台形状を呈する。溝跡1号と切り合い関係にある溝跡2号は、上幅約0.8

m、底部約0.4～0.6m、深さ約1.7mである。溝跡1号と溝跡2号の新旧関係は埋土土層の観察から溝跡1号が古いことが確認された。何れも中近世の遺物が出土している。43区からは3条の溝跡が検出された。9区で検出されたものと対応関係にあるものである。43区溝跡1号は、上幅約1.5m、底部約0.1～0.2m、深さ約1.8mである。埋土中からはかわらけ片、木製品（下駄）、墓石が出土している。溝跡2号は、上幅約0.5m、底部約0.4m、深さ約1.7mである。埋土中からはかわらけ片、陶磁器片、漆器、永楽通寶が出土している。溝跡3号は、上幅2.5～3m、底部約1.2m、深さ約1.9m、長さ約1.8m、断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは永楽通寶が出土している。43区で検出された溝跡1号、2号、3号の新旧関係は、埋土土層の観察から溝跡2号が一番新しいことは確認できるが、溝跡1号と3号の新旧関係は不明である。廃絶されたのは近世の可能性が高いことが出土遺物から推測できるが、構築時期は不明である。対応関係も含めて今後の検討課題としたい。

〈堀跡〉

9区1条、52区1条、53区1条、計3条を検出している。共伴遺物が少なく、時期の断定が難しいが、埋土の特徴等から12世紀の遺構と思われるものが多い。9区で検出されたものは、検出面から厚さ3～14cm、幅10～20cm程のグライ化した板痕跡が直線状に並ぶことが確認された。完掘時（布掘）は、上幅約0.4～0.5m、底部約0.2m、深さ0.4m、断面形はほぼV字状を呈する。遺構の時期は断定できない。

〈カマド状遺構〉

カマド状遺構は3基検出されている。何れも残存状態が悪く、平面形は明瞭ではない。中～近世の遺構と推定される。

〈木樋〉

37区で検出された。東西方向に伸び、上幅約0.6m、深さ約0.2～0.4m、長さ約2.1mである。土層観察等から近現代の遺構と考えられる。

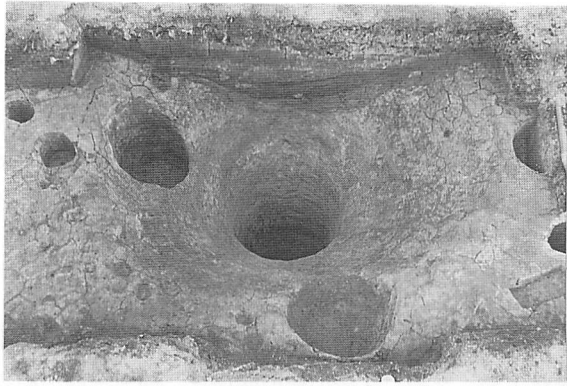
〈出土遺物〉

12世紀から近現代のものまで幅広く出土している。最も多量に出土しているかわらけは、てづくね、ロクロ成形のものが出土しており、圧倒的にてづくねかわらけが多い。中国産陶磁器は白磁の小片が数十点、国産陶器では常滑、渥美産の壺、甕、瀬戸・美濃産の花瓶等が出土している。木製品はひしゃく、下駄、チェウ木、井戸杵、部材等が出土している。その他としては墓石？、銅銭、漆器、茶瓶、種子類等がある。

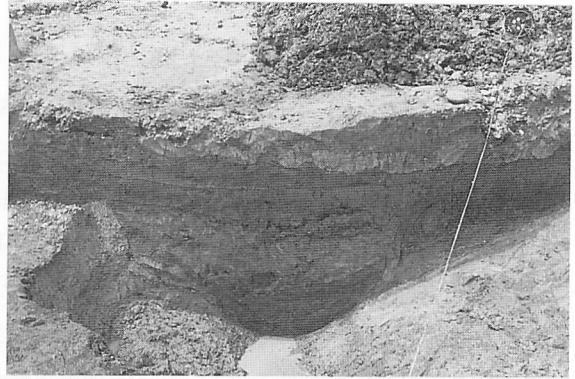
3. まとめ

今回の調査は、志羅山遺跡を東西に約350m、南北に80mにわたる広い範囲を行った。47次の調査成果も踏まえ、かねてから示唆されてきた建物や溝の方向が、白山神社参道の方向（東に10～12度傾いた方向）と近似することがより明確となった。井戸跡も多数検出されたことで、12世紀と現代のものと構造の違いや井戸杵の接ぎ方等の建築史等を考える上でも貴重な資料となった。また12世紀以降の遺構も多数検出され、上記した参道の方向を軸とする町割が少なくとも近代まで存続した傾向が窺え、現代までの町割や土地利用の様相の一端が明らかになった。

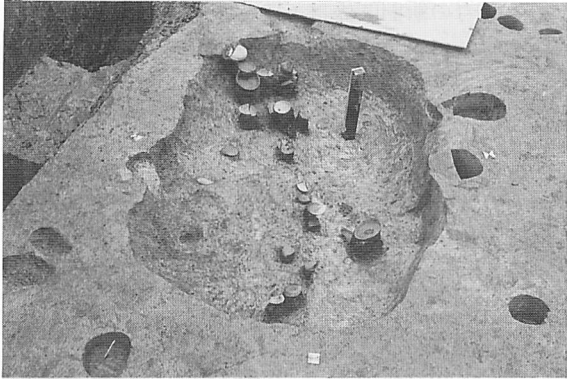
今後の整理で、平泉町埋蔵文化財センターの行った調査成果も踏まえ検討を重ねることで、より多くの建物跡の復元を試みることで奥州藤原氏の時代の「都市平泉」の構造を究明する貴重な資料になると考える。



51区 井戸跡・土坑(トイレ?)



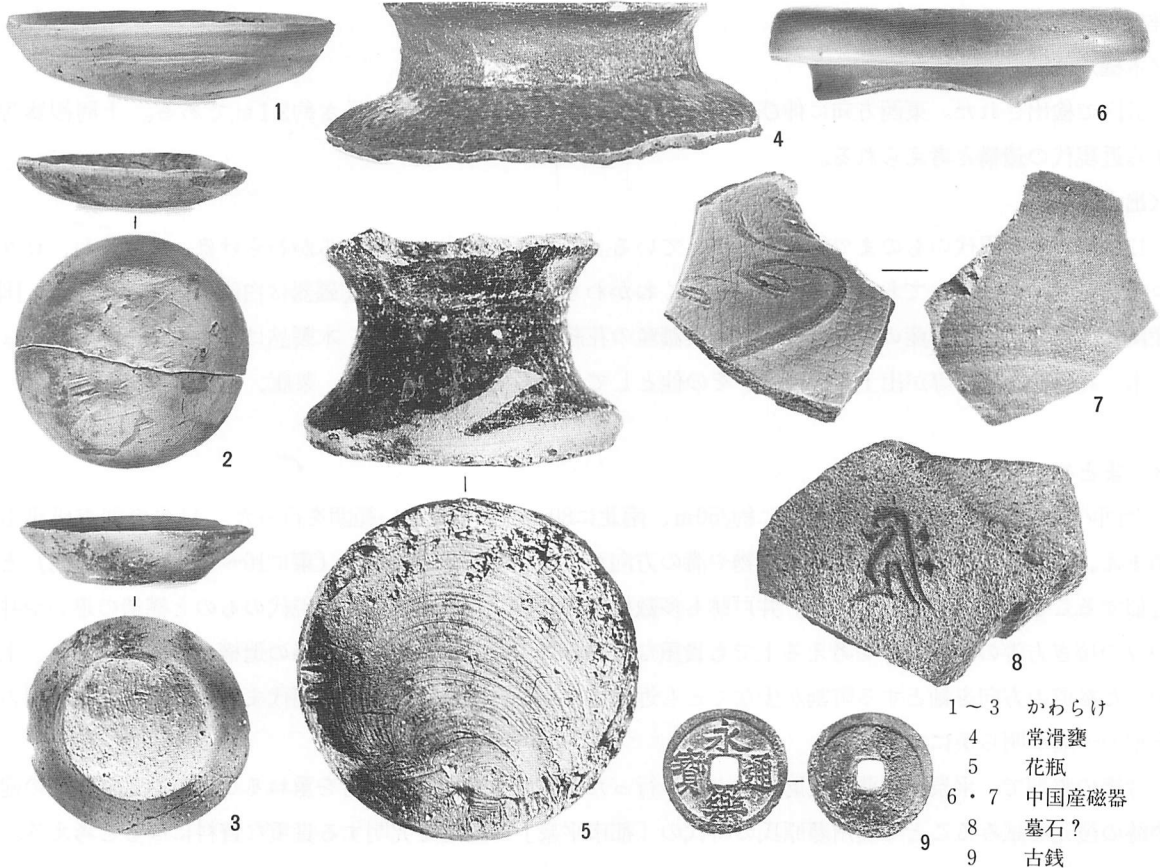
28区 溝跡



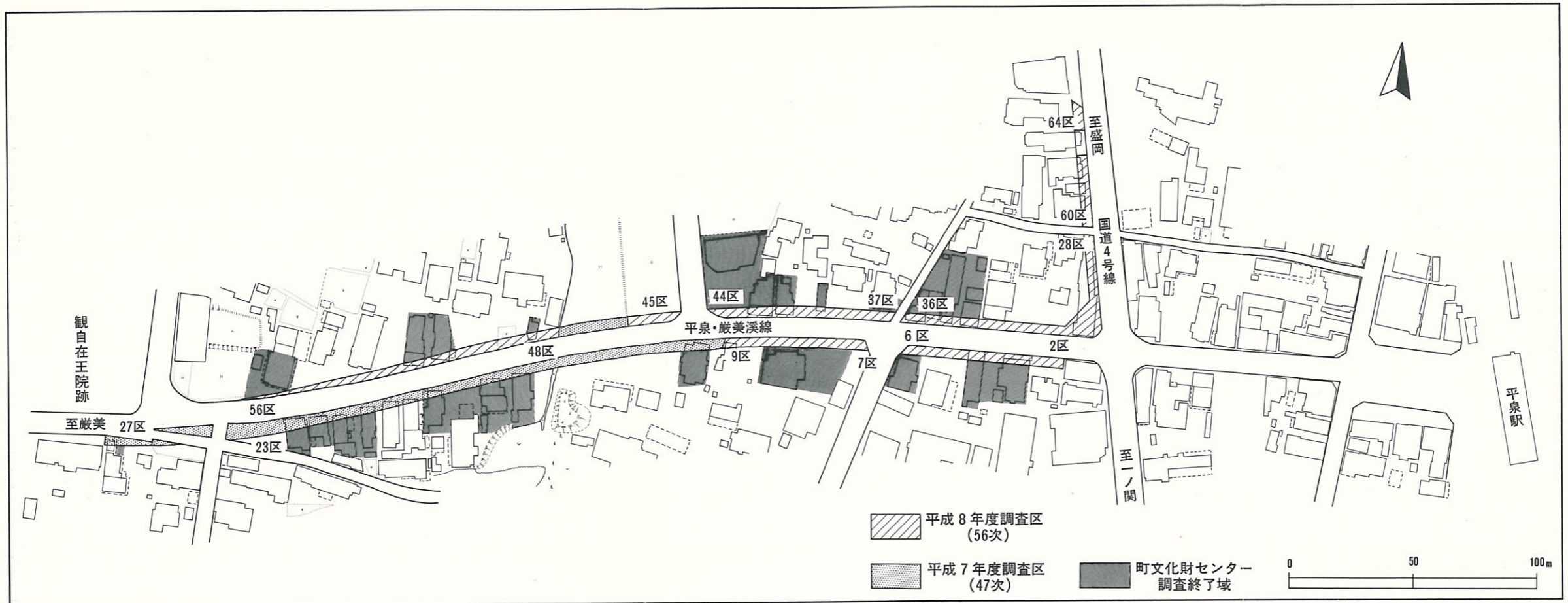
28区 土坑(かわらけ出土状況)



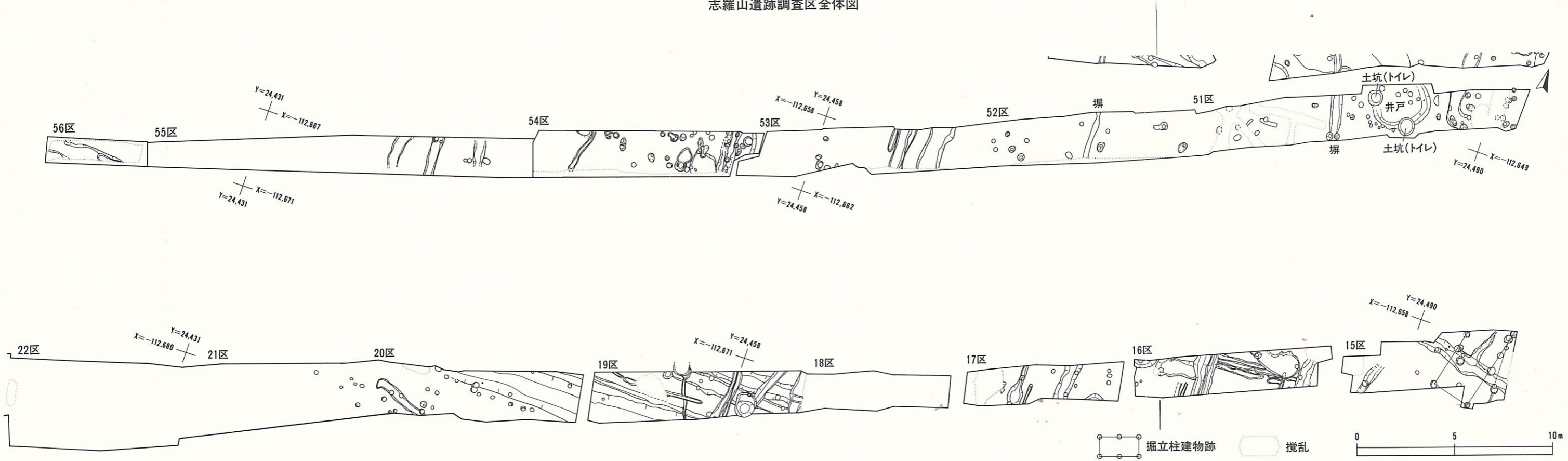
28区 井戸跡(井戸枠検出状況)



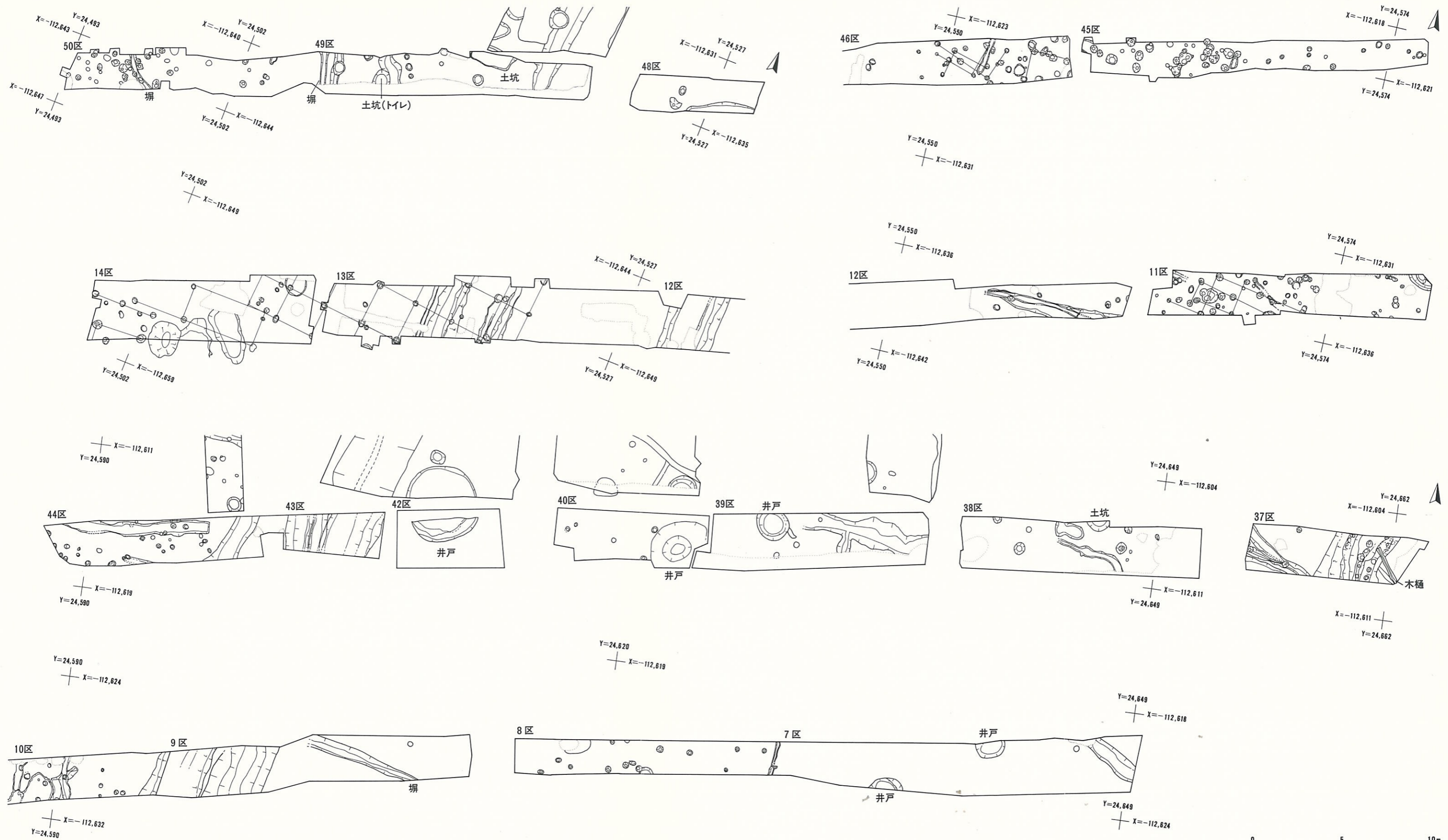
志羅山遺跡第56次調査検出遺構・出土遺物



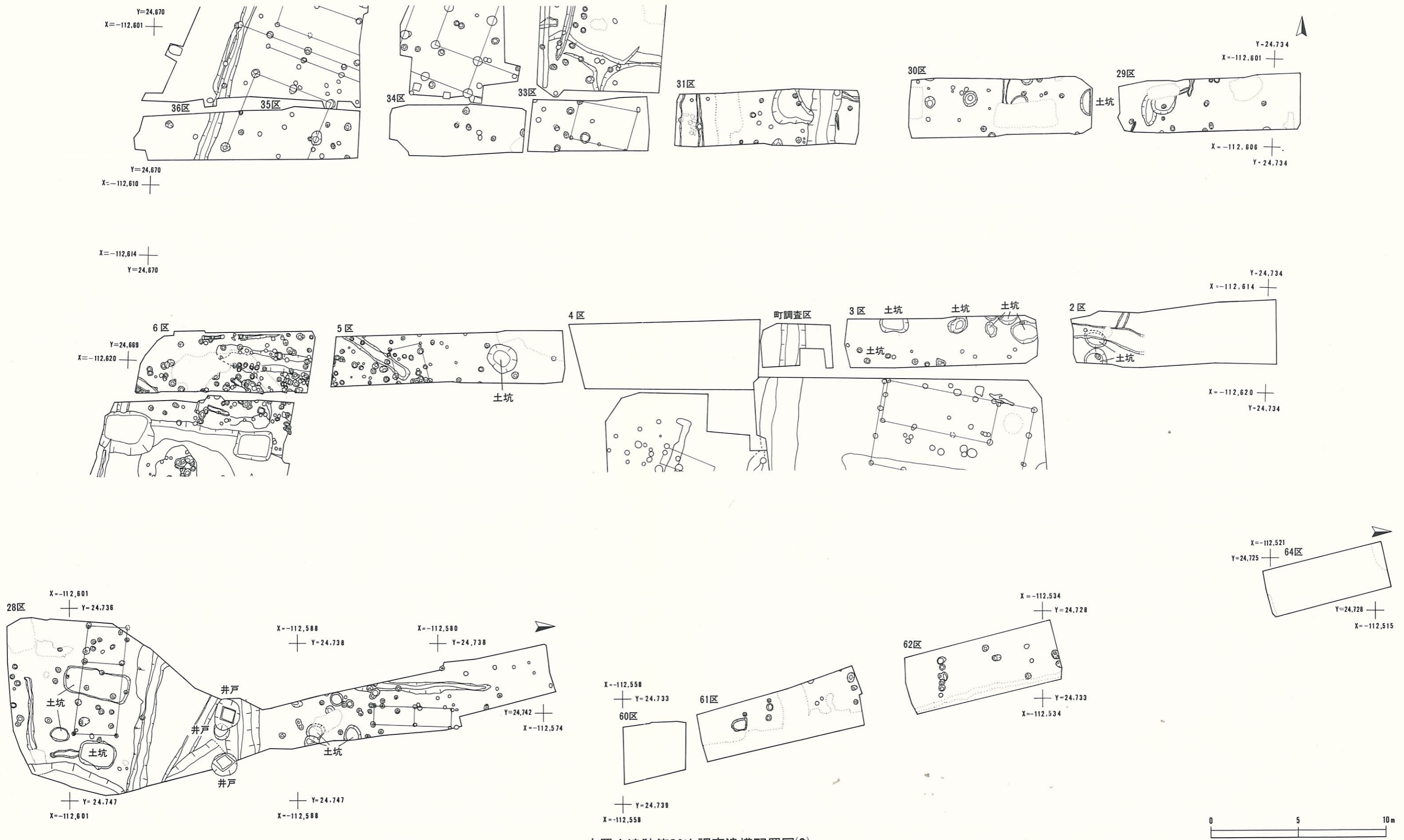
志羅山遺跡調査区全体図



志羅山遺跡第56次調査遺構配置図(1)



志羅山遺跡第56次調査遺構配置図(2)



志羅山遺跡第56次調査遺構配置図(3)

(5) 下 館 銅 屋 遺 跡

所在地	西磐井郡花泉町字下館77-5ほか
依頼者	岩手県土木部一関土木事務所
事業名	県道花泉金成線整備事業
発掘調査期間	平成8年4月9日～10月31日
調査対象面積	3,713㎡
発掘調査面積	3,713㎡
遺跡番号・略号	OE27-2111・SDD-96
調査担当者	松本建速・宮本節子・下田隆衛・山下浩幸
協力機関	花泉町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一関・若柳

1. 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線清水原駅の南南東約750m、有馬川と金流川に挟まれた河岸段丘に立地する。遺跡の標高は37～40mで、金流川との比高差は約15mである。遺跡現況は、畑地、水田および宅地である。調査開始前の調査区は畑地および水田であったが、調査区南に隣接して近世から明治時代にかけての墓が残された部分が2箇所ある。調査区の北東側と南側は沖積地で、現在は水田として利用されている。遺跡西側は小高い丘陵に続き、その丘陵東端は清水城跡と呼ばれている。金流川を挟んで遺跡の約400m南の低位段丘に、ハナイズミモリウシが出土したことで知られる、後期旧石器時代の花泉遺跡がある。

2. 調査の概要

調査区は地形により東部と西部に分けられる。標高38m台のほぼ平坦な東部、標高38～40mで東から西に向かってしだいに高まる西部である。東部と西部は遺構の出土状況も異なる。東部は縄文時代中期末頃の住居跡が多数造られている。西部には縄文時代の遺構は少なく、中世末頃と推定される遺構が集中する。

検出された遺構は、縄文時代中期中葉以前の陥し穴12基、縄文時代中期末の住居跡40棟、縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての各種土坑（いくつかは墓の可能性もある）637基、縄文時代中期埋設土器28基、縄文時代中期の配石遺構2基、平安時代前期（9世紀中葉から10世紀中葉頃）の住居跡16棟、中世末頃の掘立柱建物跡11棟以上、中世末頃の井戸跡4基、中世末頃の井戸状遺構2基、中世末頃の各種土坑15基（铸件に関連すると推測される遺構破片や鋳型が廃棄されていた穴も含まれる）、中世末頃の溝跡12条である。

〈縄文時代中期中葉以前の落陥し穴〉

12基検出された。規模と形態から3つに分類できる。幅約100cm、長さ約150cm、深さ約100cmのもの（平面形は楕円形で底面中央に2本の逆茂木状の有機物が埋められていたと推測できる穴がある）が4基、幅が20～30cm、長さ約200cm、深さ約100cmのもの（平面形は隅丸長方形）が6基、幅70～100cm、深さ約150cmのもの（平面形は隅丸長方形）が2基である。最後の2基は陥し穴ではない可能性もある。最後の2基以外の埋土は自然堆積であり、人工遺物が含まれないものが多い。最後の2基も埋土の下半分は自然堆積だが、上部には人工遺物を多く含む層があり、それには人為的に堆積された層も含まれる。また、下半部の自然堆積層中にも人工遺物はいくらか入っている。以上のことから、遺物の含まれない自然堆積埋土の前者10基は、その周囲に人工遺物が散乱していなかった頃に廃絶された遺構であると推測した。また、それらの遺構の埋土がすべて自然堆積であることから、陥し穴を仕掛けていた頃は、そのすぐ近隣に住居跡など、人が頻繁に歩き回るような環境はなかったと推測できる。

〈縄文時代中期後葉から末葉の住居跡〉

40棟検出された。直径約5～8mで、平面形はほぼ円形である。すべて竪穴式住居と考えられるが、掘り込まれた土壁は、平安時代の住居構築や後の時代の耕作により破壊されているものが多く、検出面から床面までの深さは0～約20cmである。すべての住居跡の炉には土器が利用されていた。それらの土器型式から、住居跡はすべて縄文時代中期後葉（大木9式）から縄文時代中期末（大木10式）のものとして把握できた。大木10b式の土器を炉に持つ家は、同一敷地で4～5回建替がおこなわれている例が複数あった。

〈縄文時代中期中葉から後期初頭の土坑〉

縄文時代中期中葉（大木8b式）から縄文時代後期初頭（門前式）の土坑が637基検出された。表土面からの深さが約50cm以上で、直径が約60～170cmの土坑で、人為的に埋められたものが主体である。

〈縄文時代中期の埋設土器〉

28基検出された。この中には縄文の地文だけが施されている土器の底に近い部分しか残っていないものもあり、時期が細かく把握できなかったものもある。土器型式が把握できたのは、縄文時代中期中葉（大木8b式）から縄文時代中期後葉（大木10a式）のものである。

〈平安時代の住居跡〉

16棟検出された。直径約4～5mのほぼ正方形で、壁は東西南北方向である。カマドはすべての住居で破壊されていたが、カマド火床面や焼土ブロックあるいは炭化物の集中部の位置によって、ほとんどのものは東壁中央にあったと推測された。すべて竪穴式住居と考えられるが、掘り込まれた土壁は、後の時代の耕作により非常に浅くなっており、検出面から床面までの深さは約5～30cmである。住居に伴う土坑や、破壊されたカマドに埋められた埋土に含まれる土師器から、9世紀中葉頃から10世紀中葉頃の住居と判断した。

〈中世末頃の掘立柱建物跡〉

11棟以上検出された。出土した柱穴の数から、更に多くの建物が建っていたと推測できる。柱間寸法は約180～210cm（約6～約7尺）である。3本の柱穴底面近くから、大定通寶1点、天禧通寶2点が出土した。

〈中世末頃の井戸跡〉

4基検出された。出土遺物から時期を決定できる可能性があるのは2基だけだが、他の2基も周辺遺構との配置関係や埋土状況から、中世末頃に使用され、埋められたと推測した。1基のほぼ底面からは、永楽通寶とウメの核、ヨシのような植物茎が出土した。井戸鎮め儀礼の一端である可能性がある。永楽通寶が流通していた時代にそれは埋められたと仮定すれば、その時期は中世末頃と推定できる。

〈中世末期頃の土坑〉

中世末期頃の掘立柱建物跡に付随すると推測できる土坑がいくつかある。その中に、鋳型や鋳物をした時の炉と考えられるものの破片が多量に廃棄された土坑が1基あった。

〈出土遺物〉

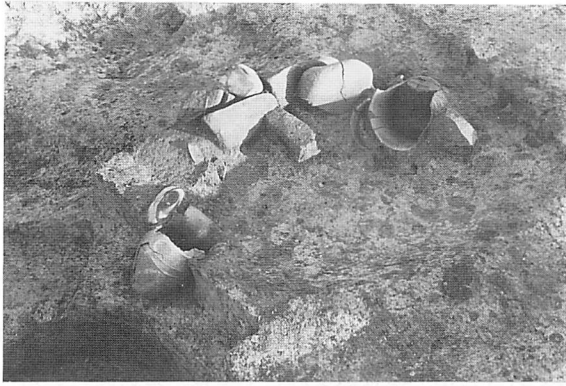
出土遺物の一部しか水洗が終了していないため、総遺物点数は把握できていない。概数を述べる。

土器：140箱（1箱約20kg収納）、縄文中期中葉（大木8b式）～後期初頭（門前式）、平安時代（9世紀中葉～10世紀中頃）土師器・須恵器を含む。大木10式が主体をなす。陶器・磁器：数点（中世末頃の明代磁器碗などを含む）。古銭：大定通寶1点、天禧通寶2点、永楽通寶1点。石器：15箱（使用された礫も含む）後期旧石器時代的剥片を数点含むが、縄文時代中期剥片石器が主体である。石鏃1235点、石錐68点、石匙7点、磨製石斧20点など（以上の石器数は野外調査中に識別できたものだけの数である）。焼けた動物骨（縄文時代中期）：多数。鋳型（中世末頃）：数点。鋳物にかかわると推測される炉破片15箱（中世末頃）。

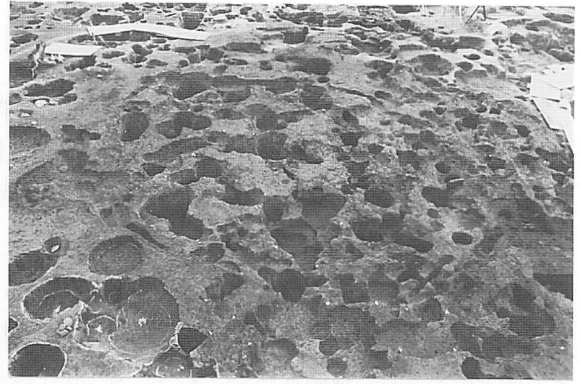
石鏃の約65%は黒曜石製であり、径4cm以下の黒曜石原石も多数出土した。遺跡近くの滝沢層という礫層にそのくらいの大きさの黒曜石転石が含まれている。黒曜石製石鏃が多い理由と関係があると推測できる。

3. まとめ

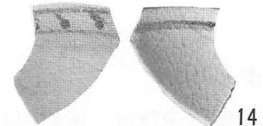
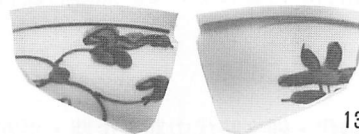
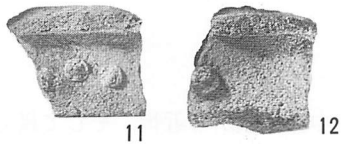
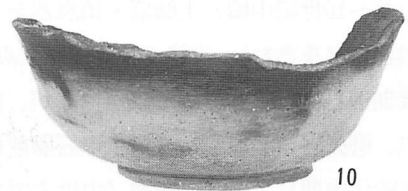
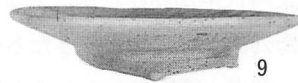
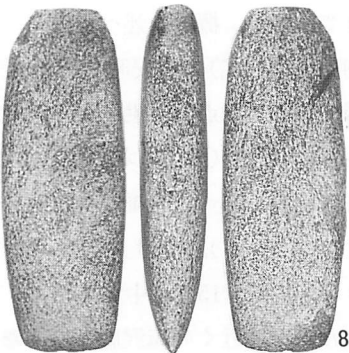
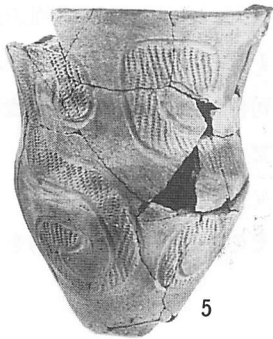
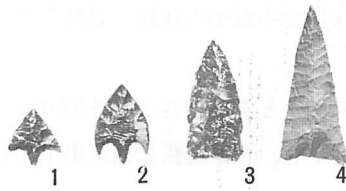
下館銅屋遺跡は、後期旧石器時代・縄文時代中期・後期・平安時代・中世末頃から近世、そして最近までの人々の生活の跡を残した遺跡である。旧石器時代の遺物包含層は調査時点ですでに無くなっており、縄文時代や平安時代の遺構内や表土から遺物がいくつか採集できただけである。縄文時代中期末には住居が多数建ち、多くの人々が生活していたが、後期初頭門前式期を最後に一旦人々はこの地を去る。再び人々がこの地を生活の根拠地とするのは平安時代前期である。その後しばらく人々の生活の跡は途絶えるが、中世に再び人々が住み、鋳型を用いて鉄製品も製作した。その後遺跡は最近まで畑や水田として利用されていた。



縄文時代住居跡炉検出状況

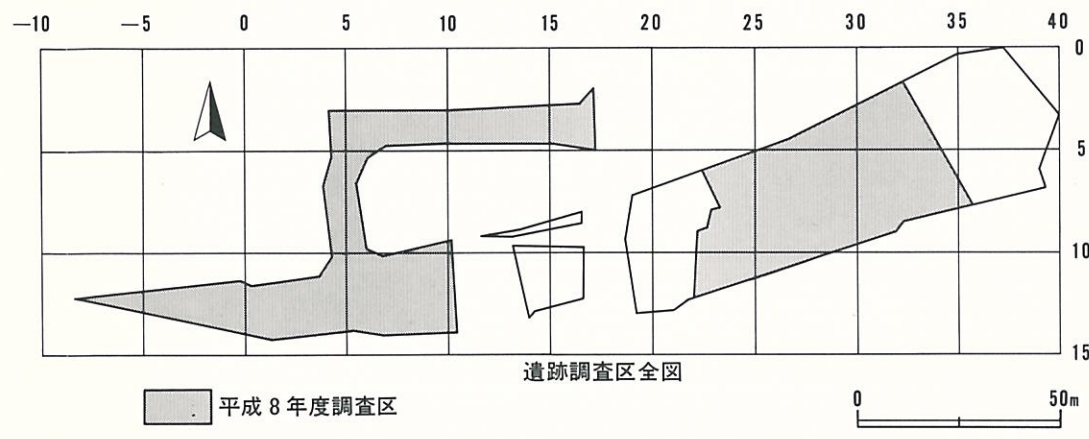
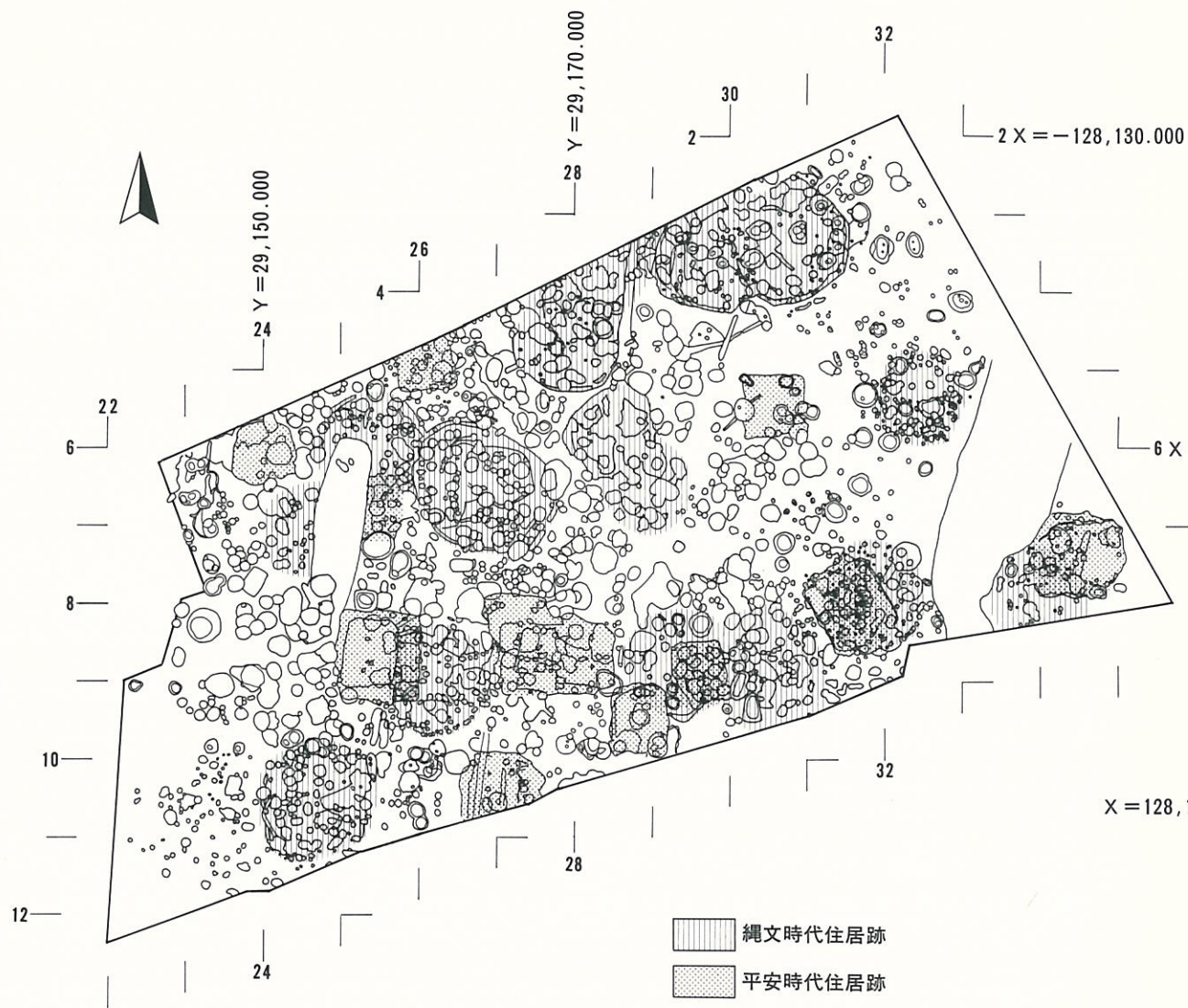


縄文時代住居跡検出状況



- 1 ~ 4 石鏃 8 磨製石斧 11・12 鋳型 14 明代陶器
 5 ~ 7 縄文土器 9・10 平安時代土師器 13 明代磁器

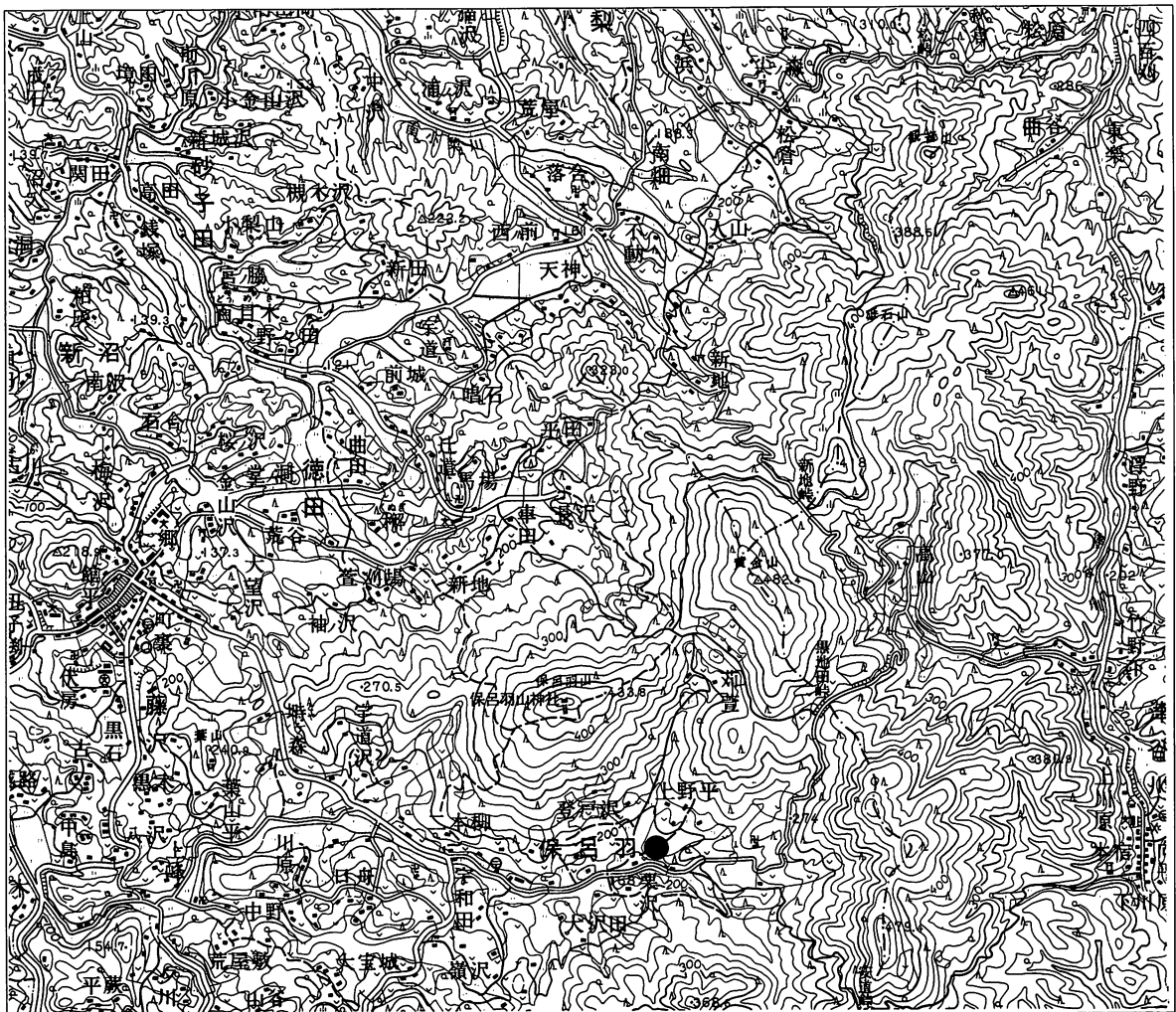
下館銅屋遺跡検出遺構・出土遺物



下館銅屋遺跡遺構配置図

(6) ^{うわ}上 ^の野 ^{だい}平 ^ら遺 跡

所在地 東磐井郡藤沢町保呂羽字上野平33-1ほか
委託者 岩手県土木部千厩土木事務所
事業名 緊急地方道路整備事業（藤沢・津谷川線）
発掘調査期間 平成8年4月9日～6月5日
調査対象面積 1,283㎡
発掘調査面積 472㎡
遺跡番号・略号 OF22-2019・UNT-96
調査担当者 阿部勝則・鈴木 聡
協力機関 藤沢町教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 千厩

1. 遺跡の立地

上野平遺跡は、東磐井郡藤沢町保呂羽字上野平33の1ほかに所在する遺跡で、藤沢町役場の東南東約3.7km付近に位置し、黄金山（標高482m）南南西の緩斜面に立地する。遺跡の標高は194m～200mで、遺跡の現況は水田・畑地である。

2. 調査の概要

調査区は現状の土地利用から3箇所に分けられ、西からA区・B区・C区と呼ぶ。いずれも水田造成時に削平され、切土・盛土が行われていた。今年度の調査では予想を上回る遺構が検出されたため、A区は調査を終了したが、B区は調査途中、C区は検出だけで調査を中断することになり、次年度以降の継続調査となった。各区の状況は以下のとおりである。

A区

東側は基盤まで削られており、遺構は確認できなかった。西側は厚さ30cm～40cmの遺物包含層が残っていたが遺物量は僅少である。土坑1基が確認されている。

B区

全域が地山まで削平されており、遺物包含層は無いが、多数の遺構が検出された。検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、墓壇、柱穴などである。遺構の配置をみると、大きく西側に掘立柱建物跡群、東側に土坑群の分布がみられ、その間に竪穴住居跡が位置しているようである。

C区

全域が削られており、北側で数基の土坑が検出されている。南側は道路側にむかって傾斜しており、遺物包含層が検出されている。

次に今年度精査したB区の遺構について述べる。精査した遺構は、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、土坑15基、墓壇1基、柱穴50基である。これ以外に検出だけの遺構もあり、また遺構の重複が多いことから今後の調査で遺構数はさらに増加することが見込まれる。

〈竪穴住居跡〉

床面まで削平されているため炉跡と柱穴だけの検出であり、規模・形状の詳細は不明である。炉跡は土器埋設炉で4個体の土器が正位・横位で埋設されており、うち3個体の土器は接した状態で埋設されていた。周囲に柱穴が多数検出されており、同地点での建て替えや重複の可能性はある。

時期は、埋設されていた土器から縄文時代中期末葉と考えられる。

〈掘立柱建物跡〉

B区の西側で掘立柱建物跡を構成する大型の柱穴が多数まとめて検出された。今回、確認した掘立柱建物跡は2棟であるが、検出だけの柱穴に重複が多数あること、個々の柱穴の規模にばらつきが認められることなどから、今後の調査で建物数はさらに増加することが見込まれる。柱穴の規模・形状は、最大のもので径150cm、深さ110cm、柱痕跡の径50cmである。平面形は円形を呈するものが多いが楕円形を呈するものもある。ほとんどの柱穴で柱痕跡と掘り方を確認することができ、また柱を立てた際の接地面と思われる痕跡が底面に確認された。

確認できた建物跡の規模は、1間×2間で、柱間は350cmほどである。2度の建て替えが確認され、長軸方向はN-50°-Eである。この建物跡を構成する柱穴のひとつが調査区北側に竪穴住居跡と重複しているが、その部分の調査は次年度以降となった。他にB区の中央付近と東端の方1間と思われる掘立柱建物跡を

検出している。いずれも調査区域外にかかるため規模は推定の域をでない。建物を構成する柱穴の規模は、径140cm、深さ40cm、柱痕跡の径30cmほどで、柱間は280cmである。

時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉～末葉と考えられる。

〈土 坑〉

B区の東側でまとまって検出された。規模・形状から定形的なものと不整形なものに分類される。いずれも上部を削平されているため本来の規模は不明である。定形的なものは断面形がフラスコ状を呈するものとピーカー状を呈するものがある。フラスコ状土坑は、平面形は円形を呈し、底部の中央付近に副穴をもつものが多く、四方に広がる溝状の施設を伴うものが1基ある。最大規模のものは開口部径150cm、底部径190cm、深さ120cmで、最小規模のものは開口部径80cm、底部径90cm、深さ90cmである。ピーカー状土坑は1基検出されており、規模・形状は、開口部径230cm、底部径220cm、深さ130cmで、平面形は隅丸方形を呈する。底部は平坦で副穴はもたない。これらの土坑の時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

〈墓 塚〉

B区の東側で検出された。規模・形状は、径150cm、深さ30cmで、やや方形がかかる円形を呈する。埋土中から副葬品と思われる玉類・石鏃が出土した。出土状況は、石鏃が北側でまとまって出土し、玉類は南側に比較的多く、数箇所ですべて出土している。人骨は出土していない。底部には径40cm、深さ10cmの副穴が確認された。他のフラスコ状土坑より底部の掘り込みが浅いという問題があるが、規模・形状・位置などからフラスコ状土坑を墓塚に転用したのと考えられる。出土遺物は玉類53点、石鏃7点、縄文土器片数点が出土している。時期は、縄文時代中期末葉以降と考えられる。

〈遺物包含層〉

C区で検出された。検出のみで精査は行っていない。検出した範囲は約200㎡であるが、包含層の範囲は調査区域外のさらに南側・東側・西側に延びているものと予想される。南斜面に形成された捨て場で、確認できた地点で包含層の厚さは80cm以上である。傾斜に対して不自然に落ち込むところがあり、包含層中に遺構の存在も予想される。検出面で縄文時代中期末葉の土器片が出土しているが、詳細は不明である。

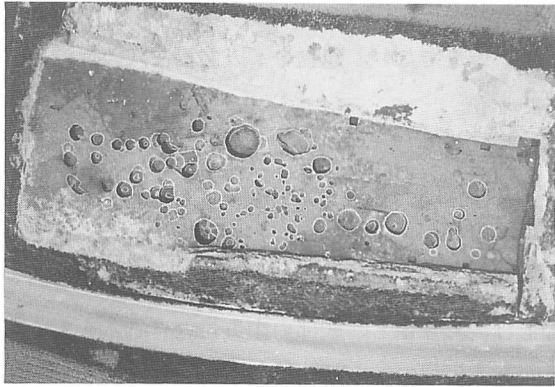
〈出土遺物〉

出土遺物の総量は、コンテナ（大）で約10箱で、縄文土器・土製品・石器・石製品が出土している。時期は、縄文時代前期・中期であるが、今年度調査した遺構の時期は、中期後葉から末葉に属するようであり、遺構外の遺物も該期の時期のものが大半を占める。前期の遺物は、C区の粗掘中に表土中から多く出土しており、今後の調査ではC区以東に前期の遺構・遺物の存在も予想される。石器は、石鏃・石匙・不定形石器・擦石・凹石・石棒などが出土している。土製品は円盤状土製品であり、石製品は墓塚出土の玉類である。

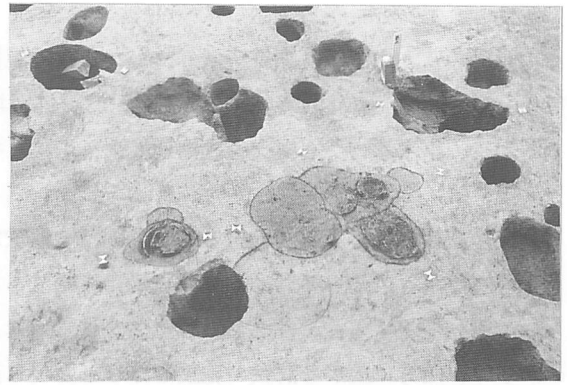
3. まとめ

B区の遺構の配置をみると、大きく西側に掘立柱建物跡群、東側にフラスコ状・ピーカー状を呈する土坑群が分布しており、その間に竪穴住居跡が位置している。場の使い分けがあった可能性がある。またC区で捨て場と考えられる遺物包含層が検出されていることから、遺跡は、調査区のさらに北側に広がっているものと思われる。C区以東の上位面には前期の集落跡の存在も予想される。

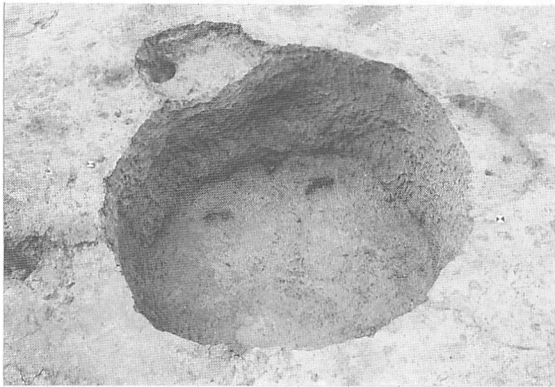
今回の調査で、上野平遺跡は縄文時代中期後葉～末葉の集落跡であることが確認された。掘立柱建物跡の規模などからみて該期の拠点的な集落であったものと推定される。調査は途中であり、現時点では不明な部分も多いが、集落の規模・構造などの全容が今後の調査で明らかにされるものと思われる。



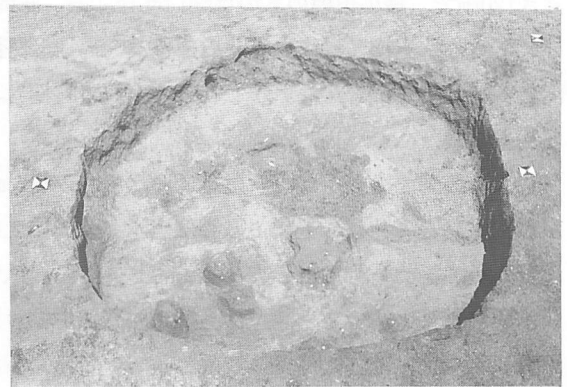
遺跡全景



竪穴住居跡



土坑



墓壙・遺物出土状況



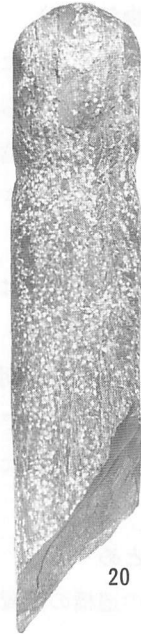
1



2



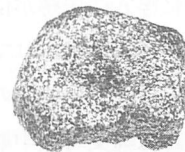
17



20



18



19



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



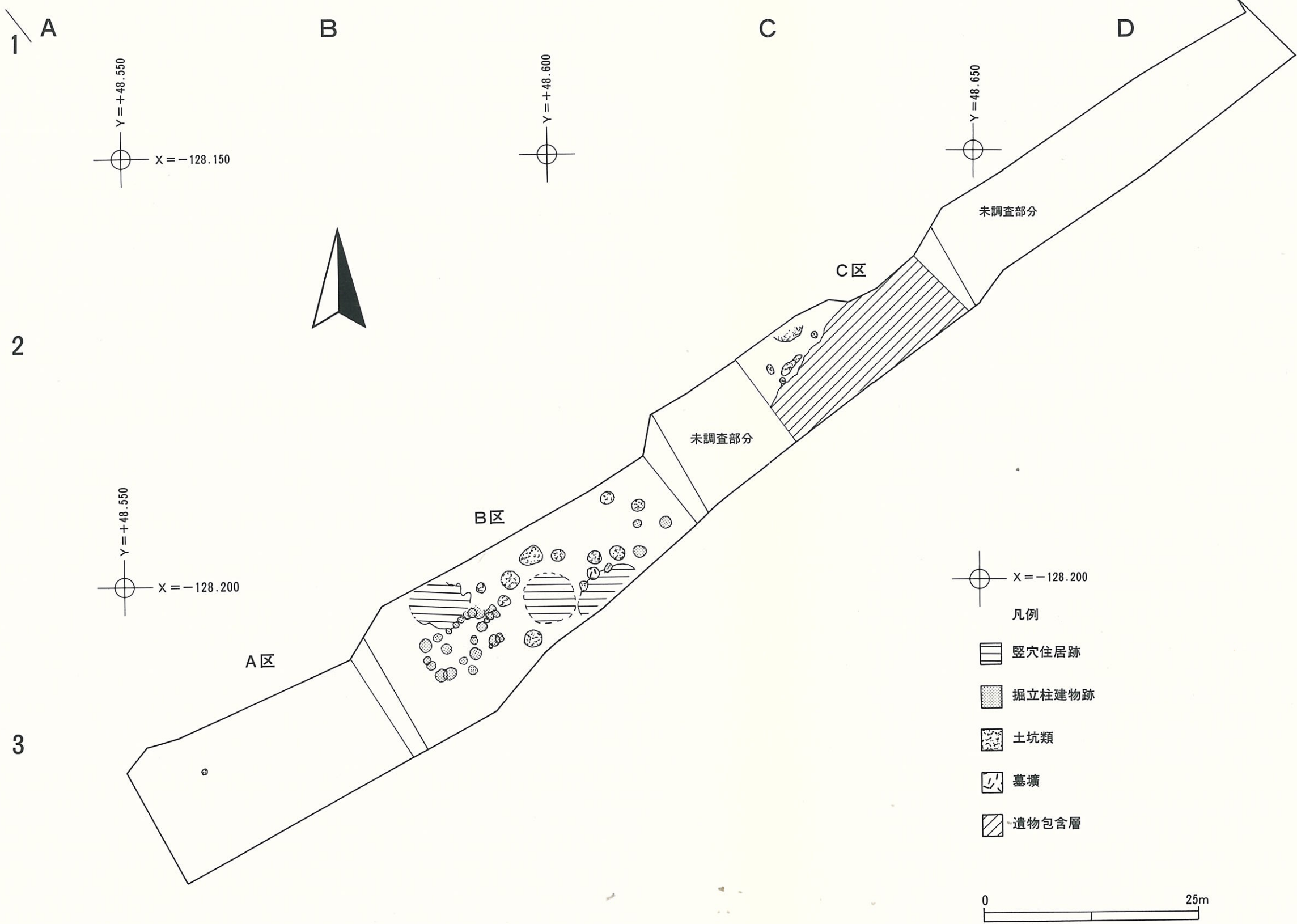
15



16

- 1・2 縄文土器(中期)
- 3～6 石鏃
- 7～16 玉類
- 17 磨石
- 18・19 凹石
- 20 石棒

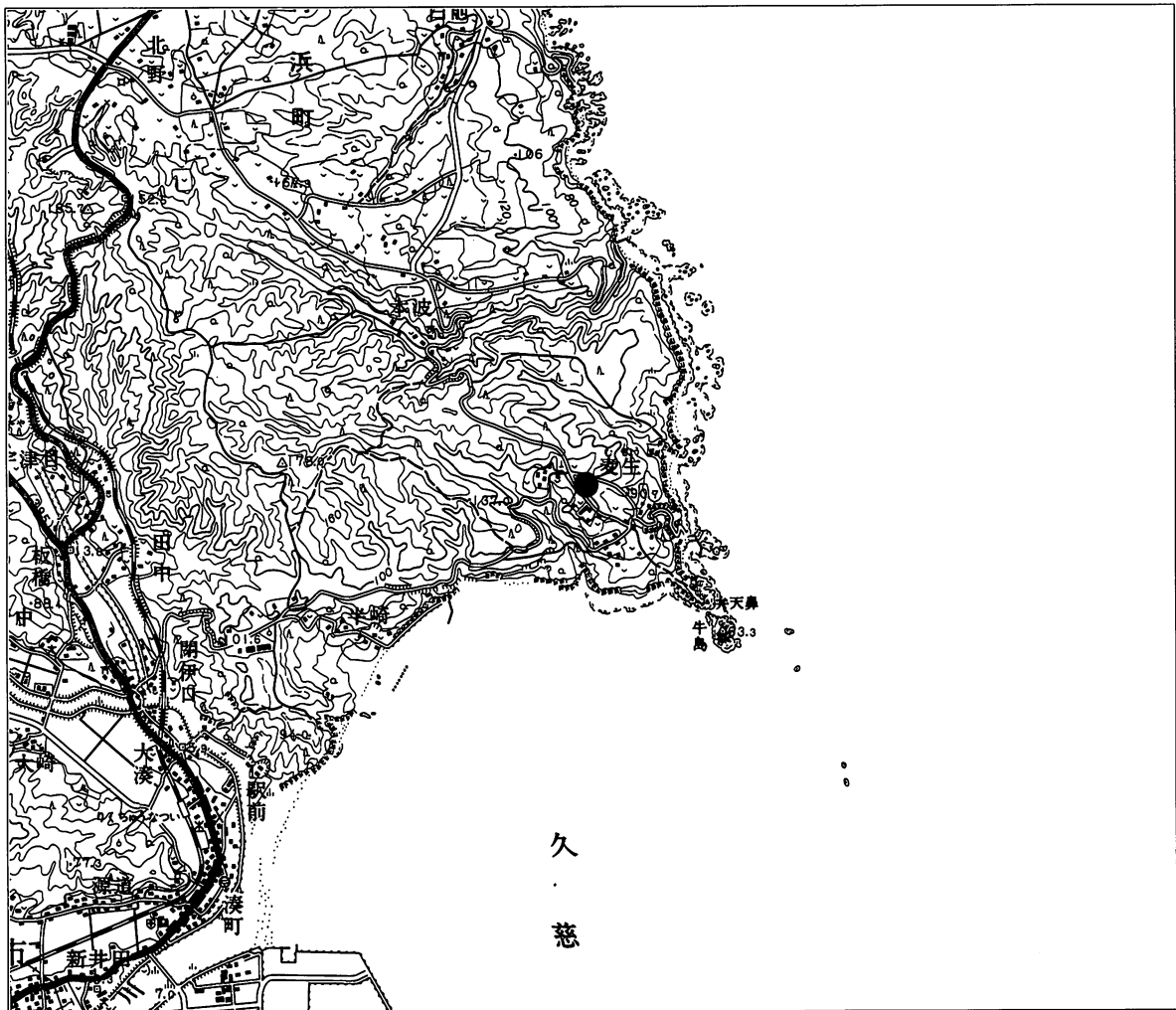
上野平遺跡検出遺構・出土遺物



上野平遺跡遺構配置図

(7) 麦生Ⅲ遺跡

所在地 久慈市侍浜町字麦生第5地割29-1ほか
委託者 岩手県土木部久慈土木事務所
事業名 緊急地方道整備事業
発掘調査期間 平成8年4月10日～5月24日
調査対象面積 6,725㎡
発掘調査面積 6,725㎡
遺跡番号・略号 JG11-1077・MGⅢ-96
調査担当者 菊池人見・鈴木浩二
協力機関 久慈市教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 久慈

1. 遺跡の立地

麦生Ⅲ遺跡は久慈湾の北側の段丘上に位置している。東経141度49分と50分の間、北緯40度13分と14分の間である。海岸線はほぼ南と東に開けており、南東隅に弁天岬の半島があり、その先南南東に牛島がある。この段丘の地下には、国家石油備蓄基地があり、従来の海岸線より広く埋め立てられている。

麦生Ⅲ遺跡は、海からの強風のため本来の表土がほとんど残っておらず、農地として利用するために客土がなされている。現在の表土の下には、過去に耕作した黒色土と八戸火山灰（12,700±260）の黄褐色土が混じり合う攪乱層が確認された。攪乱層から下の八戸火山灰層からが本来の土層である。

2. 調査の概要

遺跡の調査区は現在使用されている道路に添う形で、北北西から南東に細長く伸びている（遺跡全体図参照）。遺構は土坑が1基検出された。遺物は縄文土器片と石器である。

〈土坑〉

土坑は遺跡中央部（麦生Ⅲ遺跡・ⅢB-13k内）に1基検出された。開口部の長径は135cm、短径115cm、底部の直径約80cmで、深さ約70cmである。埋土は黒色土と茶褐色土の混じり合う単層で底は垂円礫の礫層になる。遺物は無く、時代は不明である。

〈出土遺物〉

土器片が小コンテナに1箱と石器類が40点ほど出土した。いずれも縄文時代中期以降のもので、土器片は耕作時に壊されたと思われる接合しない小片である。石器の器種は、以下の通りで製品は少ない。石鏃は凸基有茎鏃と平基無茎鏃である。石斧は磨製で両刃および片刃のものがある。他にスクレイパー・磨石と剥片が出土している。

3. まとめ

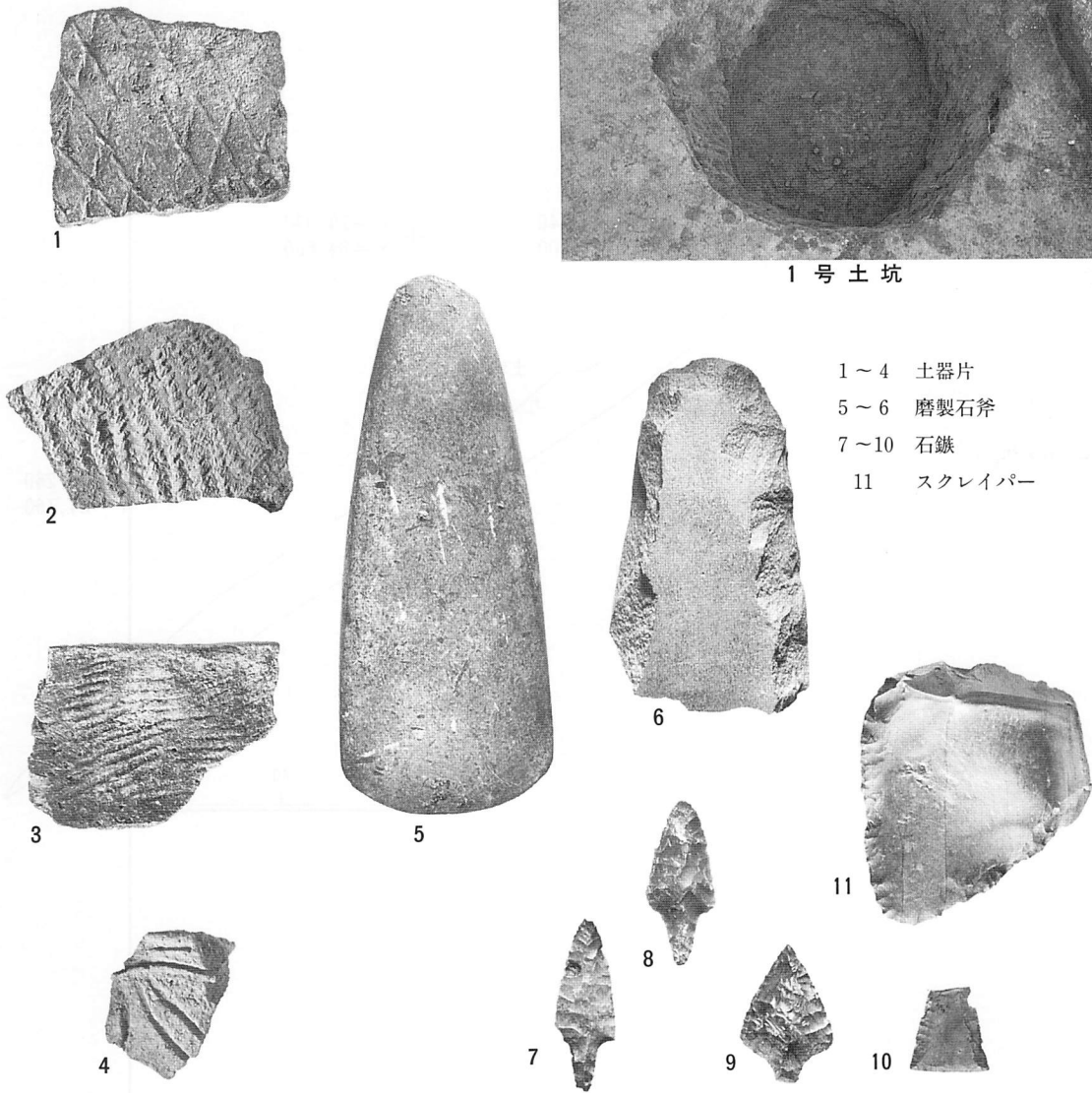
今回の調査で、本遺跡は緩やかに凹んだ地形の縁部分にあたり、且つ海からの強風を直接受けるため居住地としての利用はなされなかったと推察される。遺物の特徴から縄文時代中期以降の遺跡であると思われる。今後の周辺の遺跡の調査により、麦生Ⅲ遺跡の性格が明らかになるであろう。



遺跡遠景(南→北)

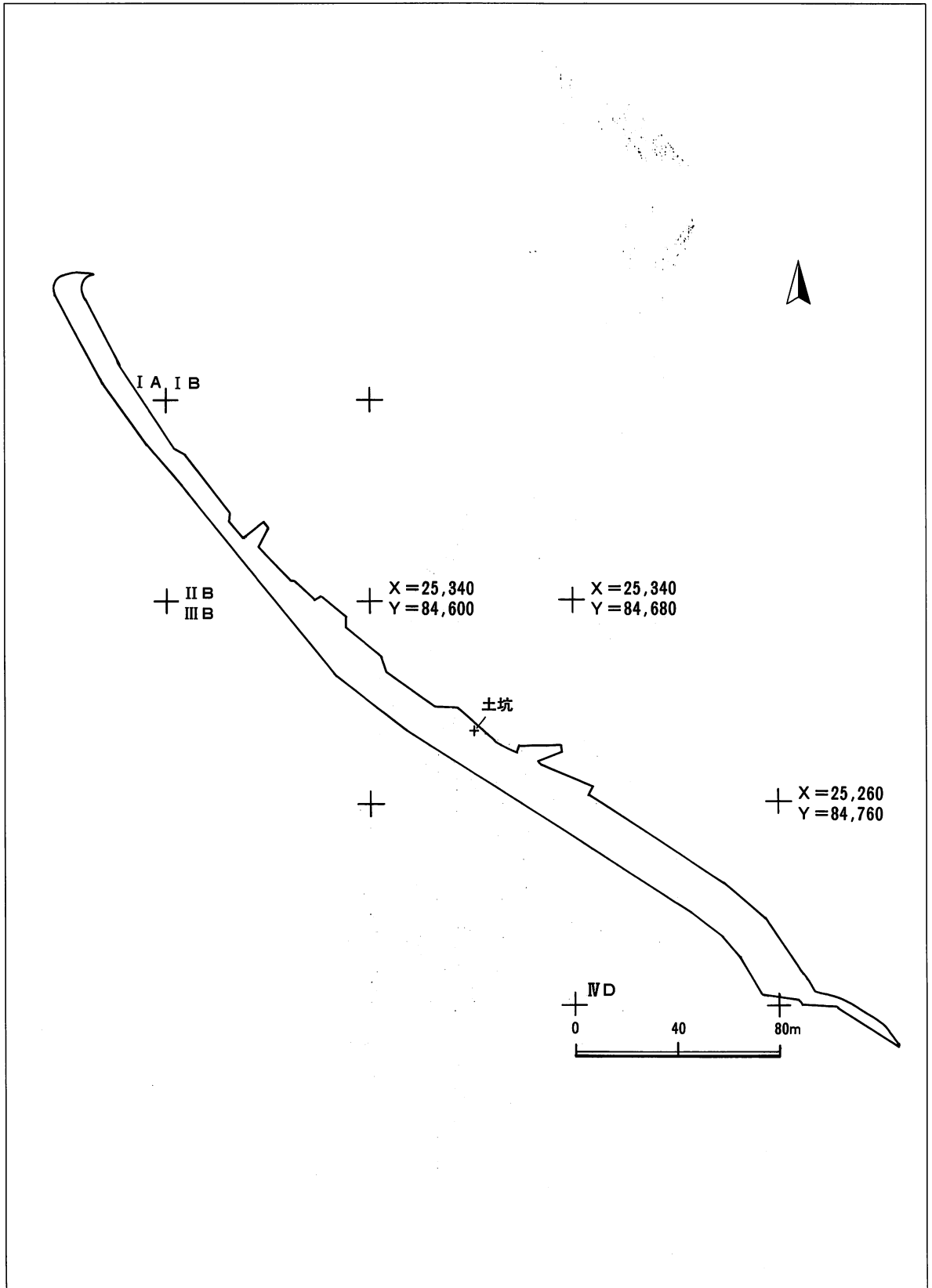


1号土坑



- 1～4 土器片
- 5～6 磨製石斧
- 7～10 石鏃
- 11 スクレイパー

麦生Ⅲ遺跡検出遺構・出土遺物



麦生Ⅲ遺跡遺構配置図

(8) 麦生 IX 遺跡

所在地	久慈市侍浜町字麦生第3地割51-12ほか
委託者	岩手県土木部久慈土木事務所
事業名	緊急地方道整備事業
発掘調査期間	平成8年5月27日～9月2日
調査対象面積	1,485㎡
発掘調査面積	1,485㎡
遺跡番号・略号	JG11-1088・MGIX-96
調査担当者	菊池人見・鈴木浩二
協力機関	久慈市教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 久慈

1. 遺跡の立地

麦生Ⅸ遺跡は久慈湾の北側の段丘上に位置している。東経141度49分と50分の間、北緯40度13分と14分の間である。海岸線はほぼ南と東に開けており、南東隅に弁天岬の半島があり、その先南南東に牛島がある。この段丘の地下には、国家石油備蓄基地があり、従来の海岸線より広く埋め立てられている。

麦生Ⅸ遺跡は、強風によって本来の表土が殆ど残っていなかった麦生Ⅲ遺跡と異なり、部分的に表土が比較的厚く残っている。

調査前の状況は畑で、一部は農作業用の道路であった。土層は、現在の耕作土（黒色土、層厚約10～80cm）・耕作土と八戸火山灰層（12,700±260）との攪乱層、八戸火山灰層、高館火山灰層（33,000～45,000）で、赤色風化殻は確認できない。

2. 調査の概要

今回の調査では、調査区の西側から焼土・土坑・柱穴状ピットが検出されたが、遺物を伴わず時期・性格は不明である。遺構外遺物は、接合するが復元までは至らない土器をふくめて土器片が少量、表土および攪乱層から出土した。石器は磨製石斧・石鏃・スクレイパーその他が同じく表土および攪乱層から出土した。縄文時代より以前の地層からは、久慈では初めての旧石器の可能性のある剥片などが出土した。

〈遺構〉

遺構はいずれも耕作土と八戸火山灰層との攪乱層から検出されており、埋土の締まりも甘く、比較的新しいものと思われるが、正確な時期・性格等は不明である。

〈遺物〉

遺物は縄文時代のもものと、旧石器時代のものに分けられる。縄文時代の土器片は小形で、耕作の際に砕かれたものと思われる。縄文時代の石器は、磨製石斧3点、石鏃32点、スクレイパーその他が80点余り出土した。

旧石器時代のもとは、縄文時代の面から約2 m掘り下げた「高館火山灰層」から出土した。いわゆるオレンジパミス(OP)の直上10cm前後の位置である。所々に野火の跡と思われる暗色帯の薄い層が確認されたので、その中の木炭片の年代測定により、時期が明らかになるだろう。石片は使用痕のある剥片や礫で、製品まで至らず、試し割りをしたものと推測される。石器となるか否かは意見の分かれるところである。

3. まとめ

今回の調査では、縄文時代の遺構と断言できるものはなかったが、久慈では初めての旧石器時代の地表面が確認された。今後のこの地域の調査によって、麦生Ⅸ遺跡の性格があきらかになるであろう。



遺跡遠景(南→北)



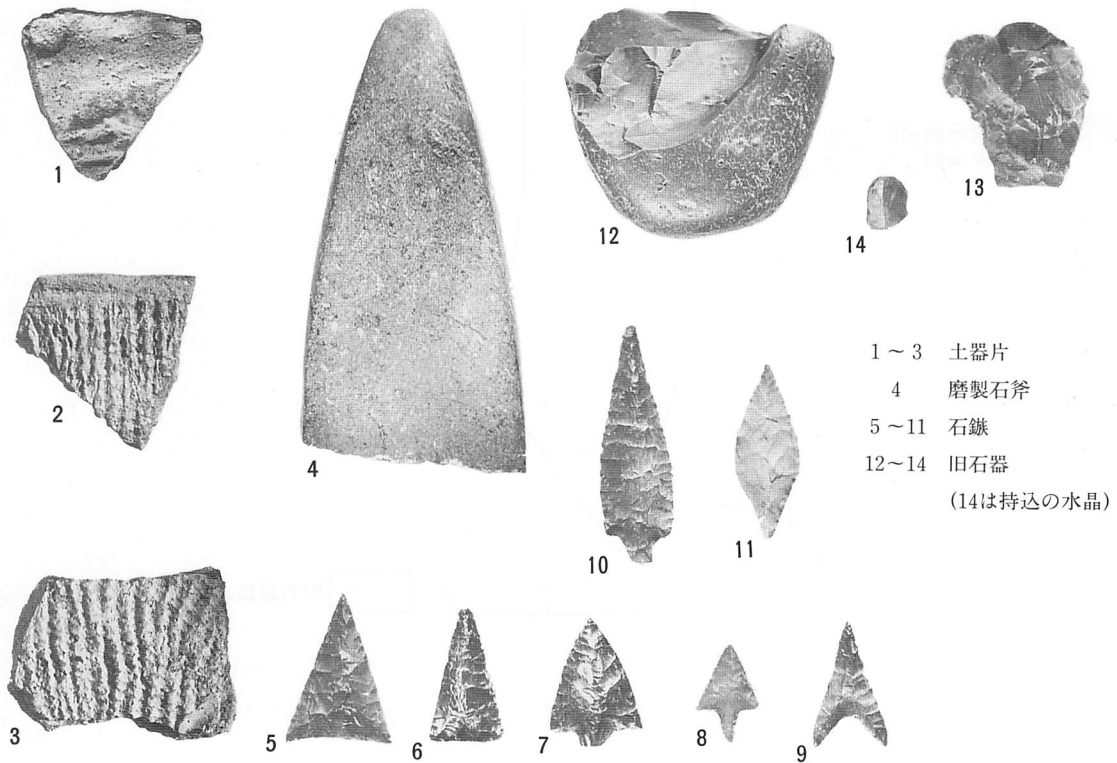
平山小学校子供会遺跡見学会



縄文の面最終確認作業

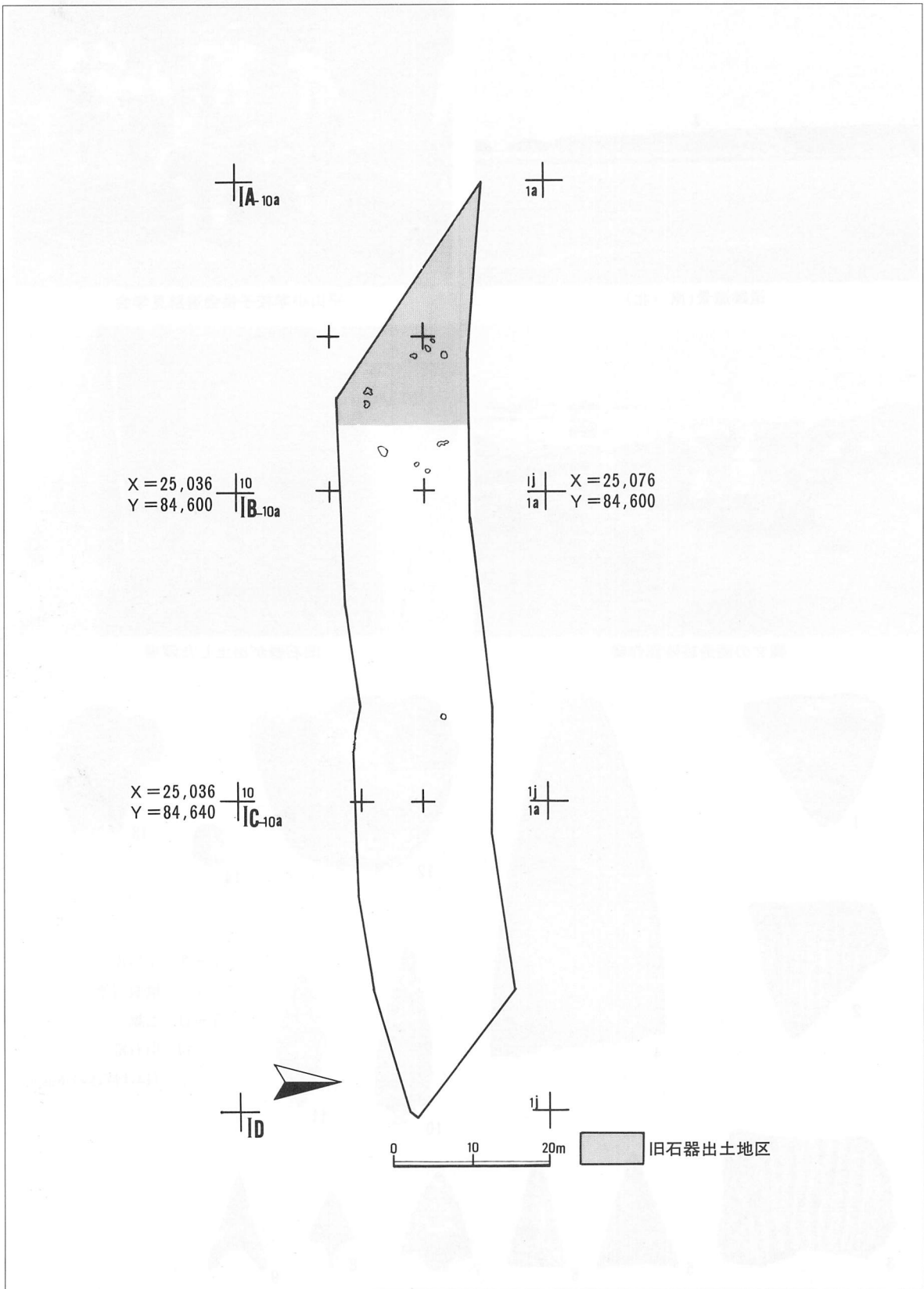


旧石器が出土した深掘



- 1～3 土器片
- 4 磨製石斧
- 5～11 石鏃
- 12～14 旧石器
- (14は持込の水晶)

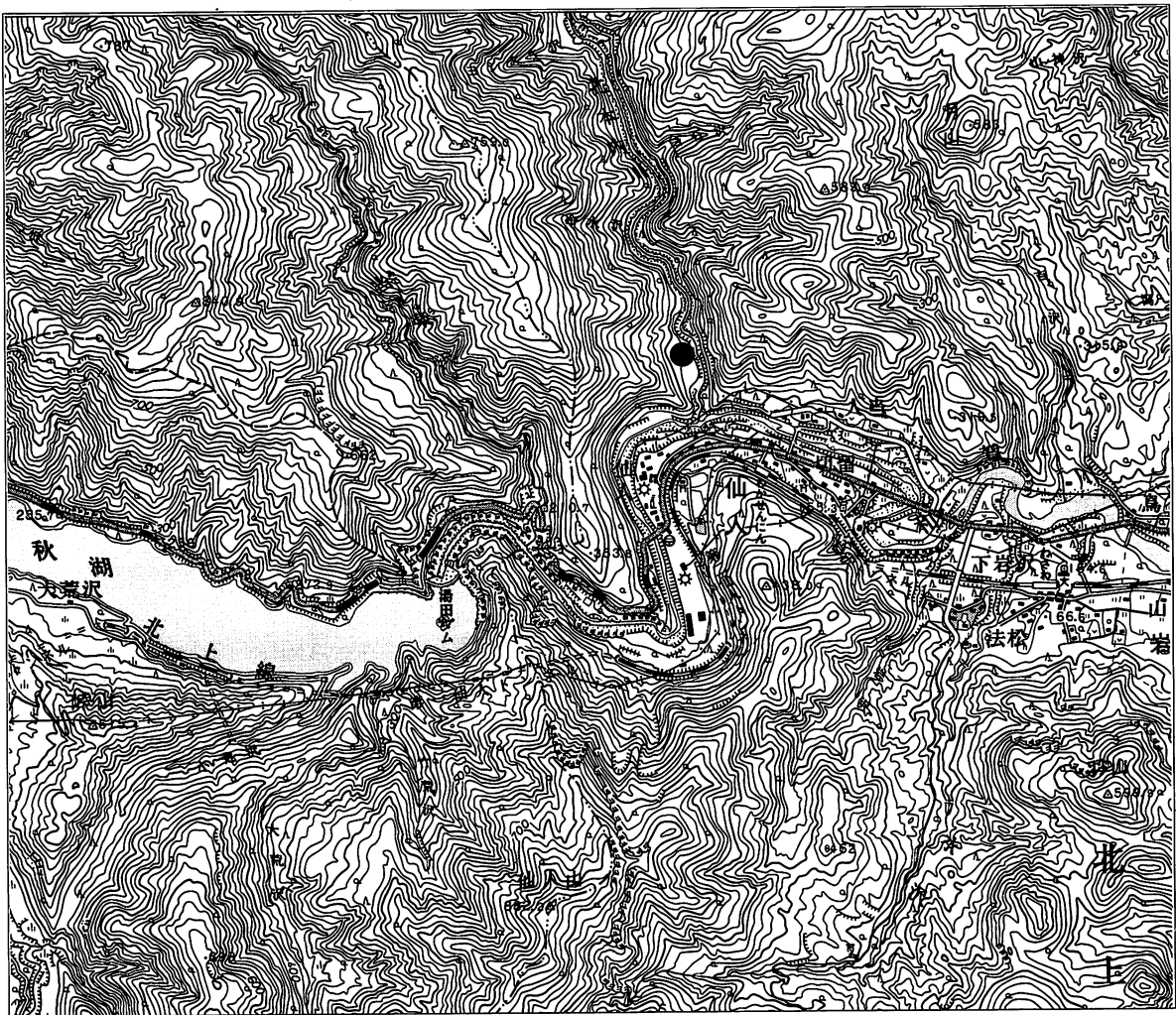
麦生Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



麦生区遗迹遗构配置图

(9) ほんない遺跡

所在地	北上市和賀町仙人
委託者	岩手県土木部北本内ダム建設事務所
事業名	北本内ダム建設
発掘調査期間	平成8年6月18日～7月31日
調査対象面積	702㎡
発掘調査面積	702㎡
遺跡番号・略号	ME51-1243・HN-96
調査担当者	高橋佐知子・中村直美
協力機関	北上市教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 川尻

1. 遺跡の立地

遺跡は、東日本旅客鉄道北上線の和賀仙人駅から北西約1km、和賀川と北本内川との合流点から約0.5kmの地点に位置し、北本内川の形成した河岸段丘の自然堤防上に位置する。遺跡の標高は168m前後で、遺跡の東側を流れる北本内川の水面との比高差は約21～23mである。調査が開始されるまでは、屋敷跡であった。

2. 調査の概要

本遺跡は平成7年度に調査を開始し、今年度は同じ地点を継続して調査を行った。今年度は洪水堆積のやや泥質のシルト層（Ⅱ層）を中心に調査を行った。検出された遺構は住居跡1棟、土坑6基、焼土1基、柱穴状土坑3基であるが、焼土が新しい可能性があるほかは、すべて縄文時代の遺構である。

なお、Ⅱ層はa～cの3層に大別されるが、b層は上層（u）と下層（1）に細分され、場所によっては上層（u）が存在せず、礫層b'が下層（1）の上ののりところもある。Ⅱ層の下には段丘礫層（Ⅲ層）が堆積している。遺物が包含されるのはⅡc層上面までで、縄文時代早期の遺物が含まれる。

〈竪穴住居跡〉

検出面はⅡa層である。約60cmの土層観察用のベルトの幅の中に土器埋設の複式炉がすっぽり入る形で検出された。壁は西側がわずかに残っているのみで、規模、形状とも不明であるが、円形か楕円形を呈し、直径3m以上はあるものと考えられる。柱穴は埋設土器の両側にそれぞれ1基と北側に1基確認された。本遺構は縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

〈土坑〉

Ⅱa層上面から6基検出された。いずれも楕円形及び長円形を呈し、深さは10～80cmまでとばらつきがある。うち1基は調査区外に伸びており、形状、規模は不明である。また、2基は昨年度調査した土坑と切りあっており、今年度調査の土坑の方が古いと考えられる。縄文時代後期の土坑と考えられる遺構が2基、中期か後期と考えられる遺構が3基で、残る1基は縄文時代に属すると考えられるが、時期は不明である。

〈焼土遺構〉

東側の段丘崖際のⅠ層下面で検出された。本遺構の付近はⅡ層の堆積が薄いため、底面はⅢ層に達しており礫層がよく焼けているが、焼土の堆積は薄い。灰も堆積しており、縄文時代の遺構よりは新しいと思われるが、時代は不明である。

〈柱穴状土坑〉

3基検出された。いずれも縄文時代に属すると推定されるが、住居跡等に伴うものとは考えられない。

〈出土遺物〉

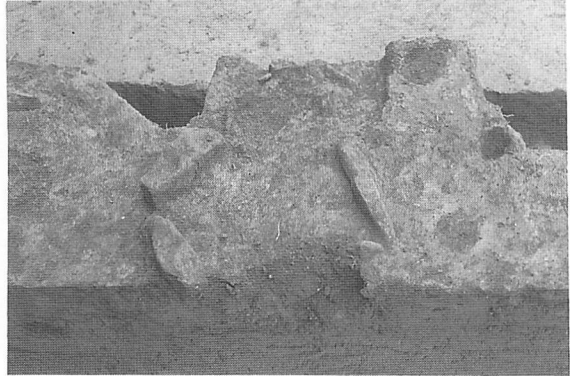
遺物はコンテナ1.5箱分の土器とコンテナ1箱分の石器類が出土した。遺構内出土の土器は縄文時代中期末～後期初頭の土器がほとんどで、Ⅱ層から出土した土器は早期と前期の土器である。早期の土器は前葉、中葉、末葉のものがある。石器は、石鏃、石槍、石匙、石筥、削搔器、打製石斧、磨製石斧、磨石類が出土している。

3. まとめ

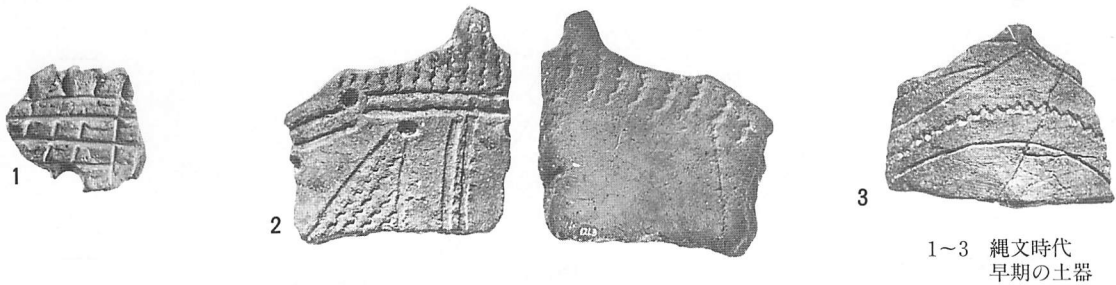
本遺跡は、今年度の調査で縄文時代早期前半からの遺跡であることがわかった。早期、前期の土器を含むⅡ層は洪水堆積のシルトと見られ、何回か水に浸った痕跡が確認された。この時代には人々は本遺跡に定住していたのではなく、しばしば訪れていたものと考えられる。



調査区全景



縄文時代の土器埋設複式炉



1~3 縄文時代
早期の土器



4 縄文時代
前期の土器



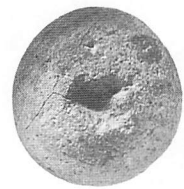
5 縄文時代
後期の土器



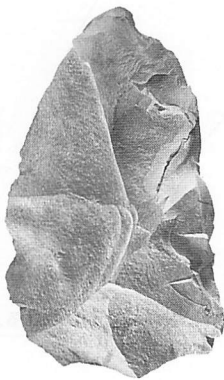
6 石鏃



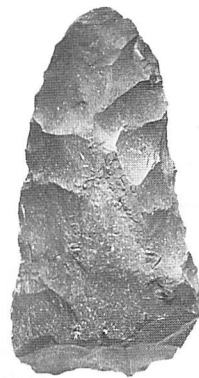
7 磨製石斧



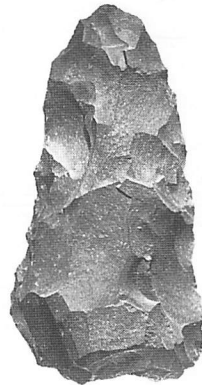
8 凹石



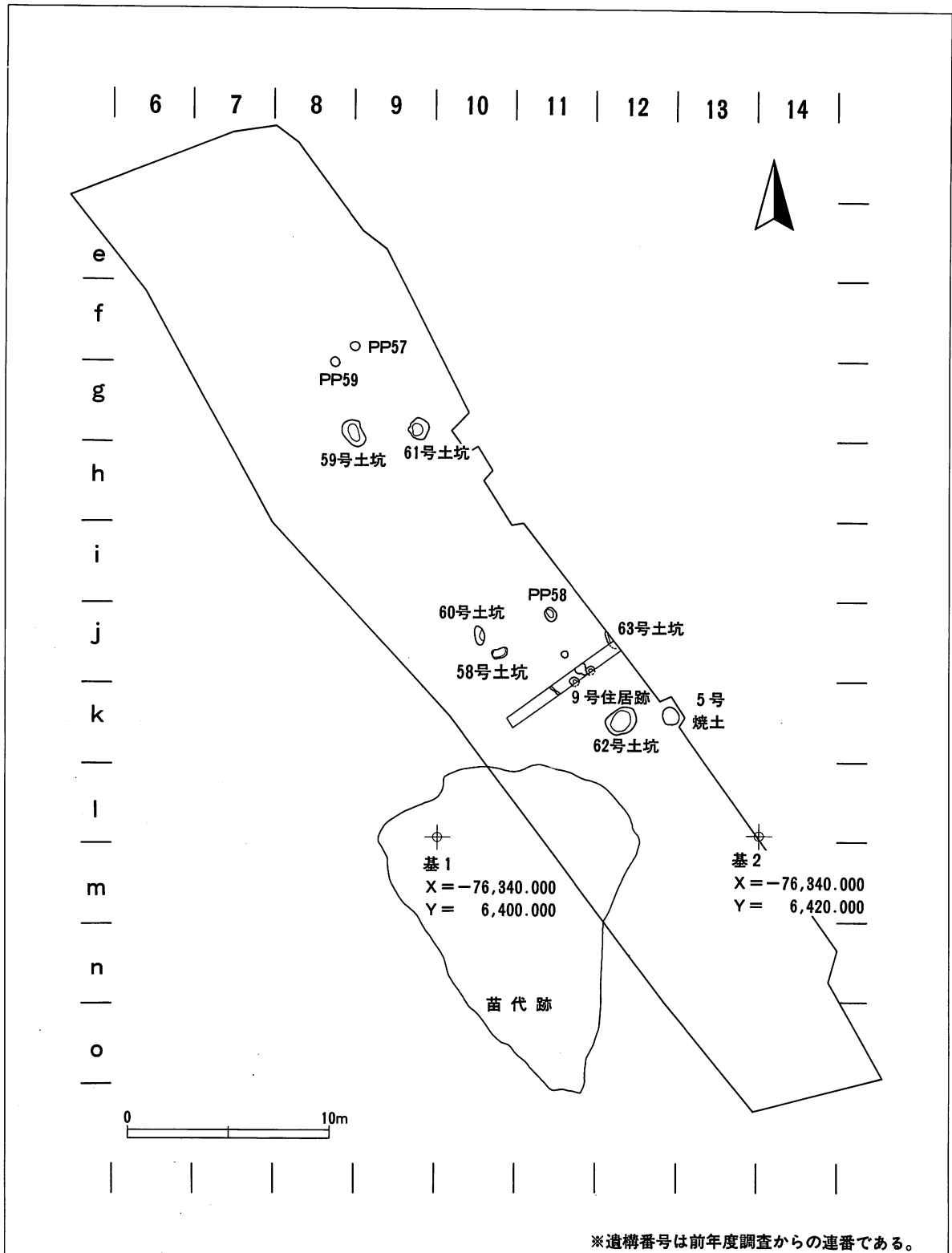
9 打製石斧



10 石鏃



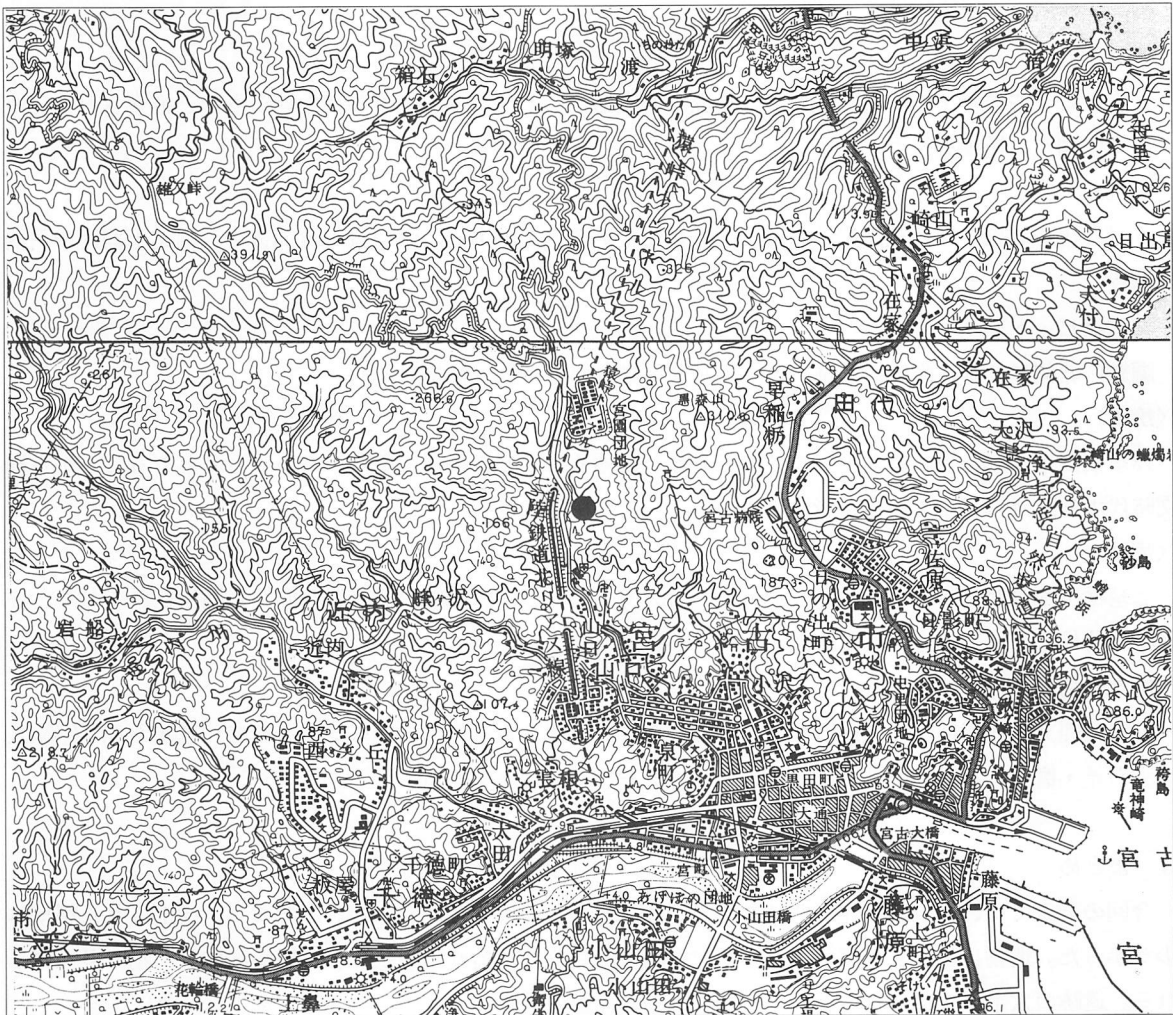
本内遺跡検出遺構・出土遺物



本内遺跡遺構配置図

(10) 小平 I 遺跡

所在地	宮古市山口5丁目108番1ほか
委託者	岩手県土木部宮古土木事務所
事業名	地方特定道路整備事業
発掘調査期間	平成8年9月2日～10月30日
調査対象面積	2,400㎡
発掘調査面積	2,400㎡
遺跡番号・略号	LG23-1255・KD I-96
調査担当者	菊池人見・鈴木浩二
協力機関	宮古市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 宮古

1. 遺跡の立地

小平Ⅰ遺跡は、宮古市中心部の北西部で、閉伊川の支流である山口川の東の段丘上に位置している。東経141度56分と57分の間、北緯は39度39分と40分の間である。調査前の状況は畑地と山林であった。

周辺には、縄文時代の遺跡である小平Ⅱ遺跡・高根（こうね）遺跡・半沢遺跡・赤畑遺跡があり、南北朝～戦国時代の館跡である山口館跡遺跡、江戸時代中期～末期の黒森町遺跡などがある。

現在は、山口川に添って三陸鉄道北リアス線が通っており、段丘上は病院施設や住宅団地として利用されている。

土層は、表面から表土である黒色土（層厚10～70cm前後）、黒褐色土（層厚20cm前後）、褐色土（層厚20cm前後）である。その下は大小の風化花崗岩の斜面堆積物が地山を覆っている。遺跡全体も同様の風化花崗岩で覆われている。

2. 調査の概要

今回の調査区は小平Ⅰ遺跡の西端部で段丘の縁にあたる緩斜面である。検出された遺構は、縄文時代の住居跡・土坑・柱穴状ピット・焼土・炉跡である。出土した遺物は、遺構内・遺構外も含めて、土器・土偶・土製品・石器類である。

〈住居跡〉

柱穴と焼土を伴って1棟検出された。土器と石器も出土しており、縄文時代中期のものとも推察される。焼土の年代測定の結果を待つ。

〈土坑〉

9基検出された。風化花崗岩の角礫が落ち込んでいるものが多い。直径は1m前後で、縄文土器片や石器を伴う。

〈柱穴状ピット〉

調査区北側に2基、南端に2基、合計4基検出された。時期・性格は不明。

〈焼土〉

13基検出された。規模は大小さまざまであるが、固くしまり、土器片を含んでいるものもあることから縄文時代中期以降のものである可能性が高い。

〈炉跡〉

2基検出された。石組と焼土から炉跡とした。内1基は、住居跡内の一段低い面から検出されており、住居跡の時代より古いと思われる。

〈出土遺物〉

土器は縄文時代前期から後期のものまでであるが、復元できるものは中期以降のもので10数個ある。石器は、磨製石斧・磨石・石筥・石匙・石鏃・石錐・スクレイパーなどである。

3. まとめ

今回の調査では、調査区全体が西に傾く緩斜面で、大小の風化花崗岩に覆われており、検出された遺構は少なかった。遺物はまとめて出土したが、斜面で流され花崗岩や木の根に引っ掛かっていた物も多く含まれる。遺跡の大半はまだ調査されずに残っており、今後の調査によって全容が明らかになる。



遺跡遠景(西→東)



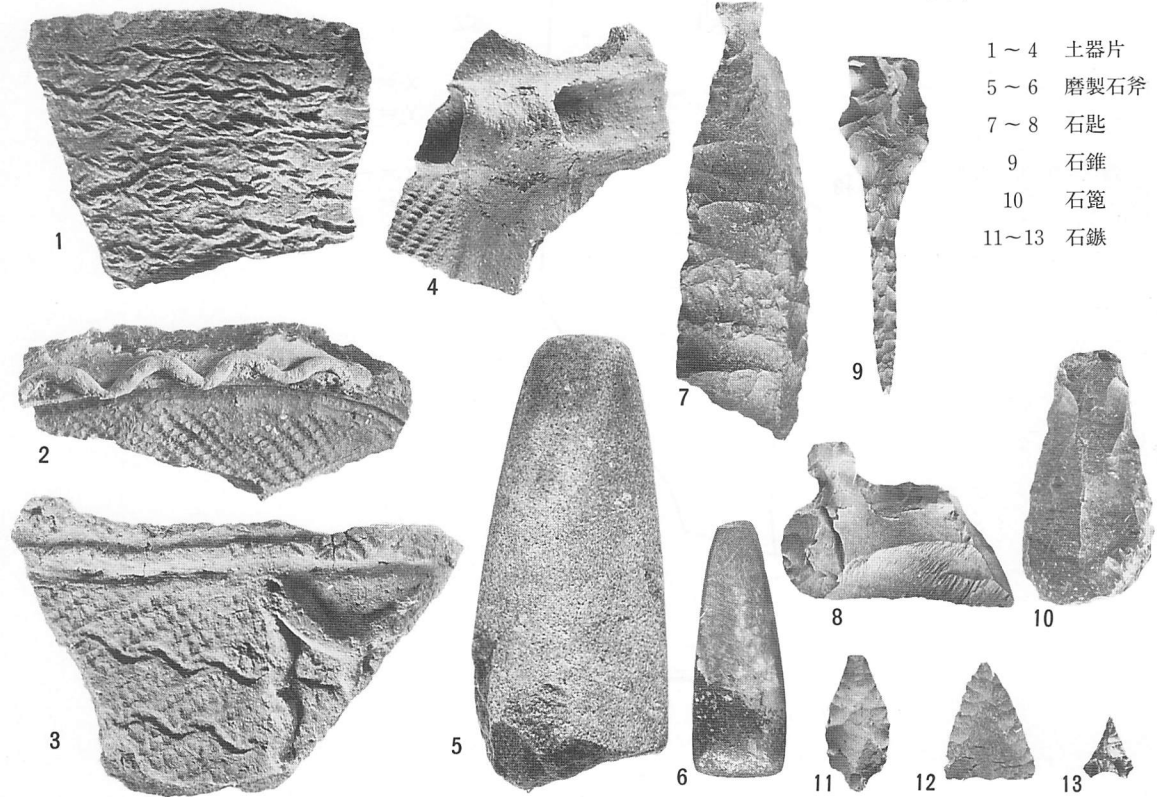
遺跡全景(北→南)



土器出土状況 (1)

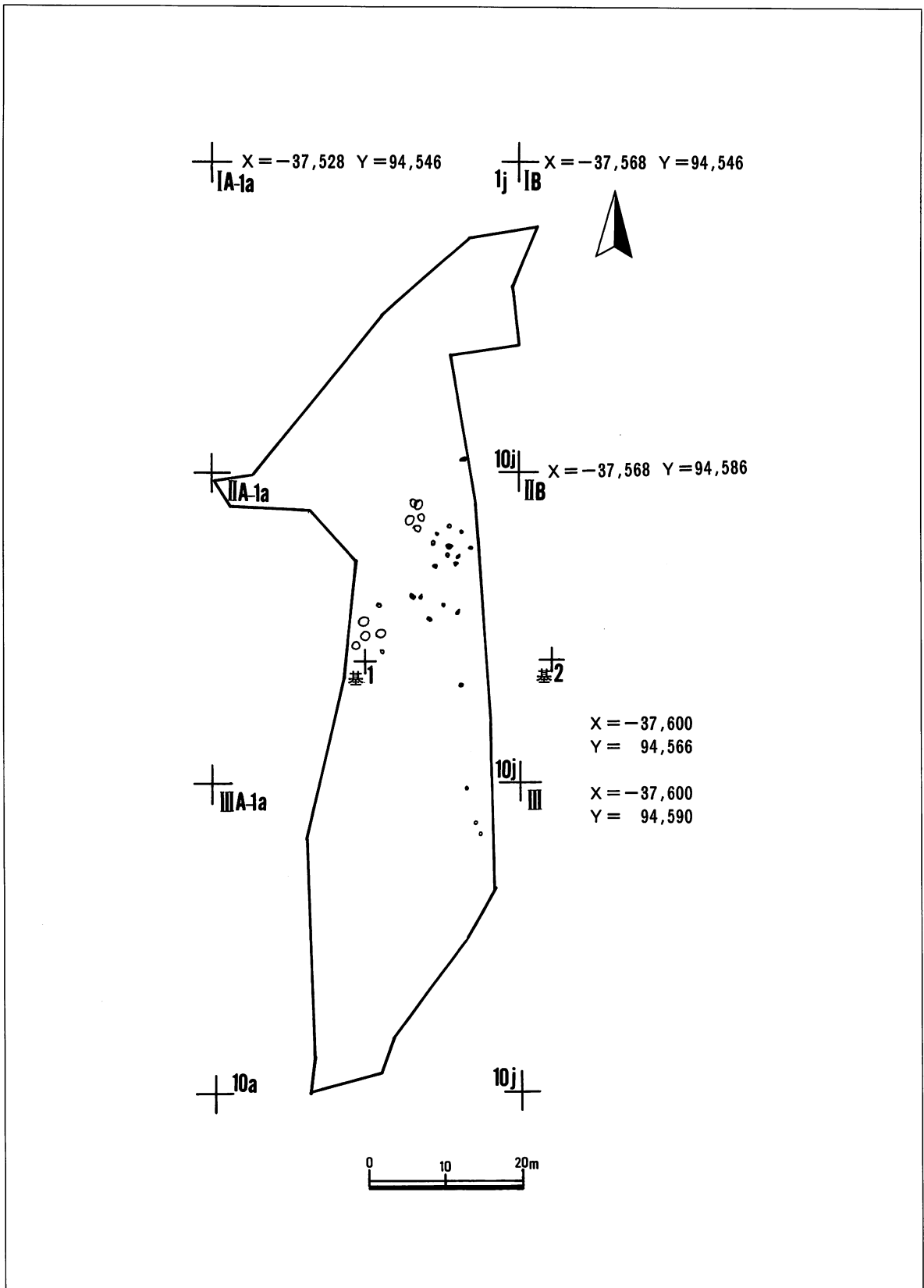


土器出土状況 (2)



- 1～4 土器片
- 5～6 磨製石斧
- 7～8 石匙
- 9 石錐
- 10 石箭
- 11～13 石鏃

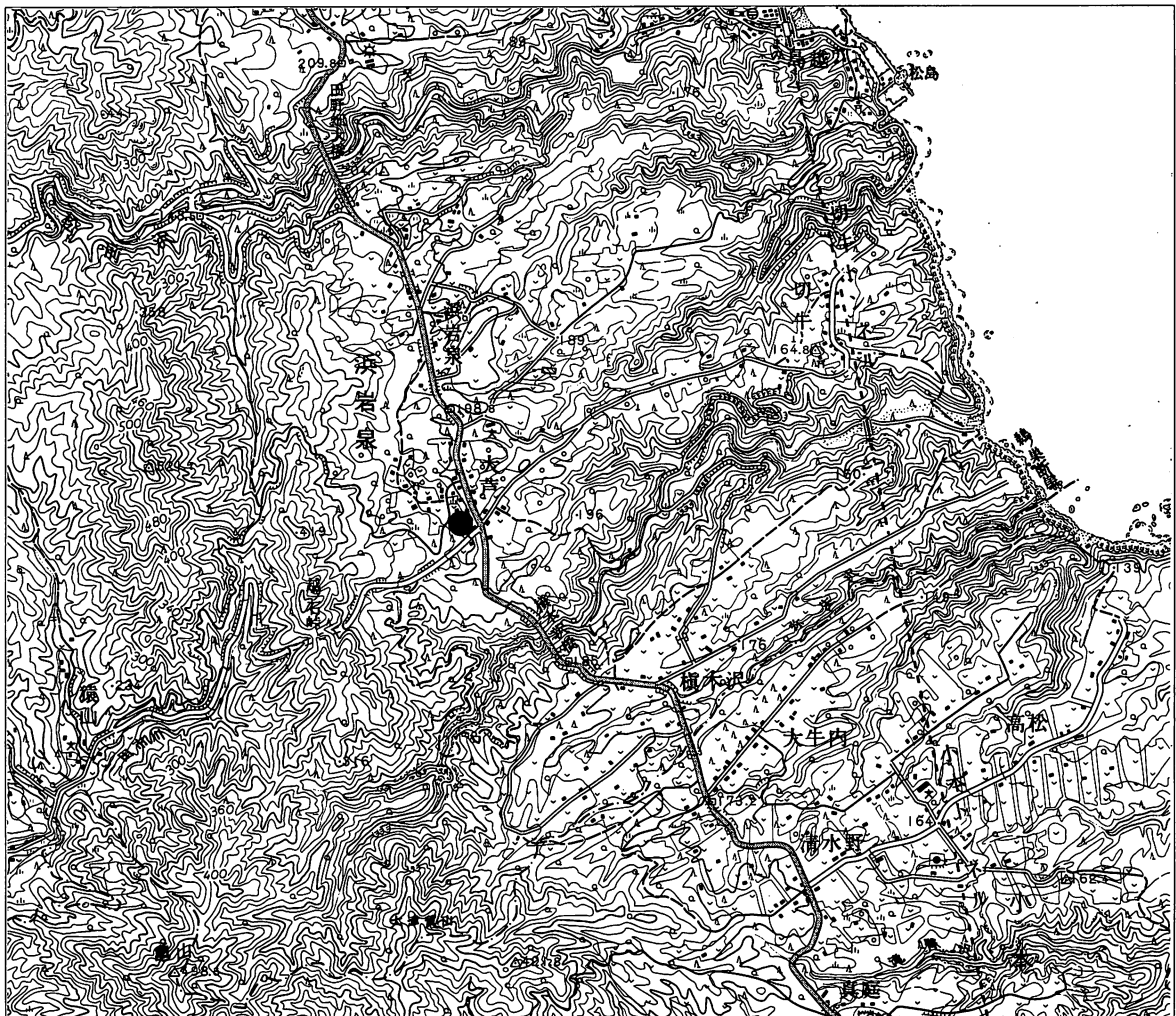
小平 I 遺跡検出遺構・出土遺物



小平 I 遺跡遺構配置図

(11) 浜^{はま}岩^{いわ}泉^{いずみ} I 遺跡

所在地 下閉伊郡田野畑村浜岩泉168-6ほか
委託者 宮古地方振興局農政部
事業名 農免道整備事業
発掘調査期間 平成8年4月8日～7月26日
調査対象面積 854㎡
発掘調査面積 854㎡
遺跡番号・略号 KG43-0036・H I I-96
調査担当者 金子昭彦・晴山雅光
協力機関 田野畑村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 岩泉

1. 遺跡の立地

浜岩泉Ⅰ遺跡は、三陸鉄道北リアス線島越駅の南西約3.7km、県道岩泉・平井賀・普代線に近い国道45号沿いにあり、すぐ北側には、大型の遮光器土偶が出土した浜岩泉Ⅱ遺跡がある。

浜岩泉Ⅰ遺跡は、東西約400m、南北約200mの、国道の東側にも広がる大きな遺跡で、今回の調査は、ちょうど遺跡の中央を約10mの幅でトレンチを入れた格好になる。

遺跡は、大きく見れば標高120～200m前後の海岸段丘上に立地し、今回の調査区は太平洋（北東）に向かって下がる緩やかな斜面にあり、標高は223～230mである。

遺跡の現況は林や畑、宅地であり、今回の調査区の大部分は林で、木根が深く入りこんでいる割に表土が浅かったため、検出・精査は困難であった。

2. 調査の概要

調査は昨年の続きで（昨年1,157㎡調査）、特に堅穴住居跡が多く検出された調査区の中央部を調査した。ここからは、堅穴住居跡24棟、堅穴住居状遺構3基、土坑12基が検出され、昨年調査した分を合わせると、堅穴住居跡40棟、堅穴住居状遺構5基、土坑14基、土器埋設遺構1基になる。これらは、江戸時代の終わり～明治時代と思われる土坑2基を除くと、全て縄文時代中期後葉～末（大木8b～10式）のものと思われる。

〈堅穴住居跡〉

最初に、昨年調査した分も含めた堅穴住居跡40棟について、項目ごとに、その特徴をまとめておく。住居跡のほとんどは、土器等の遺物の出土が少ないので明確な時期はわからないが、いずれも縄文時代中期後葉～末（大木8b～10式）になる可能性が高い。

今回発見された住居跡38棟（40棟のうち炉と柱穴しか見つからなかった2棟を除く）は、平面形と規模から、大きく三つのグループに分けることができる。一つは、円形と円形に近いもので、大部分がこれに含まれ（33棟）、もう一つは、六角形で、端から端までが5～8mの大きなもので4棟ある。三つ目は、長径が7mを越える楕円形の住居で2棟ある。円形に近いグループは、角の丸い四角形に近いものや楕円形に近いものなどもあるが、数は少ない（32棟のうち5棟）。直径3.3mが平均的な大きさで、4mを越えるものが6棟、3m未満のものが7棟ある。六角形のグループは、端から端までが7～8mになるのが普通で、1棟だけやや小さく5mである。楕円形のうちの10m近い1棟は、検出面から床面までが約1.2mと深く、多量の土器が出土した（コンテナ約5箱）。

炉は、大部分が石囲炉で、炉が発見された30棟のうち26棟までが、この炉である。その他の4棟のうち、大形で六角形の1棟は、土器埋設炉と地床炉の二つの炉を持ち、残りの3棟は地床炉である。石囲炉に含まれるものも形や大きさは様々で、石が一周するもの、所々隙間が開くもの、一周せず全体の形がコヤニになるものなどがある。また、石囲炉の中には、隣に浅い凹みを持って複式炉に近い形になるものも見られる。この場合、浅い凹みは必ずと言って良いほど硬く踏みしめられている。

硬く踏みしめられた床を持つ住居は少なく、六角形と楕円形の大形住居だけである。ただし、炉の周りの一部だけ硬く踏みしめられている住居は多い。柱穴はほとんど検出されなかった。これは、木根などで壊されているせいと考えられるが、大形住居では検出されたことから、小さな住居の柱穴は小さく浅いために検出しにくいのかも知れない。また、大形住居の六角形2棟、楕円形1棟からは周溝が検出されている。

1棟からは埋甕が検出された。口径は20cmだが、どういうわけか胴の途中で壊れている。また、1棟の炉端の小穴から、石器の材料となる剥片類が、埋納されていたかのように、まとまって出土した。

住居跡は、主に調査範囲の南半分に集中して分布し、同じところに重複して建てられている。北半分にも住居跡はあるが、それぞれ離れて建てられている。ちょっと変わった住居として、フラスコ形土坑が廃絶された後、埋まりきる少し前で、わずかに凹んでいる状態の時に、この凹みをそのまま堅穴住居として利用していたと思わせるものがある。

〈堅穴住居状遺構〉

形も大きさも堅穴住居跡とほとんど同じだが、炉を持たないものである。北半部から4基、それぞれ離れて発見された。平面形は、一部四角に近いものもあるが、ほとんどが円形で、直径2～3mの大きさである。隣り合う住居と非常によく似ているが、これらの住居と違って、覆土に炭化物がなく、床もデコボコしておらず、人が住んだ感じがしない。時期を推定する材料はないが、縄文時代中期後葉～末の可能性はある。

〈土坑〉

これまでに14基、やはり北半部から発見されている。このうち、調査区のほぼ中央から発見された2基は、検出状況から、おそらく江戸時代の終わり～明治時代のものと思われる。1.5×1m程度の楕円形で、深さ20～30cm、骨などは出土していないが、墓の可能性もあるかもしれない（昨年北部に該期の墓壙を検出）。

残りの10基は、検出状況から縄文時代のもと思われる、やはり中期後葉～末の可能性が高い。これらは、形などから三つのグループに分けることができる。一つは、平面形が円形のもので、4基あり、大きさは直径1m前後、深さは30cm～70cmである。二つ目は、平面形が楕円形のもので、3基あり、大きさは1.7～1.1×1m弱で、深さは20cmから50cmである。三つ目はフラスコ形土坑で、5基あり、大きさは、上場は直径0.9～2mで、底面は直径1.2～2.3m、深さは1.2～2.2mある。5基のうち3基からは、覆土から完形に近い土器や磨石が出土している。

〈出土遺物〉

昨年に引き続き、遺構の数の割に遺物が非常に少なく磨石の出土が目立つ。

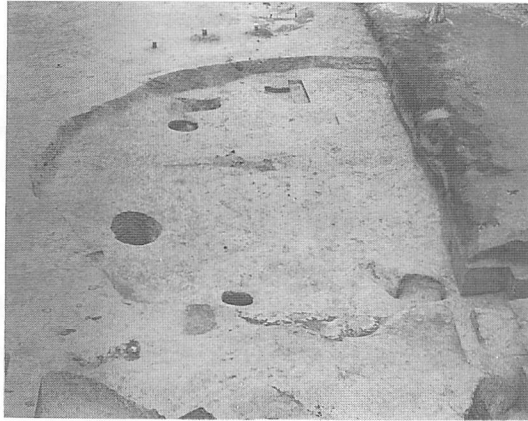
縄文土器は、今年度コンテナ約9箱（半分が一棟の大形住居跡から出土）、これまでに約13箱出土した。大部分は縄文時代中期後葉～末の土器で、ほんのわずか晩期後半の土器が出土している。また非常に少ないが弥生土器らしい破片もある。

石器は、今年度約600点出土し、計約800点となった。800点のうち約600点は磨石で、その他、磨製石斧が約20点、石鏃約80点、搔器類約100点と、剥片石器が少ないのも昨年からの特色である。

今年度は、この他、斧状土製品2点、軽石を加工した容器、大形（直径10cm、長さ1m程度）の石棒の破片数点が出土している。石棒は昨年にも数点出土しており、琥珀、直径約5cmのアスファルトの塊なども出土している。

3. まとめ

昨年からの調査で（総調査面積2,011㎡）、浜岩泉Ⅰ遺跡の今回の調査区は、縄文時代中期後葉～末の集落跡であることがわかった。三陸海岸北部での該期の調査例は少なく、中期後半の集落研究に大いに役立つことと思われる。また、人面付石製品、中期後葉（大木8b式）土器を出土した中机遺跡が、本遺跡から北北東に約12kmの距離にあり、また小規模ながら継続して調査が行われている中期後葉の集落跡、森の越遺跡が南西に約10kmの位置にあり、これらの遺跡との比較も浜岩泉Ⅰ遺跡を理解する上で重要であろう。そして、岩手県あるいは東日本において、この時期の集落の調査例は多く研究も進んでいるので、その成果を参照することで、浜岩泉Ⅰ遺跡の位置づけ（地域的特徴）がわかるものと期待される。



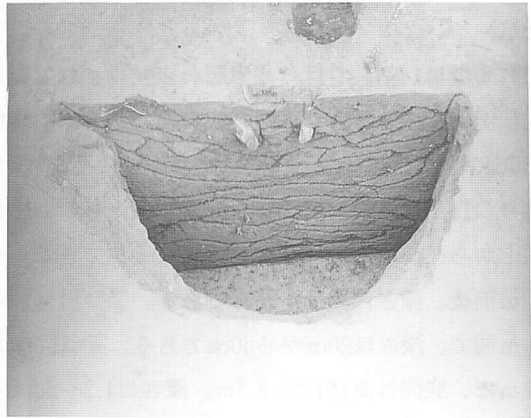
大形住居跡 (1)



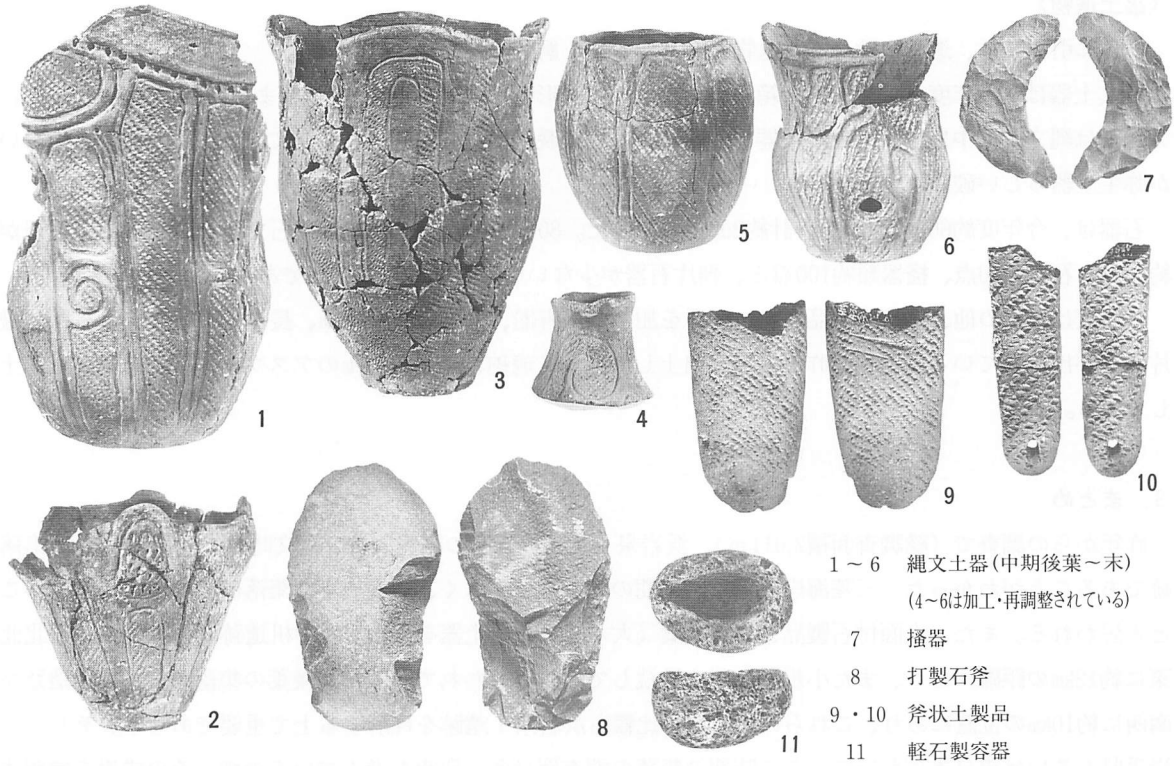
大形住居跡 (2)



大形住居跡 (3) (複式炉? を持つ)

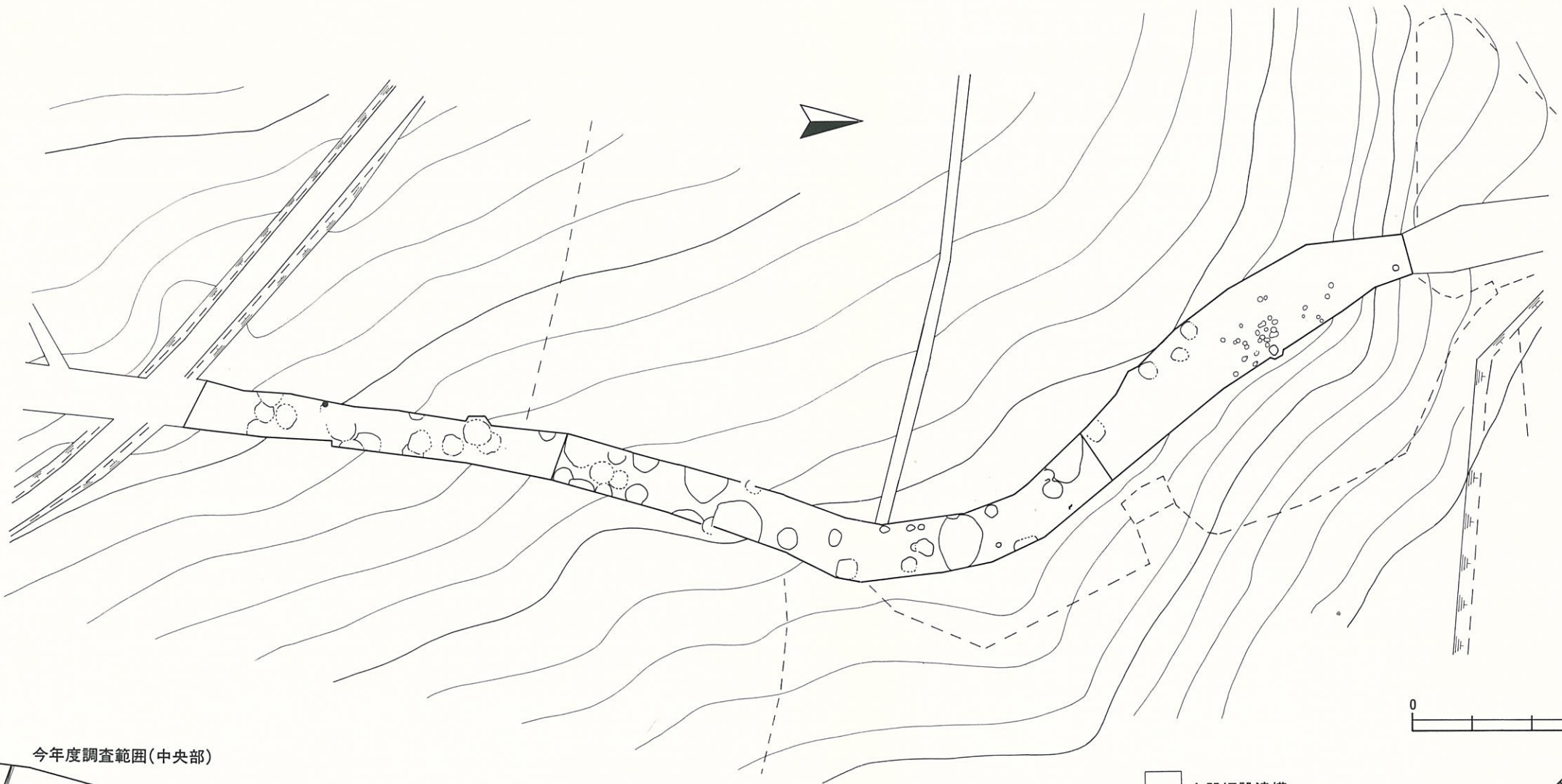


竪穴住居跡とフラスコ形土坑の重複



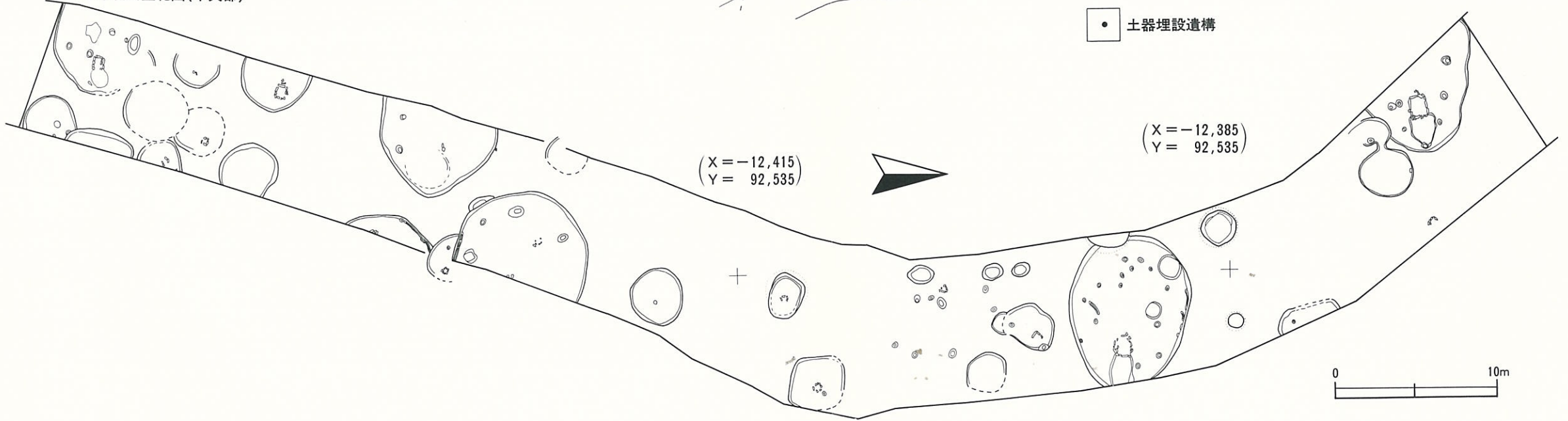
- 1 ~ 6 縄文土器 (中期後葉 ~ 末)
(4~6は加工・再調整されている)
- 7 搔器
- 8 打製石斧
- 9・10 斧状土製品
- 11 軽石製容器

浜岩泉 I 遺跡検出遺構・出土遺物



今年度調査範囲(中央部)

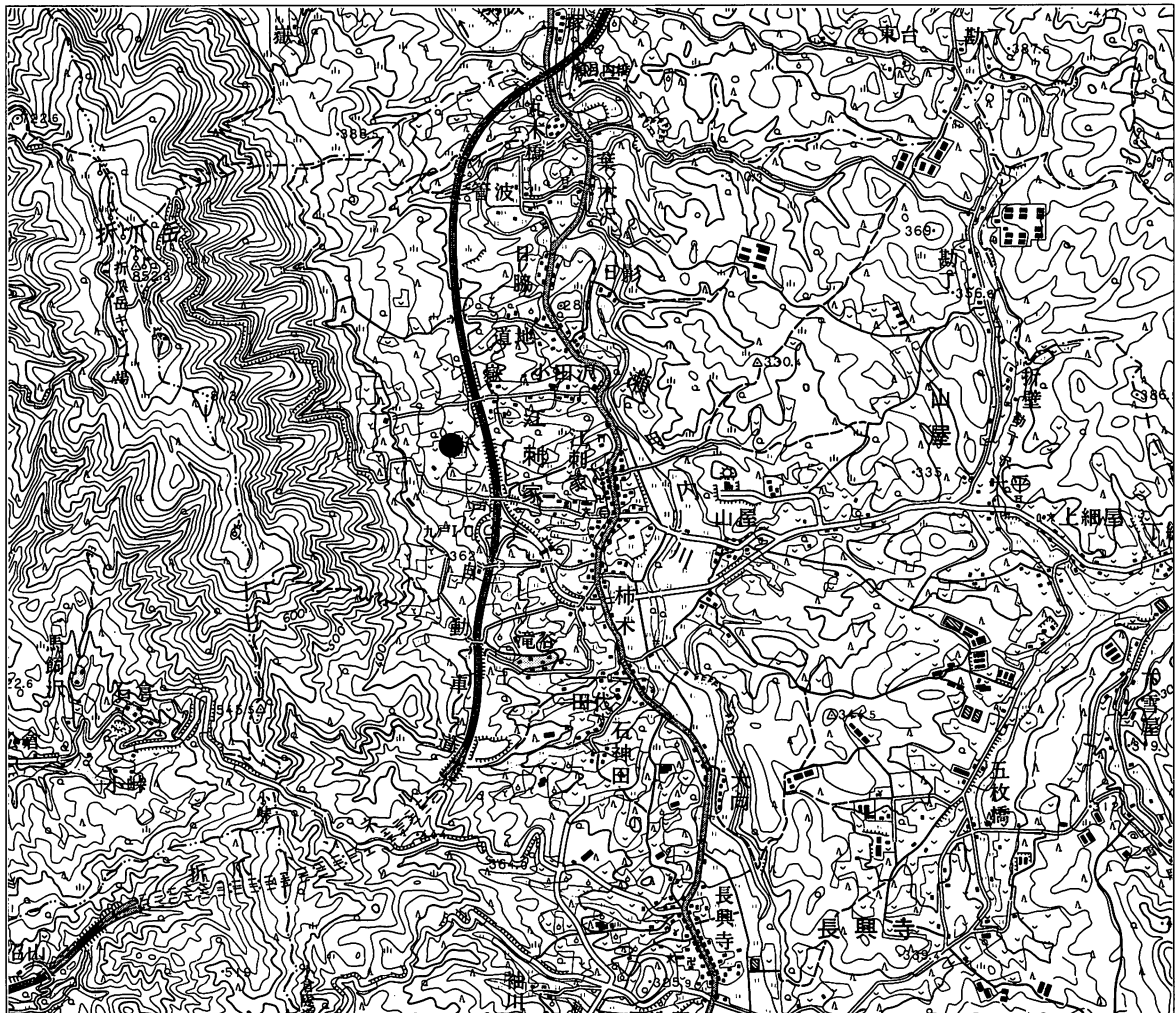
● 土器埋設遺構



浜岩泉 I 遺跡遺構配置図

(12) 江刺家 IV 遺跡

所在地	九戸郡九戸村江刺家第13地割字鍋倉45ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	県営畜産経営環境整備
発掘調査	平成8年4月11日～6月21日
調査対象面積	2,000㎡
発掘調査面積	2,000㎡
遺跡番号・略号	JF-02-1067・ESKIV-96
調査担当者	浜田 宏・篠根敬志
協力機関	九戸村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 一戸

1. 遺跡の位置と立地

江刺家IV遺跡は、九戸村の中心地である伊保内から、国道340号を約5.5km北上した付近にある八戸自動車道九戸インターチェンジの西北西約1kmの地点に所在する。遺跡は、瀬月内川を東方に臨む山麓斜面に立地し、標高は320～340mと、遺跡内でおおよそ20mの高低差がある。調査前の状況は、畑地及び荒地で、調査区のほぼ半分は農作業用道路として利用されていた。

なお、調査区北側の沢付近には、九戸村教育委員会によって立てられた「鍋倉包含遺跡」という標柱がある。この遺跡は、周辺では既知の有名な遺跡であったようである。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、竪穴状遺構3棟、土坑33基、炉跡3基、埋設土器2基、焼土遺構5カ所である。これらは、時期の違いはあるが、ほとんどが縄文時代の遺構である。その分布状況は、標高の高い面には縄文時代前期末から中期はじめにかけての遺構が、それより低い面には中期末から晩期を中心とする遺構が集中している。また、土器・石器などの遺物の出土状況も、遺構と同様の傾向が窺える。

〈竪穴住居跡〉

9棟の竪穴住居跡が検出されたが、時期的には、縄文時代前期末から中期初頭に属するものが2棟、中期末から後期初頭のものが3棟、後期中葉から後葉のものが2棟、時期不明のものが2棟である。

前期末から中期初頭の住居跡のうちの1棟は、5.5×7.0mの規模をもつ比較的大型のもので、平面形は楕円形を呈する。床面中央部には、土器埋設炉が設けられている。もう1棟の住居跡も同じ形態の炉をもつが、規模は3.0×3.6mとやや小型である。

中期末から後期初頭にかけての住居跡では、直径6.0mを越えるものを最大とし、その他は3.0～4.0mの規模である。いずれも平面形は円形で、数個の支柱穴のほかに壁柱穴がほぼ等間隔に巡らされている。炉は、石囲炉と複式炉がともに中央部からわずかに壁に寄った部分に設置されている。

後期中葉から後葉と思われる2棟は、ともにほとんどが調査区域外にあり炉が確認できなかったが、出土した土器や柱穴の配置などから該期のものとした。

〈竪穴状遺構〉

小型の竪穴住居跡ほどの規模をもつが、炉が設置されていないものを竪穴状遺構とした。規模は、直径2.0～2.7mである。3棟検出されているが、1棟からは中央に柱穴が1個確認された。このことから、大型の貯蔵施設であった可能性も考えられる。

〈土坑〉

33基のほとんどが縄文時代の土坑である。平面形は円形のもの最も多く、その他に長方形を呈するものもわずかにみられる。断面形はフラスコ状・ピーカー状・浅鉢状などである。数基あるフラスコ状土坑のうち、2基から炭化した堅果類（クルミ・クリ）が出土している。また、扁平な礫を1個または数個伴う土坑がみられるが、墓壇であった可能性が高い。これらの土坑の時期は、出土遺物などから、主に前期末・後期・晩期に属するものと考えられる。

〈炉跡〉

いずれも、本来は住居跡に伴う炉と考えられるが、その周辺に柱穴等の住居跡の痕跡は確認されなかった。3基とも石囲炉で、うち2基には炉内に晩期の鉢形土器が埋設されていた。もう1基の時期は不明であるが、

検出された場所などから、中期に属するものと考えられる。

〈土器埋設遺構〉

調査区中央部の東寄りと西寄りに1基ずつ検出された。ともに正立の状態で見られるが、農作業用道路を作る際に削平を受けているためか、口縁部から体部上半にかけてが一部欠損している。時期は、後期か晩期に所属すると考えられる。

〈焼土遺構〉

検出状況から、いずれも縄文時代の焼土と考えられるが、詳細な時期は不明である。6基のうち、現地性焼土が5基で、1基は投げ捨てなどの異地性のものである。

〈出土遺物〉

遺物は、大コンテナ25箱ほどの土器類と400点あまりの石器・石製品が出土したほか、炭化したクリやクルミなどの堅果類がある。すべて縄文時代の遺物であり、主体は中期・後期中葉～後葉・晩期である。前期末葉や後期初頭のものもわずかにみられる。

器種は、深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器・香炉形土器・壺形土器・単孔土器・ミニチュア土器などがある。土製品は、耳飾りなどの装飾品2点、土偶3点が出土している。

石器は、石鏃・石匙・石錐・石篋・搔削器などの剥片石器や磨石・凹石・半円状偏平石器・石皿・石斧などの礫石器が出土している。石製品では、石刀3点、石棒の先端部1点、石剣と思われるもの1点、円盤状石製品7点、軽石製品1点がある。フレイク・チップを除くこれらの総数は、約200点である。

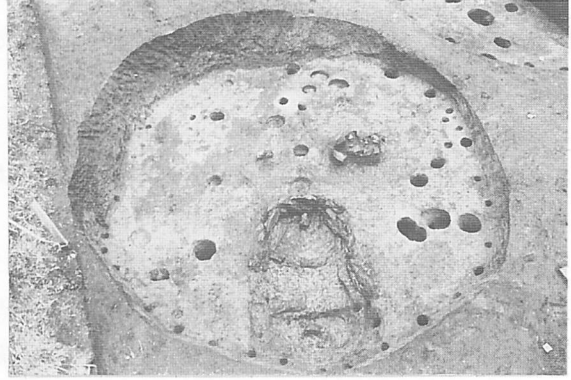
3. まとめ

今回の江刺家IV遺跡の調査は、昭和56年の東北縦貫自動車道に関連する発掘調査に次ぐ2回目のものであった。当時の調査では、縄文時代中期末から後期にかけての住居跡7棟と土坑20基などが確認されている。

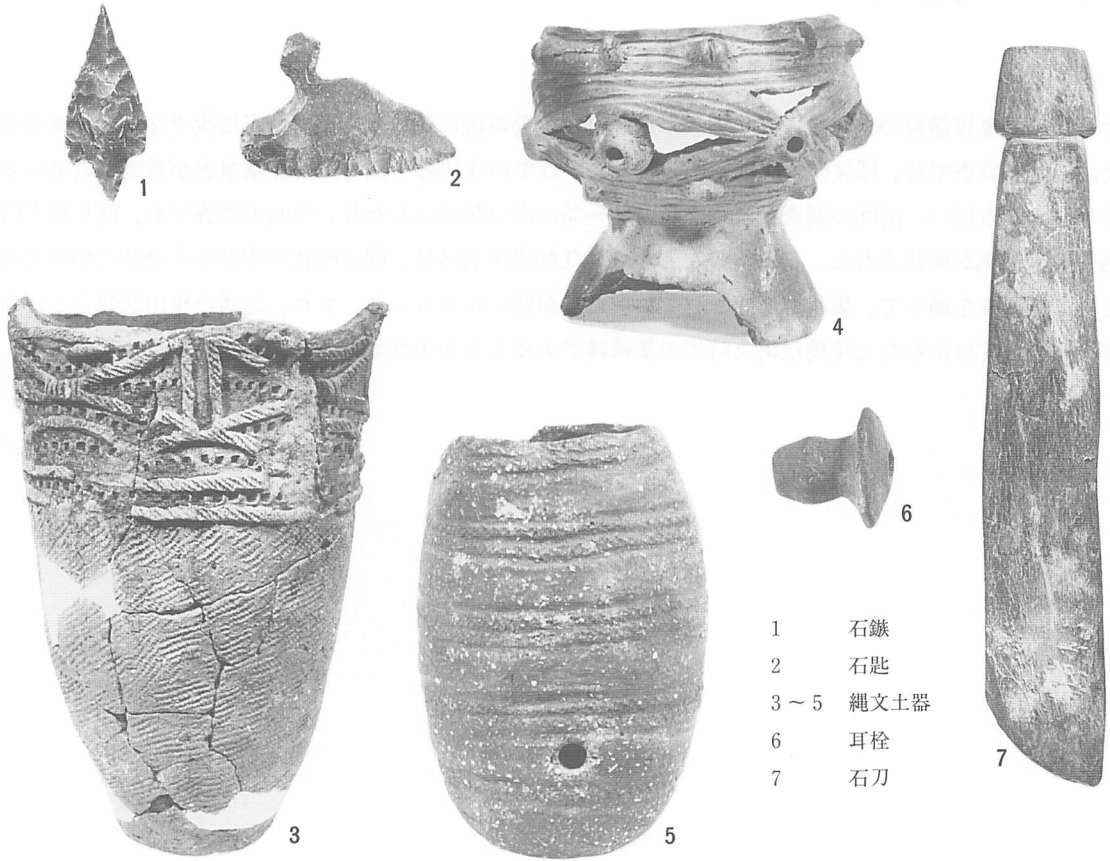
今年度の調査区は、前回の調査区より標高で20～35m高い部分にあたり、今回の調査でも、同じ縄文時代の各時期の遺構が確認された。これらのことから、江刺家IV遺跡は、縄文時代の中期から晩期にかけてを中心とする各時期を通して、集落が形成されていたことが明らかとなった。また、遺構の検出状況などから、遺跡全体としてはかなり大規模な縄文時代の集落跡であることが予想される。



遺跡全景

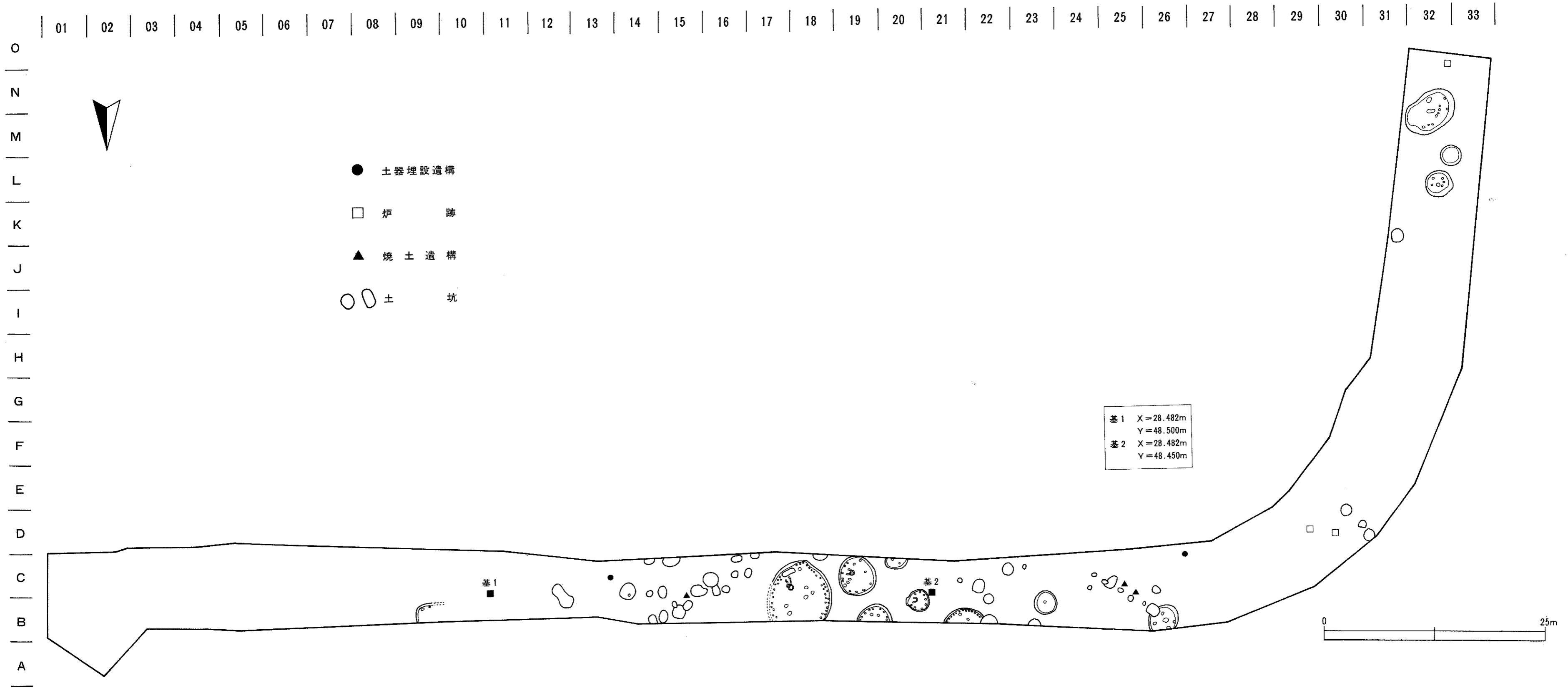


縄文時代の住居跡



- 1 石鏃
- 2 石匙
- 3～5 縄文土器
- 6 耳栓
- 7 石刀

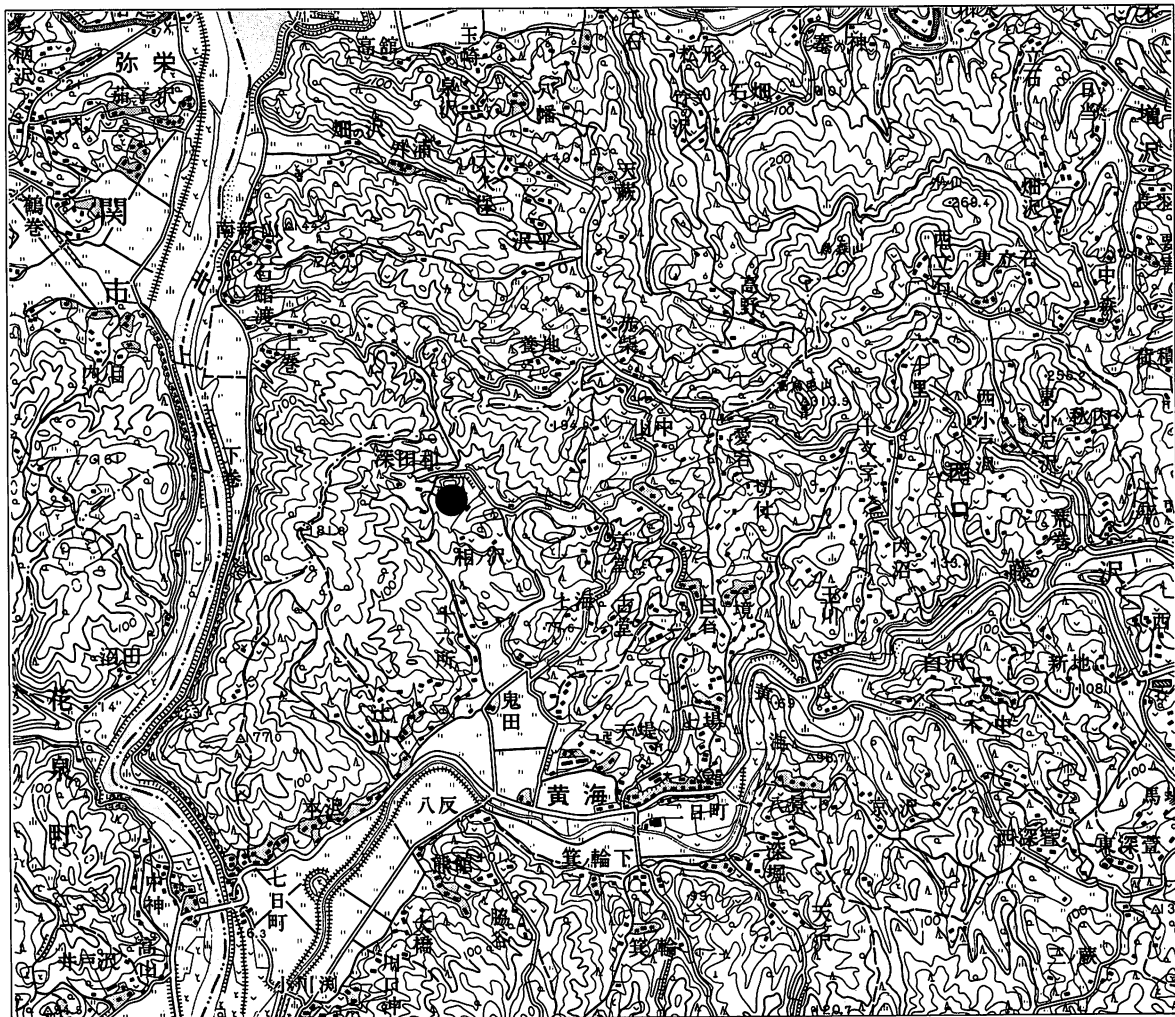
江刺家IV遺跡検出遺構・出土遺物



江刺家IV遺跡遺構配置図

(13) 相ノ沢遺跡

所在地 東磐井郡藤沢町黄海字深田和263番地ほか
依頼者 岩手県千厩地方振興局両磐土地改良事業所
事業名 畑地帯総合土地改良事業
発掘調査期間 平成8年4月8日～6月23日
調査対象面積 400㎡
発掘調査面積 400㎡
遺跡番号・略号 ○E29-0315・AS-96
調査担当者 宮本節子・菊地榮壽
協力機関 藤沢町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 千厩

1. 遺跡の立地

相ノ沢遺跡は、藤沢町黄海二日町の北西約2.5km、標高100mほどの丘陵の頂上部とその周辺の斜面部に広がる。調査区は全体のうちの南西向き斜面部である。調査区の南西側は道路、北西側は水田によって削られている。調査開始前、調査区は山林であった。また調査区東端の北側には近世から明治時代にかけての墓がある。遺跡の東約200mあたりに川幅2mほどの相ノ沢川が流れている。

2. 調査の概要

平成7年度からの継続調査で、今年度は調査区中央部から北西側を中心に400㎡が対象となった。

今年度検出された遺構は縄文時代後期・晩期の竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構2棟、土坑28基、焼土17ヶ所、柱穴128基、埋設土器1基である。これらの精査とともに昨年度検出された配石遺構・柱穴・焼土などの精査を行った。また調査区の大部分が縄文時代後期・晩期の「捨て場」となっている。

〈縄文時代後・晩期の捨て場〉

遺跡を構成している土の大部分は「捨て場」に廃棄されたものである。「捨て場」の土は次のように形成されたと考えられる。後期前葉頃、人々が斜面に、どこかを掘った時に得た土、焼土、不要になった土器や石器、石器製作で生じたフレイク、チップ、食事で生じたごみの類を廃棄し始めた。土や廃棄物の状態は場所により異なるが人々の廃棄は続いた。整理作業の途中なので正確なことは不明だが後期末頃の遺物はないようなので、後期後葉のある時期以降、しばらくそこでの生活は途絶え、晩期前葉に再びこの地で生活が始められたと推定できる。そして縄文晩期大洞A式の古い頃を最後に人々はこの場所を去ったと考えられる。「捨て場」の土は最も厚い所で1m程堆積している。

「捨て場」は時期によって形成箇所が移動している。後期中葉には調査区中央から北西に中心があり、晩期前葉から中葉にかけてはほぼ調査区中央に中心が移っている。最後の時期には中央より南西側に中心が移っている。

〈縄文時代後～晩期の竪穴住居跡〉

調査区東側から2棟検出された。北側の1棟は壁の一部しか確認できずプランは不明である。炉は石囲炉が検出され、炉を中心に考えると直径約4m前後の住居と推定される。炉は礫を円形に並べ作られており、炉を使用したと考えられる焼土は検出されなかった。床面には炭化材が残り、埋土に多量の焼土が混じっていたことから住居の上屋が焼け落ちたものと考えられる。時期は竪穴に伴う土坑出土の土器から晩期と考える。南側の1棟は壁の残りが悪くプラン・規模の確認が難しい。石囲炉が平らな石で蓋をした状態で検出された。炉の使用によるかたたくしまった焼土が3cm程の厚さで残り、蓋をした石との間には土が堆積していた。

〈縄文時代後～晩期の住居状遺構〉

調査区東側から2棟検出された。2棟とも壁の一部しか確認できずプラン・規模は不明である。

地山を掘り込み作られているが遺構内の遺物はほとんどなく時期は特定できない。

〈縄文時代後・晩期の土坑〉

調査区中央から西側に比較的多く、地山まで掘り下げて検出されたものがほとんどである。埋土に時期を特定できる遺物が含まれていないものが多い。作られた目的は不明だが、配石遺構とも考えられるもの（周囲の壁に沿って石が埋められている）、埋められている石のひとつだけが立石状のもの、大きな石がひとつだけ埋められているものが数基あり、墓墳である可能性もある。プランはほとんどが円形・楕円形で埋土は単層のものが多く、短期間に埋め戻されたと考えられる。規模は現在把握しているものでは最大 開口部直

径180cm深さ34cm、最小開口部直径38cm深さ10cmである。

〈縄文時代後期の配石遺構〉

調査区ほぼ中央と1-2グリッドから昨年度検出された。中央のものは偏平な粘板岩（大きさは30×40cm前後）などを4個、1-2グリッドのものは3個を斜面に沿って階段状に配している。石の下に土坑などは検出されなかった。

〈縄文時代後期・晩期の焼土〉

調査区中央から北西側にかけて検出された。2-9グリッドのものは固くしまっており、そこで火が焚かれた可能性が高い。石や土器で囲ったり、区画したものはない。形状は不整形で厚さも一定でなく、捨てられた焼土と考える。焼土からは土器片や炭化物・獣骨が多く出土している。検出面と遺物から後期・晩期の両時期のものとする。

〈柱穴群〉

調査区北側の平坦部から南東側にかけて検出された。竪穴住居跡または建物跡が調査区外へ広がっていることが想定されるが、現時点で把握できた構築物はない。地山まで掘り下げ検出されたものが多く時代を特定できる遺物は出土していない。柱痕跡が残っていたのは数基で、ほとんどは埋土が単層で開口部直径14cm～40cm 深さ8cm～60cmの規模のものである。

〈縄文時代晩期の埋設土器〉

2-14グリッドから検出され、下半部の失われた晩期の土器が埋められていた。埋土に焼土粒が含まれていたが土器が火をうけた形跡は見られなかった。

〈出土遺物〉

出土遺物の大部分は縄文後期から晩期のもので遺構外からの出土である。土器片が大コンテナで約111箱、石器・石製品が約15箱出土している。これまでに把握している内訳は、石鏃・石錐・石匙が約3000点（うち石鏃が2500点以上を占める）、磨製石斧52点、打製石斧4点、石皿75点、凹石・敲石・擦石が295点、石剣・石刀・石棒が71点、石錘1点、土偶50点、円盤状土製品9点、土錘9点、耳飾り9点、鐔形土製品3点などである。他に多くの焼けた獣骨と、サメと推定される歯が出土している。

3. まとめ

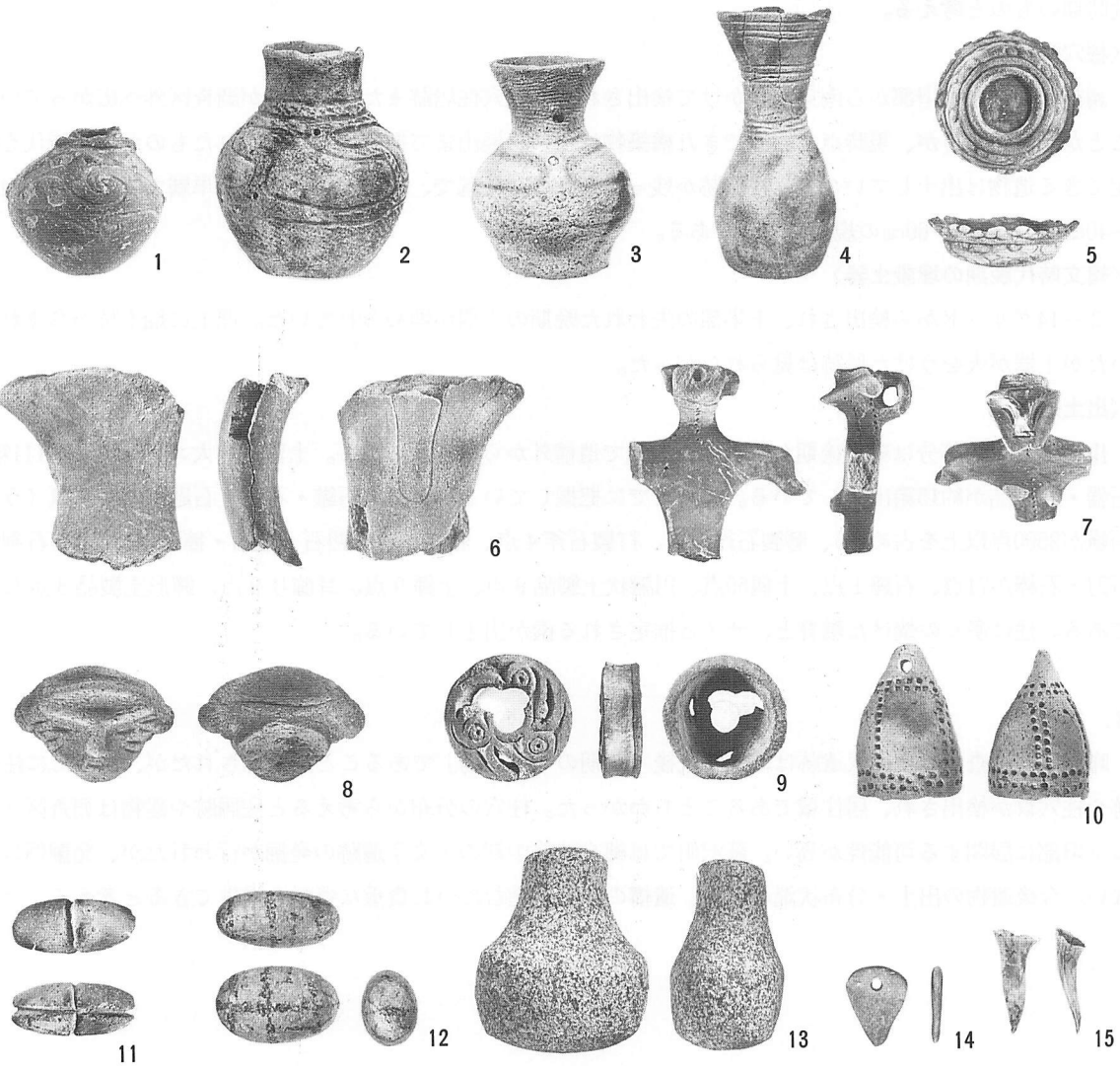
昨年度の調査で、相ノ沢遺跡は縄文時代後・晩期の「捨て場」であることが確認されたが、あらたに住居跡や柱穴群が検出され、居住域であることもわかった。柱穴の分布から考えると住居跡や建物は調査区北側の平坦部に展開する可能性が高い。藤沢町では縄文時代中期の十文字遺跡の発掘が行われたが、発掘例は少ない。今後遺物の出土・分布状況の把握、遺構の検討が進むにつれ貴重な資料を提供できると考える。



石囲炉検出状況



竪穴住居に伴う土坑



1 ~ 4 壺形土器(後期)

5 浅鉢(晩期)

6 ~ 8 土偶

9 耳飾(晩期)

10 鐸形土製品

11 土錘

12 石錘

13 石冠状石器

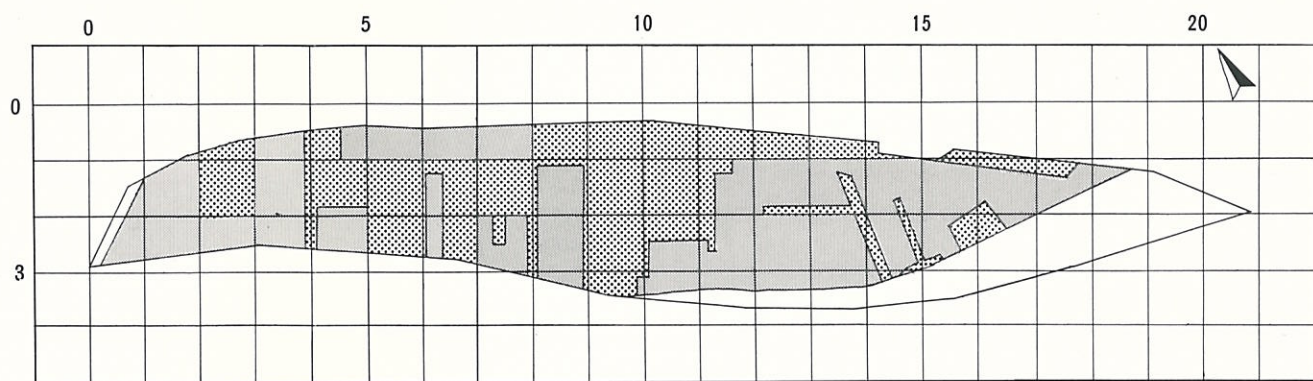
14 垂飾品

15 サメの歯

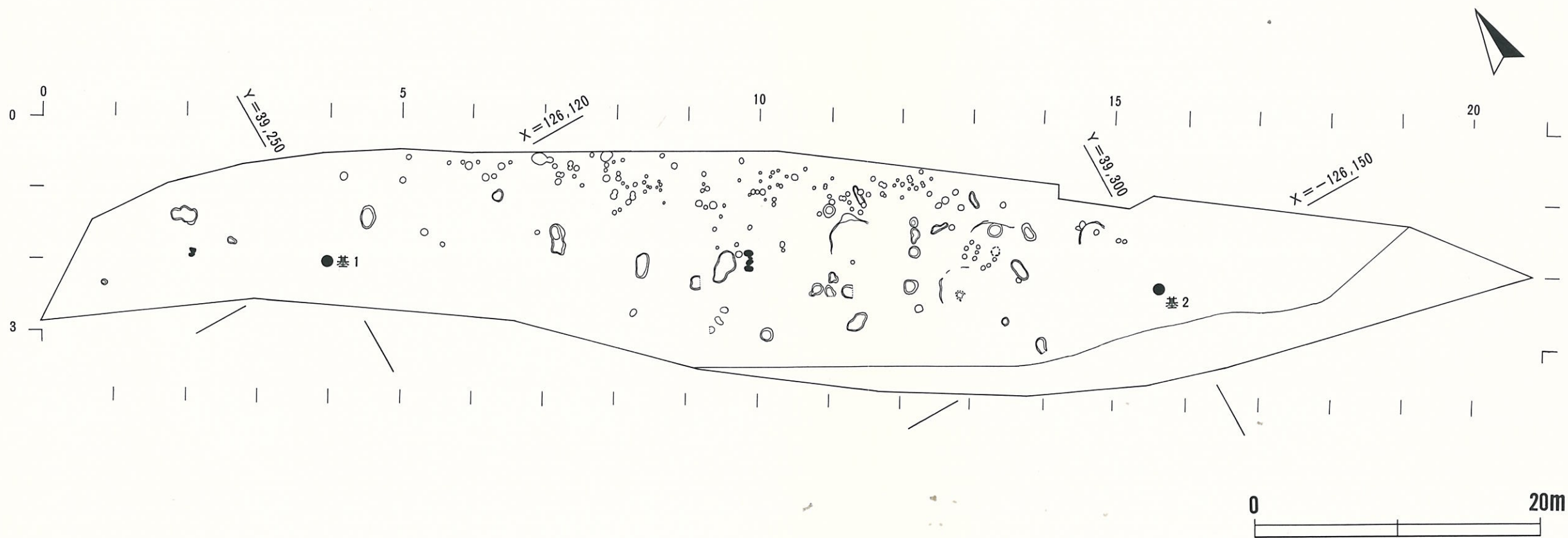
相ノ沢遺跡検出遺構・出土遺物



調査区 位置図



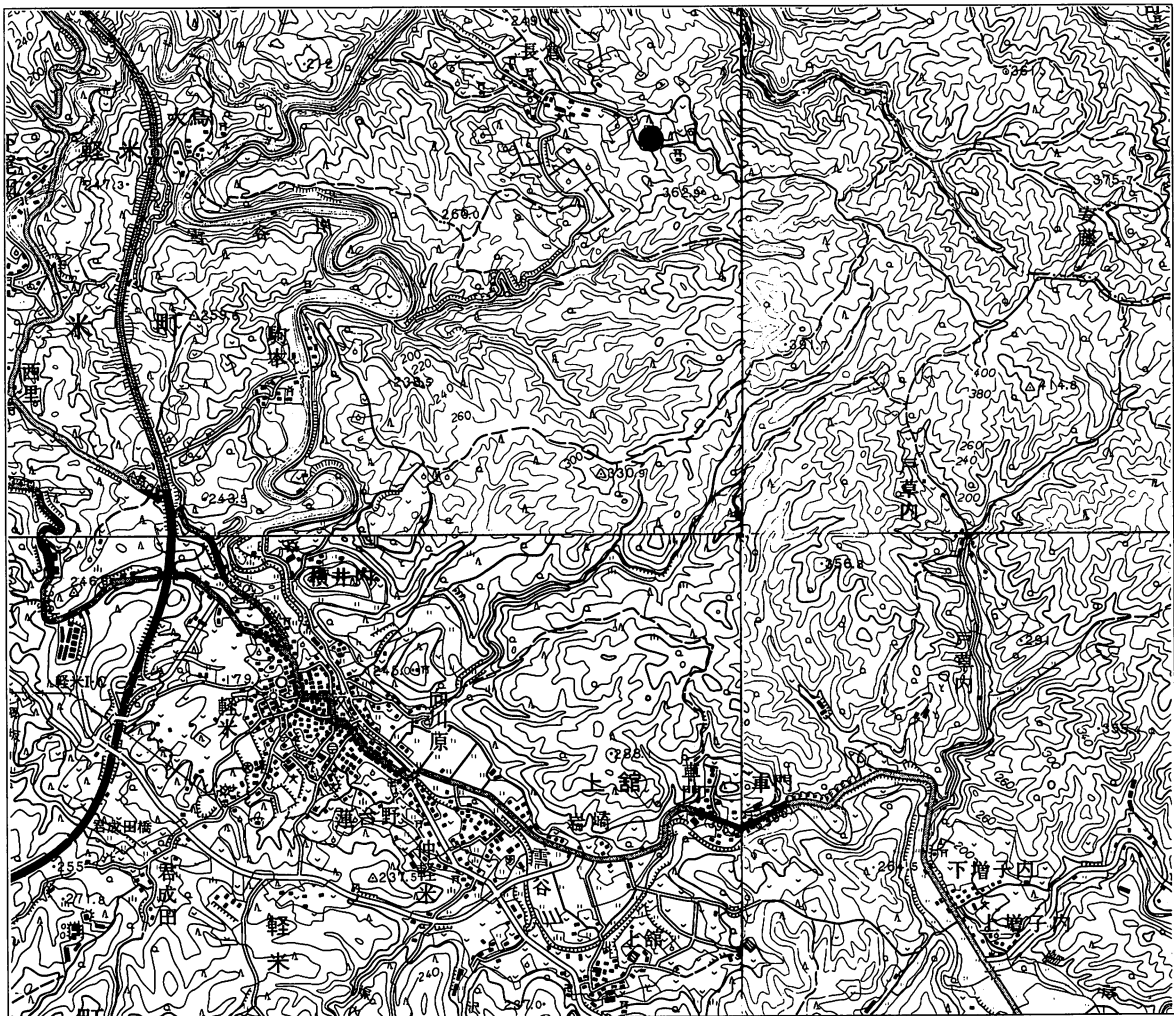
- 平成7年度 調査区
- ▨ 平成8年度 調査区



相ノ沢遺跡遺構配置図

(14) ながくら I 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字長倉一本木
委託者 岩手県二戸地方振興局二戸土地改良事業所
事業名 広域農道整備
発掘調査期間 平成8年4月10日～11月8日
調査対象面積 1,342㎡
発掘調査面積 1,342㎡
遺跡番号・略号 I F 63-2309・NK I-96
調査担当者 中川重紀・星 雅之・平澤里香
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 三戸

1. 遺跡の立地

遺跡は、軽米町役場の北東4.4kmに位置し、北側に舌状に延びている尾根頂部の平坦部から東西斜面部に立地し、丁度鞍のようになっている地形を呈している。標高は最頂部で296m前後で、遺跡の現状は山林、原野であるが、以前には畑地として利用されている。

遺跡の南東方向には、明神神社を祀っている標高340mの明神山があり、北西方向には眼下に長倉の集落が望め、遠望して青森県側の山々が眺望できる。

2. 調査の概要

調査は平成6年度から3年間にわたる継続調査で、今年度は全調査区の中央平坦部、南側斜面部と東側斜面部について調査を実施した。平坦部と南側斜面部は昨年度の未終了部分が含まれる。

今年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡・竪穴住居跡状遺構21棟、堀立柱建物跡5棟、柱穴・柱穴状土坑440基、土坑397基、石囲い炉4基、焼土14基、集石1基、柱穴列1条、遺物包含層1カ所である。

〈竪穴住居跡・竪穴住居跡状〉

調査区中央平坦部と南側斜面部及び東側斜面部傾斜変換点付近から縄文時代後期～晩期初頭に属する21棟が検出された。中央平坦部から検出されたものの中は、規模が径4.8mの円形で、床の中央に土器埋設炉をもち、壁際に沿って円形にめぐる柱穴群が検出された。南側斜面部から検出されたものほとんどは、斜面下方の北側が一部削られているため明確ではないが、平面形は円形で、規模は径3.5～4.0mと推測される。東側斜面部の包含層から検出したものについても黒褐色土中のため明確ではないが、規模は南側斜面部から検出されたものと同様で、地床炉が住居中央付近に見られる。

〈堀立柱建物跡〉

調査区中央の平坦部から、縄文時代晩期のものと考えられる、正方形若しくは長方形のものを5棟検出した。最大規模の建物の柱穴間隔は5.8m×5.8mの正方形で、柱穴の開口部が1.1～1.2m、深さは1.1～1.5m、柱痕跡の径が0.8m程のものもある。最小規模の柱穴間隔は2.5m×3.5mの長方形で、柱穴の開口部が0.5～0.75m、深さ1.2～1.4mであった。現段階において明確ではないが、類似した柱穴が多数検出されていることから検証次第では棟数がかなり増加すると思われる。

〈土坑〉

主に調査区中央平坦部から東側斜面部にかけての傾斜変換点に多数検出された。これらの大半は後期のものであり、中央部の土坑は全て埋め戻されている。平面形は円形で、断面形はフラスコ状及び皿状を呈するものが大半であり、規模は大きいもので開口部1.5～2.0m、深さ0.1～0.8mである。断面形がピーカー状のものは開口部0.85～1.2m、深さ0.7～2.0mで、検証次第では柱穴になる様相を呈している。

〈柱穴・柱穴状土坑〉

調査区中央平坦部から南側斜面部、及び東側斜面部傾斜交換点に大小の柱穴や柱穴状土坑が多数検出された。柱穴の規模は、開口部0.3～0.5m、深さ0.2～1.0mと様々である。これらについては、堀立柱建物跡や竪穴住居跡の柱穴であった可能性が考えられる。

〈柱穴例〉

調査区中央の平坦部北側から東側斜面部との傾斜交換点付近で、長さ約10m、幅0.5m前後の布堀状を呈した溝と、溝内から上端径0.3m前後で深さ0.5～0.9mの柱穴6基を検出した。

〈焼土・焼土遺構〉

東側遺物包含層中のものは黒色土との混合土が殆どであったので投げ込み焼土の様相を呈している。一部は住居に伴った石囲い炉や地床炉の痕跡と考えられるものもある。

〈集石〉

調査区中央において、約1.3m×0.4mの範囲で径3～5cmの礫が長方形状に集められていた。礫の下に土坑や埋設土器等はみられなかったが、周囲から土器片と石製品を少量検出した。

〈遺物包含層〉

調査区の西側・東側両斜面部に形成されている。今回調査した東側遺物包含層は、深さが1～2.5mである。今年度の出土遺物の大半がこの包含層から出土しており、縄文時代後期～晩期の遺物と混在して獣骨片及び焼土が散在することから、生活残滓廃棄物場所として機能していたと考えられる。

〈出土遺物〉

今年度出土した遺物は、大コンテナで約250箱の土器と約260点の土製品、約12箱の石器と石製品、約1箱の骨片、炭化物、琥珀等が、出土している。

土器は縄文時代後期から晩期初頭のもものが中心で、完形品や、完形品に近い土器は縄文時代後期のもものが多く、器種としては、深鉢形土器、浅鉢形土器、鉢形土器、片口土器、注口土器、香炉型土器、壺型土器、ミニチュア土器がある。なお、ごく僅かであるが、縄文時代前期の土器片が出土している。

土製品は、土偶、スタンプ形土製品、イモガイ形土製品、鐸形土製品、きのこ形土製品、円盤形・方盤形三角形土製品等、多数出土している。

石器は、石鏃、石匙、削器・削搔器、石錐、石槍、クサビ形石器、石錘、大小の磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿等が、石製品では有孔製品、石棒、石剣、石刀、異形石器、等が出土している。

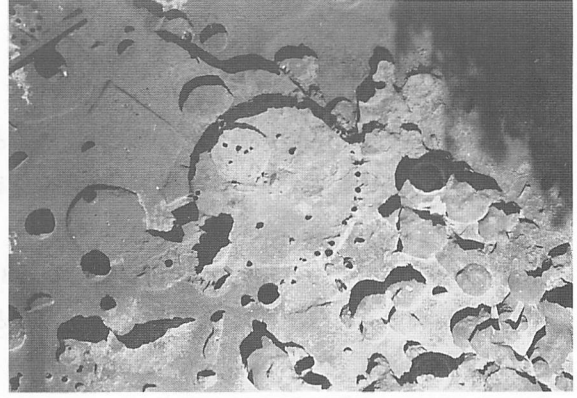
3. まとめ

本遺跡の調査結果から、縄文時代前期の一時期と縄文時代後期～晩期初頭にかけての生活の一端が明らかになった。東側遺物包含層から出土した遺物は縄文時代後期のもものが多く見られたのに対し、明確に後期の住居跡といえるのは1棟だけである。南側斜面部が大きく削りとられていることや、中央平坦部の土坑には埋め戻した痕跡が見られたことから、晩期の頃には大規模な造成を行なったと考えられる。

昨年度に検出した大型住居跡の東側で、土坑群の北側にあたる区域については、遺構が全く検出されていない。広場的な場所と推定されるが、不明である。今後該期の類似例などとの比較から検証をおこなってきたい。



遺跡全景(上方が南)



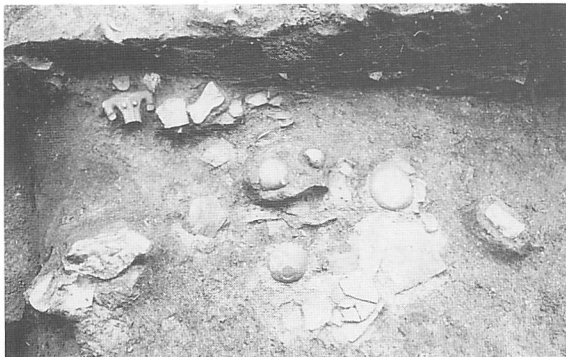
縄文時代住居跡



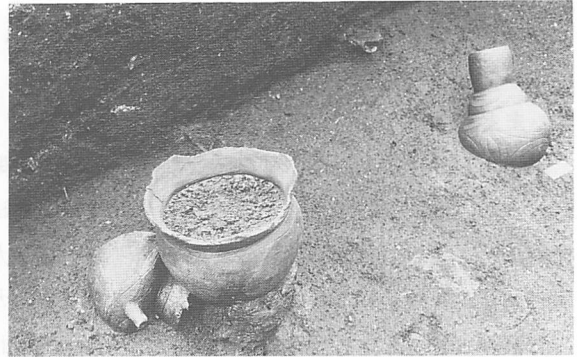
縄文時代住居跡



石囲い炉



遺物出土状況



遺物出土状況

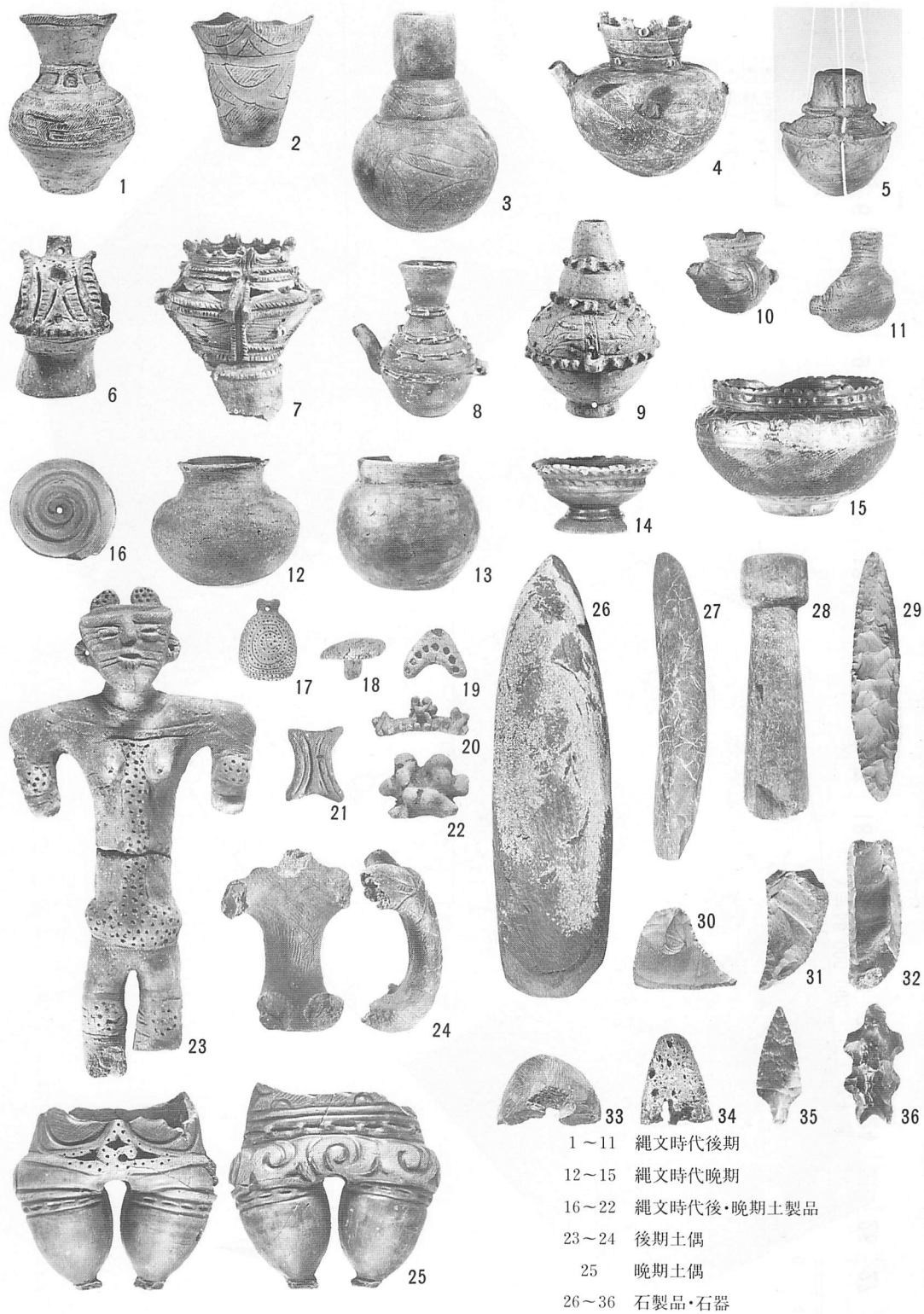


遺物出土状況

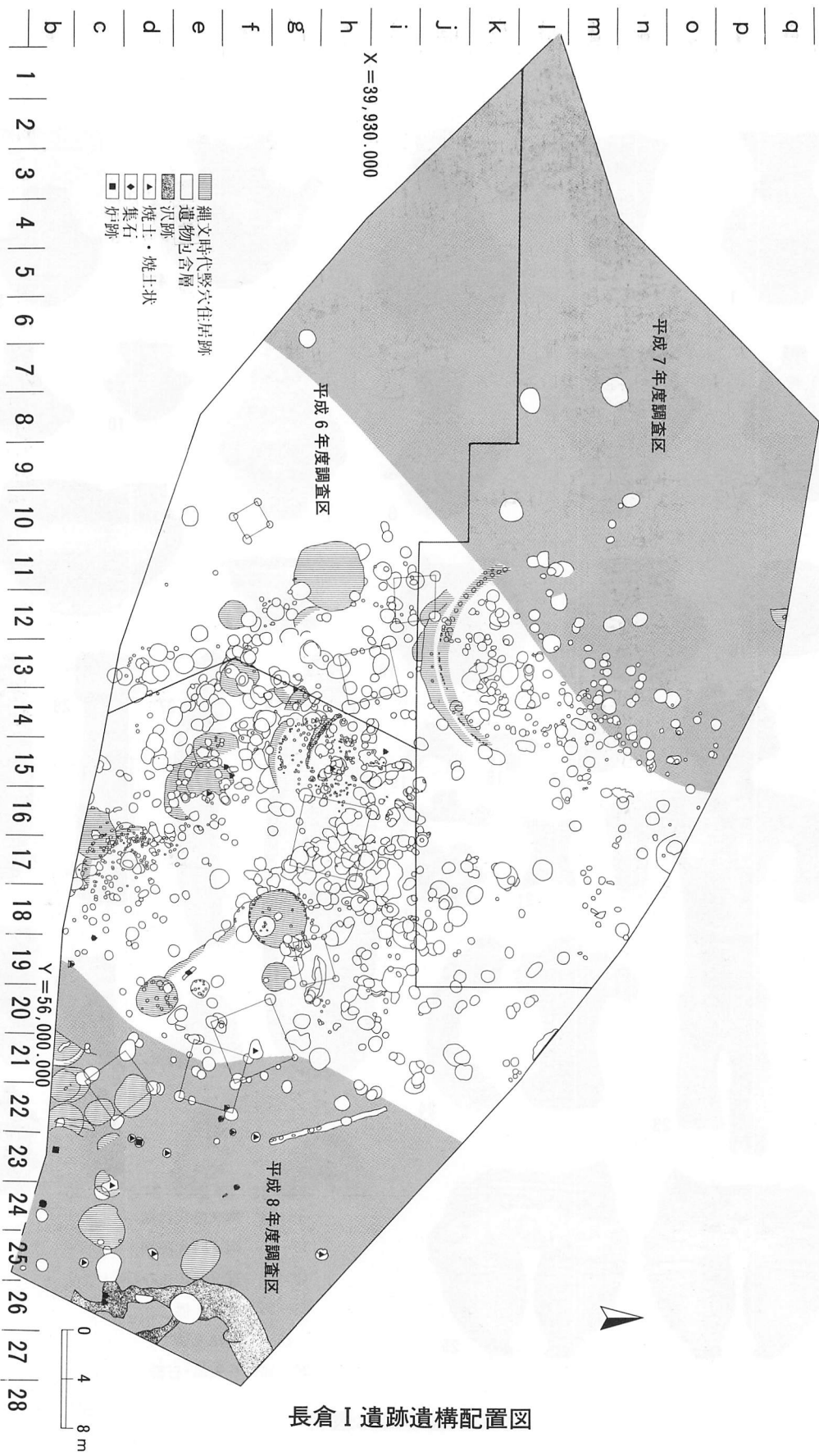


遺物出土状況

長倉 I 遺跡検出遺構



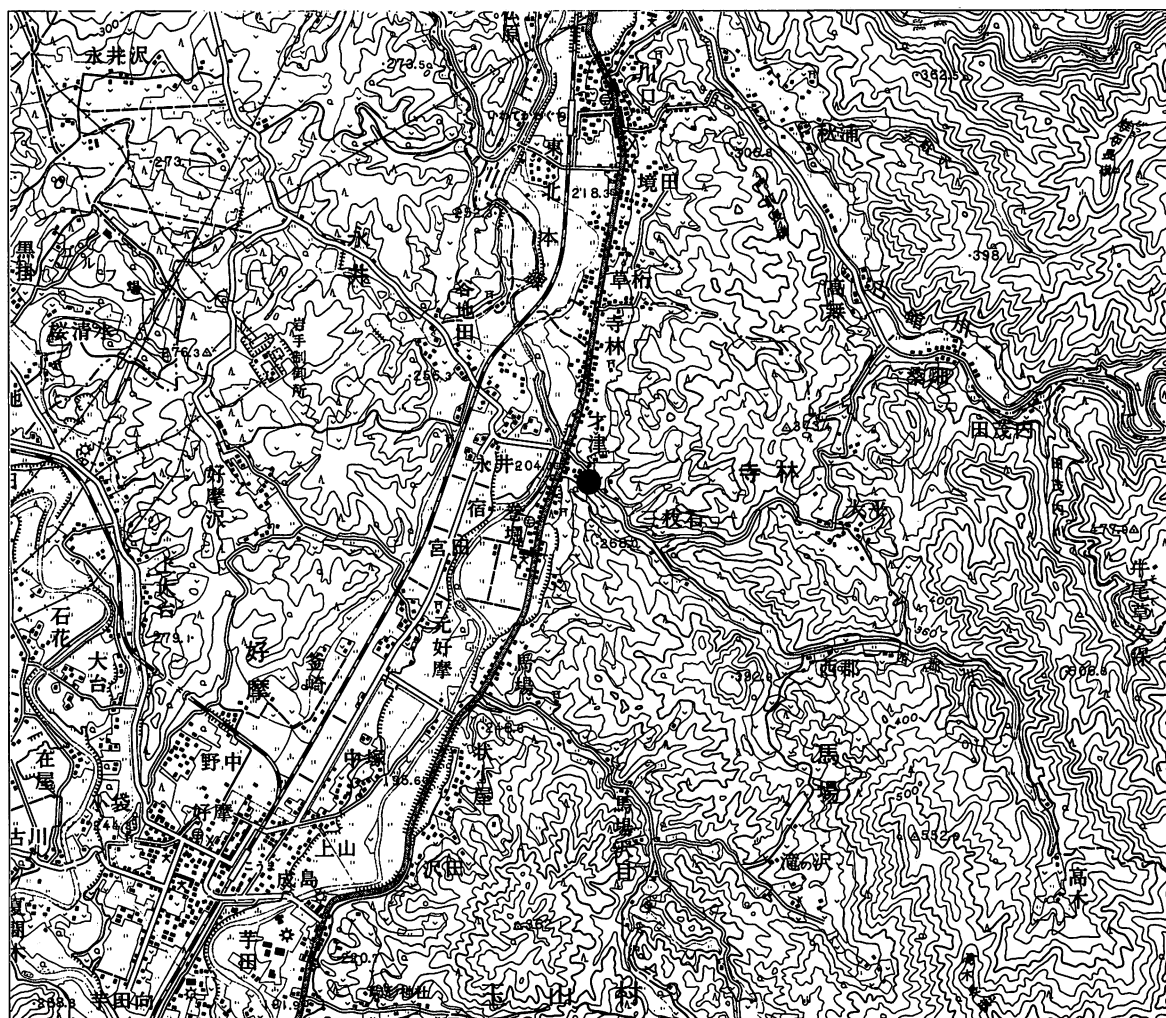
長倉 I 遺跡出土遺物



長倉 I 遺跡遺構配置図

(15) さい っ ざわ 遺 跡

所在地 岩手郡玉山村寺林字才津沢26-4ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所
事業名 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
発掘調査期間 平成8年4月5日～6月17日
調査対象面積 1,036㎡
発掘調査面積 1,036㎡
遺跡番号・略号 KE37-2357・STS-96
調査担当者 高橋佐知子・中村直美
協力機関 玉山村教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 沼宮内

1. 遺跡の立地

才津沢遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線好摩駅の北東3.4km、国道4号から200mほど東に入った地点に位置する。遺跡は北上川と遺跡のすぐ南西を流れる西郡川によって形成された段丘上に立地する。標高は215～221mで、南西にゆるやかに傾斜する緩斜面である。調査区はその緩斜面を北東から南西に貫く幅約8～17m、長さ80mの区域で、調査開始前は畑と牧草地として使われていた。

2. 調査の概要

遺跡の北寄りの部分は道路建設と草地造成などで削平されており、遺物や遺構が検出されなかった。また、沢よりの一部も草地造成で平安時代の住居跡の検出面が削られている。

今回の調査で検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡3棟、弥生時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡3棟、弥生時代の住居状遺構1棟、縄文時代の土坑5基、弥生時代の土坑6基、平安時代の土坑1基、平安時代より新しいと見られる土坑1基、縄文時代の焼土遺構4基、弥生時代と考えられる焼土遺構1基、平安時代の焼土遺構7基、柱穴状ピットである。

調査区付近は現在南西に向かってなだらかに傾斜しているが、縄文時代以前の地形は調査区の中央付近が南東から北西に向かって沢状に落ち込んでおり、現在と異なることがわかった。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

調査区のほぼ中央から3棟検出された。うち2棟は遺構内からの出土遺物は少ないが、縄文時代後期の住居跡と考えられる。壁の一部しか検出できなかったため、平面形は不明であるが、いずれも直径3m内外のいびつな円形を呈すると考えられる。炉は床面のほぼ中央に一棟は石囲炉、もう一棟は立石炉が検出された。石囲炉は礫を円形に並べて作られているが、焼土は薄く、使用期間の短かさが窺える。立石炉は炉の南側に1個の礫を直立させており、固く締まった焼土が6cm程堆積している。柱穴は立石炉を持つ住居跡の床面から2基検出された。

晩期の住居跡も1棟検出された。この住居跡は弥生時代の住居跡に切られており、壁の一部しか検出されていないこともあって、全体の規模は明らかでない。検出された壁にはゆるやかなコーナーがある。炉は地床炉で、南壁にかなりよって作られており、焼土がよく発達している。床面から小穴が2基、住居跡外から2基検出されたが、すべてが柱穴かどうかは明らかでない。

〈弥生時代の竪穴住居跡〉

調査区中央のやや沢よりに1棟検出された。直径は9.8×9.2mで、ほぼ円形を呈している。主柱穴は4基であるが、壁際には一部を除いて壁溝が回り、その中に小穴が並んでいる。

炉は2基検出された。床面の中央から礫を二の字形に配置した配石炉とその南西から検出された焼土である。この焼土の周りから石の抜き取り痕が検出されたので、地床炉ではなく石囲炉であったと考えられる。いずれも焼土がよく発達している。

壁高は12～50cmである。残存状況からは埋まるのに相当の時間がかかったとは信じがたいが、埋土に灰白色の火山灰が層となって堆積し、住居中央付近では埋土中位にまで達している。この火山灰は現在分析中であるが、十和田a降下火山灰の可能性はある。住居の大きさ故に、なかなか埋まらなかったであろう。また、床面から埋土下層にかけて焼土や炭化材が検出されており、本住居跡は焼けたものと考えられる。

〈平安時代の住居跡〉

3棟検出された。調査区の中央北寄りで検出された住居跡は北西の隅が調査区外に伸びている。埋土は黒

褐色土で、灰白色火山灰を埋土の最上部に少量含む。カマドは調査部分では検出されなかったもので、調査区外に存在すると考えられる。平面形は隅丸の長方形で、東西方向の辺の長さが5.2m、南北方向の辺の長さが3.8mである。本遺構から黒色処理されたミガキのある坏と甕の破片が出土している。

他の2棟も、いずれも調査区外に伸びている。カマドが検出されたのは1棟で、他は調査区外にカマドがあると考えられる。1棟が埋土に十和田a降下火山灰と考えられる灰白色火山灰を含み、同火山灰降下前の住居であるが、他の1棟は火山灰を含まないことから火山灰降下後の住居と推定される。

埋土に灰白色火山灰を含む住居跡は、調査区南よりに位置する。西側の一部を除いてほとんどが調査区外に伸びている。方形を呈すると考えられ、一辺が4.3mを測る。カマドは西側の壁のほぼ中央にあるが、煙道は住居より新しい土坑に切られている。本遺構から甕の底部破片が出土している。

調査区中央南寄り検出された住居跡は南東部分の約3分の1ほどが調査区外に伸びている。平面形は突隅丸方形で、一辺の長さは5.7mである。埋土は黒色土で、灰白色火山灰を含まない。カマドは調査区外に存在する可能性がある。床面から小穴が4基検出されたが、柱穴となり得るか疑問である。また、床面中央付近から小礫と土師器甕破片が集中して出土した。

〈弥生時代の住居状遺構〉

調査区中央の北よりに位置する。ほとんどが調査区外に伸びており、全容は推定できない。住居である確信が持てなかったため、住居状遺構として報告することにした。径は調査した部分で4.5mである。埋土は炭を含む黒色土である。壁よりに柱穴が1基存在する。壁溝はない。

〈土坑〉

縄文時代の土坑は主に沢よりに、弥生時代と考えられる土坑は調査区中央からやや北よりに多く検出されている。ほとんどが楕円形を呈し、断面形は逆台形か浅い皿状を呈するが、沢よりに検出された平安時代と考えられる3号土坑のみ異なる様相を呈する。平面形は隅丸の長方形を呈し、3.7×1.6m、深さ46cmで、断面形は逆台形状である。埋土最上面は黒色土で粉状の灰白色火山灰をまばらに均一に含み、中層及び下層はオレンジパミスや褐色ブロックを含む黒褐色土である。本遺構の埋土から土師器が出土している。

13号土坑からは縄文時代後期初頭末の土器が、投げ捨てられたような状態で多く出土した。

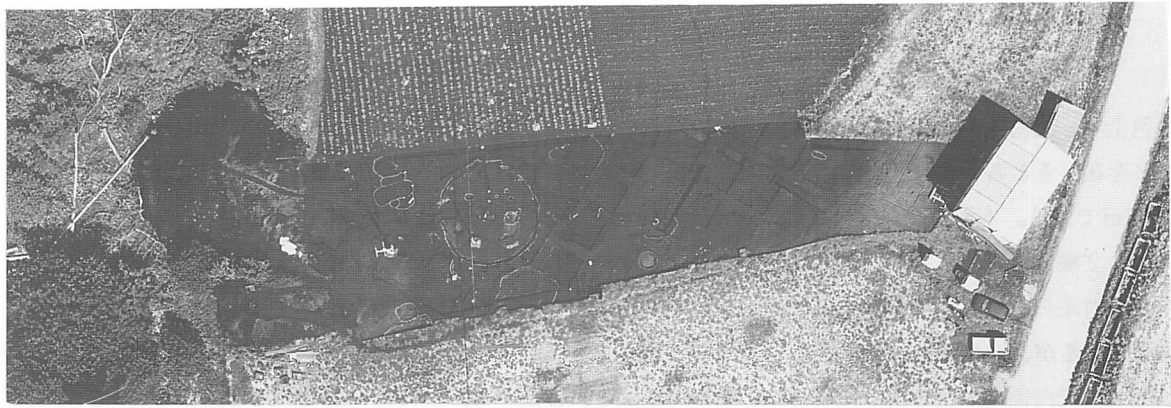
〈出土遺物〉

コンテナ7箱ほどの土器、石器が出土している。土器のほとんどが縄文時代後期の土器で、次いで弥生時代前期の土器が多い。そのほか縄文時代前期末葉の土器、中期末葉の土器、土師器（奈良時代、平安時代）があり、須恵器はごくわずかである。石器は約60点ほど出土しており、石鏃7点、磨製石斧5点、定形の剥片石器12点、磨石類14点、不定形の剥片石器11点などがある。不定形石器は素材の石材が同じ種類のものが多く、原石も小型であると考えられる。そのほかでは、鉄鏃と考えられる鉄製品が、焼土遺構から出土した。

3. まとめ

今回の調査によって、才津沢遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代の各期の人々の生活の場であったことがわかった。平安時代の住居跡は火山灰の降下前と後の2時期に渡っている。各期の遺構は縄文時代より前には沢であった凹地が埋まって、平坦になってから形成されている。

調査した住居は時期ごとにはそれぞれ少数であるが、遺跡は地表面の観察や遺物の分布などによると周辺に大きく広がるもようで、集落を形成していたと考えられる。



調査区全景



弥生時代の住居跡

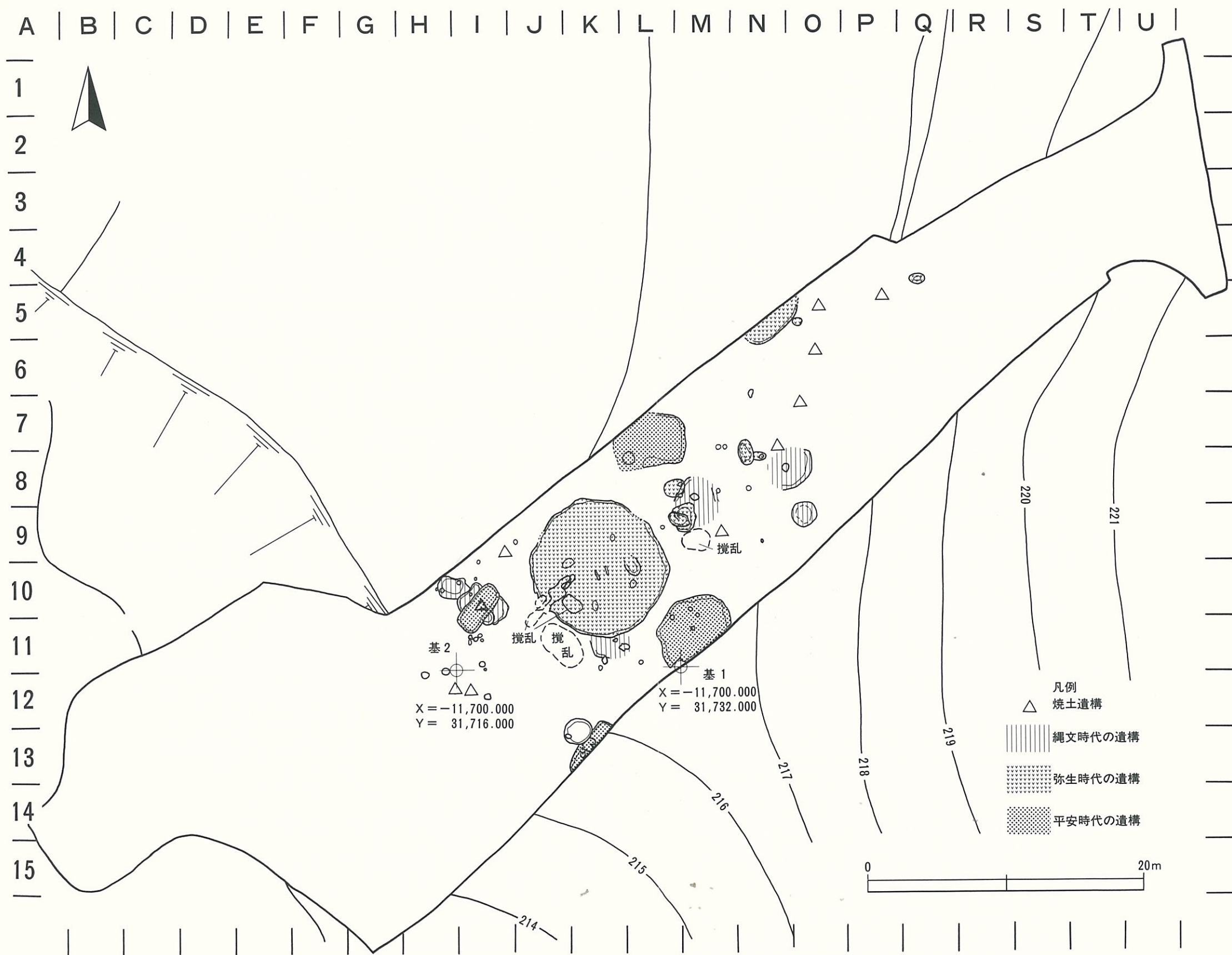


縄文時代後期の土坑



- 1～2 石鏃 3 石匙
- 4 磨製石斧
- 5 縄文時代後期の土器
- 6 縄文時代晩期の土器
- 7～9 弥生時代の土器
- 10 平安時代の土器

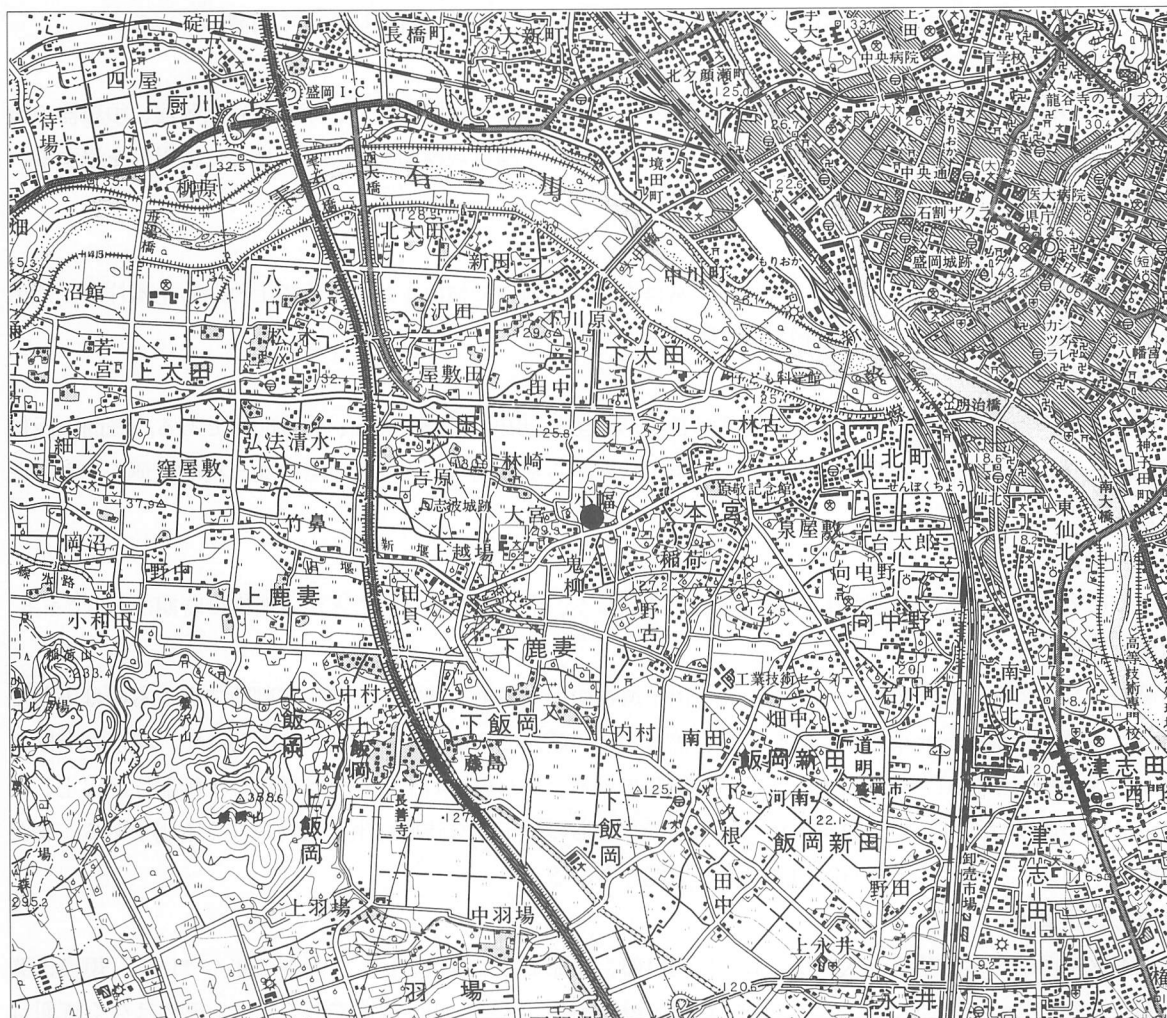
才津沢遺跡検出遺構・出土遺物



才津沢遺跡遺構配置図

おお みや きた
(16) 大 宮 北 遺 跡

所 在 地	盛岡市本宮字小幅13-1ほか
委 託 者	盛岡市
事 業 名	盛岡市南新都市土地区画整理
発掘調査期間	平成8年4月5日～5月24日
調査対象面積	3,900㎡
発掘調査面積	3,900㎡
遺跡番号・略号	LE16-2036・〇〇K-96
調査担当者	溜 浩二郎・高橋実央
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

大宮北遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から西に約3kmに位置し、雫石川によって形成された標高126m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約1kmに志波城跡、東約300mに小幡遺跡、宮沢遺跡がある。

2. 調査の概要

検出された遺構は竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構2棟、土坑5基、墓壇1基、焼土遺構2カ所、溝状遺構9条、陥し穴状遺構1基である。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は南北に並んで検出されており、南側の竪穴住居跡の規模は一辺380cm程ではほぼ正方形を呈し、床面までの深さは約12cmである。西壁のほぼ中央にカマドが設けられている。カマドには燃焼痕が無く、袖には地山の土が使用され、両袖部の外側には直径約20cm程の窪みがある。煙道部はくり貫き式で約1m、煙出し部は直径30cmほどの円形である。また出土遺物は皆無で人間が生活していた痕跡は窺えない。遺構の時期に関しては定かではない。一方、北側の竪穴住居跡は規模が260cm×280cmの方形状を呈している。表土下からの検出で、床面しか残っておらず、出土遺物はない。また北壁が溝に切られて消滅している。

〈竪穴状遺構〉

調査区の南西部で2棟検出され、1棟は規模が一辺520cmほどで壁溝を有し、床面から土師器、須恵器の破片が出土している。また、柱穴は確認されていない。別の1棟は規模350cm×276cmほどで楕円形を呈する。出土遺物はなく、時期は不明である。

〈土坑〉

調査区全体で5基検出された。このうち1基は竪穴状遺構内で検出され、埋土の上位から土器片が1点出土している。他はいずれも出土遺物がなく時期は不明である。

〈墓壇〉

調査区南西部から1基検出された。形状は長方形を呈し、規模は長軸100cm、短軸66cmである。底面の西側壁面から骨片が炭化物と共に出土している。出土状況から別の場所で火葬したものを二次的に運んできて埋めたものと考えられる。

〈焼土遺構〉

2カ所で検出された。いずれも現地性の焼土ではなく、出土遺物もないことから遺構の時期は不明である。

〈溝状遺構〉

調査区全体で9条が検出された。このうち出土遺物や埋土の堆積状況から時代が判断できるものは1条である。本遺構は南西-北東方向に軸をもち、幅は60cm～最大で2mを超え、深さは約70cmで、埋土の上位に灰黄色火山灰（十和田a降下火山灰？）が堆積している。また埋土の下部からは微量の土師器片が出土している。他の溝跡は切り合いで遺構の新旧は確認できるものの正確な時期は出土遺物がなく不明である。また現況が水田跡であったことから区画溝である可能性もある。

〈陥し穴状遺構〉

調査区南西部から1基検出された。形状は開口部、底部ともに溝状を呈し、両端は窪んでいる。規模は開口部が長軸345cm×短軸54cm、底部は長軸330cm×短軸20cm、深さは50cm前後である。出土遺物はなく時期は不明である。

〈出土遺物〉

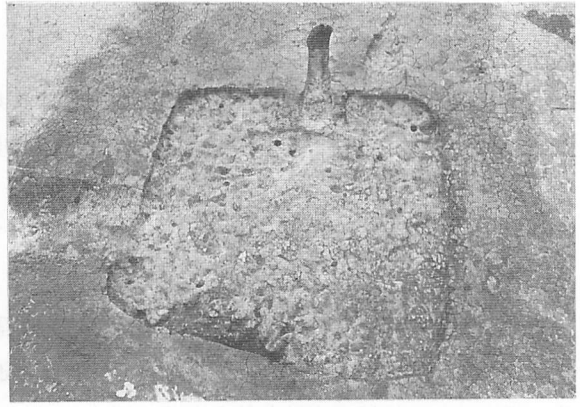
出土遺物の大半を占めるのは平安時代の土師器である。ロクロ成形の坏の破片が多いが全体の出土量は少なく小コンテナで1箱ほどである。石器はほとんど出土しておらず、剥片石器が大半であるが、石鏃が1点出土している。

3. まとめ

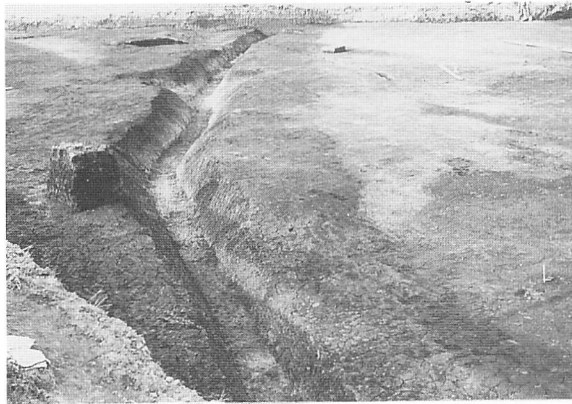
今回の調査で平安時代と考えられる竪穴住居跡、竪穴状遺構が確認され、この地域が集落として利用されていたことが明らかになった。特に竪穴住居跡は本遺跡のなかでも標高の高い位置にあり、雫石川の影響を強く受けるこの地域の立地条件を顕著に反映している。



遺跡全景



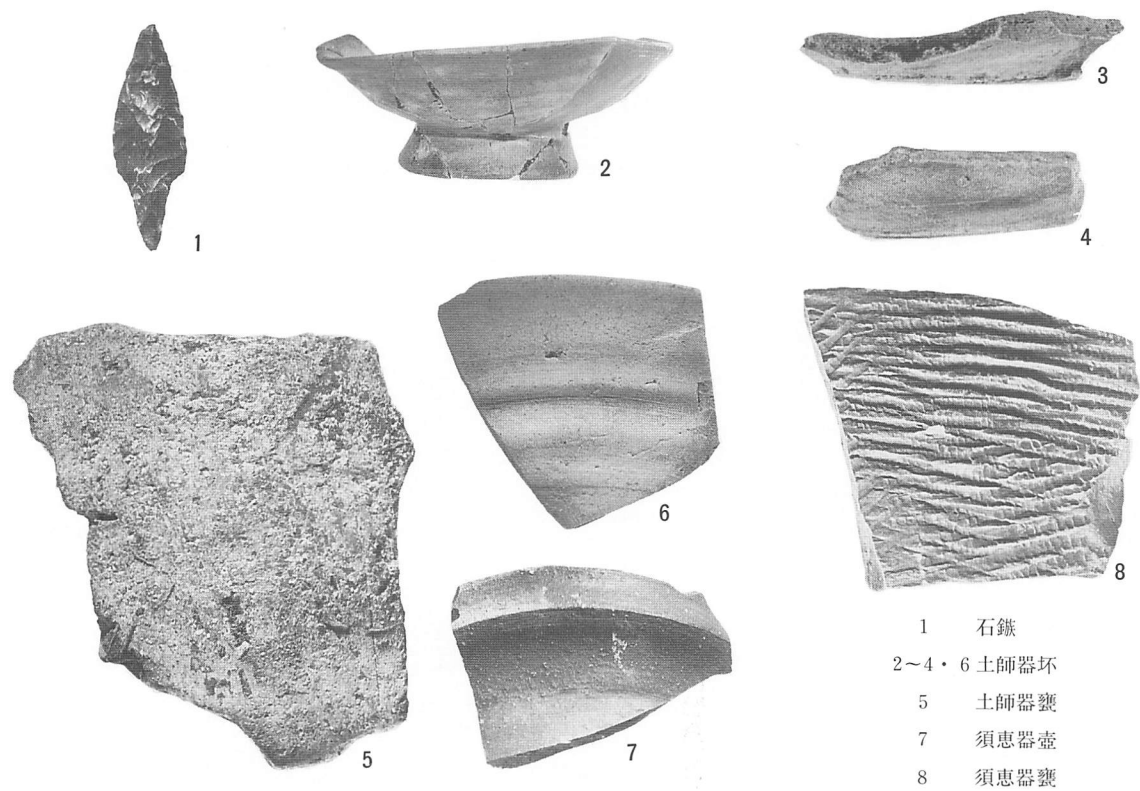
竪穴住居跡



溝状遺構

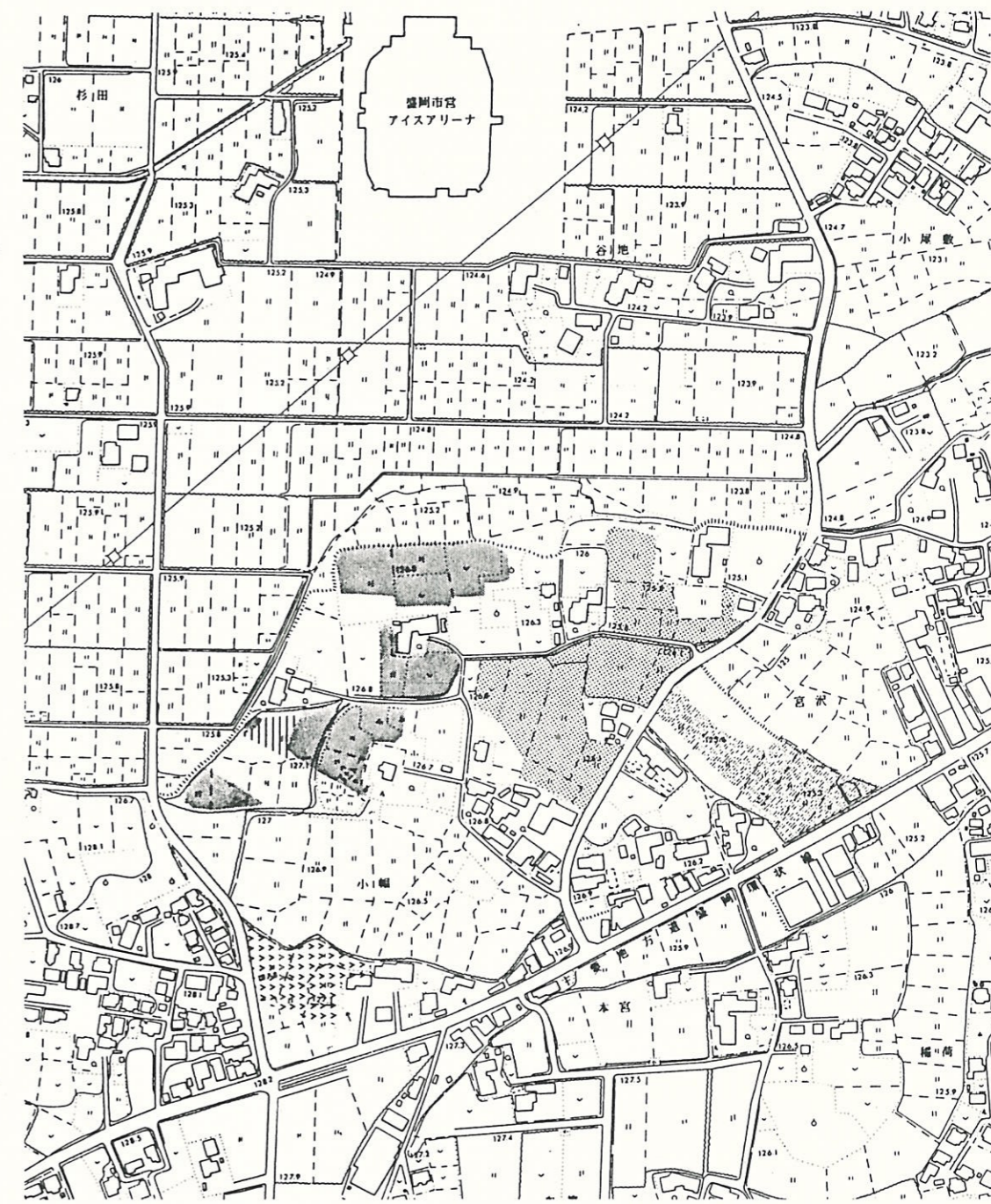
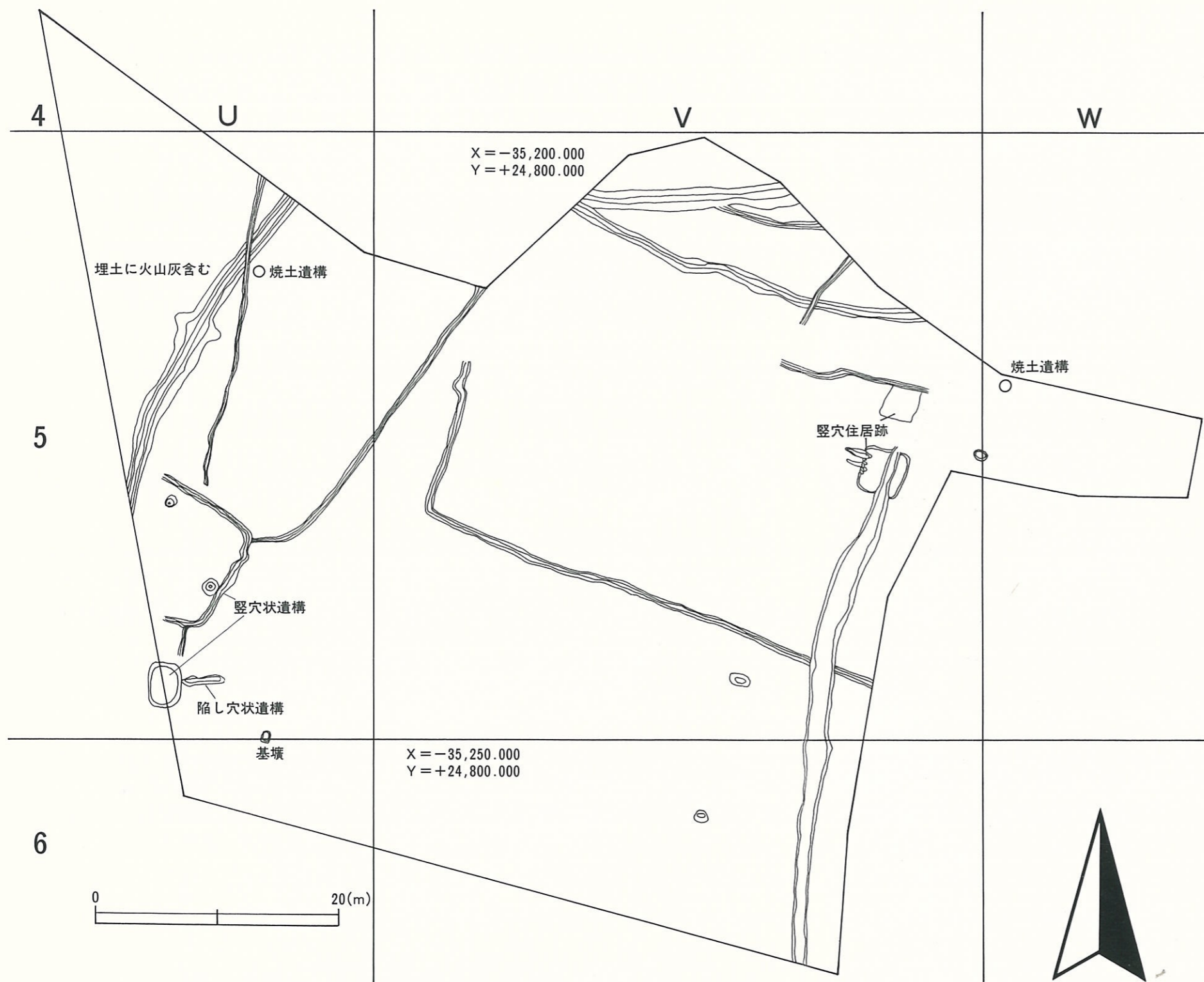


墓墳



- 1 石鏃
- 2~4・6 土師器坏
- 5 土師器甕
- 7 須恵器壺
- 8 須恵器甕

大宮北遺跡検出遺構・出土遺物

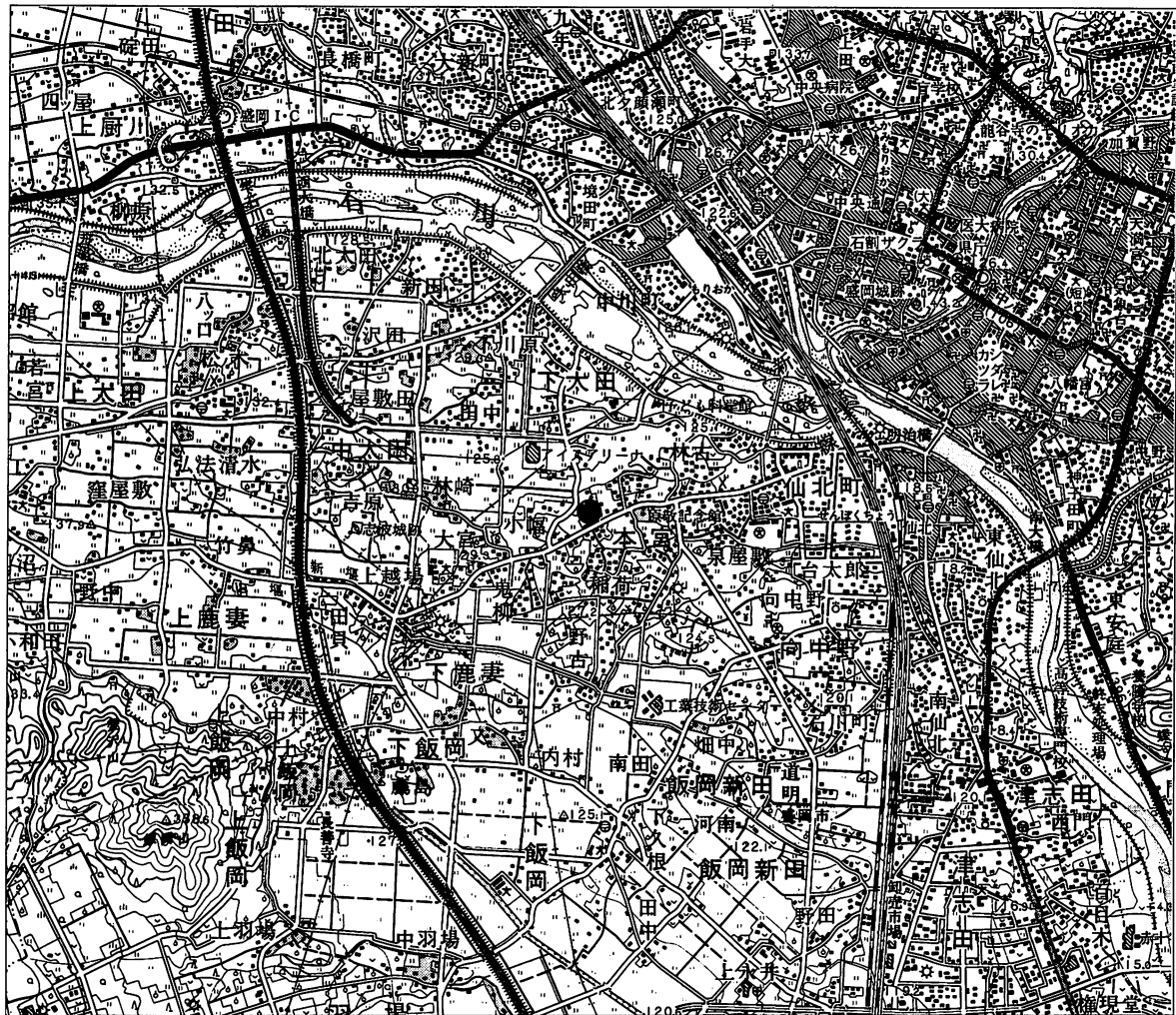


- 小幡遺跡 第2次調査
- ▨ 小幡遺跡 第6次調査
- 小幡遺跡 第4次調査
- ▧ 大宮北遺跡
- 宮沢遺跡

大宮北遺跡遺構配置図

(17) 宮 沢 遺 跡

所在地 盛岡市本宮字宮沢10-2、11-1 ほか
委託者 盛岡市
事業名 盛岡市南新都市土地区画整理
発掘調査期間 平成8年5月27日～7月2日
調査対象面積 4,600㎡
発掘調査面積 4,600㎡
遺跡番号・略号 LE16-2101・OMZ-96
調査担当者 溜 浩二郎・高橋実央
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・日誌

Ⅰ. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成3年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要求を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間で事業予定期間とし、面積320haを対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議を重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成8年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市と(財)岩手県文化振興事業団の両者に通知され、これを受けた両者は、平成8年4月1日に(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘調査は平成8年5月27日に着手され、同年7月2日に終了した。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年11・12月に整理をし、当埋蔵文化財センター平成8年度調査略報に本報告として掲載することとした。

Ⅱ. 遺跡の立地

宮沢遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から西に約2.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘に立地し、現在の雫石川との高低差は約8mある。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約1kmに志波城跡、西約300mに大宮北遺跡、西に隣接して小幅遺跡がある。

Ⅲ. 遺跡の基本層序

本遺跡は度重なる雫石川の氾濫によって供給された砂礫やシルト質土で被覆された沖積面の砂礫段丘上に立地する。立地する地形を反映して表土下の地層は異なっており一様ではないが、基本的には以下のとおりである。

第Ⅰa層：10YR 3/1 黒褐色土 粘性なし しまりあり

旧水田跡。層厚約10～15cm。

第Ⅰb層：10YR 2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり

旧水田跡で水酸化鉄粒多く含む。

第Ⅱ層：10YR 2/1 黒色土 粘性あり しまりあり

第Ⅲ層：10YR 1.7/1 黒色土 粘性あり しまりややあり

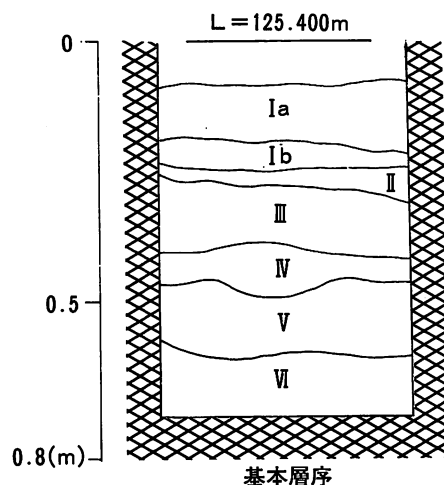
平安時代の遺物を包含する。

第Ⅳ層：10YR 4/4 褐色土 粘性なし しまりなし 砂

を多く含む。

第Ⅴ層：10YR 3/3 暗褐色土 粘性あり しまりややあり

第Ⅵ層：10YR 5/6 黄褐色土 粘性あり しまりあり



IV. 調査の概要

(1) 検出された遺構

検出された遺構は、溝状遺構14条である。遺物は少量の土師器と近世のかわらけ1点、古銭1枚などが出土している。

〈溝状遺構〉

溝が14条検出された。最も長いもので90mあり、大半が調査区の東側に集中している。遺物（近・現代）を伴う溝状遺構（R G 05）、埋土に火山灰（十和田a降下火山灰？）が堆積している溝状遺構（R G 08）がそれぞれ1条確認されているが、ほとんどが切り合いによって新旧関係を確認できるだけで、遺構の時期を特定することはできない。

(2) 出土した遺物

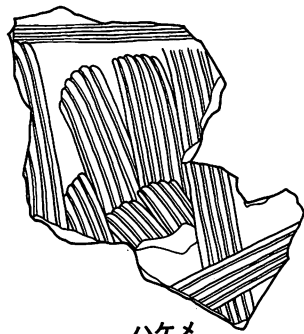
ロクロ成形された土師器の破片など少量出土している。1は土師器甕の体部破片で表面にはハケメ、内部にはハケメとナデによる調整が施されている。2～4はロクロ成形された土師器杯の底部破片で3の外面には僅かにケズリによる調整痕が残る。5はかわらけで、近世以降に属する溝の底部から出土している。6・7はいずれも金属片であるが用途は不明である。他に遺構外から古銭（永□□□）が1点出土している(8)。

V. まとめ

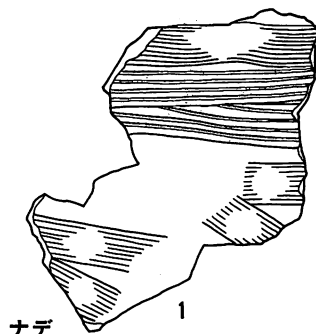
今回の調査で本遺跡が遺物散布地であることが確認された。出土遺物の量や生活に直接関わったと考えられる遺構がないことから、生活の場としての利用はなかったと思われる。

報告書抄録

ふりがな	みやざわいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	宮沢遺跡発掘調査報告書							
副書名	盛岡市南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第266集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)-638-9001							
発行年月日	西暦 年 月 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。' "	。' "			
みやざわいせき 宮沢遺跡	いわてけんもりおかし もとみやあざみやざわ 岩手県盛岡市 本宮字宮沢10- 2、11-1ほか	03201	LE16-2101	39度 41分 03秒	141度 07分 00秒	1996. 5.27~7.2	4,600㎡	「盛岡市南新都市計画土地区画整理事業」事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮沢遺跡	遺物散布地	平安時代	溝状遺構14条	土師器片 古銭1枚				

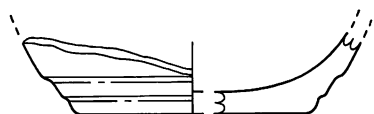


ハケメ



ナデ

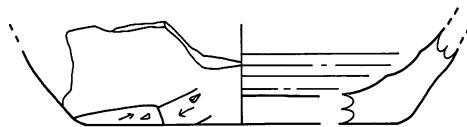
1



ロクロ



2



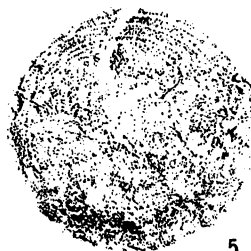
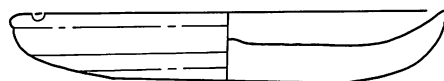
ケズリ



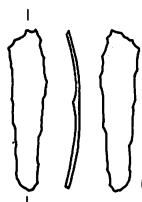
3



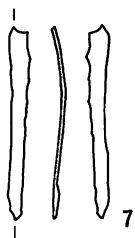
4



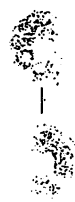
5



6



7

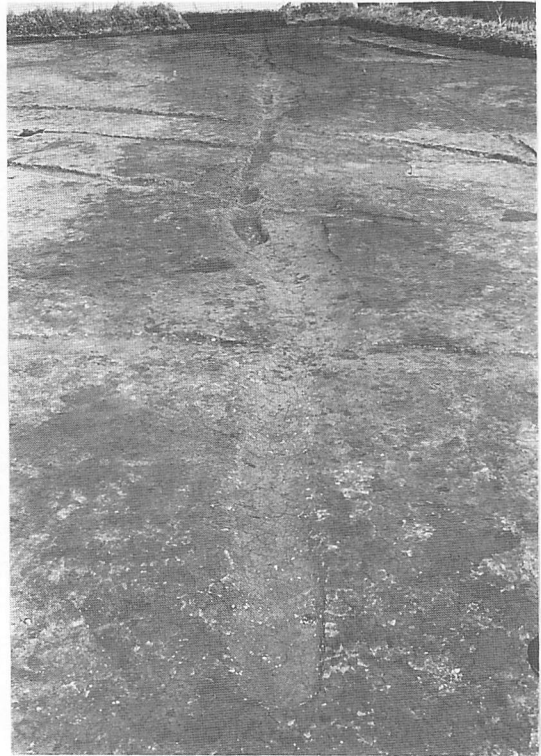


8

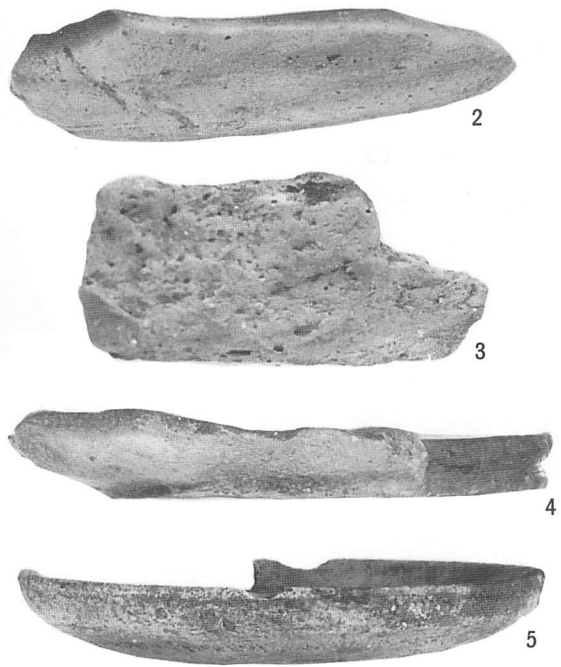
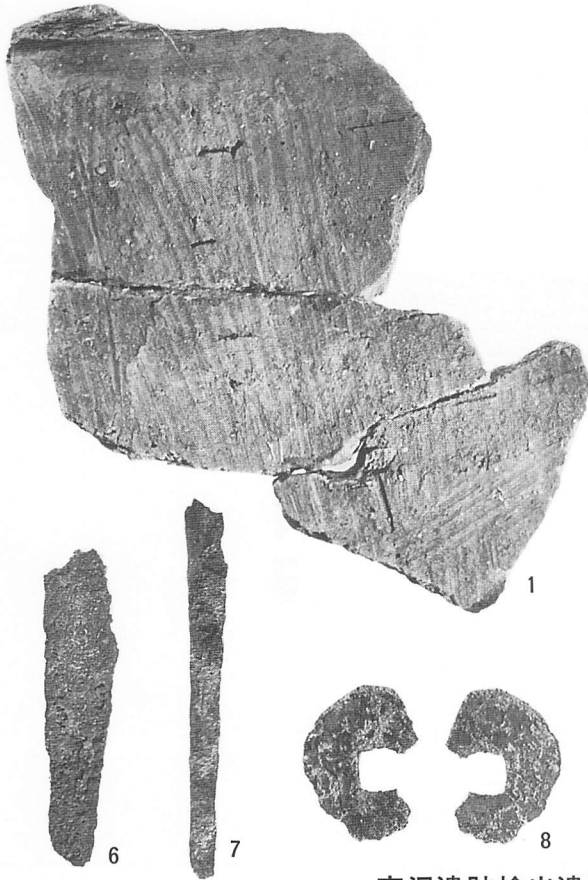
宮沢遺跡出土遺物



調査区全景

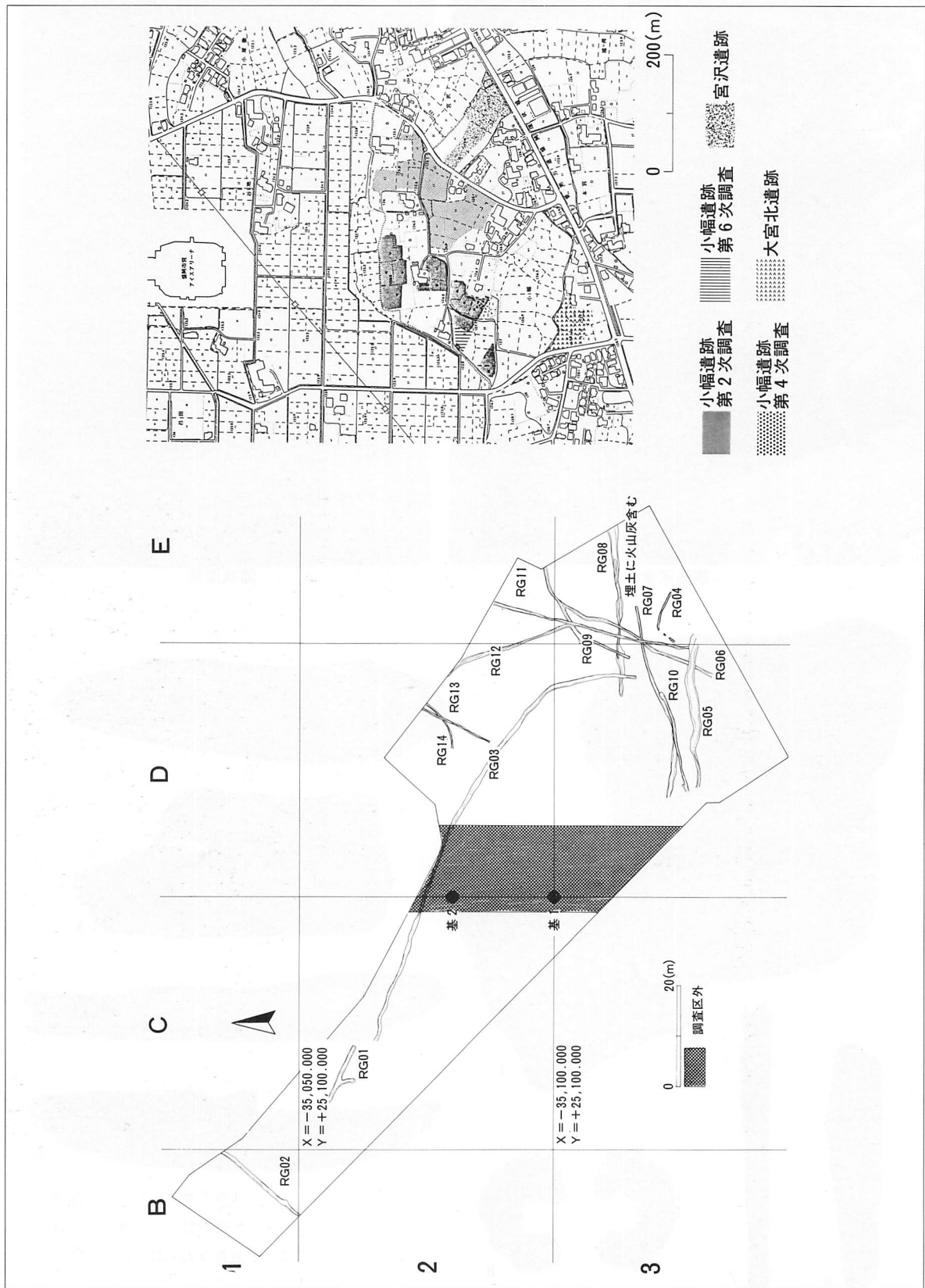


溝状遺構



- 1 土師器甕
- 2~4 土師器坏
- 5 近世かわらけ
- 6・7 金属片
- 8 古銭

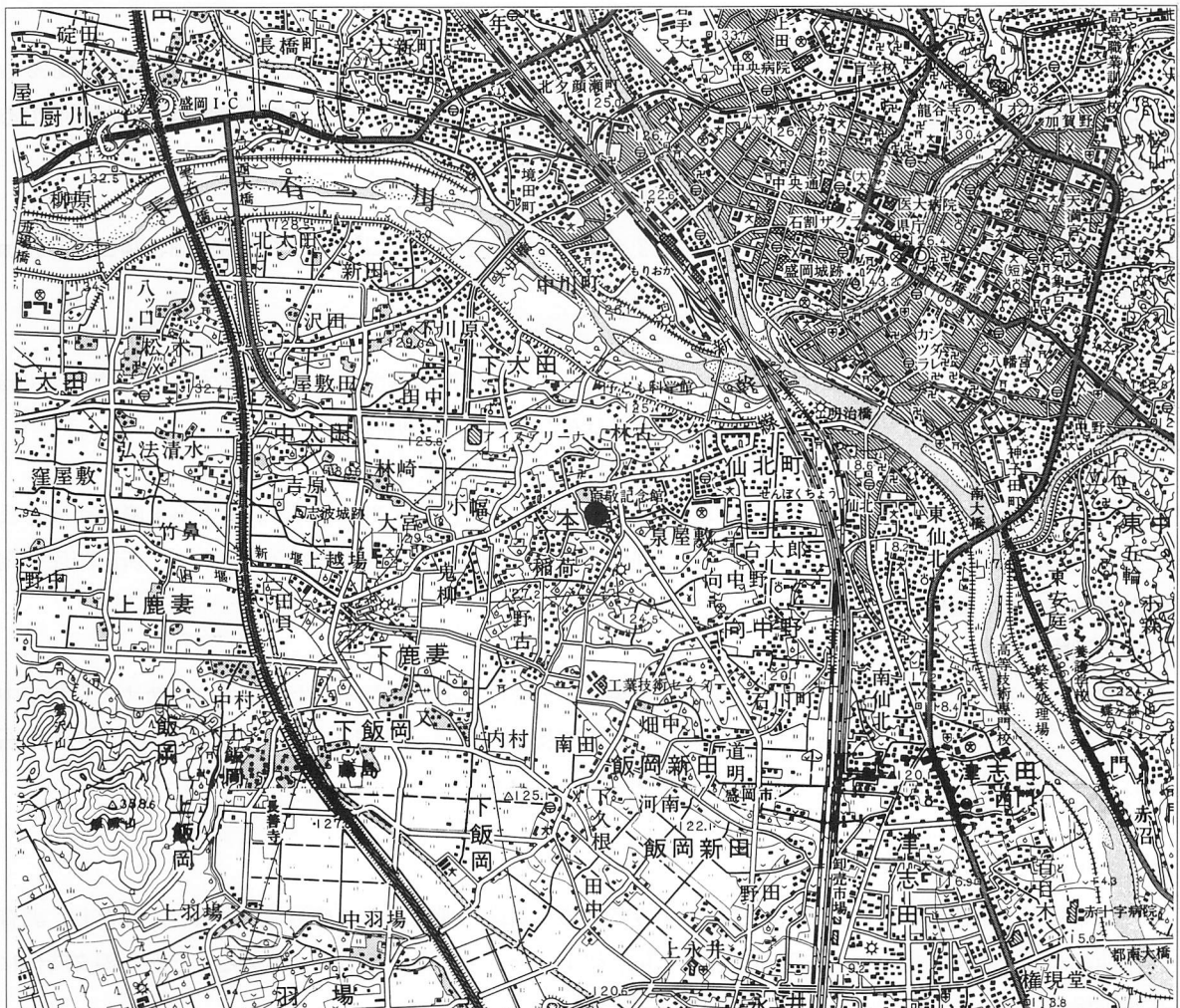
宮沢遺跡検出遺構・出土遺物



宮沢遺跡遺構配置図

もとみやくまどう
(18) 本宮熊堂 A 遺跡

所在地	盛岡市本宮字熊堂65-3、73-1ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡市南新都市土地区画整理
発掘調査期間	平成8年7月3日～10月24日
調査対象面積	15,110㎡
発掘調査面積	15,110㎡
遺跡番号・略号	LE16-2107・OKD-96
調査担当者	溜 浩二郎・高橋実央
協力機関	盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1 : 50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

本宮熊堂A遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西に約1.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘に立地している。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約2.0kmに志波城跡、北西約700mに大宮北遺跡、北北西約200mに小幡遺跡がある。

2. 調査の概要

当初の調査対象面積は7,800㎡であったが、その後7,310㎡が追加され、最終的には15,110㎡になった。検出された遺構は竪穴住居跡1棟、焼土遺構8カ所、土坑20基、土器埋設遺構2基、井戸状遺構7基、溝状遺構51条が検出された。

〈竪穴住居跡〉

調査区南西部で1棟検出された。形状は円形を呈し、規模は長軸280cm、短軸260cmで床面までの深さは10cmである。中央には石囲いの土器埋設炉が設けられている。遺構の時期は縄文時代晩期である。

〈焼土遺構〉

調査区全体で8カ所検出された。大半が縄文時代に属し、調査区南西部に集中する。

〈土坑〉

調査区全体で20基検出された。最大のもので開口部径360cm×320cm、深さ100cmである。南西部にあるものは検出面と出土遺物から縄文時代の遺構と考えられるのが、他地区から検出された土坑は時期が不明である。

〈土器埋設遺構〉

縄文時代晩期の深鉢形土器が倒立した状態で2カ所から検出された。口径はどちらも31cm、高さは約37cmである。

〈井戸状遺構〉

調査区中央部を中心に全体で7基検出された。形状はすべて円形状を呈し、最大のもので開口部径210cm×200cm、深さ140cmである。遺構内からの出土遺物はなく、時期は不明である。

〈溝状遺構〉

調査区全体で51条検出された。最も長いもので80m、幅は40cm、深さ20cmである。大半が水田に利用された水路である。遺構からは土師器、縄文土器、剥片石器が出土しているが、切り合いによって新旧関係を確認できるだけで、遺構の時期を特定することはできない。

〈出土遺物〉

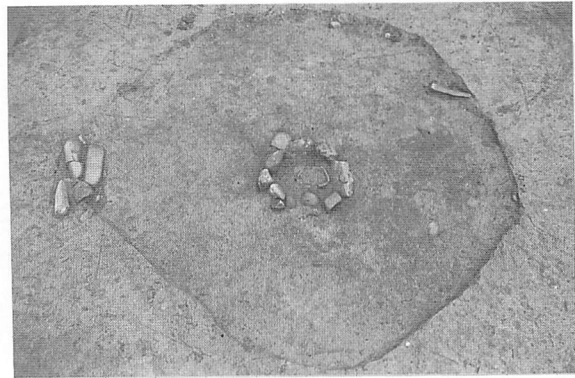
遺構外からの出土が大半で、土器類は調査区南東部を中心に縄文時代晩期の土器が大コンテナで14箱で中でも大洞C₂式の土器が顕著である。他に調査区南側の旧沢跡などから少量の土師器片が出土している。石器は遺構外を中心に石鏃、石錐、石斧など大コンテナで1箱出土している。

3. まとめ

今回の調査で本遺跡が主に縄文時代晩期と平安時代の土器散布地であることが確認された。ただし、調査区南西部からは縄文時代の竪穴住居跡1棟と土坑、焼土遺構、土器埋設遺構などがあることから縄文時代に生活の場の一部として利用されていたことが確認された。



調査区全景



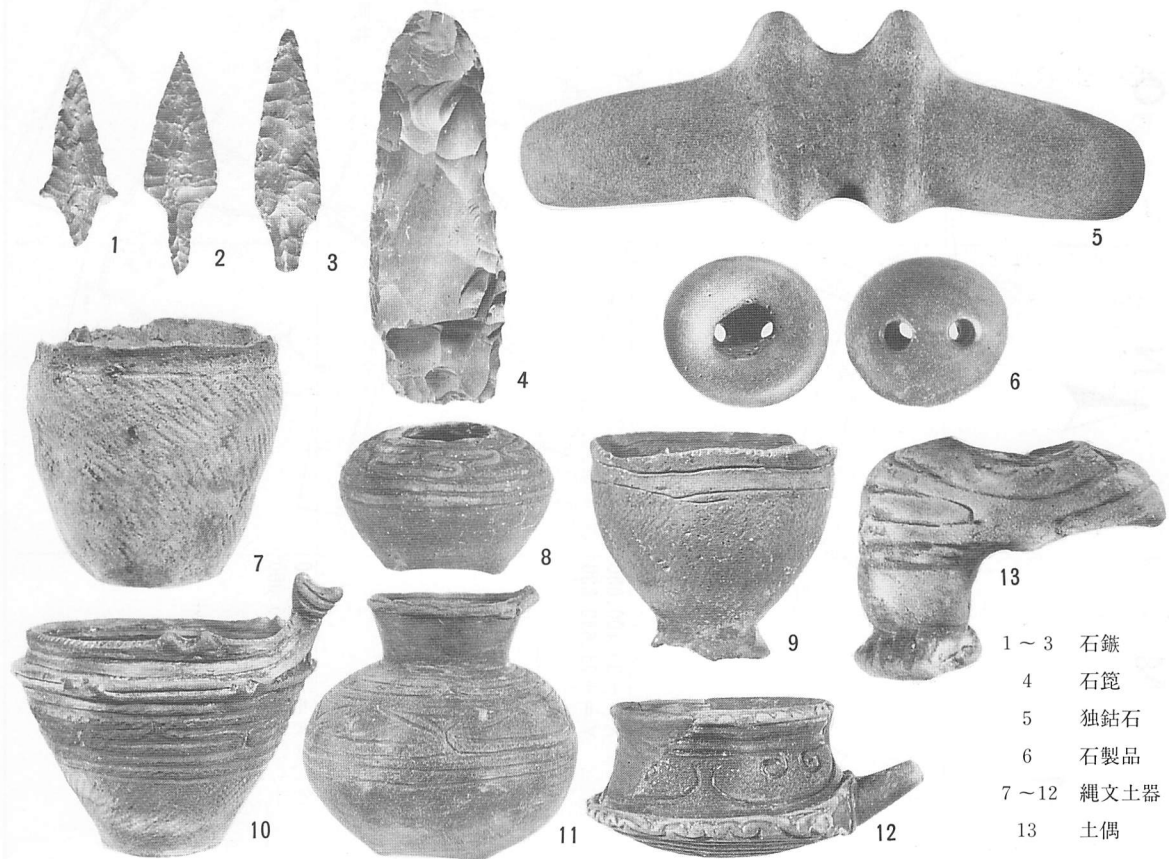
竪穴住居跡



土器埋設遺構

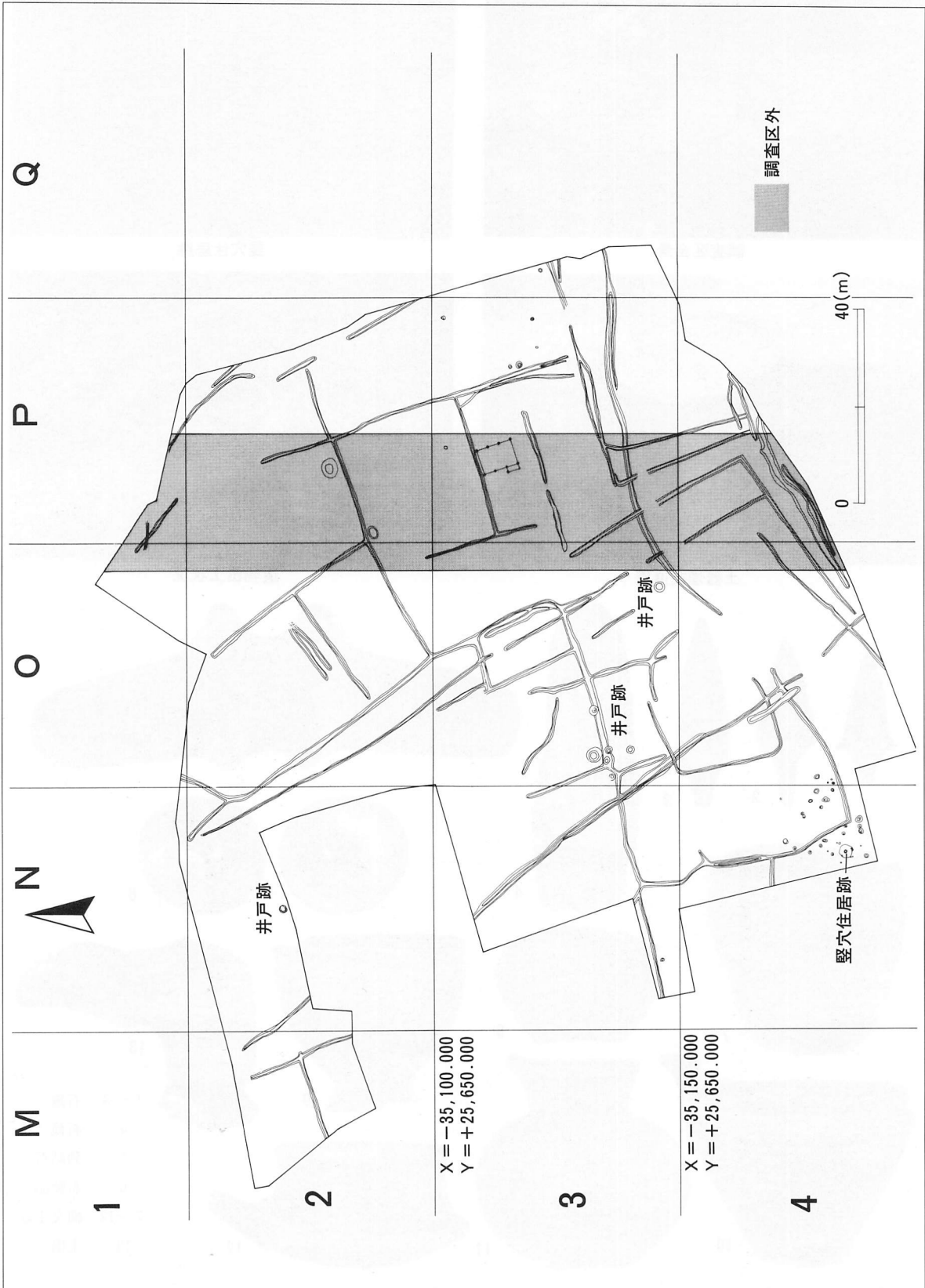


遺物出土状況



- 1 ~ 3 石鏃
- 4 石筥
- 5 独鈷石
- 6 石製品
- 7 ~ 12 縄文土器
- 13 土偶

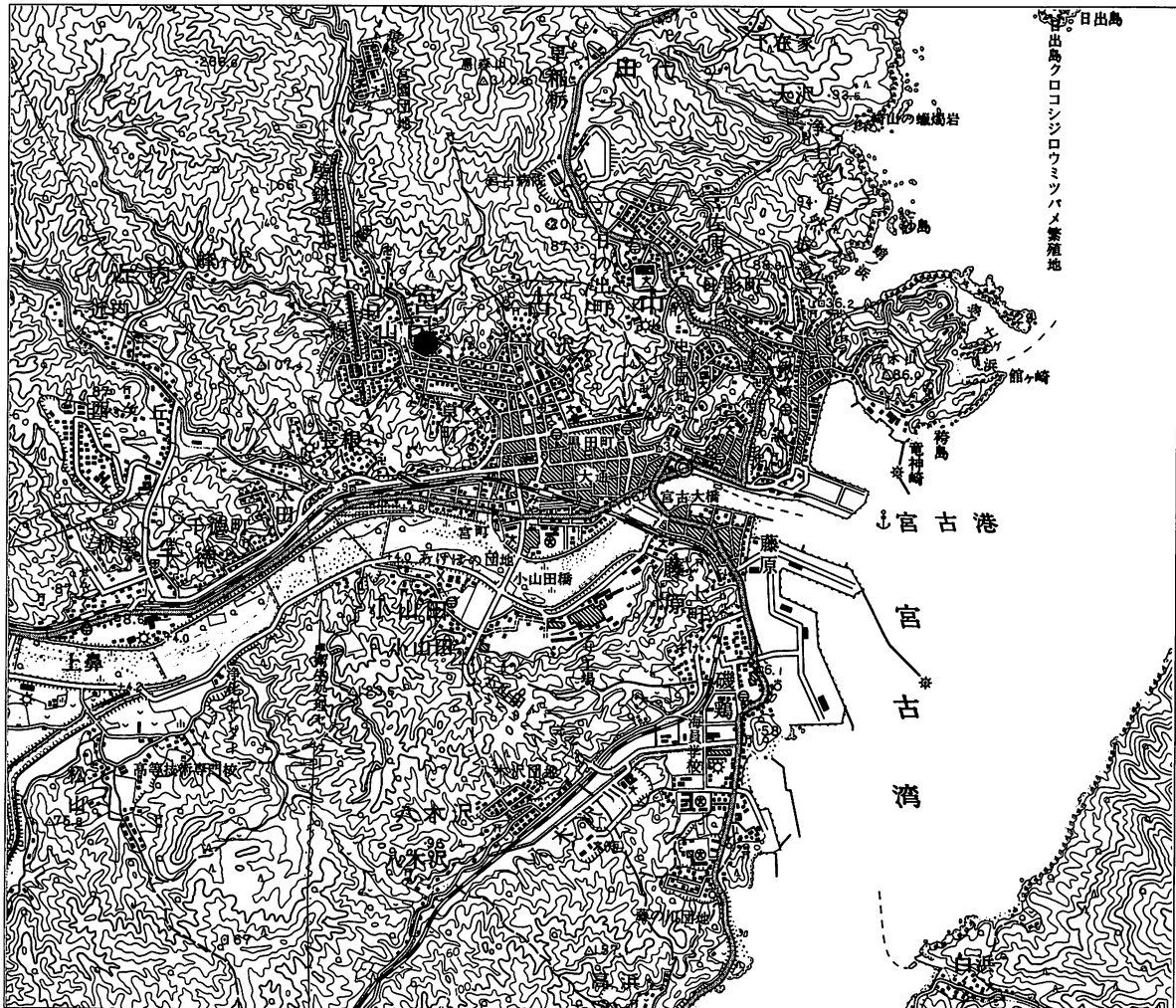
本宮熊堂 A 遺跡検出遺構・出土遺物



本宮熊堂 A 遺跡遺構配置図

やま ぐち だて
(19) 山 口 館 跡

所在地 宮古市山口1丁目117-3ほか
委託者 宮古市
事業名 市道北部環状線改良工事
発掘調査期間 平成8年4月10日～7月15日
調査対象面積 5,000㎡
発掘調査面積 4,300㎡
遺跡番号・略号 LG23-2310・YGD-96
調査担当者 小山内透・山口俊規
協力機関 宮古市教育委員会



遺跡位置図

1:50,000 宮古

1. 遺跡の立地

山口館跡は宮古市中心部にある東日本旅客鉄道山田線宮古駅から北西約1.5km、宮古市北部の100m以下の丘陵に位置し、櫛歯状のやせ尾根上に立地する梯郭式縄張りの館跡である。遺跡の標高は最高位部の曲輪（主郭）で約120m、最低位部では約40m、市街地との比高は約100mを測る。現況は全体が山林であるが、沢筋の一部はかつて畑地として利用されていた。

2. 調査の概要

平成7年度に宮古市教育委員会が行った工事路線全体の試掘調査の結果、調査範囲は全長約1kmにおよび起伏の激しい山地であることから複数年度の継続調査の予定となっている。今年度の調査区は遺跡の南西端部にあたる畑地跡の沢部と山林で馬の背状の尾根部が対象で、尾根部の標高は約55m、沢部との比高は約15mを測る。現況では尾根から沢にかけての急斜面に犬走り状の平場が認められたが、調査の結果近代の畑跡であることが判明し、また館跡に伴う遺構は確認されなかった。今年度の調査で検出された遺構は縄文時代の陥し穴状遺構2基、奈良時代の竪穴住居跡6棟、平安時代の竪穴住居跡1棟、中世の竪穴住居跡2棟、時期不明の土坑13基、溝跡1条、柱穴列1条、焼土遺構4基である。このうち古代～中世の遺構は地形的な制約をうけて埋没沢と尾根頂部の緩斜面という限られた範囲で重複して検出され、沢部では竪穴住居跡を構築時の掘削排土の広がりか所確認されている。

〈陥し穴状遺構〉

調査区西端のやせ尾根上で検出したが、自然崩落により遺存状況は悪い。いずれも長軸約2m、短軸1m前後の小判形を呈する。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は尾根上に奈良時代の2棟、ほかはすべて沢部で検出された。平面形はいずれもおおむね方形基調であるが、尾根上の1棟は自然崩落により山側の一部が確認されたに止まる。奈良時代の竪穴住居跡の規模は一辺6～7mのものが4棟と2m前後の2棟がある。カマドは沢部では北壁のほぼ中央に、尾根部では北東隅に付設されていた。沢部北側の1棟は炭化材が検出された焼失住居跡である。西側の小型の1棟からは高坪が出土した。東側2棟の埋土は人為的堆積によるもので、遺構周辺の状況からみて開墾時に削平された北側に竪穴住居跡が存在した可能性が高い。平安時代の1棟は一辺約4mで、東壁側に付設されたカマドは位置を変えて3度の作り替えが確認された。沢部に位置する古代の竪穴住居跡のうち4棟では軟弱な沢側が一部貼床とされていた。中世の竪穴住居跡は一辺約3mで壁際に6～8本の柱穴が規則的に配置され、床面中央には灰のたまった地床炉が検出されている。北側の1棟からは貝が2枚出土した。

〈土坑類〉

土坑類は沢部で5基、尾根部で8基が検出された。沢部のものは一辺約1.5mの方形基調の2基と長軸約1mの楕円形の3基である。北側の方形土坑には貝層が形成されコンテナ8箱分の貝が出土し、中央の楕円形の1基からは獣骨が出土した。尾根部では長軸2m前後の長方形2基と径1.5～2.5mの円形6基が検出されたが、いずれも遺物が出土せず時期は不明である。

〈溝跡〉

尾根部でL字形の1条が検出されている。自然崩落と土坑との重複のために時期・性格は不明ではあるが、竪穴住居跡の可能性も考えられる。

〈焼土遺構〉

沢部と尾根部で各2基検出したが、現地性のものは沢部南側の1基のみである。

〈出土遺物〉

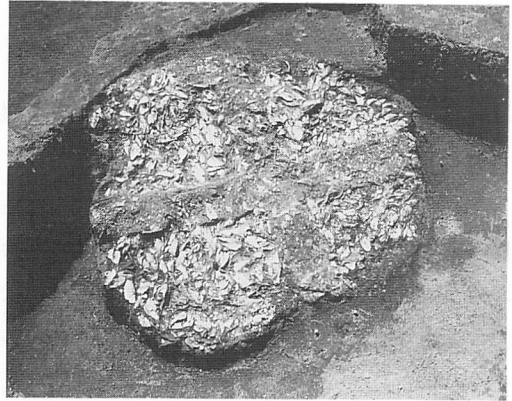
総量でコンテナ約15箱分の遺物が出土した。多くは沢部からの出土である。貝層出土のコンテナ8箱分の貝を除くとほとんどは古代の遺物であり、土師器（甕・坏・高坏）が大半を占め、須恵器（甕・双耳壺）はわずかである。この他に釘や刀子と思われる鉄製品と鉄滓、そして数点の縄文土器・石器が出土している。古代の遺物は主に遺構内と竪穴住居跡構築時の掘削排土中から、鉄滓はすべて耕作土中からの出土、コンテナ8箱分の貝についてはその大半はイ貝である。

3. まとめ

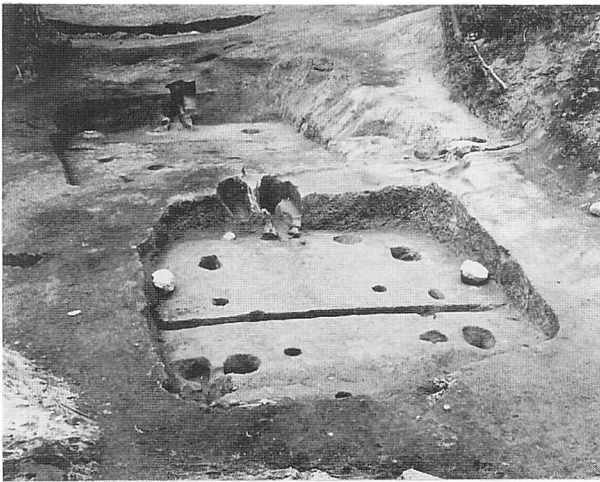
今回の調査は宮古市教育委員会の試掘結果から、古代の集落と製鉄関連遺構を想定しながら、中世城郭としての山口館跡の調査を行ったが、今年度の調査区は城郭の範囲外であり、製鉄関連遺構については開墾削平のためか確認できなかった。調査は来年度以降も継続される予定であり、遺跡の主体である館跡関係の遺構・遺物は無論のこと、今後の調査範囲も今年度同様の地形、自然環境が続くことから古代～中世の集落に関連する遺構・遺物の資料の増加が見込まれる。



遺跡全景



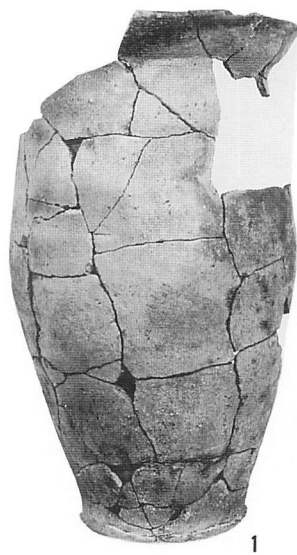
貝層出土状況



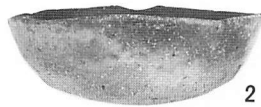
奈良時代の竪穴住居跡



中世の竪穴住居跡



1



2



3



4



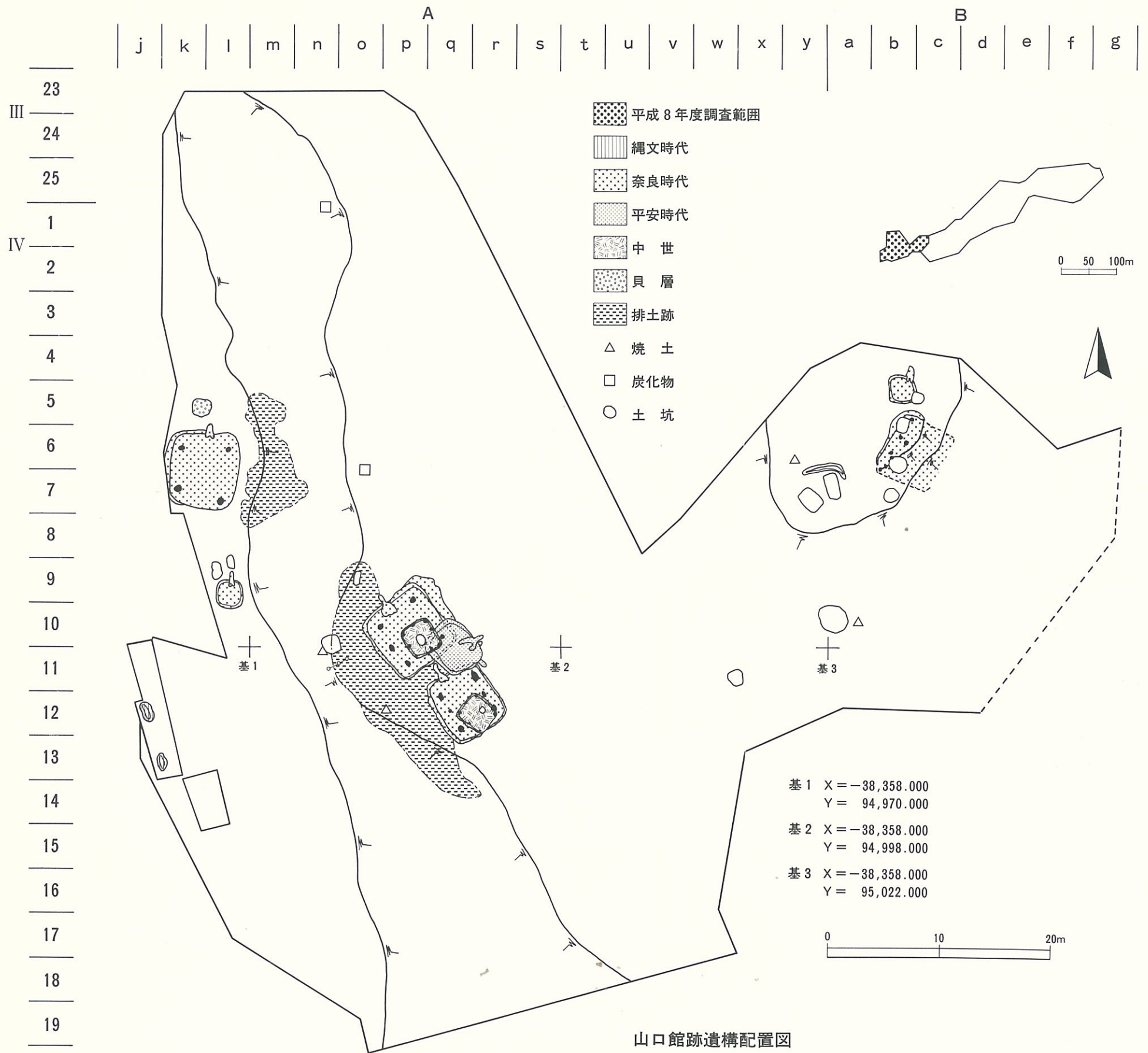
5



6

- 1～3 土師器
- 4 須恵器(双耳壺)
- 5・6 貝

山口館跡検出遺構・出土遺物



山口館跡遺構配置図

財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	山 影 源 吉		
副 所 長	鷹 羽 康 造		
(管 理 課)			
管 理 課 長	澤 田 寛		
主 任	横 山 文 彦		
主 事	千 葉 勝 彦		
(調 査 課)			
調 査 課 長	小 田 野 哲 憲	文 化 財	羽 柴 直 人
課 長 補 佐	高 橋 與 右 衛 門	專 門 調 査 員	
〃	工 藤 利 幸	〃	星 雅 之
〃	〃	〃	高 木 晃
主任文化財	中 川 重 紀	〃	杉 沢 昭 太 郎
專 門 調 査 員	〃	〃	大 道 篤 史
〃	佐 々 木 清 文	〃	溜 浩 二 郎
〃	高 橋 義 介	〃	村 上 拓
〃	酒 井 宗 孝	〃	中 村 直 美
〃	菊 池 人 見	〃	〃
文 化 財	小 山 内 透	期 限 付	川 向 聖 子
專 門 調 査 員	〃	專 門 職 員	〃
〃	金 子 佐 知 子	〃	佐 藤 良 和
〃	松 本 建 速	〃	篠 根 敬 志
〃	菊 地 榮 壽	〃	柴 田 慈 幸
〃	宮 本 節 子	〃	鈴 木 浩 二
〃	下 田 隆 衛	〃	鈴 木 聡
〃	濱 田 宏	〃	高 橋 実 央
〃	金 子 昭 彦	〃	千 葉 和 弘
〃	晴 山 雅 光	〃	平 澤 里 香
〃	木 戸 口 俊 子	〃	山 口 俊 規
〃	阿 部 勝 則	〃	山 下 浩 幸
(資 料 課)			
資 料 課 長	菊 池 強 一		
主任文化財	伊 藤 拓		
專 門 調 査 員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第266集
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
(平成8年度分)

印刷 平成9年3月25日

発行 平成9年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田1丁目6-49

TEL (019)653-4151